明治三十五年十二月五日發行
毎月一回五日發行

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界

第二巻第十六號

口繪


三井呉服店
東京日本橋區駿河町
大阪高麗橋三丁目
東京電話本局 特五三五、一三一七 一八六〇、三三三三
大阪電話東 特四七三 一六五〇
新柄流行の反物品々階上階下にのこらず陳列し尚休憩室をも取設け候間ゆる〳〵御遊覧奉願上候
地方よりの御注文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送可仕候尚注文案内書も有之候

女學世界 第貳卷第拾六號 目次


二八水は
肌を白くきめをよくし●にきび●あせも●ひび●すべて肌のあれ、おしろい下に用ゐて尤もよし又芳香馥郁として貴嬢紳士の愛すべき佳品なり
登録商標
本品縮圖
Nihachi Water.
中瓶一本拾五錢
花王石鹸
品質善良と衛生に經濟を旨として製煉したる佳品なり
東京日本橋區馬喰町二丁目
發賣本舗
長瀨富郎
(電話特浪花三番)



小川一眞製

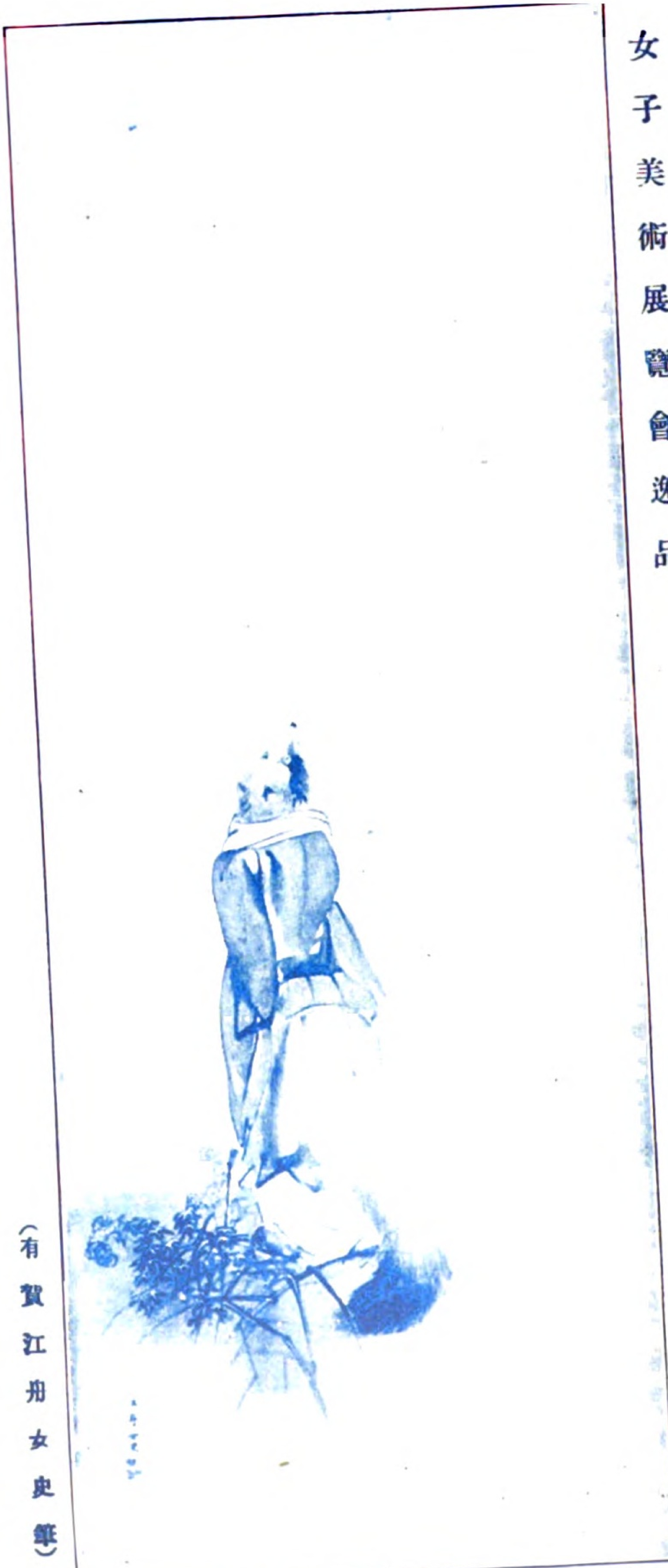
獨逸皇后ヴイクトリア陛下

舞姬



佛蘭西の女優マツチオ孃

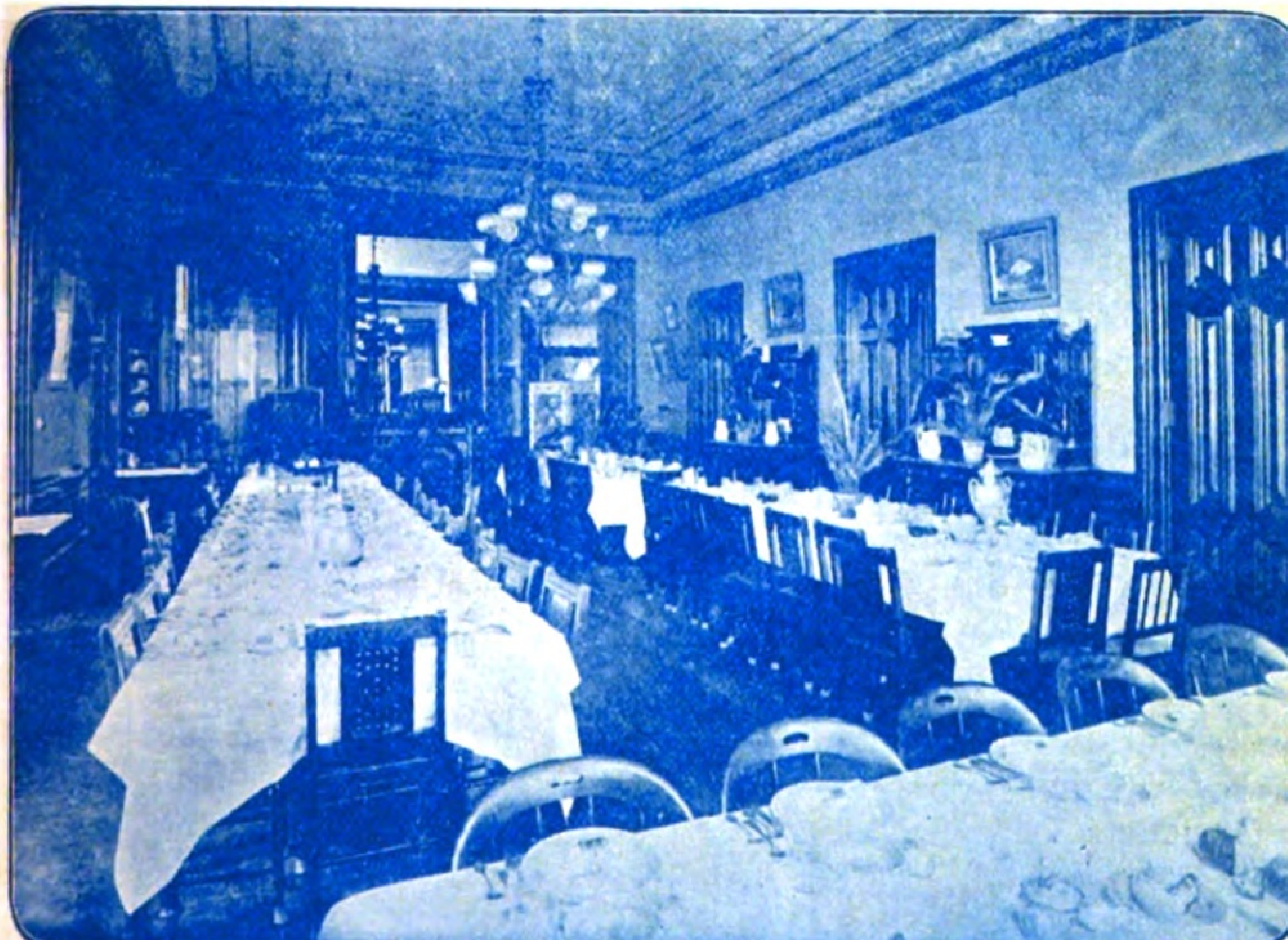
女子美術展覽會逸品



（有賀江舟女史筆）

米國高等女學校の內部

オガンツスクールの食堂





同溫室の撮影

（學海記事參照）



每月一回十日發行

明治卅六年の新曙光

一月十日發行

世は實業の社會となれり之れと共に本館又益飛躍を試みるへき時期となりぬ茲於て從來發刊の**太陽**の中より實業に關する一切の記事を割き特に太陽と同一體裁の月刊雜誌太平洋を發刊し以て帝國實業界の機關となり師友とならんと欲す

太平洋は元と本館の週刊雜誌として東洋唯一の寫眞畫報なりき然れども今は太陽を以て社會百般の寫眞畫報と爲すが爲めに二者重複の嫌あり是れ從來の太平洋を改め時期の最も急なる月刊實業雜誌となし太陽と相俟ち帝國の過去現在未來の全般現象は事の有形と無形を問はず巨細網羅して絲毫も遺すなきを期する所以なり：：：：：

今略ほ**太平洋**の內容を述れば新年の第一號には東洋第一の大船渠長崎の三菱造船所の最も斬新なる寫眞と伴ふて特に本館員を派遣し調查せしめたる詳細の記事は吾海國民の爲には劈頭第一の好讀物たるべく其他口繪寫眞は內外の實業家工場都市等最も材料を精選し●論說は現代第一流の學者實業家が主として農工商業に關する實際の改善意見を請ひ●月旦には日本實業界の泰斗を品隣し●訪問は若手實業家中の俊秀を歷訪して其意見を叩き●講演は諸名家の實業に關する集會席の演說若くは講義を筆記し●商業は銀行會社取引所倶は貿易金融交通運輸保險等の各項に付き皆專門家の筆に成る材料を集め●工業は製造工藝土木機械建築電氣冶金鑛業造船造兵等の各科に亘り●農業は耕作養蠶牧蓄山林漁業水產等を首とし此等各業の副產物製造法に至るまて盡く專門家の手に成り學理實驗相俟て當業家をして一度本誌を繙けは身親しく各種專門實業學校に入りて實驗研究しつ丶あるの感あらしむ况むや●雜錄の多趣味なる●小說の材料を實業界に取て斬新奇拔なる●史傳に於て內外實業家の功勞大にして未名聲の世に知られさる人々を旌表し●營業案內に於て各種實業の內幕を探究するや多面多趣にして興味と實益の豐富なる者あらん殊に●交詢の欄には讀者の如何なる質問も親切に調查して之に答へ●通信によりて內外各地に於ける實業上特殊の習慣を世に紹介し其他時事物價等盡く實業家の好師友たるを期す

尙ほ **新年附錄** には菊判八頁大の **近世界交通全圖** あり

(甲の一)

(正價壹冊廿五錢、三冊七拾貳錢、六冊壹圓卅八錢、拾貳冊貳圓六十五錢)

發兌元 東京市日本區本町三丁目 **博文館**

（甲の二）

英國ケンブリッチ大學女子高等師範部長イー、ヒー、ユー、マ孃
米國 エー、シー、ハーツホン孃 共著
日本 東京高等師範學校教授 本田增次郎君

家庭の模範

美麗裝釘＝口繪著者肖像
定價金參拾錢
郵稅金四錢

圓備にして和樂せる家庭は世界無二の樂園なり圓備にして和樂せる家庭に在る人は世界無上の幸福なり本書中我國家庭の改良を促して圓備完全ならしんとの抱負を懐けるもの其内容は英國の家庭(ミス、ヒユース述)米國の家庭(ミス、ハーツホーン述)宗教家の家庭(本田君述)の三篇に分かれ何れも和氣靄々として紙面に溢れ眞に世界無二の樂園に遊ぶの感を起さしむ殊に言文一致にして振假名付なれば何人も讀み易し

▲クリスマスの贈物に最も適當!!!

岩崎元一君著

手鞠と追羽子

◎新年の進物品!!
◎生徒の賞與品!!
▲美麗裝釘◎定價金拾五錢＝郵稅金貳錢

發行所 東京本郷區森川町一番地(電話本局二四一四番) 育成會

安全剃刀



此剃刀は携帶に便利使用に安全特に小供の頭を剃るに至極妙也御愛購の程願上候
定價一圓
送料二錢

◎類似品あり三劍商店賣品に御注意(革砥及刷毛付)

發賣元 東京日本橋區本石町一丁目 三劍商店

奏効確實
器械不要

簡易複寫インキ

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械藥品を要せず此インキ一品にて簡便迅速座上立どころに同一の文書圖畫數十百枚を印刷し得べし○即ち此インキを以て書したる原稿より直接他の白紙へ字痕を透徹すインキにて原稿百數十枚を作り複寫數千枚を得る者なり(使用法說明書を附す)

◎本品は既に諸官衛及郡區町村役塲等の御用品たり

●定價 二オンス 堅裝鑵入 送料共 金四拾錢 郵劵壹割增

發賣元 東京神田末廣町三十八番地 中村屋商店

(甲の三)

自治機關 公民之友

每月十五日 一回

明治卅六年新設の燈明臺

一月十五日 初號新刊

市町村制の實施以來既に十五年尋て郡制府縣制の法律實施され地方自治の權利益々鞏固なるを得たるも地方行政費の負担又年々に增加せり權利の增進は喜ぶべしと雖も其負担を顧みれば決して廉價なるものにあらず況んや黨爭の弊あり收賄の害あり地方行政紊亂の聲は漸く全國に反響し其改善は實に天下の輿論たり是れ皆全國公民の頭上に被むる最大痛切の問題なり自治の機關たる雜誌公民の友は此に於て起る且つ其目的とする所一に全國公民の友となり且地方行政に關する吏員の顧問となり自治制を利用して各人の權利幸福を增進せしむると同時に後來地方行政上に橫はる弊竇は全く之を芟除し未了の問題は盡く之を解決するにあり

公民の友は明治三十六年の一月より每月一回發行すべく其體裁は菊版百六十頁となし定價一部十二錢其各號內容の梗概は畧左の如し

口繪寫眞は每號八頁つゝ地方行政に關する官吏公吏議員若くは地方共同の大事業外國に於ける地方施設の營造物等地方公民の參考に資すべき者と地方行政上の有功者を紹介し**論說**は當代第一流の行政法學者若くは地方當局者の自治制に關する高論卓說を請ひ**訪問**は教育土木衛生警察監獄救貧等總て地方事業當局專門家の意見を紹介し**講演**には行政法專門の學士に乞ひ自治制に關する原理の講義をかゝげ**地方事業**には全國各市町村の重要なる事業の顚末を報導し**地方經濟**には詳かに各地方の財政經濟の實況を調査して得失を攻究し殊に**警察監獄制度**に關して內外の理論實驗等專門當局者の參考資料を收集しまた自治制につきて外國の事情を講明し**史傳**には內外自治制の歷史を叙し全國各地方の俊秀を論評し**裁判令法令伺指令**等最も材料を精選し訴願行政訴訟等の裁決は具さに網羅し**質疑應答欄**には自治制警察法規戶籍法等に關する質問を歡迎して一々詳かに解答を揭げ**雜錄**には趣味富豐なる小說逸話漫筆等を以て讀者の眼を慰め**文苑**もまた普れく讀者の詩歌俳句新體詩等を歡迎して法令に拘束する枯淡乾燥の頭腦にも錦心繡腸の伴ふもののあるを表章すべく**寄書**は江湖の識者が自治制改善に關する意見をおさめ**地方通信**によりて廣く全國各地方行政の汚隆を視察すべく**時事**は每月間に發生する地方行政上の諸問題を悉く網羅して報導せんと欲す

公民之友の希望此の如し尙多數讀者の希望に從ひ漸次改善完備を期す茲に帝國市町村の公民に列する者若くは市町村郡府縣の吏員には皆坐右必ず一部を備へざるべからざるや疑ひなきなり尙ほ**新年附錄**には**帝國自治制の母**なる山縣侯の肖像を現はせるものと外一葉の美麗なる繪端書を添へんとすまた每年一回帝國議會閉會後**臨時增刊**として約七百頁許の地方制度法令彙纂を發刊して益々讀者の便を計らんとす

定價金一册拾貳錢◎三册前金三拾五錢◎六册前金六拾七錢◎十二册前金壹圓三拾錢◎增刊一册(假四册分)◎一ヶ年十三册金壹圓七拾貳錢◎郵稅壹册金壹錢五厘つゝにて送本仕るべく候

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（甲の四）



（學海記事參看）

米國高等女學校の遠足會

西京風俗一斑



京都清水の陶器店

三木愛花君　山田春塘君共編

相撲大觀

（近刊）

全壹册洋装並製
紙数三百貳拾頁
現今有名力士寫
眞銅版八百挿入

著者が多年相撲道に熱心して許多の書類によりて故實慣例等を調査したる上に親しく力士等に就て見聞せる奇話逸事珍談異聞を集取したるものなれば一讀して相撲の事に精通し又古今の力士に接する如き興味ある事多くの相撲書中に其比を見るべからず大方の好角家は是非一本の携帯を要するなるべし發賣の日も遠からざれば必す需めて座右の珍とせられたし

第六版

上司子介君著（眞寫銅版挿入）

相撲新書

正價廿五錢
郵税四錢

好力士輩出して相撲の盛を極むる今日の如きはあらず本書は力士年行事、力士年寄行司傳、力士成蹟表、力士の家庭、相撲一夕話、四十八手圖解等丁寧懇切盡さるなく説かざるなし

第三版

上司子介君山岸茗荷君合著（寫眞版入）

相撲と芝居

正價廿五錢
郵税六錢

本書相撲の部は相撲の趣味相撲協會の組織を始め力士の生活力士の養成亦力士の談片力士概評力士の体格等を詳叙し芝居の部は劇評諸大家訪問錄梨園逸話等詳細餘藴なし

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（乙の一）

中學世界

每月十日一回發行　**明治卅六年度の大改良**　每月十日一發行

創業以來五年を閱し其間時勢の進歩に應して着々改良し來りたる中學世界は明年より更に刷新を加へ愈よ廣く中等教育界に裨補せんと欲し諸欄を改良し文章を平易にし多趣味の材料を精選し大に奮勵して一層完全なる學生の機關たらんを期す內容及外形に改良を加ふる左の如し

表紙及び口繪 表紙は清新なる石版三度摺の美しき畫模樣を用ゐ口繪は寫眞版十六頁の內光澤紙四頁材料は人物內外風俗を選み好評なる石版畫の毛筆畫手本一頁は如畫

評論 大町桂月氏奇峭警拔の筆を揮て青年を警告する所短評痛切を極む

修養 諸名家の意見及其修養時代の經歴談等專ら青年諸氏の處世立志上の忠告となるべき談を收む

史傳地理 史傳には現代模範人物と題し現存せる東西の英傑十二人を撰び各號一人宛の評傳を載せ地理には內外の奇勝趣味ある紀行等を收む

國語漢文 和漢文章詩歌の釋義益親切にして平易を極む

英獨語學 英獨文を相互に對譯する外英文作法に關する講話數種を載す

實業 是れ從來の法政經濟欄を廢し新に設けたる欄にして實業に志す青年諸子の必須なる指針なり

科學 動植物地文天文等總て科學に關する面白き談柄を每號圖解を加へて丁寧に說明し

數學 には中學數學上の參考となり兼れて娛樂となるべき數學遊戲を收む

軍事 陸海軍人の生活及機關の說明等每號畫入にて載せ大に尙武の氣象を養ひ

運動遊戲 大に本欄を擴張して戶內及戶外の泰西新遊戲を續々紹介し

文藝雜俎 は小說美文新体詩等を始め種々の隨筆雜談を集む

青年文壇 は從來の各種目懸賞文の外「少年詞藻」の一欄を設け每號題を課して殊に年少讀者の作文機關とす

學校案內及び受驗案內 は東部のみならず廣く全國各地方の各種學校を紹介し

內外奇聞 は從來の奇聞を大に擴張して每號十數個の圖畫を入る

質疑問答 は新設の欄にして社會万般の事項に關し讀者の質疑に答へ

讀者通信 の欄を新設して各地學校の狀況土地の風習等隨意の通信を收む

定期增刊 本年亦各季に一回宛の定期增刊をなし主として懸賞文を收む

時事彙報 時事を最も簡潔明瞭に報導すべし

◉**新年大附錄** 明年第一號には附錄として名家の奇稿約六十頁を添へ又新に歸朝せる米齋畫伯の筆になる畫はがき四葉を挿入して讀者の眷顧に報ふ

◉**定價金** ●一册金貳拾錢●四册（三ヶ月分）前金七拾五錢●八册（半ヶ年）前金參圓四拾五錢●十六册（一ヶ年分）前金貳圓八拾錢●郵稅一册金二錢つゝにて送付仕候

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　**博文館**

（乙の二）

女學世界

毎月一回 五日發行

明治卅六年女學界の明星

一月五日 初號發刊

歐西文明の潮流世界を風靡して女子の教育家庭の改善は刻下の一大急務となれり女學世界創刊年を閲すると僅に二回開版以來日尚淺きに拘らず今や毎月の發刊數萬部に達し創刊以來部數を計算すれば無慮八十萬部の多きに達せり一婦人雜誌として此の如き多數の流布を見るは我國文化の程度に於て聊か異數となすに足るべし是れ元より江湖愛讀諸君の眷顧によるものとは云へ畢竟我女學世界の內容時世に切實にして家庭と學窓とに對して多少の貢獻ありしによらずんばあらず是に年改まると共に更に一段の改善を施し體裁を新にし實質を選び又新に欄を起して從來の遺漏を補ひ以て平素の愛顧に報ゐん

▲口繪 毎號寫眞銅版十二頁を襍む材料を名媛の小照大家の繪畫彫刻內外風景風俗建築家庭庭園遊戲室內裝飾其他

▲論說 本欄は社會家庭女子教育に關する時代の潮流を捉へ時事の問題を解くを主として名流大家の意見を紹介す

▲家庭 家政の學問をして實際に適應せしむるは本欄の主綱にして衞生經濟慰樂育兒料理裝飾等日常必須の事を蒐む

▲文藝 本欄を國文學漢文學西洋文學の大要を簡潔に平易に記述し初學の婦女子の思想を啓發し氣品を高尚ならしむ

▲史傳 本欄は東西古今の賢婦烈女才媛の傳記逸事を揭げ偉人傑士の事歷を尋ね德性を養ひ育兒の一資料たらしむ

▲科學 專ら學術上の利益を與ふるを目的とし自然界の萬象に就て最も趣味ある說示をなし科學的智識の啓發に資す

▲手藝 婦人の技藝は極めて多し本項は繪畫彫刻裁縫編物刺繡造花等實習其他の手引を揭げて婦女獨立の準備に資す

▲小說 妙齡女子小說を讀むの利害は世の疑問なり然れ共本誌は其材と品とを撰み娛樂の間人情の機微を知らしむ

▲雜錄 家庭以外社會諸般の事柄を最も趣味ある筆を以て記し風俗習慣生活上の巨細を知るの料となさしむるなり

▲職業 居家處世の上に於て婦人の職業極めて多く輓近女學の勃興に伴ふて大に其地步を開拓し婦人界の職業を示す

▲詞藻 歌は心の花也文章は思想の錦此欄江湖才媛の手になる錦繡を敍せり絢爛の美紅紫の彩咏むべく歌ふべし

▲彙報 本欄は一ヶ月內の婦人界の消息を網羅し其社會上の著しき出來事其他の奇聞異報を報導して女界の事情を盡す

▲新年附錄 畫はがきの四葉を添ふ意匠を四君子に取り筆者は玉枝晴翠耕霞小蘋の四氏なり

定價 金一冊二十錢 四冊前金七十五錢 五冊前金一圓四十五錢 十六冊前金二圓八十錢
◎郵稅一冊ニ付金二錢宛

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(乙の三)

春汀 鳥谷部鐵太郎君著

（近刊）

明治人物小觀

▲德川慶喜公 ▲副島種臣伯 ▲澁澤榮一男 ▲西園寺公望侯 ▲桂太郎伯 ▲曾根荒助男
▲岩倉具定公 ▲黑田長成侯 ▲石黑忠悳男 ▲加藤高明君 ▲金子堅太郎男 ▲松田正久君
▲武富時敏君 ▲秋山定輔君 ▲高田早苗君 ▲中江兆民君 ▲雨宮敬次郎君 ▲本多政以男
▲成瀨仁藏君 ▲下田歌子女史 ▲鳩山春子女史 ▲福地源一郎君 ▲大井憲太郎君 ▲頭山滿君

春汀君の人物評愈出て愈妙を極め一篇出つる毎に天下絶快といはさるなし本書は明治卅三年二月より本年十二月に至る約三年間に成れる人物評を集めて行文評論共に益々精練を經て殆と時文の模範たり特に本書には現時著名の政治家實業家文學家教育家を網羅し之を前著明治人物評論に比すれは更に一層の趣味一段の光彩なり今や燈火親しむの候敢て之を讀者に紹介す

全壹冊

洋裝四六判
上製金字入
紙數四百五十頁
正價金及
郵税未定

東京日本橋區本町
博文館發兌

（乙の四）

第九版
明治人物評論
正價金貳拾五錢郵税金六錢

●白根專一男 ●三新聞記者 ●板垣退助伯 ●念佛庵主 ●個人としての ●伊藤侯と大隈伯 ●渡邊國武子 ●新聞記者として ●の福澤諭吉 ●第二松方內閣 ●山縣有朋侯 ●衆議院の三天才 ●佐々友房君 ●島田三郎君 ●德富猪一郎君 ●尾崎行雄君 ●大石正巳君 ●福澤諭吉君
●田口卯吉君 ●井上馨伯 ●末松謙澄男 ●伊東巳代治男 ●近衞篤麿公 ●兒玉臺灣總督 ●矢野文雄君 ●林有造君 ●青木周藏君 ●衆議院の五議長 ●東北三代議士 ●三井家 ●現時の大隈伯 ●近藤誠の未來 ●星亨君 ●外山正一君

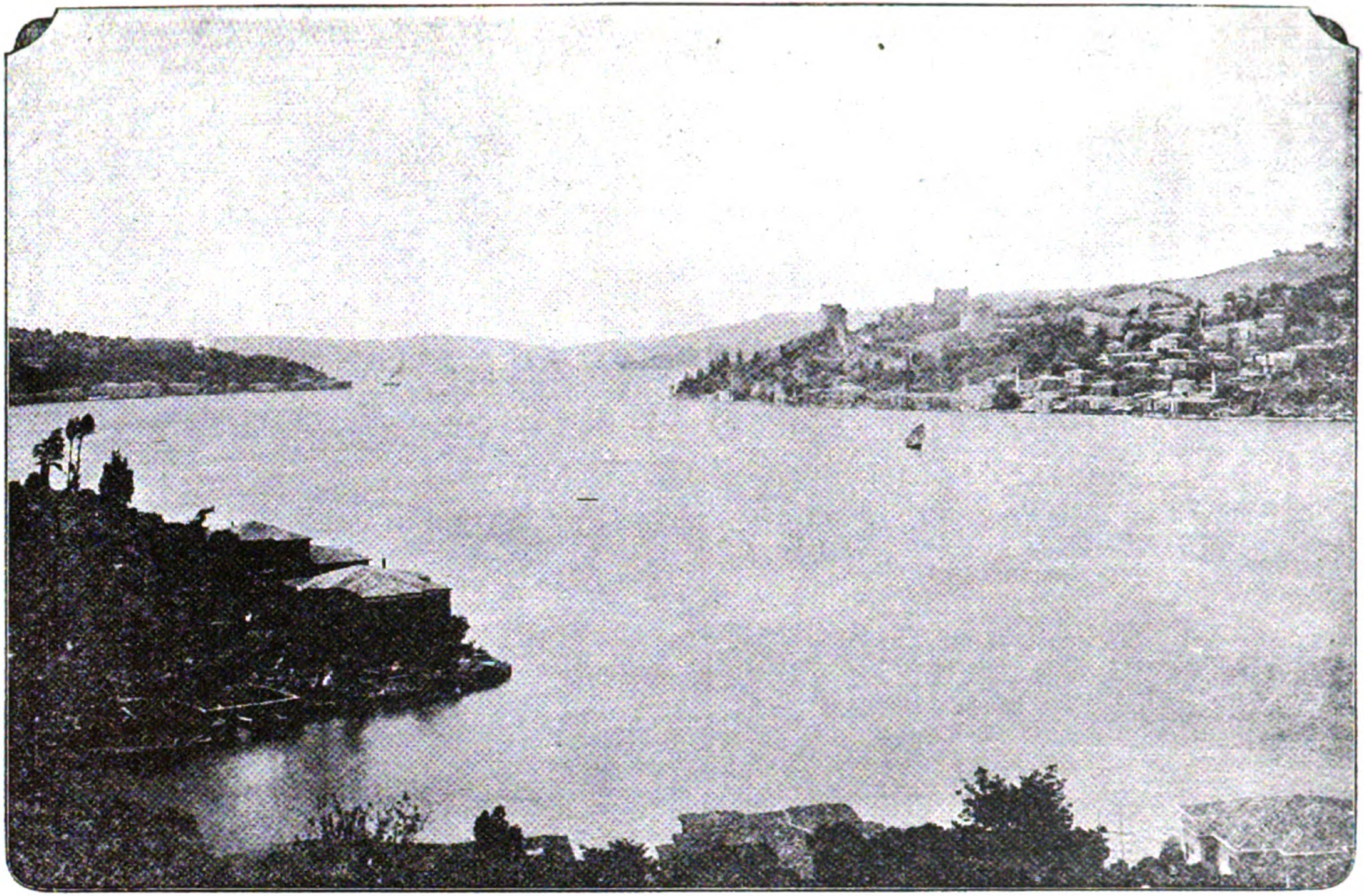
第三版
續明治人物評論
正價金參拾錢郵税金六錢

●田中正造君 ●島尾得庵居士 ●犬養毅君 ●樺山資紀伯 ●山本權兵衞男 ●山縣侯の政治的系統 ●地租增加贊否の運動及 ●其人物 ●自由黨の人物 ●進歩黨の人物 ●駐外公使 ●住友家 ●三浦梧樓子 ●政治上に失敗したる二 ●大新聞記者 ●日本婦人の國際的運動
●政界の二遊星 ●帝國黨の否領 ●伊藤侯は黨首の器なるや ●日本の外交家 ●東北の人物 ●大木喬任伯 ●陸奥の外交 ●星亨の自由黨 ●歸朝したる近衞公 ●日本の雄辯家及議會 ●佐久間貞一君 ●衆議院の院內總理 ●石川舜台師 ●北里博士 ●山縣首相に與ふ



上海少女會

泰西風景



ボスポウス海峽(亞細亞沿岸より歐羅巴沿岸を望む)



濱田婦人科産科病院看護婦並ニ醫員　(駿河臺袋町)


文藝倶樂部

新刊

讀賣新聞記者關如來君著

明治の令嬢

(中村不折君表紙畫)

洋裝美製本全一冊
正價金參拾錢 郵税六錢
肖像寫眞版刷挿入

明治の令嬢は上、貴顯縉紳の令嬢より下は貧困苦樂の女學生に至るまで、才學絶群超凡、德行端嚴貞淑、採て明治令嬢の模範たり、規矩となるものを擧げて一卷の中に收めたり。因て世人が知らんとして容易に知るべからざる縉紳高貴の家庭如何を推知するを得べく、現今の令嬢が如何なる學校及び家庭教育の下に生長して他日の良妻賢母となるべきかを觀察するを得べし。況んや著者が文の筆力隱健、縱横變化、忽にして春風和煦、忽にして秋霜凛肅、其人に因りてその筆を運び刻畫精警、活動生くるが如し、蓋し筆を下さゞるの前胸中既に一部の令嬢あり。實在の人を借りて以てその薀蓄する所を發揮したり。以て家庭の好讀本となすべく、以て令嬢の好侶伴となすべきなり。……(文武堂藏版)

●明治才媛美譚 熊田宗次郎君著 (訂正三版發賣) 正價金五拾錢 郵税八錢

●明治閨秀美譚 鈴木光次郎君著 (訂正七版發賣) 正價金拾錢 郵税貳錢

●現代をんな氣質 櫻井彥一郎君著 (訂正二版發賣) 正價金參拾五錢 郵税四錢

●發兌元 東京本町 博文館●

(丙の二)

筆戰之友

定價 一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金壹圓八錢郵税一冊壹錢

秀才文壇

每月一回十日發行

東京小石川區指ヶ谷町百三十三番地

文光堂發兌

送呈

東京日本橋區鎧橋際
電話 浪花 二番

理學應用光線學上の一大發明により撮影せるパノラマ寫眞五百有餘種の目錄表並に特許商會會則御一報次第贈呈

弊店發賣の自働パノラマ視鏡は附添人を要せずして自働的に日々五十錢乃至二圓の收入を得詳細は御照會あれ

特許商會

無代進呈

書籍。雜誌。發賣目錄。一冊郵劵貳錢送付あれ

東京神田區錦町二丁目

勉强堂書店

肺病

安房國曦村千倉

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵劵封入にて御照會あれ

川名助次郎

血塊月やく

忽ち下る
確證新藥

本劑(調經丸)は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流下する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ悪血毒血を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるに付

妊婦の服用を嚴禁す若し妊婦服藥せば即座に流産するを以てなり尤も本劑は何人服用するも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分六拾錢貳劑分壹圓拾錢參劑分壹圓六拾錢特別製分貳圓貳拾錢(各意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる服藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に着目し購求あらんことを乞ふ

わきが (腋臭症)

根治確證
新發見藥

腋臭賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても分誓て根治し決して再發或は他病に變ずるなき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を悅せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵劵代用必ず二割增しの事

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房 (電話本局二五四六番)

(丙の五)



毎月一日 一回發行

明治卅六年少年界の指鍼

一月一日 初號發行

今から二年前、獨逸伯林へ行きました、漣山人が今度歸て參りまして始めてのお正月から、少年世界も第九巻となりますから、新歸朝者としての山人が、また種々新らしい材料を、今年の誌面から續々掲ける事に致しますので、全躰の紙面の上から云ひましても、從來にはない趣向が澤山あります、少年諸君は、尙一層の御愛顧をなすつて下さい！

一來年度の本誌は、學校程度として、幼稚園、小學尋常一年より、高等四年まで、中學一二年迄としまして、これに適當の材料を撰む積りであります

一來年度の本誌には十六頁を色刷とし、少女、家庭、交詢、學事顧問の項を增します

一來年度の本誌には、石版刷極彩色の口繪を挿み、初刊には精巧なる繪葉書四枚を附錄に致します

一來年度の本誌は舊來に比して一段の興趣と材料を增加して少年諸君の愛顧に御報ゐいたします

記事

幼年諸君の讀物として小波氏お伽新を始め約六十余自を割きて新案繪直し（武内桂舟）教訓お伽噺（木村小舟）家庭珍話（武田櫻桃）世界少女お伽噺（小波氏口述、小舟氏筆記）唱歌判じ繪考へ物の諸項の外毎號斬新奇抜なるお伽噺及遊戯は筆な掲載ずべく卷頭十六頁は二色刷とし武田桂舟氏も一生懸命に繪を書かれる筈ですからとんなに立派な者になるでせふ、つまり此六十余頁は弟さんや妹さんの領分て兄さんの領分は史傳地理科學遊戯參觀軍事海事文壇交詢學事顧問など皆新らしい材料を言文一致躰の平易の文章を澤山入れる積りてす

口繪

寫眞版は四頁とし毎號珍奇な材料を撰みますし三頁掛石版摺はまた每號武内桂舟氏が揮毫される筈てす

定期增刊

來年の定期增刊は單行本の躰裁とし第一編に來春二月十一日發行します無論小波山人てすから面白いのは請合

定價

一册十錢、四册三十八錢、八册七十五錢、十六册一圓四十錢〇郵税一册一錢五厘宛

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（新刊書類）

英學新報社編輯部校訂詳註

英文 へれわーど

全壹册

袖珍美裝　正價金貳拾錢　郵税貳錢

英國十九世紀文壇の詩人「キングスレー」が畢生の傑作をこの「へれわーど」となす、本書はこの鉅作中より「へれわーど」が隨所巨人を斃し暴君を服し皐女を救ふ等英國勳爵士時代の最美質を發揮し其人情風俗を叙し該書中最も見るべき邊を拔萃して精細なる脚註を施したるものなり、讀者即ちこれによりてこの大作の面目を學び「キングスレー」が絢爛の筆高遠の想に私淑するを得ん敢て此書を我英學界に薦む

英學新報社編輯部校訂詳註

英文 白百合

全壹册

袖珍美裝　正價金貳拾錢　郵税貳錢

岩根に棄てられて瘠せ細りたる白百合も移して庭園に養はゝ時得て白妙の其花馨しき其香百卉を壓して其淸く美しきを誇りなん。此物語の如きは洵によく此理りに通ひ愛なき母の膝下に心歪け顏醜かりし乙女が一朝慈悲ある伯父の許に養はれ、頁全なる敎育を受けて復昔日の彼女にあらざるを語り綢繆たる佳人の情懷を叙したる等非ざるを語り綢繆たる佳人の情懷を叙したる等一篇絶好の家庭小説也。不健全なる文學の惡化憂ふべきもののある今日我敢て之を英學界に推薦す、若しそれ文は佳に註は詳なるまた贅せす。

英文譯註

文學士淺野和三郎君譯並に詳註

奇々怪々

正價金二拾五錢　郵税四錢

本篇は英文「奇々怪々」及「艶の間違」の二短篇を收む前者は鬼氣凄々毛髮をたゝしめ後者は滑稽百出よく人の頤を解く。共に机上の珍品たり、好學の士に絶好の侶伴たるべし。

文學博士元良先生評論
文學士戸澤姑射君譯述

小説 愛と心

（訂正四版）
正價　卅五錢
郵税　六錢

文學博士元良勇次郎先生著

現今將來 倫理及宗教

（改刻增補）
正價　五拾錢
郵税　六錢

（丙の七）

發兌元　東京日本橋區本町　博文館　東京神田表神保町　東京堂

太陽

第九卷第一號　明治卅六年度の新光彩　一月一日發行

實業界の進歩は本誌實業欄の擴張となれり然れども其盛大なる發達進歩に連れて是れが機關たらむをは本誌の克く盡し得る所にあらず此故に明年よりは太平洋誌を改めて實業專門の大雜誌たらしめ本誌は依然として社會全般を代表する東洋唯一の大雜誌として材料を精選し時勢と共に進み世界的明星として光彩を放む左に其要旨を掲く

寫眞版大改良

本誌の特色たる寫眞版は其數を增加して之を本文中に挿入すへし即ち奇麗なる紙質六十四頁の毎項に記事と關聯せる寫眞及び內外の事物百般を挿入す是れが爲に寫眞部を擴張し日々の事件及山川風景風俗等一として網羅せさるなきを勉む懸賞寫眞募集は更に擴張して寫眞術進歩の便宜を計らんと欲す…………

各欄配置

內治外交敎育宗敎文學美術經濟科學其他社會百般の事項を代表する本誌は▲時事詳論欄にて最も公平穩健の時事論を載せ▲人物月旦欄には諸方面の人士を紹介すると共に時事に關する諸家の態度を略評し▲論説欄には當代の名家に請ふて各方面に關する議論の深奧卓拔なるもの數篇を載せて不動の模典たる光彩を放たしむ是れ本誌の特色なり▲名家談叢には執筆の暇なき名家の意見を廣く掲け▲小説欄には毎號諸家の傑作あり▲娛樂記事には內外遊戲一切の娛樂に關する記事豐富なり▲文藝雜俎は美文韻文の外に海外文壇記事隨筆等趣味津々たる文字數篇あり▲史傳地理には大家名士の研鑽に成れる有益の文字あり▲學藝雜纂には科學博物衛生醫學等の通俗的説述を載せ▲評論の評論には內外の大論及輿論の趨勢を悉く網羅し▲時事月報欄は毎月の大小の事件を簡單明白に記載す此他讀者との接近を計る爲め▲百事問答欄を設く▲英文欄は內國の事情を傳ふると共に模範的英文を載せて研究者の參考に供することとせり

◉新年附錄

繪端書 淺井忠一及ひ正氏の筆へ確なる卅五年史を添ふ

定價

一册金卅錢●四册壹圓十五錢●八册前金二圓二十錢●十六册分四圓二十錢●郵稅一册金三錢

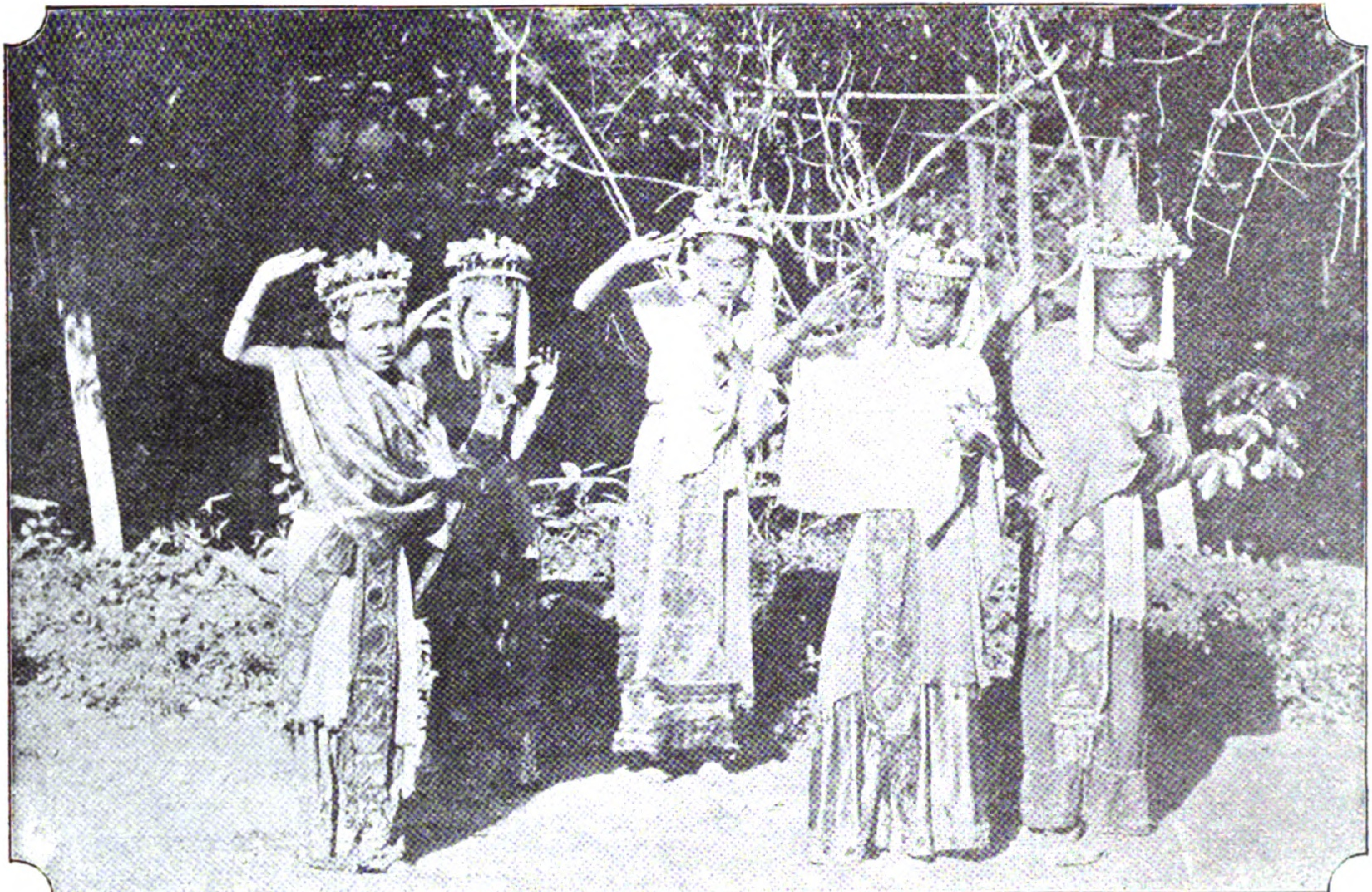
發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(丙の八)



私立佐原淑德裁縫女學校職員及生徒

緬甸婦人風俗



上流社會女子の手踊

印度風俗一斑

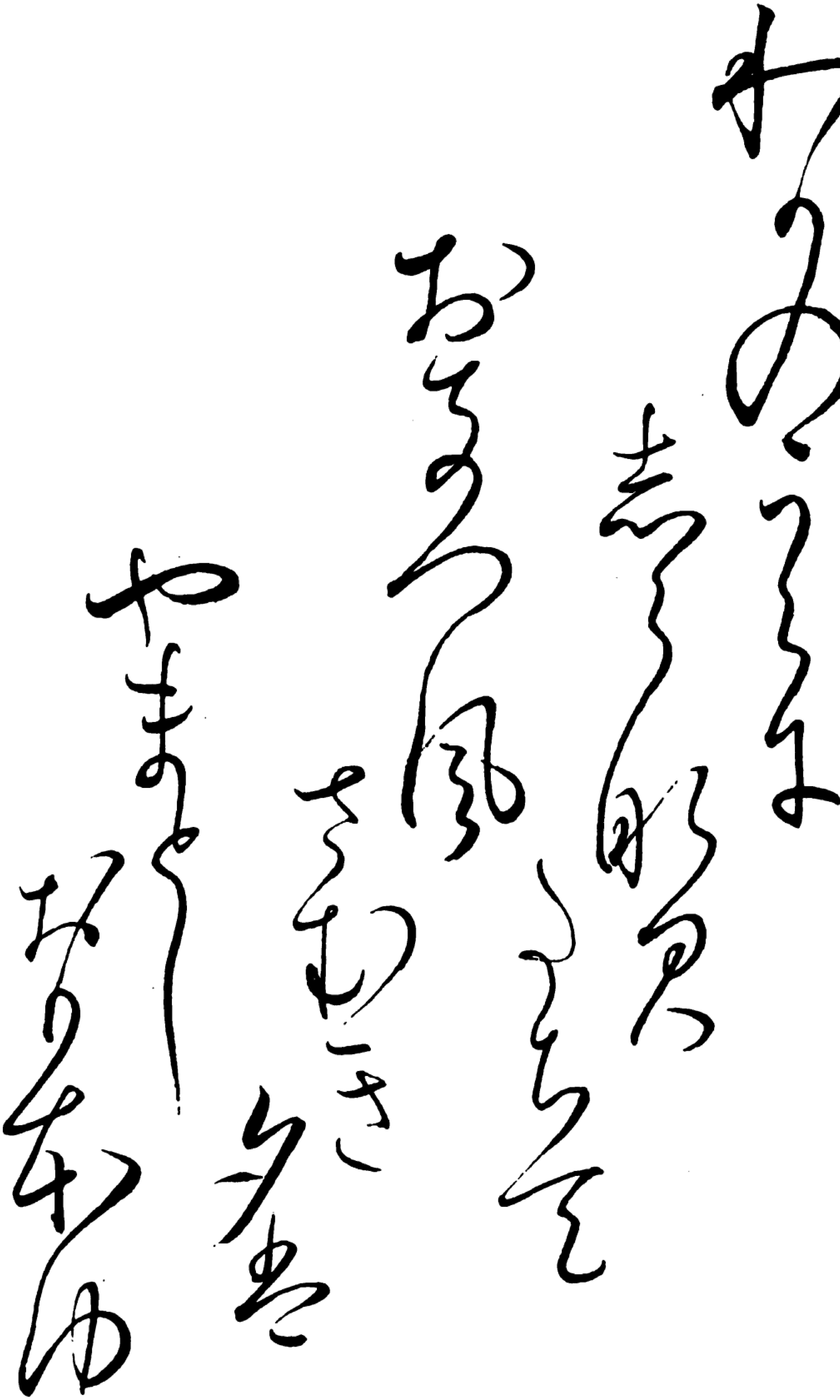


西印度カルカッタパンガレーの小童

多田野螢光生筆

いよいよ 八月四日あまり生ましい
清水様方へ移り候様抔致し
候間如此御安心下されたく候
汁塩鮭壱尾 送り葉の
志てもし 忘れ候はゞ 誠にうれし

入候よし清ハめてたく承仕
辞あそはされ候へくハ
新年ゆるゝまゝ
あら御座候
かしく



坂正臣先生筆

坂正臣先生筆

玉津嶋見れとも
あかすいかにして
影持ていなむ
見ぬひとの為

水仙



野口小蘋女史筆

鴛鴦

野口小蘋女史筆



臘梅



寒林孤亭

野口小蘋女史筆



受驗問答叢書

大田才次郎君編

新撰漢文問答（第七編）

▲全壹冊洋装袖珍上製金文字入
▲正價 金貳拾錢 郵税金四錢

世に漢文問答といふもの數多あれども大抵熟字故事を集めもしくは虚字助字の解をなすに止まりて他に及ぼすものなし本著者は斯くては熟語問答故事問答に過ぎずとなし常に完全なる漢文問答を編せんと欲し茲に本書を編纂するに至れり書中字格の問答和文漢譯漢文和譯熟語故事漢書解題支那に於ける著名の學者日本に於ける著名の學者日本に於ける漢文學の歴史等詳細に問答的に說述したれば學生の漢文學を講ずるものは必ず購求して座右に置かざるべからず附錄には例によりて各學校に於ける試驗問答を集めたり

既刊書目

- 第一編 ▲新撰日本地理問答
- 第二編 ▲新撰日本歴史問答
- 第三編 ▲新撰世界地理問答
- 第四編 ▲新撰東洋歴史問答
- 第五編 ▲新撰西洋歴史問答
- 第六編 ▲新撰國文問答

續刊書目

- 第八編 ▲新撰算術問答
- 第九編 ▲新撰代數問答
- 第十編 ▲新撰幾何問答
- 第十一編 ▲新撰物理問答
- 第十二編 ▲新撰化學問答
- 第十三編 ▲新撰動物及植物問答
- 第十四編 ▲新撰地文及天文問答

定價

一冊金貳拾錢六冊前金壹圓拾錢十二冊前金貳圓拾錢廿四冊前金四圓郵税壹冊金四錢ツヽ

發兌元 東京市日本區本町四丁目 博文館

（丁の一）

最も高評ある
最も正確なる
最も便利なる
最も經驗ある

博文館 當用日記 懷中日記 發賣廣告

（十月中旬製本出來）

明治三十六年 當用日記

◎紙數 中形大形共 各五百五十餘頁 小形五百三十餘頁

小形 菊判牛裁 上製（舶來洋紙總クロース金字入） ◎正價金三拾錢 郵稅八錢

中形 四六判 上製（舶來洋紙總クロース金字入） ◎正價金三拾五錢 郵稅拾錢

中形 四六判 特製（舶來洋紙背皮美製金文字入） ◎正價金五拾錢 郵稅拾二錢

大形 菊判 上製（舶來洋紙總クロース金字入） ◎正價金五拾錢 郵稅拾四錢

大形 菊判 特製（舶來洋紙背皮美製金文字入） ◎正價金六拾五錢 郵稅拾四錢

特色！

用紙（何レモ海外製紙會社ヘ特ニ注文濾製セシ特別上等紙ヲ用ユ）

印刷（秀英舍ガ新規鑄造セシ活字ヲ以テ注意印刷ス頗ル鮮明ナリ）

製本（弊館ガ特ニ歐洲ヨリ輸入セシ新機械ヲ以テ堅牢美麗ニ製本ス）

趣向（當用日記）日々欄ニハ過去同月日ノ重要歷史、七曜、支干等ヲ記シ天氣、寒暖、受信、發信等ヲ記入スベキ欄ヲ設ケ、普通記入部ニハ細罫ヲ附シ秩序アル記錄タラシムルニ適セリ「附錄トシテハ紙數十二頁の補遺金錢出納表、收支一覽表、友人住所錄、最新京

（丁の二）

明治三十六年 懷中日記

並製（舶來洋紙紙クロース表紙 金文字入紙數三百頁）　●正價金拾貳錢　郵稅四錢

特製（舶來洋紙頭美本總クロース金文字入紙數三百頁）　●正價金拾八錢　郵稅四錢

體裁

統計及日常必須ノ諸規則ヲ網羅セリ（懷中日記）毎月ノ初ニ當月ノ行事、食品月令、遊覽案内、日陰暦氣節等ヲ掲ケ日々欄ニ過去同月日ノ歴史、七曜、支干、天氣、寒暖ヲ記スル等當用日記ノ如ク、卷末ニハ金錢出納録アリ又日常有用ノ事項諸税則及最新重要ノ統計表ヲ附セリ

弊館出版の懷中、當用日記の正確堅牢にして實用に適するは玆に喋々の要なし今回用紙印刷體裁製本に至るまで尚一層の改善を加へ懷中日記は本年更に新工夫を凝して縱長に製裝して携帶に便し又當用日記は舊に倍して一層優美に裝釘し尚趣向の改良を加へて記入の便を計り小形外の四種には農學博士横井時敬君の農家年中行事及中央氣象臺技師和田雄治君の調査に成る全國氣候一斑を掲け尚ほ最新の統計及座右必需の重要諸規則は漏らさず收めて網羅せり之を舊年の日記に比すれば材料愈よ豐富記事愈よ精確にして江湖坊間の日記と同視すべからざるや論なし請ふ續々御愛購あらんことを

●賣捌所は全國各地（書籍雜誌店及紙類文具店等）到る處にあり

◎取次望みの方は種類部數等御申込次第精々御便利に御相談可仕候

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（丁の三）

近刊　**學生必携簿書**　近刊

慶應義塾教授管學應先生撰

學生日記及通信用紙

菊判二頁開き
横綴り洋装製
正價廿二錢
郵税四錢

本書は普通銀行會社に備へ置ける**控**及び**切取の二部**となし其切取附受預書の体裁に據り以て目的の一は**學生諸氏**が**毎日學事**及び**會計**等に關する大小の出來事を記入する**日記帳**に供し一は毎月月末に至り諸氏が**之を割て郷里の父兄へ報知せらるゝ通信用紙**に充つるにあれは其便利重寶なるは言ふ迄もなく殊に本紙の欄上欄下には學生諸氏が日夜に服膺すべき無慮一百有餘の座右銘を以てしたれば亦以て立志修養の一助となすを得べし乞ふ速に本紙を使用して便利實益併せて之を收得せられんことを

文學士 大町桂月先生著
學生訓（第七版）（全一册洋装袖珍）
正價金貳拾錢　郵税金四錢

文學士 大町桂月先生著
續學生訓（全一册洋装袖珍）
正價金貳拾五錢　郵税金四錢

法學士 田中次郎先生著
學生立身策（第五版）（全一册洋装袖珍）
正價金拾貳錢　郵税金四錢

法學士 丸尾昌雄先生著
日常行爲法則（第五版）（全一册洋装菊版）
正價金貳拾五錢　郵税金六錢

風間禮助君著
偉人修養録（全一册洋装四六版）
正價金四拾錢　郵税金八錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　**博文館**

（丁の四）





第貳卷

第拾六號

奢侈の流弊を戒む

歐羅巴の文明が世界を風靡してより豪華の風俗日に月に進み、上下の社會を通じて奢侈贅澤に流れ、殆んどその究極する處ろを知らざるの狀勢なり隨て社會の風潮外貌の美を求むるに急なるより婦人たるもの亦その內容を治むるに等閑にして專ら外形の美を飾るに勉め以て世の風潮に媚ふるの風あらんとす、此の風潮はやがて妙齡の婦女子を驅つて妖艶の姿を裝はしめ、淫蕩の風を馴致せしむるに至る。この如き流弊の及ぶ處ろ即ち嚴肅なる家庭を蠱毒し。國家の基礎を危ふするに至らんも知るべからず、志ある人はよろしく此の流弊を矯正し、嚴正を以てその家庭を率ひ質素儉勤を以て其の子女を導くべし

婦人と美術（二）

伯爵　松方正義

若し女子に適當なる技藝を求めなば美術の如きは蓋し重なる其一なるべし、何となれば女子の性情は自然に美術的なればなり。

美術は人心を調和し、風俗を醇厚ならしむるの勢力あり、其の巧妙を極むるに至りては賢者も愚者も齊しく其の美の感化を受けざるなく其の心性を涵養せざるなし。而して女子の特性は優美溫和にして常に人事と天然の美趣に密接す、女子の特性と美術と相一致すと謂ふ所以のもの之が爲め也。

女子已に此の特性を有するものとせば、此の特性と一致する美術を學ぶに於て最も恰當したるものと謂ふ可し、美術は其の大に於ては國家國民の文野に關し、富强の基も之に由て立つことを得べし。國民の氣風も之に由て養ふを得べし、是れ決して閑事業にあらざる也。試みに其の小なるものに就て語らんに凡そ一家の構造より、一室の裝飾乃至は一身に纒被する處の衣服に至るまで、美術の應用を必要とせざるなし、スペンサー曰く『節序の轉換に於て裝飾は衣服に先立つ』と是れ一面の眞理也。夫れ衣服の用は氣候の暖に適し、寒に適すれば可也。何ぞ必ずしも裝飾を要せんや、然れども裝飾は常に實用に先だつものにして、其の茲に至る所以のものは全く人の性情が美術を愛玩し 要求するの自然なるを知る可し。

果して人の性情の裝飾を要求するは自然に出づるものとせば出來得るだけ其の滿足を得せしむるは當然の事にして一家を整理し一室を裝飾し一身を優美ならしめんと欲するものは常に心を茲に用ゆるを要す、若し美術の

應用なきに於ては大厦高樓と雖も荒木作りの白屋と同一の觀あるべく美術の應用あるに於ては竹椽茅檐なほ朱門に優るの感あらん、美術の効用も亦た大なりと謂ふ可く、裝飾の必用なる所以も解し得べし美術の應用と裝飾の必要とは獨り大厦高樓にのみ限らるべきものにあらず竹椽茅檐の白屋にも必要也。試みに其の家を見、其の門に入り、其の室を窺へば直に其の人の品性と其の家風の如何とを知り得べし。如何に家屋の外觀が宏壯輪奐なるも其の室内の物品が布置宜しきを得ずして亂雜を極むるに於ては忽ち醜惡の念の胸中に滿つるある可し若し夫れ茅檐の中なりとも裝飾宜しきを得れば床頭の一幅好し新聞附錄の石版畫なりとも名畫の品格を備ふべく一草一花悉く雅趣を添へ、其の人と家風との如何に高尚なるかを感ずべし。徒に巨金を投じて購ひ得たる物品のみが裝飾に適すと云ふ勿れ布置按排宜しきを得れば瓦石も亦た金玉に優るものあらん茶仙利休幼時師の命によりて後庭を掃はんとし往けば既に人ありて洒掃を卒へ復た一片の塵芥なし彼れは師の命に惑へり暫くして一株の楓樹今や爛然として錦を織るを認め試みに手を揚げて之を搖かす楓葉地に落ち花片の水に漂ふに似たり師之を望見して曰く『雅趣掬すべし茶技の奧意なり』と美術裝飾の眞味も亦た此に外ならず。

室内の裝飾や、纏身の衣服や之を女子の手に待たざる可からず、女子も亦た家を守り家を理し女子を養育するの義務ありとせば室内の裝飾を理し纏身の衣服を裁する其の任とせざる可からず、果して然らば美術の心掛け最も必要にして之を學ぶ可きは肝要なる事とす、况んや其の特性は美術と一致するに於てをや、思ふに我邦と歐米とを問はず女子にして美術を專修し其の名聲の世に聞ゆるもの少しとせず、殊に繪畫に於て多しと爲す、美術豈に男子のみの特有ならんや、却つて女子に在りて其の適切なる技術なるを疑はず、然れども我邦に在りては女子

の美術を學ぶは音樂と同じく遊戯三昧の肴を爲し之を以て實用に供せんとしたるものあらず之れが爲めに女子に在つて美術は左程に重要視されずして今日に至りしが、今日以後に在りては遊戯三昧を以て輕視すへきにあらず正に實用的技藝として修めざる可からず、勿論名流の美術家たらんとするに於ては、他事を抛擲して専心之に從事するの外又た天才に由るべくして一般の女子に望む可からずと雖も、余の今說く處のものは一般女子の修得し應用して實用に供し得べき範圍に屬す、即ち日用の物品に應用し兼ねては其れを以て婦人の職業たらしむへきに在り。

凡そ女子敎育の本旨は良妻賢母となり、家を理すると同時に子女の敎育に任せしむべき智德を備へしむるに在りと雖も、社會の進歩と推移とは女子をして單に良妻賢母たらしむるのみを以て足れりと爲す能はず。女子をして獨立自活の道を立てしむるの必要生ぜんとす、獨立自活の道を立てしめんには之に職業を與へざる可からず。美術は其の職業として最も適したるもの也。果して然らば之を敎ゆるものも職業的實用的を目的として智識と技能とを與へ之を修むるものは之を應用し、職業とするの思念を以てすべく、遊戯的若くは贅澤的と思量すべからず、今日も猶ほ女子が美術を學ぶを以て遊戯若くは贅澤の技藝と考ふるものなきにあらず、是れ實用の技藝たるを知らざるの誤解に出づ、願くは此の誤解を排除せしめよ、而して女子をして實用的に職業的に美術を修得せしめよ、然も美術の奥儀は心性を養ふに在るを知らば、其の技藝を研精すと同時に須らく女德を養成せんことを勗めよ。（本篇は松方老伯が女子美術學校落成式に於て披講せられたる演說の要旨なり）

女教邇言

靜女塾長　平尾光子

德育の欠乏は今日教育上の大弊でありますが、これは毎度申す通り現今の學校制度の欠點から來つた事であらうと思ひます、今日の學校では校長乃至教師たる人が官吏か何かの樣に勤め人の心得であつて教師社會に德を以て率ゆるといふやうな尊とい人物が少いからでありませう。然るに昔の教育の仕方はさうでありません、其の方針にも心の先生と藝の先生との二樣がある、心の先生といふのは眞に敬服すべき先生で、彼の先生の爲めならばどんな苦みをしても厭はないといふやうな一種の崇敬心が生徒の心に生ずる程の感化力を持つてゐる又藝の先生といふのは、文章とか、詩とか乃至は其他の藝術を教はるに就ての先生である、されば今日の學校に於てもどうか藝の先生と、心の先生との二樣を具へたいと思ひます、現今では悲しい哉學校の先生といへば藝の先生ばかりで生徒の中に有難く崇め奉るといふほどの人物が少い、元來心の先生といふのは人間を完全に仕立て呉る先生である、藝の先生といふのはそれに飾りを附けて呉れる人である、心の先生は人間の本體を拵へて呉れる人、藝の先生はそれに修飾を附けて呉れるのである、そこで今日の小學校では校長は概ね師範學校の卒業生で、其他の教師先生達も矢張り同樣で一見した處で兒童は勿論、其の兩親とても恐れ入つて眞から敬服するほどの人物は少くないのみならず、實に一般に價値のないのが多いのであります、これは甚だ悲むべき事で私は曾て或る方々に向つて小學校の校長始め諸學校の校長は無論で、名譽校長にしたらばよかろうとの考へを述べた事があります、名譽校長と云へば道德堅固な人が校長と爲つて、其人の道を慕ふてゐるさうなれば、父兄も誰樣と言て崇める樣に

なり生徒も尊敬するに相違ない。修身敎科書の何のと言ひますが、この方針を執れば修身の敎科書は孝經一冊で澤山である。何萬卷の敎科書でも孝經を離れませぬ、能く孝經を頭に入れ、校長が名譽校長であつて折々臨んで生徒に話をして聞かせるならばそれで充分である。今日の修身敎科書は古人の滓を彼方此方と集めて居るのであるから皆な死て居る、且つそれも國家と云ふ觀察があつて修身敎科書を拵へるならば宜いが、一時利益の爲めに修身敎科書を拵へ出すやうなのもないとは言はれぬ、さうならば敎育は名で其實は本屋と組合つて商法をしてゐるのである、日本將來の爲めに甚だ歎かはしい事です。私は賴山陽先生に就ては每度敬服して居りますが、これは學問が立超へた方かと云ひますと、其れほどにも思ひませぬが、兎に角時勢を察して自然に士の氣を呼び集めましたには敬服の外ありません、維新の大功業を起した其根を養ふたは日本外史と思ひます。恐らくは古今日本外史ほど時代の敎育に與つて力ある書物はないかと思ひます。日本外史は歷史としては隨分間違も多いが書物に魂が這入つてゐる、彼の楠の處には一層で、德川の末に士氣を勵ましたのは非常なものです。一讀して忠孝と云ふ事は外れぬ樣に思ひます。それからモウ一つは日本の忠孝を萬世にまで傳へた其の標準としては孔子の道であらうと思ひます。其處で維新前後大學者は何れの處に這入つて御修行爲されたかと云ふと聖堂です。然るに今日の聖堂は一の圖書館に止まりて孔子の廟として學者が誰あつて拜する者もなければ、文部省もトンと其儘に置いて問はぬと云ふ氣味である。恐れ多くも　天皇陛下を御始めとして此の孔子の廟には少し御注意あらせられて相當であらうとおもひます。其れ等を上が遊さるれば下に忠孝の道が起るのです。其等を棄てゝ唯々文部省で歐米の事は總て宜いものだと云ふのは日本の

習慣と云ふ事を外づして仕舞ふたものでありませう。孔子の道が萬世に傳はる事を望むにあらず、孔子と云ふ人の學問が日本の習慣の忠孝に適して居る、孔子の道が日本の忠孝の志氣を維持して來たので孔子の道から弘つて來たものであるから、此邊は少し文部省でゐ考へあつて然るべきと思ひます。又一部の人は孔子は支那の人である漢學であると申しますが。それは大變な間違て、孔子は支那であらうが亞米利加であらうが英國であらうがそれは頓着はない、何れにしても孔子の教が日本の習慣國俗に適して居るものであれば日本の國の道として宜からう、其れを宜しとして忠義と云ふ道が出來たものであるから、何れの英雄豪傑も忠孝の道に當嵌まらねば人傑とはならない。ドウも親の稼いだ骨折りを息子が知らぬで贅澤をして、其の隣りの榮燿榮華を看似てゐるといふ國家の有樣でござります此邊は第一教育の原素として少し破れて居りはせぬかと思ふ。それ故に大學は即ち學士博士を拵へる處として置くは至極結構ですが其の外に政府は矢張り十人なり二十人なりの人傑を拵へる處、即ち心を拵へる場所として置くが宜いと思ふ。先年或る方々が秀吉公の廟を立つる事に就て頻りに御奔走でしたが、是も結構な事と思ひますが、其れよりは聖堂を舊に復するが目下の急務である。多少道德を維持して行くと云ふ事にはモウ少し聖廟を何とか御工夫なさらねばなるまい。それて根本の立たない教育の方針を文部省が執つても人間の出來やう筈はない。本が立つて來てから始めて枝葉即ち智育に及ぶのです、今日の德育は日に増し廢たれるばかりて、恐れ多くも御膝下で女房を殺したり、夫を殺したり、實にドウも日本の習慣として有る間敷き事が多い、田舍ならば兎も角御膝下の人民が其の通りて、大臣方から忠孝と云ふ事が薄して國家を脊負ふて行くと云ふよりは、利益になれは手を出すと云ふ風て

ありますから、學校て人物の出來やう筈はござりませぬ。

家庭時言

大町桂月

女子は結婚すべき乎

女子は結婚すべき乎、結婚は幸福を來す者なる乎、これらの言は、吾人の近時往々耳にする所なるが、これ蓋し結婚後の不幸より起れる懷疑の聲なるべし。されど、如何なる不幸あるにもせよ、人の子と生れたる以上は、結婚せずには居られず、もし女子が皆結婚せざるやうにならば、人類は玆に全く絶え果てむ。

極端の言かも知らねど、余をして遠慮なく言しめよ、子孫蕃殖を外にしては、女子の存在は無意味也。男は之が手傳をなすに過ぎす。女に比すれば、其存在更に輕きなり。

人はすべて現在に滿足せざるものにて、必ずや未來を想像して樂む。未來に絶望せるものは、過去を追懷して樂む。人の常情、未だ嫁せざるものは、其大半は必ず言はむ、願くは戀しき人を得て嫁せむと。されど、結婚は、果して其豫想するが如く幸福なるもの乎。一旦嫁して見れば、思つたほどには樂しきものに非ず、既に嫁せるものは、その大半は必ずや言はむ、今一度娘時代になつて見たしと。

吾人は、人類が何故に世に生れたるかを知らず、又何故に子孫を蕃殖せざるべからざるかを知らず。せんじつむれば、人類の存在は無意味なるかも知らねど、既に生れたる以上は、致し方もなし。家を成し、社會をなし國をなす以上は、是非とも夫婦なきを得ざる也。たゞ其結婚する時期に就いては、余いさゝか説なきに非ず、概して都會の人は田舍の人よりも晩婚也。開化人が、未開

化人よりも晩婚也。而してこれ實に生活の難易如何に由る。都會と開化國とにありては、生活が困難也。故に結婚も亦おそからざるを得ず。日本は西洋諸國に比すれば、生活やすし。從って早婚也。されど、なほ早婚に失するの弊なき乎。

余以爲へらく、結婚の早遲は、大に結婚後の幸福如何に關係す。まづ男の方より云へば、學校を卒業して何か職を得れば、間もなく妻を迎ふるが常なれども、暫く一考せよ。學校を卒業したればとて、學力が十分なりとはせず。職につけばとて、いつ免ぜらるゝかも知れず、まだ十分の貯金もなかるべし。而して早くも夫とならむとす。地位ひくければ、思ふやうな白物は得難かるべし不滿足ながらも妻を得、やがて子を得て、精力の一半以上を一家の維持に費さゞるを得ず、爲めに力量の上に、事業の上に、十分に力を伸べ得ざるべし。殊に冒險的行爲は出來がたくなるべし。男子の結婚の早きに失するは、甚だ以て不利益也。結婚後の不幸の大部分は、實に早婚にもとづく。女子とても今少し婚期をおくらして、十分に家婦となり得べき力を養ひ、何か自活し得る藝能を得たる上にて嫁せば、後に逆境に陷ることありとも、生活上さまでの不自由もなかるべく、萬事都合よかるべし。されど、これ女の方のみが晩婚せむとするも、男の方にて早婚を止めざれば、不可なる事也。女子晩婚せむとするうちに、男子は早く婚を結び、子ある處の後妻ならでは、婚しゆくに由なきやうになるべし。今日にても、女子高等師範の卒業生にして四五年のお勤め奉公したる者は、この嘆あるを免れざるべし。男が主にして、女が從也。男の方にて晩婚すれば、女も自然晩婚になる也。

親の身になりて見れば、娘を早くかたづけたかるべし。ことに、身分もなく、金もなく、娘が別嬪でもなく、藝があるでもなしと來ては、緣付けをいそぐも、尤も千

萬なることなり。早くかたづければ、やれ〳〵重荷がおりたと、むねなで下も、自然の人情。されど、後日の結果を見れば、却つて娘の爲めにならぬこと多かるべし。とにかくに、早婚は女にとりても、男にとりても、損害多きことにして、結婚の不幸の大半は、これより起るものと知るべし。

男にせよ、女にせよ、子をもてば、早く孫が見たしと思ふが、元來よくなきこと也。又一般に早く子を生みて、老後の安樂をはからむとするは、間違つた事也。子が親の臑をかじるは、あたり前也。親の恩に非ず。親が子の臑をかじらむとするは、今日の社會、決して許すべからず。而して此點より早婚せむとするは、以ての外の不心得也。親はたゞ子を教育して、死ぬる時之に金を殘してやれば十分也。子よりは、何も求むべきものなし。見よあらゆる生物、子をうみて、子を育つる能はざるものはなきに、人間のみは、子を生むも、之を育つる能はざるものあり。而してあらゆる生物、子の世話になるものはなきに、人間には、子の厄介になることをあてにするもの多し。誤れる哉。尤もこれは、親に向つて言ふ也。今の親に向つて言はず、將來親たらむものに向つて言ふ也。今の子に向つて言ふには非ず。

都會の女と田舍の女と

地方を旅行して、まづ目につくことは、女みないそがしくして、男のらくらして居ること也。尤も暑き時は、女も晝寢するものあれど、男はほとんど晝寢せざるものなし。夏を除くの外は、女はみな何か仕事をなす。男の方は、唯坐して烟草をふかすか、將棊をさすか、むだばなしを爲すか、ぶら〳〵歩くか、仕事をせずに居るもの多き也。古人曰く、小人閑居して不善をなすと。危い哉。

翻つて都會の中等の程度以上の婦人を見るに、男の出勤していそがしきにひきかへて、至極氣樂也。子はうばに任せ、厨房は下女に任せ、奧樣は、ほとんど用事

なし朝から晩までお化粧ばかりしても居られず、退屈のあまり、小新聞の三面に目をさらし給ふ也、小説と親しみ給ふ也、出入の商人をとらへて、退屈をまぎらし給ふ也。新調の衣服を見てくれがしに、訪問を試み給ふ也。芝居のかはり目毎に、かゝし給はざるなり。寄席に出掛け給ふ也。縁日に出かけ給ふ也。嗚呼都會の貴婦人、一に何ぞ氣樂なるや。重ねて記せしめよ。古人曰く小人閑居して不善をなすと。危い哉。

厨房瑣言

はかりと舛を備ふる家は、極めてすくなけれど、試みにはかりて見給へ、味噌にせよ、砂糖にせよ、また米にせよ、東京には、正直にめかた通りに賣る小商人は、殆んど一人もなきぞかし。斯く商人がこすき事をなすを、一般の風習とせるは、畢竟するに、家毎にはかりと舛となければ也。少くくれても、はかること出來ず、だまつて居る故、商人は、よい氣になりて、こすきをせざるが損なりと心得居る也。これ余が例の惡口に非ず、一家の經濟にさとき婦人は、とくに承知せる所なるべし。余の家に關する一二の例をあぐれば、近頃、八百屋が三貫目なりとて置きゆきし薩摩芋をはかりて見しに、二貫五百目に足らざりき。一里ばかりの路をわざ〳〵番町まで味噌一貫目買ひにやりしに、これもはかりて見しに、わづかに七百四十目しかなかりき。かゝると、もとより微なれども、塵積りて山を爲す。商人をして暴利を貪らしむるも、餘り氣のきかぬこと也。買ひ手が迂濶なれば、商人は、いつまで經ちても狡猾也。さまで高價のものでもなし。はかりと舛とは備へおきて、よく〳〵吟味せば、啻に一家の經濟になるのみならず、商人をして直正とならしめて、社會にとりても、此上もなき功德なり。

酒のみは、はかり目よりは、多きとあり。それもその筈也。東京の酒屋にして、手の字をきめざるものなけれ

ば也。水を入れ、アルコールを入れ、惡酒を入るゝ故、少し分量を多くしても、まうかりは、頗る多きなり。されば、はかり目の多きものほど、不正の甚しきものと知るべし。東京の問屋へは、灘酒の最もよきものが送らるゝなり。殊に二百里の海上を浪にゆられて、酒が益々よくなる也。されば、東京の問屋にある酒は、灘酒の本元にあるものよりも、更に上等なれど、之を小賣りするに至りて、惡酒となる。瓶づめの正宗に、本當の正宗なきと、なほ三十日に月なきが如し。たゞ錢を損するのみならば、忍びうべきも、身躰を害するに到りては、損失も極めて大ならずや。さらば、酒のむことをやめれば、よきも、數十年來ののみ慣れたる上戸になりては、酒ぎらひの想像するやうには行かぬものなり。まして酒は適宜に飮めば、身躰の藥になりてこそなれ決して害にはならぬもの也。何とか社會一般に注意して、この弊風を除きたきもの也。

女房と疊とは、新しきがよしと聞きつるが、酒屋、米屋などの類も、新しきがよし。はじめのほどは、他よりよきものを持ち來るも、慣れば、忽ち品質をわるくす。その度毎に、よくそれとさとりて小言いふか、さもなくば取代ふべし。尤もこれは東京の事也。地方の事は知らず。

▲丁抹國王と乞食　英國女王アレキサンドラ陛下の父君なる丁抹國王クリスチャン陛下は常に朝の中早身コッペンヘーゲン市内を御散歩ある習慣あり陛下例に依り此程御散歩の折身に襤褸を纏へる一人の乞食陛下と知りつゝ陛下の御側近く寄り來り、陛下に向つて手から陛下の影像など求めたるに、陛下には其折恰度一個の影像を御持合せありたれば、乞はれたる儘に、之を手から乞食へと下し賜ひたるに、乞食は之を一見して大に驚きながら、更に陛下に向ひ、言葉柔かに陛下よ陛下の御肖像は國内流通の貨幣面にあるものこそ最も生々として且つ明瞭なりと申上げたるに、寬宏なる陛下は成程と合點し玉ひ、微笑を湛へながらポケットに手を差入れて一圓二十五錢の銀貨一個を取出し、之を乞食に與へ玉ひしと云

落葉片々

宮澤すみ子

○冬のこゑ

うつくしき立田姫の御姿、天の一方に去り給ふてより、世は次第〳〵に冬の境へうつりゆくらんさまの、霜のたゝずまひさへ寂しきを、晝はまだよし、薄絹につゝまれたるやうの大空に、日の影淡き光をもらし給ふて、ものほし竿に我等がほせしきぬの乾くともなく雫のきれゆくを、さても夜に入りてより、落葉の音、たからたから、むすびし夢も砕けよと許り吹きすさむは、これや初冬の聲なるらん、其颯々たるや、はた蕭々たるや、きのふの秋にかはられど、何となく嚴かなる聲の中に冬の宣告うくる心地して、夜と共に寒さ身にしむはふるさとあたり雨交りに、霰ちら〳〵みぞれとなりて、里人皆冬ごもりに取り急ぐらんか。

○殘菊

つれなき人の情をも忍ぶべし、耐ゆべし、たとへこの身の消へゆくとも、契りしむかしのわすれかねてと、執着ふかき婦人が身に、似たりや似たりや、枯野の中に一本しろき花の白菊、天凝り地閉づるの期にあたり、猶ほゝゑむすがたいぢらしく、幾世幾歳日本が理想となし來れる節操を漸うこの頃、あやしきかたへ解釋の學者おはせど、見給へ、枯野の花の白菊、なほ我等女子に、變らぬ、變らぬ、節操をおしへつゝあるなり、我が日本の女子だち、これに學ばすして、はたそれ何をかまなばん。

○枯野

大都會は大砂漠なりと西の國の詩人うたひたましとなんきくを、たとへ金殿玉樓に榮華の夢あたゝかう、其の富と位は萬人の頭下ぐべき譽あるとも、まこと、まこと、人一人の至情もたぬは、枯野のさまと異らでやは。

「唯我のみは、廣野の原の冬枯をゆくやうに、心に止まる物もなく、氣にかゝる氣色とも覺えぬは」とにごりえのお力、あの賑やかな〳〵花の都のまんなかに、想は寂し又つらし、枯野をたどる如くにて、涙あるハートより離れたる女、あたゝかき愛の光に浴されぱこそ、かゝるおもひにむせびしか。

ましや我等運拙なうして、冬野の中のあばらやに、一生埋木の、こがらし吹きすさぶとも、そこに熱あるハートあらば、うらまじ、泣かじ、さ

てし、かゝる人ありや、なしや。

○木枯

くも井にかゝる三日の月の小さき〳〵影も、散れよとばかり木枯のふきすさぶ夜は、筧の音のそれすら聞えずなりて。心細うなるを、ことしは市の民となりて故里を十里の下に、さても我が庭に神樹といへる丈たかき楮より、さと吹き降す風の凄まじかりしよ、留守居の媼ひとり、炬燵に其音きくらんか。

おもひぞいづる、去年の冬、あまりにもつよき木枯に、幼子等の怖れて、しかと我が腕にすがるもつらや、頤もる肌に、さと燈火消へぬ、母も子もうちふるへり、偶々、研ける光のさと障子をもれて、てりわたりたる、さながら天の御威光にうたれたるの感おこりて、何事のおはしますかは知られども、いと尊くおもほへたり、奇跡はたゞに〳〵ユダヤの野にかぎらんや、今、今、こゝに我等が眼の前に日々夜々行はるゝを。

○霜

重なる山々、雲のころもを飾かざるなきも、さすがこゝへは降ることの遅う、朝な〳〵の霜のみぞ冬のしるし深かりける。

等しうこれ空氣の作用によりて現はるゝ家なれど、露の婉なるは霜のたぐひにあらず、霜の凄なるはまたこれ露の類にあらず、彼れは百花いろを競ふの千草が上に結ぶちぎりのさても〳〵優なれや、小萩がもとのさゝやきは我等人間の知るべからざる神秘のこもるらん、これは世の栄よりとほざかりし土の上に、有明の影にまがへるいろ白う、霜柱結ぼゝれたる、もとより双つながら旭にもろく消へゆくものなれども、露の命や、まだとしわかき處女が、罪と惡を知らずして、潔き〳〵身そのまゝ死の御手にいだかれゆくらんさま見ゆるを、このあさぼらけの霜よ、幾多の苦、幾そのうきを味ひし人妻の、容色漸うおとろへたるが、終焉かなしう去りゆくの心地して、枯れ〳〵尾花と運命ひとしきぞうたてかりける。

○蜜柑

駿河の如き暖國には、蜜柑おびたゞしう生ひたちて、世は皆冬枯の寂しき野中に、其葉青々とみのれる實の金色に、すゞなりなるはうつくしきものなり

一歳かの國に住ひし頃、朔風ふきすさぶ野をよぎて、黄なる蜜柑林に遊ぶ、畑のほとりなほこれが二三本あらぬはなく、まして金附の小さき

かなれるいとうらやましかりき。

人は松柏の操をたゝへて、ことの外たかきおもひを寄すれど、知らずや嚴冬、金色の粧を飾りて、しかも芳馨ならびなく、花光の妍娟にまされるあり、況且つ柿栗おとろふる時にあたりて、世に捧ぐるの美味は功すくなしとせんや、蒼松翠竹、はた寒梅の操と共に、これをも愛で給へや世の人々。

〇水　　鳥

厚ぶすま重ねても猶寒きを、習慣とはいひながら、水鳥のすまひよ、鴫は互にゐかはりて羽の上の霜を拂ふときくさへしほらしきに、鷺くも、鶴くも、鴛鴦のむつまじげに冷たき水に命をうけて、立並べるがいぶかし。うすらひよそこ鎖す勿れ、狩人ようきねの夢をなみだしそ。

扨も兒等に見せたきは、爺が園に、動物園の水鳥、彼等手をうちて、よろこび跳むらん、大人の我等さへたのしき記臆の歴然とうかびいづるを禁せざるなり。

〇寒　　星

どこやらの小路に、花のたより戀の辻占がうり聲、次第に細うなりゆきて、夜も三更と覺しき秘　天の河原を見渡せば、くろき宇宙のはてなきかぎり、きらめく星の數幾億、あの幽けき光も、我等が太陽のそれよりも大きく、それよりも光れるがありと、其隔離や幾萬幾億なるらんとおもへば、我等は眇たる地上の一小動物、かぎりなきのスペイスに、タイムの掛橋、わたりゆくさへおぼつかなきを、この肉ほろびて、靈やいつこまでとそゞろに天の偉いなるを仰ぎぬ。

春秋、いづれも霞と靄のへだてあり、冬夜寒星を仰げば、ものむづかしき唯物論者も、嚴かなる靈氣にうたれて、何ものかの御手にいだかれんとすらん。

〇歳　　暮

明治三十五年はゆかんとす、小さき兄妹等の年一つ重ぬることをおもへば我が身の齡ますらんつらさも忘られて、春着の重れ、取り急ぐべく母は終日暇なし、四つ身三つ身のとり〴〵に、襟先後形案じわづらふを、中には小さき初衣の可愛らしきを縫ひ給ふ若き母君もあるらん、さて仕立上げての後、うるさきは肩縫上、腰縫上、まして重きものゝ不揃がちなるは、いよ〳〵手間取れど、たのしみもおのづからこゝにこもりて、喧あわたゞしう、餘りすくなき日をすごすなる。



獨逸皇后陛下の美德

稻澤英子

獨逸國は歐洲六大强國中でも一番武力の强い國として知られてゐますが、今日は單に武力ばかりでなく。富の力に於ても又世界に一二を爭ふ位な强大國でありますが、その强大國の帝室は現皇后陛下の美德によッて帝室と國民との交情が至ッてうるはしく保たれてゐるのであります。

皇后陛下御名をアウグステー、ヴイクトリアと申されまして、シユレスウヰヒ、ホルスタインといふ日耳曼聯邦の公主たる公爵家の第一の姬君でござります、今より廿二年前現皇帝陛下が未だ皇太孫で在らせられました時御嫁入になりまして千八百八十八年に皇后の御位に即かれました、皇后は千八百五十八年の御誕生ですから今年は御年四十四て此の十月廿二日に第四十四回の誕辰を迎へられました、陛下の御容貌は美貌の方ではなく何れかと申せば御肥滿の方で、且つ最も御壯健の躰格を備へてゐらせられます、御幼時の敎育は門地こそ高けれ、父君は小國の公主日本で申せば四五十萬石の大名位にましませば力めて質素を貴び日々の課程は極めて嚴肅に授けられ、年頃にならせ給ひし頃には齊家の法育兒の法なども合せて御學びに成りました、されば陛下は今日獨乙帝國五千萬人より國母と仰がれ玉ふ尊位に在しませど、家政の整理、皇子達の敎育に關しては近侍の者に委ね玉はず、御身親ら手を下して御實行あらせらるゝのであります、臣下に御陪食を賜ふ折は食卓の整頓など御吟味あらせられ、又皇子達のわるさを懲し玉ふ時に御鞭を取りたまふこと屢々ありと

承はり及びます、元來皇帝陛下は世の人の知る如く剛毅の御氣象に富ませ玉ひ國事萬般何事にも干渉在せらるゝ御性格ですから勢ひ臣民の意に逆ふ事が多いのでありますけれど、其傍には常に此の優美にして溫和なる皇后のましまして、帝の性急な御行爲に對し忠告したり、慰藉たりして其の御心を和げられますから、上には帝の御親愛を增し、下に向ては臣民の敬愛を增し玉ふので在る、されば皇帝陛下も眞に皇后の御美德を稱し玉ひて愛敬の情自然と深い譯であります、兩陛下が常に御協力遊ばして國民の幸福を增進せしめんとて、まづ家庭圓滿の活ける模範を示し玉へば、上に倣ふを以て喜びとせる獨乙國民は只管これを己が家庭内に實行するのであります、此の如く陛下は宮中に於かせられては善良なる妻であり且つ六人の皇子と內親王方には慈愛深き母君として坐ますのみならず、下々に向つては又德望の高い國母として尊敬を博し玉ふのである、現在國內に散在する幾多の慈善事業は皆陛下の殊に御心をかけさせ玉ふ處で、屢々御行啓ありて親しく御視察あらせ玉ひその事業は皆大概陛下の御名を戴いてゐるのであります。

私は今近刊のティーヰルヘーと申す一雜誌に皇后陛下の御美德を掲げた一節が在りますから茲に一寸轉載いたしませう、事は本年正月廿七日の事です、此日は皇帝陛下の御誕辰日ですから、陛下には常より早く御起床あそばし、先づ最初にケブルツタアハスラツシユ（誕生日の臺と譯すべきか、これは皇后陛下を初めとし、各皇子皇族其他臣民より奉る祝ひの品物を載せた臺で、每年皇后は皇帝の御出ましにならぬ前に美しく御飾りになるのが例です）の御支度を終らせたまふや皇子皇族を始めとして各國の全權公使文武の百官などが參列して祝賀を奏し奉るもの引も切らず、午前八時から午后四時に至るまで僅の御暇も無いので、甚く御疲勞あらせられましたが其にも拘らず、夜は御陪食を群臣に賜はるの嘉例で夜半にまで及ばんを御察しあり五時迄の一時間を御休息と定め玉ひ御附の女官にも堅く其由をふくませ御寢所に入らせられたといふ事であります。

丁度此の折午後四時半の頃、皇后陛下御直轄の伯林病院の監督を務めて居る伯爵夫人が宮中に伺候して火急の用向を申されました、その事柄は配下の一看護婦が病氣危篤で生命旦夕に迫つて居る、責ては此世の思ひ出に唯だ一度皇后陛下に拜謁を得たいとの事で在りました、女官共は兼々陛下今日の御疲勞を恐察してゐる際ではあるし、御休息を妨げ奉るは恐多い事と思つて、いかゞはせんと案じ煩つたもの丶日頃御仁德の厚くゐらせらるゝ事を思ふて、恐る／＼御居間に參り此の由を申上ると、陛下には朝來の御疲勞をも厭はせられず直ちに御許諾在つて御乘物を申付られ、御愛讀の祈禱書と御居間に飾られた香の高い珍花とを御手づから一束となし玉ひ、病院に向はせられました。軈て陛下は件の看護婦が臥せつてゐる臥床の傍に立たせられて、少しも御多忙の樣子なく、携帶の祈禱書の一章を御朗讀あらせられました、その時病婦は其の弱り果てたる兩眼をかすかに開いて難有き陛下の溫顏をつくづくと拜しつゝ此世のなごりの微笑を湛へて拜聽し奉り且つは感涙に咽びました、そこで陛下は花を病婦の臥床の上に麗しく飾り給ひて還啓あらせられました。

かゝる御美談は幾つとなく民間に傳へられてゐます、其故獨乙の國民も亦た陛下の御恩澤に感じて陛下を愛敬しまつること一方ならず、陛下をもて一日も無くて叶はぬ國中唯一の御方と稱へ奉り、その御德を慕ふのであります。

家庭の交情

藤堂梅軒

家庭の他の人とは、隨分廣いもので、第一に指を屈するは、親戚、次には朋友、次には舊知、教師、同鄕人から、廣く社會一般の人を指し、猶も婢僕は或る意味よりいへば、此の中に數へられます。

さて家庭が他の人に對する道とは、謂はゆる交際の宜しきを得るといふことてあるが、交際とばかりいへば、我が家の幸福を謀り、又他人の感情を損せぬといふこと

とにばかり聞える。それでは、餘りに勝手過ぎたり、又は人の機嫌取りのみに係り切つて居るような譯で、何だか有り難くも見えないです。それよりも、他人に對する道とは、禮義上は勿論のこと、國家社會一般の幸福を謀るというように説いて貰い度くあります。此の説明から割り出して、家庭なるものが、どんなに、家庭以外の人に對すべきかを、論じて見たいと思ひます。

○親戚に對する道

他人といふも、親戚は殆んど他人ではないかと思はれるほどに、親しいものである。殊にそれが、家を別にして居る親子兄弟の間柄であるときは、一層その通りである。併しながら此の樣な間柄は、寧ろこれを家庭の人と見做すべきもので、此處には論ずる限りでない。そこで此處に述べる親戚は、世間が通常稱へ來て居る伯叔、從子や母又妻の緣族などを指すのです。

さて此の樣な親戚として、これに對するには、どんなにすれば良いか。親戚といふからは、骨肉を共にし、血緣を一にするので、互の間に利害相分ち相救ふが至當であるに、世の實際に於ては、中々左樣ではなくて、相嫉み、相怨み、相陷るの惡德は、却つて親戚の間に最も甚しいのを認めることが往々あります。普通一般の情からいへば、親戚に目出度いことがあれば、從つて我が家の目出度い心持が致し、親戚が名譽を得れば、從つて我が家にも其れを得たかの如く、感じられるのである筈です。然るに事の全く其の反對に出づるのは、さる次第の理由があるので、即ち一方が他方の利益名譽を直接に分配して貰へない場合の失望、怨恨から來るのであります。

今少しくこれを委しく申さうならば、即ち一方に何か大きな利益を得たことがあつたとするに、他の方が親戚の間柄であるから、必ず、相當の分配をして呉れるか、たとひそれ程でなくとも、此方から申込めば、無論それに應じて呉れるだらうとの推測が外れたり、或は又平生に於て互に其れとなく競爭をしたり、又全く音信不通となつて居る間柄では、其の分配は迚も望み得られないとの僻みから、種々の惡感情、惡手段を構へ

るようになつて來るのである。

實に親しいようで油斷のならぬは親戚の間柄であります。そこで親戚に對する道としては、余は彼等を救ふこそあれ、救はれることは望まぬといふ決心を持つてもらひ度いのである。必竟他を依賴るといふことがあるから、失望の餘り嫉妬、怨恨、擠排などの惡德が演ぜられるのであります。だから假初にも親戚を依賴するような意氣地なしを、根本から刈り除けて了はねばならぬのです。依賴はしないが、亦全く庇つても遣らぬといふは、決して親戚に對する道ではあるまい、即ち禮儀にも悖り、又國家社會の鞏固を根本から弱め崩して了ふようになります。

○朋友に對する道

家庭の朋友とは、家庭の主夫婦の朋友といふことである。そこで此の朋友に對する道は、前の親戚に對する道とは、全く狀況を異にして居ります。一は親戚といふ血緣、一け朋友といふ他人、其の名稱をいふだけても、既に異つて居る。が、しかし、互の間の親しさは、却つて、朋友の間に密で、親戚の間のように屢々嫉み陷るが如きことの毛頭有り得べからぬものである。若しも左樣でなければ、其の朋友としての交誼は、全く存しないので、即ち朋友といふ資格は全く消滅して了ふのである。親戚の方は、そういふ譯には行かないで、血緣とか、骨肉とかの關係は、たとひ絕交しても、緣切りしても、事實に於ては消滅しないのであります。朋友の方は前申す通り、其の關係が消滅するものであるだけ、其の關係の存する以上は親戚も及ばぬ親しいものである。

朋友が斯のように親しい者であるとすれば、彼等から救つて貰ふことは公然要求し得られる。彼等を救ふこそすれ、救はれることを望まぬといふようては、朋友としての情が、淡く淺いといはなければならぬ。一家の苦痛困窮はこれを朋友に對して、包み裝ふ必要は更に認めぬのみか、有りの儘を明かして、此處に温かい同情が湧いて來るのである。これと等しく、一家に幸福利益があれば、又これを包まず明かして、何の彼等から嫉

紿を買ふこともなく又陷れらるゝことがあらうぞ。實に朋友の間には、双方の家庭が有する幸福も不幸も互に共通してこそ、眞の友誼友情が存するのであります。兄弟にも明かされぬ秘密を朋友の間に語るといふさへある程だもの。

○教師に對する道

教師とは抑も誰ぞ、家庭の主夫婦が幼少の時から學んだ所の人も、兒供が今現に學びつゝある先生も皆此にいふ教師である。其の學ぶ事柄には、學問もあり、裁縫、手工等の技術もあつて、何れにするも教ふる人は教師先生である。併し先生としての有難さは、學問を教ふる人であるか、將た技術を授ける人であるか。余は技術よりも、學問を教ふる人を、猶有り難いと思ふ。否、學問とて、只ゝ智識を授けるだけの人よりも、智識を授けながら我々に感動を與へ、我々の意を錬り鍛へて與れた人の方が遙に有難味が多くあります。

それて見ると、小學の先生が、我々に取つて、最も有難味のある人達てある。いはずとも知れたこと、我々が兒供である頃には、全くの無心同樣で、一も二も小學教師のお蔭で、將來人らしくなるべき土臺を與へられたのである。此の次には中學、高等女學校の先生達てあるといはねばならん、我々の青年時代には、尚、心の定まらぬもので、少からず此等教師の恩澤を受けるものであります。

所で、實際世間を見ると、隨分小學や中學の先生達が、冷かに見做されて居るに反して、兒供の裁縫、茶道、琴曲、漢學、英語等の私宅教師が中々に大事に取扱はれて居ます。其の理由は、學校の教師は、自然父兄に接する場合が少いが、私宅教師はお互に往來交際することが多く、又學校の教師は轉任、移住等が繁くあるが、私宅教師は一箇所に家を構へ門を張りて無暗に移り動かない。これ等の點が、世の實際の如く、取扱の厚薄を來たしたのであらうと思はれる。此の理由からいへば、無理でもあるまいが、さりとては、今日の家庭が餘りに物事を辨へないのに、驚かざるを得ません。

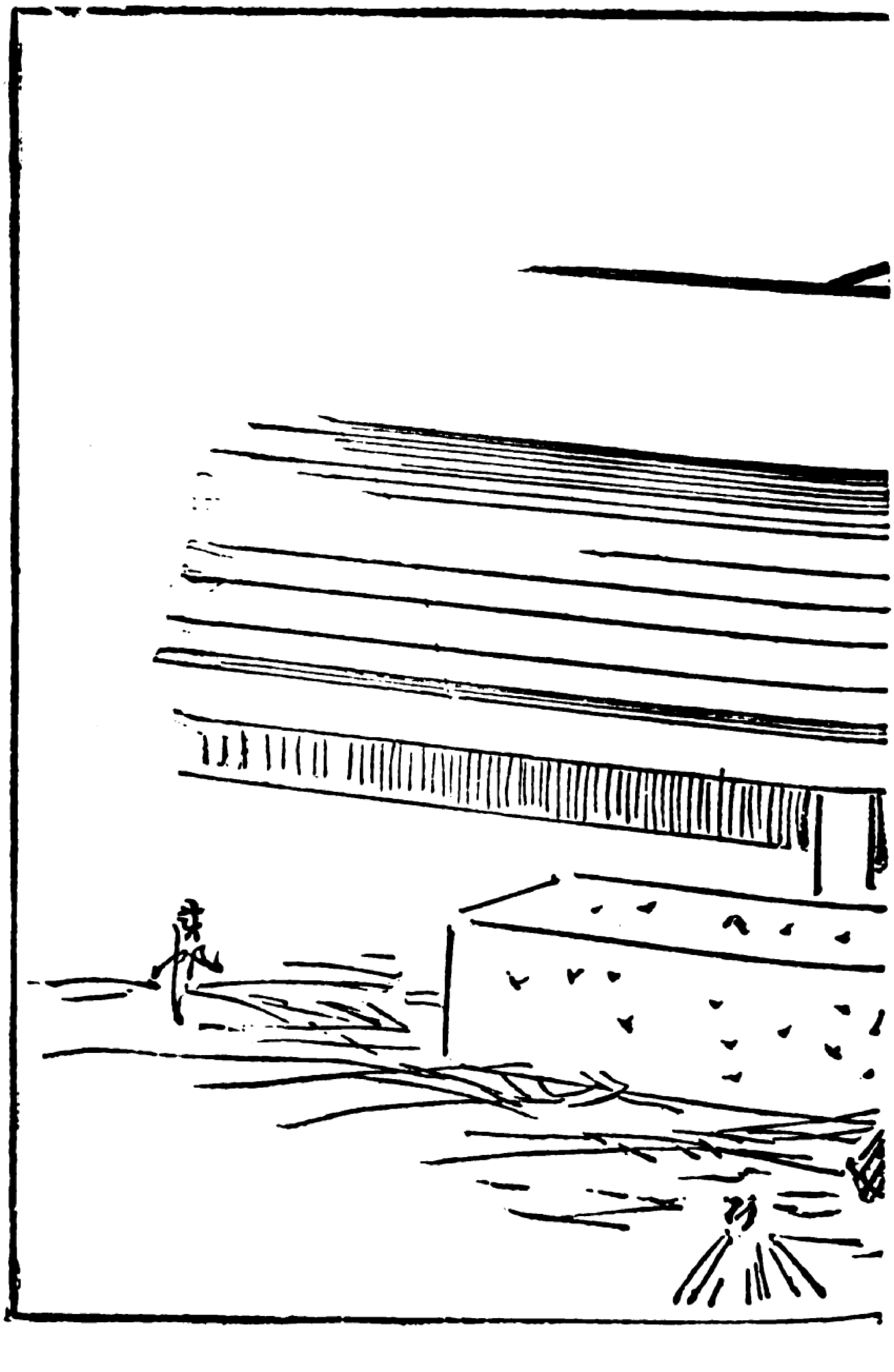
成る程、小學の先生達は、兒供に、平易い文字や、數へ方

を敎へて居るだけに、些の俸給を受けて居る。去りながら、彼等は彼等の本分として、其の薄給を意ともしないて、只管ら其の生徒たる兒供が、後日天晴の人間になつて貰ひ度いことを祈つて、それのみを何よりの滿足として居るものであります。今日の小學敎師が、悉く此の通りの高尙な心懸がないとしても、小學敎師の天分が斯くあるべきものとして、各々覺悟もなし又斷念もして居る其れ等の人を、どうして、世の家庭が、等閑に冷かに取り扱ふことが出來ようぞ。思へば今日の小學敎師こそ、實に薄給て、碌々其の妻子をも滿足に養ひ得られないに、よくもそのように甘んじて居られたものであります。それは、又敎育者の側から、即ち仲間の中からも、又敎育の書籍の上からも、小學敎師



は斯くあるべきものであると説き示してあるからである。家庭としては、よく〳〵此の點に、あらん限りの同情を表して、充分に彼等を滿足させ、兒供の世話になりつゝある恩誼に酬いねばなりません。

偖て、其の樣にするには、どうすれば良いか。家庭が金を出して、其の足らぬ俸給を足すべきであるか。否々、そんなことはするにも及ぶまい。社會一般が、教育といふ仕事を大切と考へ、教師を大切な者と認めるようにならば、自然と其の俸給を上して來るに相違ない。それよりも、差當りの處家庭が教師や其の學校と、最も近しくなつて、兒供の一身上に係る事柄を、隔てなく打ち明かして相談もし、又眞底の敬意と親愛とを以て、交際を結び、たとひ、其の兒供が其の學校



を卒業退學した後も、常に、其の一身上の相談や報告を續けて行き、將來其の兒が或る名譽を得て、祝宴を開くとか或は年頃になつて婚儀を結ぶとかの著しい事のある時には、必ず其の元の敎師を、其の席に招待するようにありたい。

今の世には偶には、右のようにする家庭があつて、我々を感服させることとないでもないが、滔々とした一般に於ては、未だ中々に、そうは行つて居りません。田舍の風俗人情の質撲な所では、却つて都合よく行つて居るものもあるが、少し身分あるか、但しは資産ある家庭に於ては、輙ゝともすると學校先生を輕んじ、家庭の中で屢ゝ先生の批評を兒供の前に試みたり、或は道路で先生に出逢ふことがあれば、兒供ばかりが先生に敬禮はするが、父兄は見ぬ振りに通り過ぎたり、實に不都合極まることが多いのである。これを見聞きさする敎師の不快はどれ程であらう。それて以て薄給て能く天分を守ることが出來ようか。氣の毒とも、何とも、いひようがないてしよう。

全躰、兒供の先生は、即ち家庭の先生てあり、家庭の先生は即ち主夫婦を始め、一家全躰の先生てあることを忘れてはならぬ。それて、どんな身分ある人でも、郡長樣ても、知事樣ても、議員樣ても、大臣殿でも、大將殿ても、華族殿ても、我が家庭の兒供が、世話になつて居る先生は、これを先生として呼び先生として扱はなければなりません。公務の上では、小學敎師を命令し支配することもあらうが、私事に於ては先生として仕へねければなりません。そこて、今日困窮の極に達して居る小學先生達も、益々喜んて其の職に安んじ、競うて其の本分を完うしたいと思うようになります。此のようなことに氣が附かないて、世には小學敎師に奏任の待遇や勳位を與へて、これを喜ばせようと考へ居る人が隨分あるようたが、それは未だ〳〵末のことてある。即ち國家社會の幸福から考へると、そんなことは一時の姑息てあるといはねばならん。

○舊知、鄕人に對する道

舊知とは主夫婦が昔から互に知り合つて居る間柄て、

隣家同志であつたとか、仕事を共にしたことがあつたとか、特別に朋友とも附かぬ交際を結んだ人である。又郷人とは、其の出身の土地が、府縣を同じうするとか、國郡を同じうするとか、或は府町村を同じうするとか、總て同一の土地的團躰の間柄であつて、それが狹くなる程、其の親しさが加はつて來るのである。此等の舊知郷人は、彼の朋友や親戚とは違つて、それ程に相依り相救ふことを要しない。只々團躰として或る企を起す場合には、其の團躰に對する道として特別に處する必要があると思ひます。

日本人は兎角團躰に對する道を辨へないから、外國人に笑はれもし、又事業に失敗し易いのである。團躰を裏切りして、其の團躰が潰ぶれると、後は、各々孤立して却つて他から甚く凌がれた例が幾等もあります。

○社會一般に對する道

これは前の舊知郷人よりも、一層廣い方であつて、國家といふよりも、猶廣く説明するが宜しくある。謂はゆる公德なるものが、此の道に相當して居るのであります。道路に腐敗して居る水を撒き注いだり、川や溝に塵芥を投げ込んだり、傳染病に罹つて屆をもしないで濟ませたり、警察から成るべく道路の左側を通行すべしと注意があるにも拘らず、平氣で大側を歩いたり、數へ來れば、様々の公德を破つて居る家庭が甚だ多い。しかも家庭がそれ等を以て少しも惡いことだと感じて居らぬのである。どうも嘆はしいことではありませんか。寧ろ耻かしいことでしよう乎。

○婢僕に對する道

婢僕は家庭の中に居るから、これを家庭の他の人と見るは隱當を缺いて居るやうだが、これを家族から見れば餘り、それも無理ならぬと思はれる。勿論場合によりて全く、これを家庭の人として計算することもあるが、こゝでは、暫く家庭以外の人として、家庭が如何に、これに對すべきかを論じようと思ふのである。

婢僕は、家庭が相當の報酬を與へて、これを雇ひ居るのであるから、即ち雇人であつて、官廳が官吏を雇ひ、銀行會社が役員を雇ひ、學校が教師を雇ふと、大した相異

はない。只々其の仕事が器械の働く樣で、考へることの餘りに要らぬ下等であるだけ、其の人までをも下等と見做したので、實は決して下等なる人と限つたことでもありません。どうも今日では多くの家庭が、婢僕を下等な人間と見做し、往々畜類や何かを使役ふように心得て居るのもある。

彼等とて、亦人たるの心を持つて居るから、人間らしく取扱つて貰へば、有り難く滿足して、忠勤を勵むようにもなるのであらうと思ひます。試みに今日、多くの家庭が彼等をどんなに取扱つて居るかを見給へ。其の使役に限りがなくて、一つの命令を果せば、直ちに次の命令が下り、一つの定まつた仕事を濟せば、不時に或る用向にかゝらねばならん。從つて彼等は身疲れ心衰へて、晝の間から睡氣を催し、其れも朝は早く一番に起きて、夜は遲く一番後に臥するから、睡る時間が乏しい。加之に食物が粗惡と來て居るから、顏色が蒼く、家婢になると赤い頰に、デブ〱と肥え太るから、一見食物の粗末なることが知られる。今少しく彼等を丁重に取扱ひ、自由をも與へ、その代りに責任を充分に盡させることにすれば宜しいのである。

○結論

家庭が他人に對する道に就いては、我々猶も深く廣く研究すべきことがあらうけれども、今は大略に留めて、他日又機を見ることゝいたします。

無邊俠禪 渡邊子爵の家庭

（令妹逸子刀自の談話）

鈴木げん

幾世經ぬらん木立物深き麻布本村町なる渡邊子爵の邸宅、時しくに蔦赤々と這ひ繁れる玄關に音なへば、いつも身に木綿の衣の清素なるをつけて、自然のまゝなる風采飽迄氣高く犯し難き、年嵩の婦人が、訪ふ人の貴賤を問はず、一々叮嚀周到に應接さるゝを見ぬはなし、抑も内に助くるの夫人なく、慰め受くる兒達もあらね家庭に子爵が、積年丹心よく公に奉して露も内に顧み

るあらず、分けて彼の去年の夏の最中波風あやしう立騷げる政界の中心點となり、世上の毀譽一に君が身に集ひし頃も、泰然自若聊か立脚の地歩にたじろがず、去つて歐洲の天に高蹈するや、虚心異邦の風物に吟嘯するもの、寔に一年有半、頃日義子千冬氏を擁して歸り、新たに雄健なる其大抱負を發展して一世を震駭せんとするを得る所以のものは、二十年來身に積み經し苦酸の閲歷に鑑みて、日夜實踐躬行し偏に阿兄の大業に貢献する稀世の烈婦、渡邊逸子刀自なる無名の女英雄ありて存するによる歸朝ありて以來けふ始めて宮中に伺候されし兄君の靴の紐をも手づから結びて勇ましく出て行く馬車のかげ見えずなる迄端近く跪きてありし刀自は、やがて元の座に就きて語を次ぎ玉ひぬ。

一躰高輪の兄(千秋男)は有名な骨董好きて其邊の數を盡して手許に集め居れど、こゝの兄計りは凡そ是好きと申物なく、恭將碁は勿論、他の一切の遊戯、分けて婦人を近付ける事の嫌ひなのは、世間の知る處でございます、而も何の信仰より左様あるかといふ事は、私どもすらよく知り得ませんが唯其昔し兄の十五歳の頃田舍のさる家へ養子に參つた事があります行々見合せやうといふ娘は當時やつと六才で、その下に二つ計の男の子ありましたが、兄は其縁談の不當であるのを唱へて自ら辭退して家に歸りました其後自分で追々立身するに付け、先の養家の上に思ひ、其頃十五才の子を迎へとり、一切の敎養を自分でして外に其父母の養老金として、年々五十圓ツヽを送り居りましたに折角成業に近付きました頃、其子がなくなりまして又其姉といふのも身まかりましたといふ事ですが若し女てふものにあッた關係として推て尋ねて見れば唯それ計りです、今より思へば二十年前、私がこゝに參る迄は、京都のもので年増の婦人一人、何かと親切に兄の身のまわりなど世話をして居りましたが以來幾程もなく暇出して後は家事一切は悉く私に一任して、露程も顧みず、永の年月せめて一つの樂みは書物位ゐて御座いませうか、書物は實によく集めて居ります、各外國の書物は申すに及ばず、漢籍和書其外小說義太夫本草艸紙の類ま

て凡そありとある書物のかず〳〵、恐らくは世にあるものでないと中者は御座いますまゐ、夫故本の虫干と申日には、親類中から澤山よつて參り、大騷ぎして手傳つて呉れるのが例で御座い升、兄は非常な勉强家と申ても差支なからうと思ひ升、まづ朝は二時半三時頃より如何なる日も必づ床を離れ、燈火の影に端座して、宵に枕に備へ置きました本を讀み、食後も矢張り續けて居ります、よく〳〵急用でゝもあれば格別、午前中は大躰のお方には辭して會ひませぬ。

食事などは永年侍して居りますが、一度でも撰り小言申した例しは御座いませんが、どちらかと申せば肉食は好む方です、歸朝の後は追かに日本料理がよろしからうと存じましたに、やはり牛肉の方がよいと申して居ります、姪の千冬も極めて穩かな物優しい性質、私の伜直澄(是は高山と申す家へ嫁ぎまして擧けました子供ですが不幸にして其二誕生の朝夫は身まかり以來五年の間は私が、貧苦の極に沈んでとり分け六か敷姑と、三人の小姑のあらゆる試みの中で、夫こそ盤根錯節の間に育て上げ、晝は土地の小供の針の指南、夜はすがらに微かな賃仕事して、かつ〳〵其日を送り升程に、此兄に呼び上ぼされて此方へ參り、以來は不足なく敎育されまして、唯今は大學の政治科に居ります)は又至て平氣な無頓着なたちのものですから、二人は眞の兄弟の樣に仲睦じく斯樣なより合ひの一家族でも、實に平和に幸福に送つて居ります。

衣類の事などに何一つ彼是申した事はない、兄て御座いますが、私の存じ升にはどうか一家の着料丈けは、人の手を煩はし度ないと心得、高輪の姉(千秋男の夫人)が私の十ヲの年から手をとつて、早う二親に別れた孤の私に、親に成替つて琴茶の湯から糸とを機織道まて、夫は〳〵難有い信切をもつて敎へて呉られました。厚い御恩に對しても又二つには昔苦しんだ難儀の時代忘れぬ爲めに、邸内の空地〳〵に桑種へて、少しつゝでも蠶を養ひ升して、書生部屋の隅や、巡査室の側迄そこでとに一枚づつならべて仕立ますので、先づ今日迄には一度も外から求めた事は御座いません、外に是れぞと

いふ樂しみも御座いませんので、こんな事や皆の靴足袋のもう迚も綴れぬのを、夜なべ仕事に打ほどして、竪糸をわらくして織りましたりします、世間ではそんなものを思しめされやうかも知れませんが、中々立派な敷物となッて今三反迄織上げました。兄が先に大臣て居りました頃には奈須野の別墅の方に桑の樹が澤山あると申ので下婢や書生を皆引つれて參り、其時には澤山養ひました夫から、是は今年の糸で兄や姪の侍設けに一反つゝ織ましたもの、御覧下さいませとて刀自みづから座を起て次の間より三反の糸織縞もて來て示されました、つく\/と見れば二反はげに糸すぺもよりによりつゝぬき惜しみなう打込まれたれは、仙台平とも見まがふ斗り見事なるに引かへ中に一つ横に節糸織りたるは其子直澄氏のだそうです、刀自の心用ゐの周到なは其所謂より合ひの一家族が分けても睦しく幸福なる所以てありませう、此地の染屋にまかせては、茶の色のあせ易いとて、幼少の折から手馴れて居られる染草をわざ\/信州からとりよせて、御自分で染られたものであると聞けば、愈々奥床しふおぼへました刀自は更に又隔てなく語られました。

私共は草深い信州の山の奥に生れて、名物の雪に埋れて育ちました我身、況して運拙く、最初嫁ぎました宿の夫は、實に淫靡放逸の性質て箸の上げ下ろしに迄、「武士の娘」といふ鑄形に入れて育てられた身には、忍び難いのをしのび\/て五年六年死んで居る氣て心棒しましたけれど、男の子二人迄擧げました私を措いて、近く住ひ居る叔父の娘と、如何いふ譯の出來てか、後から思へば叔母迄も能得づくて、東京の中村敬宇先生の塾に入學するといひ立てゝ家を出で、程なく私の知らぬ間に叔父の家迄歸りて來て居ります始末、無限に堪へてもかひなしと思ひ切つて兄の許へ離縁の申請いたしましたら、噂は其耳にもは入りて居り、快くゆるされましたので二人の子にも生き別れして兄の家へ歸りますと、因果と又一人胎に宿つて居りましたので夫より五ヶ月の間は涙の中に日を送り、產み落しましたのは始めての女の兒、惜しらぬか武士の娘の本領でもな

けれは、此子計りはと燃え立つ程に思ひつめた事も御座いましたが、退いて思へば一旦縁切つた人の子供、兄夫婦の思ひとりも耻しく、亂るゝ心を鬼にして、程なく乳母に付けて先方へ返し其後はたとへどの樣な憂き目見るとも、再び嫁して苦患を重ぬる事をしまじと、深く決心致しましたか、兄達の嚴命に背きかねて先に申上げた高山の家へ嫁ますと、今度は力に致した夫に死に別れ、其生前より家に集る數々の債主の爲めに、身にそふ衣類手道具迄一つ殘さず賣り盡しました上に骨も身もけづられる程苦勞ばかし重ねました、此頃よく人樣が、「兄達の續く出世に定めて身のまはりの何やかや十分調へてあらふ」などゝ申方が御座い升が、愚かや年とつて子供迄引連れ、兄の世話受る身で夫れ處で御座いましよふか、唯どふか積る恩報しに身を粉にしても出來る丈け盡して見たいといふ外は、夢にも自分の事など考へては居られませんので、同じ召使ひ升下女も三人と思ふ處は二人、他の一人分は自分てすればよいといふ覺悟、兄が大臣の職に就きました節も他の方の官舍には目につく樣に澤山女中の居るのを見受ましたが、私どもはとうと四人て而も幸ひに事なくやり通しました。

私は容易に人を易る事が嫌ひて御座いますから、大體手許へ參るものは三年四年と永く勤めさせます、其替り始め家に置くと定める前によく／＼其ものゝ性情を檢め升、一番にまづ其ものゝ手を見るので御座います、節の高い指の太いものならば格別、所謂白魚の樣な細やかなものに役に立つものゝある氣遣ひは御座いません。然るに此頃では往々こういふ風のものゝ方か多いので、私も不思議と心得て試みに其者に是迄居たるお家ては何をして居たと尋ねますと、其もの等の話す處は大同小異ては御座いますが、一つ實にもつて驚くべき限りの事は、如何て御座いましよふか、よいお身分の方々や大變な重いお役を勤めらるゝ人々の奥樣達の間に、彼の花といふ勝負事の行渡つてない處はないといふ事て御座います尋ねもせぬ間はず語りを聞いて見ますと。

先の奥樣は極のお花好きで日暮頃からはきつと其集りの宿へお出かけ遊ばしてお歸りはいつも夜中の一時か二時、夫故外の用はせずとも子供さへ可愛がつて呉れればよいとの始めからのお言付けてすされば御留守中は遊ぶ外何の用事もなく、漸う子供衆を寐かし付けて、お迎ひに參れば數多の家から矢張り我身と同じ迎ひの使者、外には編物雜巾さして時を消すものもあれど、大方は皆主人の惡口を喋々啾呼くもの計、お供して歸れば奥樣は翌日の晝過迄お休み故、旦那樣は獨りで御支度遊ばしてお勤めにお出懸け、其お退けの頃は奥樣の朝御飯の濟んだ時分といふ勘定です、それゆえ濟まぬ事ながら眞面目に御奉公申上るものもなく、獨りてに身躰も放らつになり勝て御座います

などゝは推しなべて皆異口同音、勿論はしたないは彼等の常てすから悉く信じは致しませんが、とにかく之れに近い家庭に育てらるゝ子達こそ、可憐そうな次第です先づ試みに御覧なさい、主人の目つま忍んでも身をこそかばへ、熱心に子守るものなどは容易にないのが一期半期と金錢で雇はるゝ奉公人のならひ、家に歸れば寐るが仕事、眼さへ覺めれば内を外に出ありく主婦の留守に、どうして小兒を愛しましよふか、まして起臥衣食のすべてを、夫にのみ任せ置いて獨り無益の快樂にふける親の心は、如何に殘忍では御座いませんか、家の秩序も之れより亂れ、格式も自ら衰へて、夫の名を迄穢すのは目の前の事、世間から何んと取されたせられても致方のない儀であらうかと存じます、よし世間では美衣を着たり、いゝ宅にさへ住むものは直ちに幸福の人の樣によつて擧つて羨みますけれど、私は世間の所謂幸福といふ意味を深く疑はざるを得ないので御座い升、幸ひに私共の家庭は、親しければ親しい丈、樂しければ樂しい丈け、一すぢの道のかげにめいくが動作して居るとても申ましようか。夫故出入して下さる方々が、「こんな隅から隅まで透き通つた樣にせいせいした家はない、くさくした時もこゝへ來ると胸のつかへが下る樣だ」などゝ申して呉れますのには、お世辭と知りつゝ、滿足に存じます。

主婦の心得

醫學士　石原笠軒

此間歐羅巴の雜誌を讀みました其内より家庭衛生の參考となるべきもの五六を茲に拔萃しませう、

○病兒の授乳に就きて

ケルレル氏が小兒治療法年報に於て報道してゐるのを見ますに、胃腸病に罹ッてゐる乳兒に對し自然營養即ち人乳を與ふる時の關係はどうであるかと云ふことを論じてあります、氏は胃腸病にかゝってゐる小兒に婦人の乳を授けばそれと共に通例速に胃腸の症狀が無くなる、そして全體の快癒と云ふことに漸々と近寄ッてきて體量も增加するやうになる（歐羅巴では日本と違ひ人工營養が行はれてゐるのであります）それで自然營養法即ち婦人の乳を與ふると云ふことは病兒に向ッては最も必要であッて務めて勸告せんと欲する所である、しかし急に結果を見難きを以て餘程忍耐を以て效果の來るのを待たんければならぬ、人工營養を行ふときには通例急に體量の增加を見るものなるが是は反て好ましからぬものであッて實際には段々と漸を追ふて進み來る處の治癒を期せねばならぬのでそれには自然營養法が一番穩當で確實であると思ひまする云々と我邦の狀態では少々右と相違の趣もありますが何時でも健全の人乳であればそれを以て病兒に與ふるが最も適當であることは誰も異議のないとでありましよう、

○小兒に與ふる牛乳に乳糖を混和するの利害如何

人工營養を施すときに牛乳に普通の白砂糖即ち蔗糖を加へたり、同一物より製する單舍利別を加へなどして甘味を付けるのは平常目擊する所であります、そして多量を加へることは小兒の胃の爲めによろしからぬことは皆さんも能く御承知であります、所が乳の內にある乳糖なるものは天然に乳の內に存在するものであれば之を以て乳の甘味を增す爲めに混和するのは一寸よろしかりそうに考へられましよう、然るにやはり小兒病治療年報上でプレセトル氏が說いてゐるのを見ます

と乳糖なるものは易しく乳酸醱酵を起すものである、依而生ずる乳酸は乳の成分たる乾酪素なるものから燐酸石灰を取去るのである、そして乾酪素が凝固する、乳は消化し難いものとなる、そして石灰の拆出が多量となる、如此次第であるから牛乳に乳糖を混和するのはあまり望ましからぬ事であると

●ホン、ドゥンゲルン氏法により凝固せしめたる全乳を以て健兒又は病兒の營養を試驗せしこと

是はジーグルト氏が實驗したのでありまするが、元來乳兒の胃中にて婦人乳は極小なる塊に凝固すれども牛乳は乾酪素が一層大なる塊に凝固し爲めに消化が困難となる、即ち小なる塊なる時は胃の消化液に觸れる面が多くまた消化液がよく混ずるけれども大なる塊なる時は消化液と接觸する面積が少く、また消化液と相混和することが六ヶ敷なるわけてあります砂糖を水に溶くにも大塊なる時は小塊なる時に比すれば其溶け方が餘程遲くなるのと同理てあります、

右の事實は既にとく以前から知れ渡ッた事であります此事實からしてドゥンゲルン氏は牛乳を人工的に凝固せしめ、其凝固したる塊團を能く〳〵振盪して極〻小なる塊團となし然後之を飲用に供せることを發明し之を健康なる乳兒幷にまた病める乳兒の營養物として與へたりしに好結果を得たりと云ふ

ジーゲルト氏も亦實地に其試驗をなしてドゥンゲルン氏の實驗の確實であると云ふことを經驗したのであります、ジーゲルト氏は六ヶ月間之を經驗致し健康なる乳兒、病める乳兒は もとより尙ほまた一層年齡の進みたる小兒及び成人にも試みましてそして胃の部を外より壓迫して人工的に吐逆せしめ又は自然の嘔吐を起したる場合等に其吐出物を檢査してドゥンゲルン氏の說が實際であると云ふことを認めましたのであります

ジーゲルト氏はまた胃が加答兒症に罹ッてゐる時及び胃潰瘍と申して胃の粘膜に糜爛せる傷が出來る病氣にもやッて見ました、

ジ氏は重症又は慢性の胃腸加答兒に罹れる乳兒に對し

ては稀釋せぬ乳なれば少量宛與ふることゝし五十瓦若くは三十瓦を一度にやることゝしました、小兒生れて第一年の間ならば、乳を與ふる時間の間隔即ち食事と食事の間は凡そ三時間乃至三時間半とするを可とすと申します、そして、八ヶ月末間の小兒には一「リーテル」(五合五勺)の乳を與ふべからずと説いてゐます、また前述の如く凝固せしめたる乳を與ふると既に四週間なる時は最早凝固せぬあたり前の牛乳をやッても小兒はこれに堪え得るであらうとの事です、稀薄せざる牛乳を與ふる然めに小兒が若し便秘を起せし時は乳脂又は乳糖の溶液を混和するを良とす、またカノプテル氏が稱揚せる「マッサージ」をも施行すべしと、

牛乳を凝固せしむるには「ヘックステル」色素製造所より製出する凝固粉「ペクニン」を用ふるにあり、此物質中には凝固酸酵素が乳糖と結合して存するものでありまず、二百瓦の牛乳を凝固せしむるに此物質が一小刀尖だけあれば澤山であります、之を牛乳と混和すれば一回よく振盪したる後其容器を凡そ攝氏四十度位の温湯にて温むること約五分乃至十分とす、そうすれば凝固は充分に出來るのであります

若し必要ならば更に水、乳脂、粘液質、卵黄などの類を加へ強く振盪すれば肉眼にて見得らるべき位の大さの凝固物は除去し得らるべし、

◎月經が乳汁の分泌に及ぼす影響に就きて、

是はベンチックス氏が研究せる報告でありまず同氏は伯林大學の小兒科の外來診察所で百四十例に就き調査致しました、其六十%(八十四人に當る)の母は小兒に乳を與ひつゝあるにも拘はらず月經がありました、然るに其乳の分量を調べますのに此月經の爲めに蒙る所の影響と申すものは甚だ輕微であります、即ち授乳中に月經が起ッても乳の出る量と云ふものはあまり變はらないのです　扨てまた乳の性質の變化は如何であるかと云ふに月經中は單に脂肪の分量が増加するに止まるばかりてあります、

他方で乳兒の側ではどんな變調が來るかと云ふに右樣

の乳の變化はあるとも其乳を吞む所の小兒の方では別斷是ぞと申す異狀は稀てあります、夫故に月經が起ッたからとて小兒に乳をやめるの必要を認めません、第一、月經の來りし爲めに乳汁の分泌が惡くなるとか又は無くなる事あらば其時は一時人工營養か若くは乳母を置くより他の策はありません、

右は月經が乳汁の分泌に及ぼす影響の點てありますが次に妊娠が乳汁の分泌に及ぼす影響はいかゞかと申すことに關して同氏は今後其事に關して調査を致し更に詳細を報道致さるゝやうてあります、しかし妊娠すれば乳汁の分泌が減量するのが當前で、月を經ると共にとまッてしまうのです、よし分泌があるともこれを與ふるのは胎兒の爲めによろしくないし、また乳兒の爲めにも好ましきことてはありませんそれゆへ早く人工營養なり乳母なぞの手段に移るのが至極適當の處置でありましやう。

家庭雜話

羽仁もと子

○私は嘗て佛蘭西人の學校に居つたとが御坐います。寄宿生が僅てありましたから、通學生が歸つて仕舞ふと、先生の佛蘭西人と、寄宿の生徒とは、本當に一家族のやうに親んで居りました。佛蘭西の方達は、時々調戯半分に、日本人は仕事をするのに皆遲いと申しまして、縫物でも早く出來ると、「あなたは日本人の通りてありません」などゝ云ふのてす。て、皆が負けぬ氣になつて、度々種々の事て先生達と競爭をするのてす。糸を捲くと、靴足袋を編むと、日曜などに散歩に出ると摘草をすると、また或時に學校の裏庭に澤山出來た梨の實の皮を剝くと、坐敷を掃除すると、何事に就けても、いつも私供の負けになるのてす。スルト或時一人の先生が斯う云ふとを云はれました。

「あなた方の仕事をするのには、順序がありません。或時は朝起きて、直ぐと寢床と片附けます、夫からは

どかりに行つて、顏を洗つて、掃除をなさる。ソーカと思ふと、翌る日は、一番さきへ便所へ行く、序に顏も洗つて、次に寢床を片附ける、掃除をなさる。また或時は御飯後に掃除をなさることもあるやうです。けれども私供はさうでありません。起きてから寢るまでの仕事の順序がちやんと定まつて居りますので、餘程の差支でもない限り決して取り更へることがないのです。寢床を片附けるにしても、或時は枕を先へ拂つたり、また或時は毛布をといふやうなことは決してありません。第一が毛布、次が枕、次がシートと、いつも定めてあるので、極く氣をつける方になると、シートは毎朝幾度ふるふといふ、その度數までも定めてあるのです。此樣にすべての順序がついて居ると、手が自然敏捷に働いて、しかも一定の時間に、一の仕事がいつもキチンと出來上るので御坐います。そして平生敏捷に働く僻がついて居ると、他の糸捲ても摘草ても、矢張り早く出來るのでありますす」

○仕事に順序がなければと云ふことは、よく申すことでありますが、平生順序正しく働いて居る人は、不規則に働いて居る人とは、五分か十分の間、仕事の競爭するのでも、實際以上ほどに違ふのでありますから、一日の間、一週の間、かつは一生の間には、西洋婦人の仕事の分量と、日本婦人のとは、非常の相違になりはしないかと思ひます。

○なほ仕事に順序のあるのは、仕事が早く出來るといふことの外に、前にも申したやうに、一定の時間に出來るといふ便利があるのです。例へば、朝の仕事がそれ〳〵て、何時何分までに出來上り、晝の支度は何時からあとかたづけが何時までに仕舞ふとか、また是丈の洗濯は一時間とか、庭の掃除が何十分とかいふやうに、種〳〵の仕事に要する時間が、それ〳〵明かに分つて居りましたなら、女中を使ふにしても、多くの利益があらうと思ひます。不規則になつて居る今の家庭を整理するには、これらの點が第一の急務であらうと思ひます。ちよつと出來にくいやうに思はれるかも知れませんけ

れど、實際西洋人はあたりまへの事として、此事を實行して居るのです。

○此頃旅行しましたところ、汽車の中に夫婦づれの西洋人が居りました。夫は妻のために殆どあらゆる世話を燒き、妻は夫の上に女王のやうに構へて居るのです。あたりの人々は皆片腹いたく思ふ樣子でありました。中に一人の商人らしい男が居りまして、頻りに何やら憤慨して、連れの婦人に話しかけて居るのです、聞くともなしに聞いて居ると、「よしんば理が非でも、女房は亭主のいふ通りに、しなけりアならん筈ではありませんか、それに何ぞといふと、此間の始末ですもの、全く兄貴に意氣地がないんでさア、頭からコーしろて、いひつけて仕舞へば女房の分際で、どうしてグズ〳〵云へるもんですか………」。連れの婦人は笑ひながら、「おやア兄さんは、向ふの異人さん同樣でいらつしやいますのねえ」と申して居ました。



○妻は夫を僕のやうに召使ふ權威を有つて居るとでも、信じて居さうな此外國婦人と、理が非でも、妻は夫の云ふとに盲從せねばならぬものと、思ひ込んで居る此男と、何たる極端

を取合せてありませう。可弱き婦人を保護するは、剛性たる男子の美德です。婦人は宜しく、感謝を以てその厚意をうくべき筈で御坐います。夫にして妻のために諸事を周旋するヿは、決して醜くはありません。唯夫のまめやかなるに對して、妻が傲然と露ほども氣の毒に思はぬらしいのは、夫の德までも汚すものであらうと思ひます。なほ例へ夫はわがために、ドンナ些細な事までも、氣をつけやうとしたいといつても、自分に出來る限りのヿには、夫を煩はさぬが謙遜なる婦人のするヿてありませう。たゞ婦人にふさはしからぬヿ、また出來得ぬ事柄に就ては、安心して夫の保護をまつヿは、決して夫に對する敬愛の情に違ふては居らぬと思ひます。

○理が非ても、夫は妻を我意に從はせ得べきものゝまた從ふべきものと、習慣的に思つて居る人々も、なか〳〵に多いやうに思ひます。その間違といふヿは申すまでもありませぬが。また一方には例へ夫の言たりとも、不道埋と思ふヿには一切從ふに及ばぬといふやうな事ばかりを、一圖に心にとめて、度々家庭に波風を見るやうな人々もまたあるやうに思います。一應の道理には違ひありませぬが、さりとて不幸にも、夫妻互に意見を異にしたる場合には、妻たるものがまづ忍んで、其の調和をはかるのは、婦人として尊敬すべき美德であらうと思ひます。妻にしてこの美德を有つて居りましたなら、非常に頑迷な人物でないかぎり夫は必ず後に自らその非を悔ゆるてあらうと思ひます。

○幼兒の惡い僻などに就て、云ひきけるのには、寢かしつける時が一番よいと、或西洋夫人が申しました。今まで飛びまわつて遊んで居た子供が、身躰も心も靜かになつて、うつ〳〵眠らうとする頃に、何事でもやわらかに諭しイやりますと、誡めの言が母親の愛と一所にとけあつて、幼兒の腦中に深く〳〵流れ込むやうに思はれるとの事でありました。

○また同じ方のお話に、子供が玩具など毀したときに「マア、こんなに毀して」などゝ、たしなめるやうな小言をいふのはよくないといふヿでした。何となれば、

子供も毀した後では、必ず惜しくなつて、内心一方ならず失望して居るもので御坐います。この樣なところに小言を聞くと、氣の强い子供などは、却て反抗的の感情を起すのでありますが、若し之に反して、母親がむしろその失望に同情して、『毀れて仕舞つたのですか‥‥困つたとをしましたねえ』と、申してやりますと、子供は一層玩具を粗末にあつかつたとが、口惜しくなりまして、今度からは屹度大切にしやうといふやうな、感情を深くするので御坐います。

肉体の快樂は一時間以上連續する事能はず

家訓の栞

寒澤振作

◉兒童の唱歌

小學校に通ふ子供等の唱歌を聞くに、多くは悲哀憂愁の音のみにて何ぞ快豁勇壯の曲を聞くことの少きや予は之に就き、兼て思ふ所あれば、之を世間に質さんとす、一躰小學兒童の歌謠は、雄大にして快豁なるを貴び、悲哀沈痛なるを避くべきものなりと思ふ、如何、明治廿七八年の頃は、時勢に促され、軍歌一般に行はれしが、是等は、兒童に至るまで、敵愾心を皷舞する爲めの、必要に出でしものとすれば、論外として、平常時の歌曲は、壯快活潑なるを可とするにあらずや、彼の大和田氏の鐵道唱歌や、近時聞く所の、函根の山は天下の險、函谷關も物ならずの歌及び辨慶の五條橋にて義經と出會す歌、足柄山にて山姥金時の歌などは、やゝ壯快を覺ふ、即ち予の希望に近きを以て、之を聞くを悦ぶと同時に、櫻井の驛訣別の條、楠氏の母持佛堂にて訓戒の件、正行芳野の朝廷へ参内拜辭の件、曾我兄弟敵討の件、淺野長矩殿中にて刄傷の件、赤穗四十七士夜討の件の如きは、一聞以て寒からざるに、肌に粟を生ずるが如きは、予の聞くを好まざる所なり、

抑ゝ世の教育者などは、この問題に關し、如何なる解釋あることにや、上述の忠臣義士等の事蹟を題として、歌謠に上せ、每日朗誦し居ることとなれば、多分之を是認し居るものと見て可ならんか、これは小學の唱歌科も、矢

張り修身科に聯絡し勸善懲惡の範圍内に在るものなるや、若し然らずとせば、教育者は、其機關雜誌等にありて、意見を發表し、作歌者流を示導すること、其任務にあらずや、作歌者は、皆教育家にあらざれば、之を示導し、好箇の問題を供給するは、蓋し教育者當然の任なるべし、而して此の如きことあれば、教育家の怠慢と云ふべし、

●前話のつゞき

元來日本人は、演劇は悲劇を觀るを樂みとすること、一般の慣習なるが如し、婦人などの觀劇には、涙を拭ふ爲めに、別段にハンケーチの用意さるゝを見て、揶揄ひ半分に、泣く爲めの娯樂ならば、他に善き方法もなきものにやと尋ねれば、泣く如く感ずればこそ、面白みもあるなれとの返答を聞けり、即ち演劇は、一般に悲劇にして落涙場たるの實あり、予は小學校歌曲の、改良を望むと共に、演劇の改良をも望み、悲劇に換ふるに、快劇を以てし、落涙場を化して、解頤場たらしむることは、出來ざるか、

以上說く所の如く、涙の出るを以て、樂みとする國民なれば、この慣習が、カブレて、國民教育の場所たる、小學校にまで、一聞して六月尙ほ寒さを覺ふるが如きの悲曲、勢力を恣にするに至りしにはあらずや、兒童のこれを唱ふるは、無我無中にして、何の辨へもなかるべきも、皆ことごとく然りとも限られざれば、かゝる悲曲は、神經過敏の兒童を、養成するに與つて力あるものにあらずやと、窃に危む所なり、

◎料理の献立

一家に在りて、飮食物の調理に任ずるものは、大抵主婦その人たるべし、餘程身柄ある大家の貴婦人にあらざるよりは、吾れ預り知らずと云ふが如き、有樣には達せざるべし、先づ通常の家にては、主婦自ら手を下すか、或は手を下さゞるも監督の責に任じ、家政上日常事務の一と計ふべきものなり近頃有志の士、赤堀翁を起し、治庖會と云へる會を興し、之を學科的に講究し、廣く世の令閨令孃等を募り、料理献立の知識を授けんとするに至りては、學術研究の實際的に進めるを讃賞すべき

なり
元來婦人の調理方の巧拙は、男子の品行に重大の關係あることを知らざるべからず、かく云へば奇辯以て人を惑かす者と認むる人もあらんかなれども、決して左にあらず、聊か其所以を語らんに、婦人の手際にて、同一の材料も、朝には甲となり、晝は、變じて乙となり、夜は又化じて丙となりて膳に上りなば、何時も珍味を味ふの感を起し、之を食する人は、何時も愉快に食膳に向ひ、喉通りよく飲食することとなるべし、若しも然らずして、甲の材料は、何時も此の如く、乙の品物は毎度この通りと紋切形にて、千返一律、聊かも變化なければ、人は生理上の作用にて、同一の品物を屢々するを厭ふが故に厭惡の情は發して喉通り甚だ惡しく、樂しげに食卓に向ふの氣なかるべし、かくの如く、愉快なると不愉快なるとの差は、男子は何にかにつけ、外に出てゝ飲食店に就き、其慾を充たさんとする傾きを生ずべし、かく男子をして他の飲食店に向はしむるは、不經濟なるは勿論女子の尤も耻づべきこととなりとす、他にて飲食する習慣ある人は、無賴の知人多くして、或は一杯機嫌にて心猿意馬の狂ひより、不品行の媒合を爲さずとも限られず、即ち事實あり得べき事柄にして、決して予の奇辯にあらざるを信ずるなり、

故に予は調理方は婦人の重なる學科として研究あらんことを希ふと共に、これ等の知識を得んには、前述の治庖會の如き、又は種々の著書に由り、或は折々行きかふ知人朋友と相會せし時は、お極りの人物の批評論や、他人の髮容その裝ひ、並びに身の裝ひ、衣服の精粗など、足の爪先より、頭の腦天に至るまでの品評批判は、一切拔きにして、調理献立の知識を得んとする考へを以て、話柄をこの點に向ふことゝせば、有益なる知識の交換場となり、婦人知合ひの折々の會合ほど不用無益なるものは、なかるべしと思はれたるに、之を知識の交換場となすは有益なる利用と云ふべし、

◎日記帳

小學校にては、昨年十二月年末歳首の休暇日より子供等に課するに、その休暇中經歷せし事柄を日々記述せ

しめ、今年始業後に至り、敎師之を徴して一閲することゝなりたりとて、兒童等の夜々記帳するを見たり、日記の必要を知ることの少き我國人の如きに對しては、これ甚だ美事と稱すべし、是迄も敎育に要せし費用を記帳して、先生の閲に供することは、見聞し居りしが、今又一歩を進めて日誌躰の記帳を見て、予は隴を得て蜀を望むの常情より、望むらくは何卒高等小學科の生徒には、日記帳を備へしめ、日記帳記載の一課を設けられんことこれなり、而してその躰裁樣式は、此の如しと、正しく記載の方法を敎へ、時に之を徴して敎師一閲し批評することゝせば（敎師の勞は實に恐るゝ所なれども）日記帳の必要を知らざる國民に取りては、甚だ善き躾なりと謂ふべし、

夫れ日記帳の有益なることは論ずるまでもなきことながら、日々の行爲感想を記し置きて、數年の後に至り、時に披閲して興味を感ずること殊に深く、或は注意省察の感を引起すこと少しとせざるなり、今日迄の我國の婦人として（少數の取除はあるべきも）日記の好習慣を有せしものは、幾許あるべきや、恐らく雨夜の星なるべし、これ全く從來無敎育なりし結果にして、日記などの記述は思ひも寄らざる次第にて、日々の買物の記帳さへ、良人より受取りたる活計費を錢厘の相違なき樣に、滿足に歸せらるゝは、先づ上等として算すべきものならん、

上述の如く今日小學の敎育を受けたるものは、正式に日記々載の方法を知るに至るべければ、今日にて小學以上の學校に在り若くは明治の敎育を受けたる人々は一考案を出して是迄になき一家の歷史とも稱すべき、日記帳を有する好習慣を垂れ、後の繼續者をして、之に則らしむる、日記帳の鼻祖たる名譽を荷はれんことを、今日の令閨令孃等に希望する所なり。

歳暮の室内裝飾

近藤不二

春夏の派手やかな麗はしい裝飾に引き代へて秋冬の裝飾は何所どなく物寂びて、沈着りとした……所謂ぢ

○みな趣味を具ふることが肝要である。これは四時の序、天地景物の變化に伴ふ自然の感化で、斯様になくてはならぬ。若し夫れ木々の木の葉は落ち盡して、梢疎らに三四枚の紅葉を止めて、その間から遠山の初雪でも眺めらると云ふ初冬の頃に、艶陽三四月時分の華やかに艶なる装飾などを致そふものならば、それこそ寒中に單衣でも着けた様で寧ろ滑稽と申すの外はない。冬は冬らしく夏は夏らしく、このらしくと云々とが‥‥これは獨り装飾計りに限る譯では無いが殊に大切である。四季の内の冬、冬の中でも歳暮と云へば、全く押し詰つた所謂舊臘の事で、彼の「風鈴に一文のこる師走かな。如何にも天地蕭條として自然も人事も悉くひそまり返つて居る時期であるから、居室の装飾の如きも從つて一段と閑寂の趣を要すべきことは申すまでも無い‥‥が然し、物は極れば變ずる、閑寂もその極所に達すれば忽ち一點陽春の微光を萌すもので、即ち一陽來復の時期で‥‥閑寂蕭殺の内に何所と無く、自ら生々の意氣が動いて居るその心持を遇する心得

が無ければならぬ。これは臘月の装飾に限らず何時でも四時の遷り代りの際の装飾にはこの心得が大切で若しこれなくば全く装飾の活氣を失ふて仕舞ふ。「春やがて夏の氣をもよほし、夏よりすでに秋は通ひ、秋はすなはち寒くなり、十月は小春の天氣、草も靑くなり、梅もつぼみぬ、(中界)むかふる氣下にまちもうけたるゆゑに、まちとゝついで甚はやし」との一章は實に居室装飾の機微を漏したる金言と云ふて好かろふ。

て、當季の装飾に付て一寸一つ二つ例を擧げて見れば、同し花を挿すにも淋びた花を麗しい花瓶に挿すと云ふよりも、麗はしい花を素雅な瓶に入るゝ様にする。例へば寒牡丹などを古銅瓶とか、但しは煤竹の籠花器に挿むが如き。又た同しく掛物を掛るにも、表装の幅も寂びたものよりも、表装は更紗か何のおみなものでも中の畫柄は、垣根の下草の萌え初めたて居様、或は雪の下に埋まれたる、藪橘などの珊瑚を綴つた様に眞赤に麗はしい色を深緑の葉の間に見せて居るなどの幅を掛くると云ふ様に、閑寂蕭條たる下に靑陽の氣配を見す

るのが、歳暮の裝りの秘事であり。況して新玉の年を迎ふると云ふも早や片手の指折る程にも足らぬ、僅かの日數、やれ門松の、鏡餅のと上も下も何んとなく景色立つて居る。若し此時閑寂一方の裝飾を施さうか、その坐敷は全く平凡無趣味て些の活氣も無くて斯道の術語に申す、裝飾がダレて仕舞ふ。

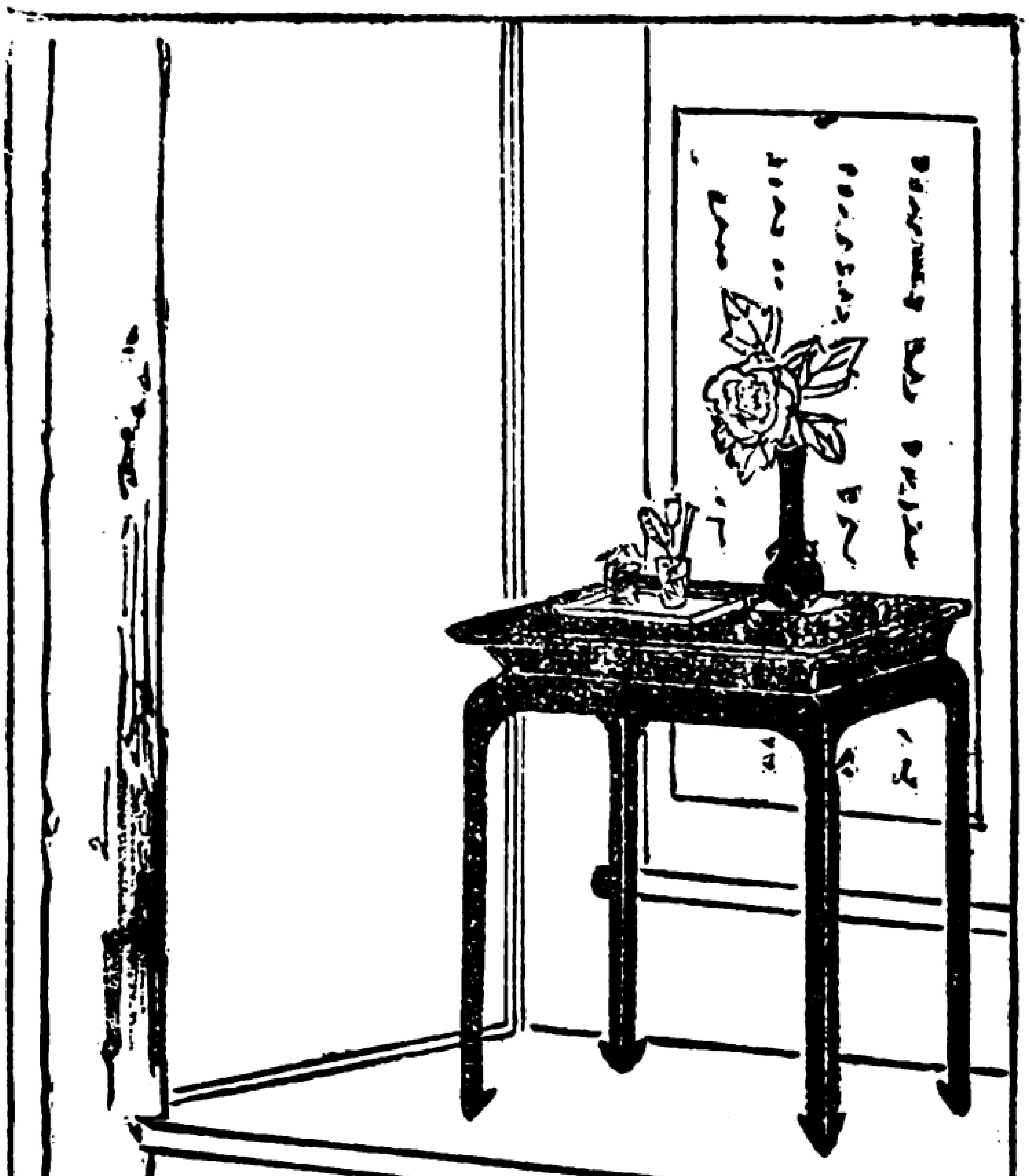
それて歳暮の裝飾は一般に暖めそうに且つ可成活氣に富んで嬉しそうに飾りたい。嬉しい飾り……これはどうも說明の仕樣が無いが、嬉しそうな飾り、かなしそうな飾り、それはもう、その室に入て見れば直に分る。少しくこの道に心を留めて居る人にはその樣子は直に眼底に映ずる。

色に付て申せば常季は白い方よりも黑ずんだ方が好く又同じく金屬製の器物を飾るにも銀色のものよりも金色のものが好い。又一寸見ても堅そうに見ゆるものよりも柔かく見ゆるものを撰ぶと云ふ樣に致すので、今この主旨によりて一の居室に裝飾を施して見よふ。

十疊敷の日本建の應接の間……建築は日本風であるが椅子やテーブルが置てあつて、腰を掛けて話の出來る樣に爲てある所謂立禮の應接間である。床の間は九尺に三尺、脇に地袋戸棚があつて、此方に面する一方の壁に洋風の暖爐が造り込んであると云ふ建て方壁は鴨居上も下も一樣に淡桃色の模樣ある緞子張付、床は寄木張て中央に花鳥に唐艸の染め出したる天鵞絨氈を敷てあるが、これ丈は夏でも冬でも取代へる事の出來ぬものである。今この室に、聊か歳暮の裝飾を試みよう。

床。掛物と挿花と外に何一つ二つの置物を飾れば充分であるが掛物……冬の掛物には書幅は別として畫の方には何分圖柄の面白いものが少い、雪中南天の圖など圓山派などに能く在る圖樣だが平凡て好ましくも無い枯芦に鷺鷥の圖、蘆雪か何かの筆なれば兎も角も凡手の畫ては致樣が無かろふ、去りとて時節に係らぬ人物畫、これも飾り氣が利かぬ。事訥言か清輝などの清素な筆の土器賣か何か年中行事の類い畫など當季の圖を白茶金襴か納戸色の緞子位て表裝したるを掛けたら

ば却て風情があるかも知れぬ。それから挿花、これは朱檀か堆朱の云ふまでも無く足の高い花臺に手付きの古銅瓶に寒牡丹を二三輪、莖短かに挿す。水仙なども惡くけ無い、そして挿花に對して何方か一方に片寄せて蒔繪か螺旋の高卓を置て上に香爐と二三卷の書卷物でも飾ろふか。或は床の間の花臺も何も一切取除きて中央に横長の高卓を置て一輪生の青磁燒瓶に例の寒牡丹でも入れて淡然りと飾つたのを伴はしむるも面白かろふ。卓は無論塗り物て無くては可けぬ。



床脇の地袋棚、どうも爲樣が無い、矢張料紙、硯、文庫、これはお定りの道具として外に二三の新刊雜誌の類を盆に載せて飾る、若し何か趣向のある美麗なクリスマスの贈り物でもあれば、それを飾るも時節柄一の取合せてある。床に面する張り壁の方には通常なれば暖爐の上が姿見鏡などを飾られたるが多いが、此の室のは鏡も何も無く一面の金張付てあるから大活額でも掛る、中の畵は花鳥も好い水彩畵の山水も面白かろふ。然し出山の釋迦の圖など若し文晁などの磊落な健筆に成るものあれ

ば却て克く似付く。爐上の棚には例に由て置時計を飾る、左右の燭も銀燭よりも金燭の配合能きことは前に述べたる通りである。

要するに冬季の裝飾は見るから暖かそうに、そして飾り整然と秩序立たぬが好い、殊に歳暮の飾りには幾分かその調度類の形にも色にも春めきた樣子の何處かに見ゆる心持がありたいのである。

割烹實習

岡野織枝

▲風呂吹大根

大根を厚五分乃至八分に輪切にして皮をむき、鍋に入れ、水をかぶるほど入れ、白米を一合ばかり布にてつゝみ、この中へ入れてともに茹でるなり。但しさらに風味よくつくらんと思はゞ鍋よりは釜を用ふるをよしとす。釜を用ゐるときは湯は大根ひたく\にして蒸す氣味にゆでべし、時間は凡そ一時間より二時間までとす。

中頃に鹽少量を加ふべし。

〔味噌のつくり方〕胡麻味噌ははじめ黒胡麻を煎り脂の出るほど擂りて味噌を加へ、砂糖を加へ、さらに擂りて裏漉しにかけ、鍋に味噌を入れ、味醂少量を加へ煉るべし。煉りあがりしときは味噌のさめざるやう湯煎にかけて置くがよろし。あたゝかきところを侑むべし。

以上分量は味噌百目につき黒胡麻一合五勺、砂糖五十目、味淋五勺。

▲蕪菁の風呂ふれ

製法は大根と同じ、たゞ中頃一度水をとりかへ、蕪菁のくさみを拔くべし。

▲鰯數種

〔鰯の醬油干〕鰯を脊開きにして骨をとり、醬油につけ、笊をかへし底にならべ日に二三十分干して后、焼きて侑む。

〔鰯の海苔卷〕鰯を三枚に卸し、皮を剝き、鹽をあて小時間經て酢にてあらひ、酢につけて置く。別に淺草海苔を焼き、この海苔にて右酢の鰯を細卷の海苔酢のほ

どに巻くなり。これをほどよくきりて簡易なる口取に用ふ。

〔山掛鰯〕 右の酢鰯を五分ぐらゐに切り、丼へ入れ、上に擂薯をかける、薯はすこし煮汁にてのばすがよろし。

〔岩石玉子〕 鶏卵をかたくゆて、皮をむき、黄身しろ身ともにつぶし、さめたるとき、砂糖、塩少量を加へ、ちいさき萩の餅ほどに握り、一方には鰯を三枚に卸し皮を剝き、水にて三度ほどとりかへあらひ、布巾にてしぼり、擂鉢に入れ、塩少量を加へ擂るべし。この擂身にてまへの握り置きし玉子を包み、さて鍋に胡麻油を煮立て置きて、この中にて揚げ、狐色になりしを度に新聞紙の上にとりて油をきり、輪切にして口取に用ふ。

▲甘鯛の塩焼

甘鯛の鱗をふき、腸を出し、水にてあらひ、笊へとり、水氣を切り、即坐にもちひんとせば強塩をふり一二時間置き、塩をあらひ、腹を左り竪に串をさし、布巾にてふき、飾塩をふり、尾の焦げぬやうに注意して火にかけ焼くなり。こゝに強塩とは腹の中又は外向ともにつよく塩する事なり。

串は板の上にてまはしながら抜きとるべし、身のくづれぬための注意なり。

▲よせ慈姑(椀種)

慈姑のトツ手だけのこし皮を剝き、卸し金にて卸し、裏漉上にうり水をきり、饂飩粉一つかみ(慈姑三十個につき)砂糖ひとつかみ、塩三匁を加ふ。尚芝老海の皮をむき、脊腸をとり、あらひ、煮汁小量を加へザツト煮て、これもまへの慈姑にまぜ、ほどよく丸にとりて、胡麻の油にてあげ、用ゐるときは煮立し湯をかけて油をぬき、椀種として用ふ。

▲洋食煮蛤

蛤の貝の目をきり、庖刀を口へあてゝ押せばふたつになる。身を丼にとり上にたまりし汁のきよき分を別の丼にとりわけ、あとの汁にて蛤をあらひ、笊へあげて水氣をとり、布巾にてをさへ、一方にフライ鍋にバタなりラードなりをとかし、玉葱を細かにきざみ、塩、

胡椒をふりて、バタにて狐色になるまで煎り、ジャガ薯をゆでゝ賽の目に切り、これも同様バタにていため、以上とゝのひしとき、

さらにフライパンにバタを入れ、まへの蛤に鹽胡椒を加へザットいため、これにまへの玉葱、ジャガ薯を加へて、さらにまへのきよき上汁を注ぎ火にかけて煮るなり。

煮あがりしとき、スープ乃至煮汁なりにてメリケン粉をドロ〳〵にときてこの中に加へて侑む。

▲海老の洋食煮

伊勢海老の頭をとり、包刀の平で海老の横側をたゝけば甲は離れべし。その身を庖刀の平にて叩き、尚玉葱をこまかにきざみ、海老にまぜて尚たゝくべし、パンを水にひたし、そのやわらかきを布巾にてしぼり、これをまへの海老とまぜ、鷄卵一二個を加へ、鹽、胡椒にて味をつけ、これを小判形の丸にまるめ、一方フライン鍋にて「ヘット」をとかし、まへの丸の兩面を燒くべし、さらにこれを鍋へ入れ、スープ又は鰹汁にて白煮をなし、その煮つまりしときさらにスープを注ぎ足し、煮こみし后肉をあげて、あとの汁へはメリケン粉を水にてときて加へ、ドロ〳〵として鹽、胡椒にて味をつけ、まへの肉の上にかけて侑む。

▲薯煎餅

薩摩芋を輪切又は花形にうすく切り、少時間日にほし、一方胡麻油を煮立て、その中にてまへの薯を狐色にあげ、新聞紙へあげ、一方には摺蜜をつくりて、これを薯の上に刷毛にてぬるなり。

〔摺蜜〕 砂糖百目に水一合にて火にかけ、煉つて飴の如く手につき加減になりしとき、卸ろし丼にあけ、水にひやし、指のふれ得るほどのあつさになりしとき、棒にてポロ〳〵になるまで摺りぬき、そのとき水數滴を加へてさらにすればやはらかになる、これを摺蜜といふ。

▲昆布菓子

昆布を鋏にてほどよく短冊にはさみ、油にて揚げこれにもまへ同様の摺蜜をかけ、貯へて菓子となすを得べ

し。

▲編笠銀杏

銀杏澁皮のまゝ摺りて、砂糖とメリケン粉を加へ、裏漉にかけ、玉子燒鍋へ油をしき火にかけ、この中へまへの摺銀杏を金杓子にてうすく丸形に落してボッタラ燒の如く燒くなり。

この中へ味噌餡を入れてつゝみ用ふ。

〔味噌餡〕　この味噌餡の白味噌百目に砂糖四掴みすりて裏漉にかけ、火にかけ煉り御して、メリケン粉三掴を加へてまぜて再び火にかけて煉る、これを摑りてまへの銀杏の皮につゝむ。

銀杏一合に砂糖、メリケン粉各々ひとつかみの割合なり。

兒そだて草

▲母乳　西洋の母親は多く子供に自分の乳をやりません我邦でも極上流には此風がありますが多くは母親自ら乳を以て育てますから此點に就て日本の子供は西洋の子供よりも幸ひであります

▲啼泣　嬰兒の泣くのは一種の運動でありますから餘じいではないか病氣ではないかと調べて見ても夫でなかつたらば放つて置のてすが西洋の母親は能く此事を實行して居ります、そして日本の母親は泣く度に乳を與へると云ふ癖は何うしても免かれぬ樣てす、乳をやる時の不規則な事がよく之を證明して居ります、何ぜなれば例へば三時間毎に乳を與へる積りであるのに泣くに氣を採んでツイ乳房を含ませると嬰兒の胃腑がどう〳〵不規則になつて仕舞ふのてす

▲放任　西洋の母親は前にも申した通自分の乳を與へませぬ故割合に子供を氣にかけない日本の母親は一人の子持になるとモハヤ乳母同樣で何も彼も放つて仕舞ふ樣てす勿論子を持つた親が若作りして氣樂に出あるくのは決して見よい物ではないけれども乳母と母親とは違います然るに何うかすると日本の母親は乳母になり濟ましてその代り母親の務めや妻君の責任を忘却し

て仕舞ふのがありますツマリ西洋の婦人は子供の敎育全躰に注意して規則立て居るけれども日本の母親は能く細かい事に氣が付て又親切であるが大切な所を落してゐる樣に思はれる

▲寢眠　西洋人は生れ立ちから嬰兒を獨りで寢かす、室のある家では子供の寢室を全然別にして女中を番人に寢かすのが通例であるが稀れには母親と一所に寢かす家もある何れにしても子供は定めの時間に女中か阿母さんかに寢臺に入れて貰ッてそして簡短な祈りをなしその儘母親なり女中なりが出て行ッた後で大人しく寢て仕舞ふ、それは實に行儀のよい事で習慣とは言ひながら感ずべき事である

▲睡眠時間　日本の家庭では晝寢をするからといつて能く宵張の子供を見る樣だが西洋人の子供は隨分大きくなる迄皆早寢です小さい子ならば六時頃少し大きくなると七時に寢る夫れは晝寢なども不規則でなく夜もチヤンとその時間には眠くなる樣に躾けてあるから夜西洋人の家を訪ねて見ると幾ら大勢の子を持て居る家でもチヤントした風をして書物でも見て居る、子供などのあらうとは思はれぬ位です、日本の母親でもやり方に依ては緩くりとお客と話す時も出來やう家の仕事もモー少し餘計に出來るかと思はれる現に西洋人の町々を夜通つて見るに一向子供の姿を見ない勿論晝でも往來が雜沓して居るから子供は多く家の內や公園に遊んで居る

▲入浴　日本人は每日湯に入りますが西洋の大人は容易に風呂に入りません然れども幼い子には始終浴みさせます朝起ると冷水で身躰を拭いてやる事は先お定まりで夏は申す迄もなく寢る前には乾度湯を遣はせ更に日の中に冷水浴をさせる家もある勿論此事は子供の健康の度合にも依る事ですが冬になると每日浴をさせる所と一日置位の所とがある

▲襯衣　を着換へる事も夏は元より幾度もするが冬になつても隔日か少くとも一週二度位是等の事でも今日は閑暇があるからお湯をつかはせやらうとか襦袢が汚れたけれど忙はしいから二三日我慢し樣とか云ふ樣に

母親の手都合一つに任せるなど丶云ふ事はない前に申した樣にチヤンと日割から時刻迄極つて居るから子供の身体にも心にも矢張規律が出來て遊ばうと思つて居るのに思ひがけもなく無理やり湯を遣せられて不平の爲に泣くなど丶云ふ事はない、

▲子供の心　は種々の點に於て野蠻人に似て居ると多くの心理學者も申しますが成程さうかと思はれる虫けらを弄つたり犬猫を苦めたり殆んど殘酷と云ふ事など知らぬ樣です夫で好奇な心が大層强う御坐いますから事の善惡には頓着なく何でも無事な事よりも有事方が大好ですそれで不注意な母親が子供をがみ〳〵と叱たり打つたりすると子供によつては母親の怒るのが却て面白いと云ふ樣な氣になつて態と惡戯をする樣な場合がある夫と反對に子供を賞めてやると又その賞められるのが大層氣に入つて一生懸命につとめる此理由に依て子供は叱るよりは賞めて育てる方が善いと云ふことですけれども賞める事ものべつですと却て子供を害します夫等の詳細な呼吸はなか〳〵むづかしいものです

▲不熱心　某小學校長の談に、子供を初めて入學させる時には巳むを得ぬ差支の外成べく兩親の中何れか同伴する樣にと呉々も希望して置くのに中等以上或は自稱紳士の家庭などでは滅多に父親も顔出しを致しません甚だしきは差支があるからと云ふやうな挨拶も無に下女や書生を寄越すのです學校を侮辱し教育に不熱心も甚だしいではないか此樣な家の子供に限つて多くは驕慢の傾きがある、之に反して下層の人は半日の仕事を休んでも態々入學の子供をつれて呉々もその教育を頼んで歸る我等は勿論その樣な事の爲に子供の上に厚薄の感情を持つ譯てはないが出來る丈け多くの場合を利用して父兄と學校の連絡をつけるのが肝要かと思ひますと言はれた



紅葉の折々

卜部觀象軒

○銀杏

天高く馬肥ゆるてふ晴秋の一日、獨輕杖を曳て關門の邊りに向ふに、紅葉色尚淺けれとも閑寂の境うれしく、川に添ふて泝れば、蒹葭中ば枯れてあはれに傾き、水に沈むの樹木枝疎にして、時に風無きに一葉二葉の散り來るなど、殊更なる景にはあられど、秋ならでは見られぬ趣のありてをかし。

更に關口臺町に登り、不動の境内に到れば、南の方開けて矚目するに宜しく、大なる銀杏の中ば色若けると、小さきそれの燃えんばかりに黄ばみたると、四五間隔てゝ立ちたる對照のおもしろく、其下には落葉を浴びつゝ五六の童兒が、われ勝ちしぞ、否われのこそ餘勢あれなど、互に劣らず獨樂の遊を爲す傍には、八歳ばかりなる二人の女兒の、扇形せる落葉を拾ふて餘念なく束ね居る樣の愛らしさ、天眞の掬すべく娛しさを今更の如く感じて、われも其一員とならまほしく思ひき。

○田舍道

讀書にも倦みて、例の散策に暮近き時を護國寺へと志しぬ。門を入れば、松、梅、櫻などの中に、さほど大きからぬ楓の立雜りたるがをかしく、其處此處歩を移し、富士道と傍標ある池に添ふたる細道を辿り、杉の木立の間に五六の兒女が長き竹竿もて枯枝を落し居る傍を過ぎて進めば、こはさる奥澤城へ通ふべき道にして、左方には繁る眞菰の枯初たるに埋められ、僅被はれたる水面は河骨を浮べし、いとも寂たる池ありて、そか對岸には一帶の紅葉今を盛りと競へる色の美しく、殊に山茶花の一株白き五七輪の花を誇るが如く咲き出せる異なる樣に、一ト入心ひかれて、飽く事知らず佇立めば、漸に黄昏れて、今迄ありし人語も薄らぎ、四隣遥に寂として夕風寒く肌に泌し、何となく悲しき感のせらるると共にいよ〳〵すみ渡りて得難き趣の見出され、若し寺門にして閉すなく、今少時此儘に佇立して、淋しき樹陰に洩れ來る燈光を望み、幽なる讀經の聲など聞かば、俗塵を絶して無我の境に彷徨し、心松籟と共に清きを得んかと思ひたりき。

○落葉

何處と定めし的はなけれど、晝飯の少時が程を散歩せばやと、帽も被らで立出るに、晴れ渡りたる空のいと靜にしてそよとの風も無し。かゝ

る日を一日の逍足に枯野など探らばいかに面白からんと思ひつゝ行くに、殘菊の三株四株廣き庭の一隅に倒れ伏して猶花を保てる、或は門近き橙樹に實の黄ばみ初めたるなど、趣多き樣を見るにつけ、荷盡已無擎雨蓋、菊殘猶有傲霜枝、一年好景君須記、正是橙黄橘緑時、といふ東坡が詩の心に浮み來るまゝ口吟みて歩を移す程に、やがて例の陶器にいかめしき名を書付けたる一樓の前にと出てぬ。

枸橘の生垣の内に又一重建仁寺の垣結ひ廻らしたる庭はさして廣からねど、箒目の清く掃除されあるに、霜に飽きし躑躅と楓の大きからぬが、見越の松の左右に二株三株、げに二月の花よりも紅に彩られてあり。未新らしき家の清く拭き込まれたる日當りよき椽には、厚き八端の蒲團の上に白色勝なる髮を撫付といふにしたる七十近き老婆の美しく痩せたるが長々と足踏延ばして寐たる小猫に蒲團の一隅を分ちて、取亂せし樣も無く、脊を圓くして坐して在り。其傍には三十を二ツ三ツ越したるべき婦人の小説らしきもの讀きて聞かせつゝ在るが、半ば閉さし柴折戸の隙より見え、いと長閑にして睦しき樣の、誰が名付けゝん、小春と云ふ節の景色に似かよひて、われに繪畫の技あらば寫生すべきものをとまで思ひ浮べしめぬ。

○冬　木　立

六時を報ずる時計の響に、起出て雨戸繰開けば、曉霧薄く四方を罩めて遠景を露はさず、烏雀の聲彼方此方に聞え、勝手口にははやかたことの音洩れ、井戸端近くにも挨拶するらしき人聲のして、秘密を包みし靜寂の夜の幕は今や秒毎に取除かれんとす。思へば昨夜寒氣枕邊を侵して夢結び難かりしも道理、見ゆる限の下町の屋根は嚴霜に飾られて淡靄を描きし如くなり。

寒くはあれど爽なる曉氣を呼吸せばやと庭に下り立ちつゝ、鴎外江山看不眞、只聞雞犬認前村、渡船滿板霜如雪、印我青鞋第一痕、と古人の詩など口吟するにつけても、往年四五日の旅行に此詩の實境をわれも賞せし事を思ひ起して面白さかぎりなし。素より其折の景の今朝の樣と似つべくもあられど、なほ二十五夜の殘月葉無き梢に懸れるもあり、光漸く薄らぎゆけど、まだそれと知らるゝ明星の一つ、曙帶ひくる東天に殘の色を放ち居るなどをかしければ、潜戸開きて其處とも無く歩を移すに、巍然たる寺の生垣越、庭に生ひし大きなる三株の楓樹の、霜に飽きて燃えんばかりに紅なるが、そよ吹く朝風にさそはれて、未消え果てぬ霜の中にはら〱と隱れ行き、我邊にも二片三片こぼれ來て落葉の道の隙を埋むるさま、院裡より響き來る木魚の音に無常の譬喩を示すが如く、非情の草木にも心あるかとさへ思はるゝ、或は炊煙に檐端を圍まれたる茅屋の門邊に、二三羽の鷄快げに餌をあさり居るなど、野趣多き眺に、一ト入曾遊を思ひ浮べて田舍の景色の慕はしく、爲すべき事の有りしも打忘れて歩き廻りしも是非なや。


織物図案
中お鈴子

刺繡圖案



鈴子

●甘藷の料理法

今や甘藷の出盛にて又旨味の乗つた盛なり、甘藷の料理にもいろ〳〵あれど、其内餘り手數のかゝらぬちよと珍らしきものを記す

○鳥もどき　甘藷の皮を剝き生のまゝにて擦し、之に葛粉を混ぜて固め、竹箆に五分乃至七分位の厚につけ、これを適宜にきり胡麻油にて煠るなり、榧實の皮仁ともにたゝき混せ、丁度小鳥の肉のたゝきほどにとりて麻子二三粒を入れ油にて煠る料理を小鳥もどきといふ、一寸變つて面白し

○衣かけ　これは單純なる仕方にて生にて三四分に切り、別に醬油と味淋にて加味したる小麥粉液にまぶし胡麻油にて煠るは普通の精進揚なるか、生にて擦し之を蒸して取り、別に小麥粉に少し青粉を混へ、醬油、味淋にて加味したるものを衣とし、之に右の蒸たる擦甘藷を煠ぶれば美しき精進揚となる

○鍋やき　これも生にて擦し小麥粉少し入れてこれまぜ、また、小豆の餡をも加へ、饅頭のやうに形をとり米の粉をまぶし焙烙をつけて出すなり

○時雨やき　矢張生にて卸し蒸して蛤の肉の形につくり、蛤の殼の肉へ入れ、醬油をさして貝共に燒いて食すべし

○雁もどき　生にて擦し之に豆腐少々加へて能く擂り、銀杏、木耳、麻子、切昆布等の混和たるものを、おろし薯にて包み胡麻油にて煠けるなり

○千鳥みそ　淡汁藷百目、白味噌五十目、砂糖十匁、乾山椒粉五匁の割合にて右四品をひとつに擂りまぜ、水嚢にてこし鍋にて煮れは千鳥みそと稱するもの容易に製せらる

○田樂　生にておろし、成るへく薄板の箱に詰め、蒸籠にかけ箱ともに蒸し上げ、之を適宜に切りて串にさし味噌をつけて燒くこと豆腐の田樂の如くす

○狸汁　生にて擦しつまみとりて胡麻油にてあげ、さゝかき午蒡を入れて味噌汁にたてるなり

○かばやき　生にて擦し凡三分程にも延し、蒸し上ぐるや直ちに淺草海苔の上に並べ、能くひつゝきたるを見て適宜に切り、胡麻油少許其上にひき、山椒醬油にて附燒にするなり

○羊羹　藷精一合（藷精を製するには生にて擦し、水に浸して水嚢にてこし其水を陶底にしづみたる精を取ること葛根より葛を製すると同じ）小豆粉一合五勺、砂糖蜜三合を混和し水嚢にて漉し銅鍋にて煉り固め、重箱に移し冷して食用とす、白羊羹を製する場合には白小豆粉を用ゆるまてなり

此外色をつけ或は道具を用ゐて料理するものいろ〳〵あれど、素人の家にて一寸むづかしきもの多ければ書きぬ

史傳

北條時宗夫人

須藤求馬

▲女權の保護　▲緣切寺の事
▲天壽院の事

公卿政治文弱の弊に陷りて。遂に武人の跋扈となり。世は刈菰と亂れゆき。人は爭奪の心繁げく。この時にあたりて。源　賴朝敗殘の餘蘗を以て。機に乘して起り。こゝに天下を一統し。政の權。皆その掌中に歸しぬ。

兎角國家變亂の後は。自から武人の氣風荒ら荒らしくなりもてゆきて。弱き者は强き者に凌がれ。女子は男子に壓せらるゝは。時世の勢ともいふへきか。誠に免れがたき弊害なり。されば嚴重なる法令なくては。弱者女子の身體名譽財產等は。保全せんこと甚難しよりて鎌倉幕府に於ては。頗る嚴重なる法令を施し行ひ。貞永年中に及びては。式目を天下に頒ち布き。武人の專恣橫行を抑制せんことを務められたり。女子の上にも亦大に意を注がれ。從前なかりし保護法をも規定せられ。女子の天地は狹くとも。また其の堵に安ずることを得る姿となれり。されど武人の跋扈と壓制は。尙ほ容易に跡を絕ちかね。まゝ邪見非道の夫に連添ひ。終身あぢきなき世を送り。泣く／＼一生を畢るもの少からず。

北條時宗の夫人は。秋田城介義景の女なり。淑德夙に高く。後閤の整肅は言ふまでもなく。內外臣妾に至るまで。悅服せざる者なしといふ。時に時宗は三十四歲を一期として。弘安七年に薨じ玉ひしかば。後室は御子貞時に職を襲はしめ。身は退きて。圓覺寺の開山佛光國師を戒師として。綠の髮も煩惱の黑髮と共に薙去し給ひ。鎌倉松ヶ岡なる東慶尼寺に入り給ひ。同八年貞時其の堂塔を再建す。時に　後宇多天皇より。東慶總

持禪寺の勅額を下し賜ふ。

そもそも該寺は。右大將頼朝公の時には。道心寺にてありつるが。頼朝公の叔母君尼とならせ給ひ。比丘尼寺として住持し玉ふ。これを東慶尼寺の開山となす。その後弘安年中に至りて。時宗の後室潮音院覺山志道和尚住持し。中興開山となり給へり。

かくて覺山尼公は。貞時に申し請はるゝやうは。我れ等出家の身なれども。女子の事にて。世上を利益すべき智德とてもなし。凡て女子の身は。三從の道を立て。一度は夫に身を寄すれども。若し其の夫邪見無道の振舞多く。愛情も絶え果て。狹き心に差し迫り。身を過つもの折々見聞および。不便の事に候間。何卒右躰の者有之時には。入寺致させ。三ヶ年の間。佛法修業の趣意を以て。彼の邪惡の夫の緣を切るべき寺法を定め。薄命の婦女を救ひ申度しと他義なく願はれたれど。貞時一分の思慮に及びがたく。天聽を經られたるに。其意に任すべしとの勅許を蒙り。右の寺法始めて立ちぬ。誠に不幸の女子を救ひ。女權を保護し給はんとの深き厚き御心より出て給へる所爲なり。

其の後第五世用堂尊尼は。後醍醐天皇の皇女に御座まして。當山に入りて薙髪受戒し給ひ。應永三年薨去し給ふ。當代より鎌倉松ヶ岡御所と唱へ。永く紫衣を用ひ。すべて格式他の尼宮御所と同樣になり。これまで緣切女入寺の期限は。滿三ヶ年なりしが。この用堂尊尼の代より。入寺期限を短縮し。二十四ヶ月を限る事とし。即ち滿二ヶ年の定めと特に寺法を改めらる。第二十世天秀尼と云ふは。豐臣秀頼公の御息女にて。德川秀忠公の御孫なり。大坂城一亂の後。天壽院の御猶子と爲し。元和元年家康公の差圖に依りて當寺に入院せらる。其折駿河大納言の居館を引移して。殿宇を修造し。祠堂金並に古來の寺領。先規の通り。改めて寄附せられたり。

第二十一世永山和尚は。喜連川源尊信の息女にて。寶永四年遷化し玉へり。東慶寺の住持は此に至りて絕え。其の後は。適當の資格を備へたる尼なきを以て。東慶寺塔中の蔭涼軒の住持として東慶寺の事を執行し

來りぬ。
されば東慶寺の寺法は。夫婦不和合の者の縁を切ると
を掌るの特權は。北條時宗の後室覺山尼公に創始せら
れ。其の後第五世の用堂和尚に至りて年限の改革ありこれより寺法は室町時代を經て。徳川氏の幕末に至るまで。永く實施せられたる事にて。この寺の縁切寺てふ名稱を得たるは右の如し。
さて婦女出奔し來ればとて。直に其の請願を容れて。
寺法に行ふにあらず。先つ其の婦女の陳述する所を聞



き取り。其の夫及び媒介人を召喚し。よく其の實否を
取り質し。示談に附せらるべき見込あるものは。雙方
をよくよく納得せしめて。之を示談せしむ。然れども
夫たる者一旦納得の體を裝ひ。途中に要して其の妻を殺害する者なきにしもあらねば。双方充分納得したるや否やを見るにあらずんば。妻を連れ歸る事を許さず。
さてまた妻妾に出奔せられたる夫は。憤怒の餘り。狂亂して拔刀の儘にて。當寺まで追ひ駈け來ることなどあれど。旣に其の妻妾たるものが。下駄片足にても當寺の門內に投げ

込めば。最早其妻妾に小指一本かくる事の出來ざる寺法なり。

抑も當寺は。「男禁制」の場所なるにも關らず。門番の侍も。多くは老人等にて。能く爲すなきを侮りて。往々門内に闖入し。其の妻妾を奪去る者あり。かゝる時は。當寺よりは之を寺社奉行へ訴へ出て。寺社奉行より其夫を厳罰に處し。且つ其の妻妾をけ離縁せしむるの制規あり。大名にてもこの罰に問はれて。其祿高を沒收せられし事ありといふ。これにて當寺の寺法の厳然として侵すべからざるを知るべし。

入寺の婦人は。食料は自辨の定めなれど。自辨致しがたき者には。夫れ〳〵職業を授けて。衣食の料となさしむ。大名の奥方。其の他高貴の人の奥方は。日々これといふ勤務もなく。只學問などを勉め。勸善懲惡の説教を聞き。敢て薙髪にも及ばず。規則の年限を終れば。寺を出てゝ。孰方に縁付くとも自由にして。また前夫より何等の故障を言出づる事を得ず。これぞ當寺寺法の効力とする所なる。而して入寺者の數は。年によりて差違もあれども。多きは數十人に及び。少きも四五人ありといふ。其の來る區域も。素より一定せずと雖も。關八州及び甲斐信濃等より來れりといふ。

かく女權の保護あるも。之を東慶寺の由緒書に。「凡そ女子の身は、三從の道を立てゝ、一度は夫に身を寄すれども、若し其夫邪見非道の振舞多く、愛情も絶え果て、狹き心に差し迫り、身を過つ者折々見聞及ぶ云々」とあるを觀れば。當時婦女の位置の高からず。其主人の爲めに虐待せられ。惘然なる境界に陥りし者少からざるを知るべし。然れば時宗の後室覺山尼公が。この縁切寺法を創設せられたるは。平等慈悲の眼を以て。當時の社會を觀察し。女子の境遇の援け少く。憐むべき者を救助せんとの誓願に出て給ひたる事にて。又よく時世に適合せるは知るべし。

あはれ。此寺建立せられてより。徳川幕末に至るまで。凡そ六百年の其の間に。此寺の恩惠を受けし婦女。實に幾許あるや知るべからず。世には時宗が。元寇を破り給へる赫々たる大功を賞せざる者なし。而して其の

後室覺山尼公が。天下の婦女に。斯の如き恩惠を垂れしことを知らざる者多し。因て諸書を採摭して。其の偉德を表彰す。

上州勢多郡德川庄に滿德尼寺あり。また縁切寺法あり。開山は淨念尼といふ。德川義季の息女なり。ついて義季の子新田賴氏の息女淨院尼公住持し給ひ。これに由りて中興開山までは。新田家より代々相續し。駈け込み離縁の寺法に於ては。大畧東慶寺に似たり。但し中興までは。駈込の婦女は。尼になるべき寺法なりしが。德川秀忠公の嫡女にして豐臣秀賴公の北の方天壽院。大坂沒落後東歸して。この寺に入院せられ。離縁の趣意相立ち。因りて本多忠時へ再嫁し給へり。之に由りて其代りとして。刑部局後閣より出て住職仰せ付られ。中興開山俊澄上人と改名せらる。其の由緒を以て。德川幕府の後閣より三代相續せり。駈込三ヶ年入寺禁足謹愼の上。髮を切り夫の方へ遣はし。離縁狀請取ることは。開山よりの寺法なり。離縁の上他へ嫁入るは。天壽院の例を以て。再び他へ縁付くことを得る規則となれり。困難なる離縁に至りては。當寺も亦寺社奉行に訴出て。寺社奉行の下知を以て寺法を執行し。全く縁を切ることゝなりぬ。思ふに當時夫たるもの其妻妾を虐待壓制せし風は。決して東國地方に限るまじ。而して他の地方に於きては。別にかゝる女權を保護する法あるを聞かず。若し是等の寺法を擴めて。以て天下に布き充たし。國每に一ヶ寺位づゝ設け置かれなば。如何計り天下不幸の婦女を救助し。女子の權を保護し得られしや知るべからず。惜むべき事にこそ。

井上通女

森　慶三

江戸朝の初にわたりて、たゞ美術のみは、さすがに豪華なる桃山の後を承けて、名匠鉅工その人に乏しからず、狩野孝信、狩野山樂のごとき、つぎては、土佐光起さては狩野守信など相蹤きて起り、互ひに巧を競ひ妙を爭

ふて、美術天地を黼黻し、後世を照破するに足るものあり。之にひきかへて、文學は、いまだまたく盛なるに至らず、藤原惺窩、林羅山、北村季吟、烏丸光廣などありて之を激勵したれど、まさに枯れ果てむとしたる草木のやう〳〵に二たび芽をふき初めたるがごときのみ。まいて閨閤の文藝なるものをや。

桃山の末より江戸の初にかけて、たゞ一の小野通女なるものありき。その才華、よのつねならず、ひろく和漢の書にわたりて、よく文をものし、かねて筆札を巧にしはた繪事を能くし、堂々たる髯丈夫を壓倒したりき。通女がごときは、實に麟角ともいふべきか。小野通女の後に出でたる者は、即ち井上通女なり。

さて、井上通女は、寛文の六年をもて、讃岐國丸龜城下に生れき。世は方さに後光明天皇の御宇にして、小野通女が歿せしより後四十餘年、林羅山が歿せしより五年を經たる時なりき。

通女、なほうらわかき頃よりも、才名を天下にとゞろかすほどありて、太く世の女童と異なりたるものありしがごとし。時習齋といへる人の記する所に依るに、「通女、生れて穎悟たぐひなく、一を聞て十をしる。七八歳の程より、和語の草紙を見つくす。源氏物語によく通じて、是をそらんず。十二三より、漢學の道に入りて、六經四書をならふ。すべて諸子百家、九流三教の書よみ盡して、通ぜずといふことなし。いにしへの女博士といひつべし。歌をつらね、詩を作る事、日毎にくはし、月々にすゝむ。」と見ゆ。こは、太く誇大にすぎたるごとくおぼゆれど、とにかく、その才學の世にまれなりしを窺ふべきなり。

由來、才色兩ながら備へがたし。おほよその女子、才あれば、容貌うるはしからず、容貌うるはしければ、才のとるべきものなきは、古今同嘆なりとす。然るに、この通女のみは、すでにかゝる才ありて、髮容のかたちも、いとうるはしかりきとぞ。時習齋またいふ、「泉氏の母通女を相知る事熟せり。曾てかたりていはく、通女、文才智はいふにやおよぶ。書捨し筆の跡、いひのふることくさにもしられ侍る。其かたちのみやひやかなるをみ

て、いよ〳〵其才智もいやまさりて有がたく覺え侍る。故郷へ歸りし頃は、年已に二十四歲といひ侍れど、よそめには、只二八二九の間と見え侍る。おのれ此年まで、女をみたる事多し。通女がごとくなる美形は いまだ見ず、有がたき人がらにて侍りしとかたる。」まことに果報めでたき女子といふべし。

通女かその年十五六にいたる頃は、その才、いよ〳〵高くその容、いよ〳〵麗はしく、遠近の人相傳へて、その名、大に世にひろまりぬ。つひには、丸龜城主京極備中守の後室松容院の聞きたまふ所となりて、藩吏ども、通女を召さるゝこと、いとねもころなり。此において、通女、天和元年はしめて江戸の丸龜藩邸に來りて、松容院の左右に侍しぬ。松容院、通女か才色の兩なから美なるを愛てゝ、これを見ること、恰かもおのれか愛子に對するがごとし。

おほかたの世の女子は、少しく才あるか、はた髮容のいさゝか人にまさりぬれば、おのつと之を鼻にもかけ口に出して、朋輩の者にもにくまるゝならひなるが、通女は、つゆほども、さるふるまひなく、おなしく松容院に侍する女ともになつかれたりき。時習齋いふ、「通女、左右に侍る事九歲、その人から、用意すべて常の人ならす九とせの中、その友の女ともはいふにやおよぶ。使令の下婢等にも、一度もはらたゝしき面ふりみたる者なし。只平生窈窕として、上をたつとみ、友としたしむのみ。」

通女、自ら後室に侍りたる中のことを述べていふ。

一とせ、故君(即ち松容院なり)の仰をうけ給はり、御言の葉のふかき御めぐみによりて、身のつたなきをもわきまへす、はるけき海山のさかしきをしのきてまゐれるこころざしを、淺からすおぼしわきて、御側にのみ、朝夕ならさせ給ひて、よろつに御心をくはへて、おぼしいたらぬくまもなく、いたはりおほせらるるをは、いかてかはいとゝおろかにもおもひたてまつらん、いとになうたのみきこえ奉りて、十とせにちかき年波の立かさなれるも、只きのふけふの心地ぞする。あくよなくなれつかふまつりし御かけに、かく假なるやうにて、わかれ奉りしかは 夢現のさかひも

おもひわかす、いとゝうき身をようなきものにおもひすて侍るを、とゝまらせ給へる御子達、御はらからをはじめまゐらせ、ありし御心にかなひておほしめしつるをとて、いとかたしけなくも、ねもころに仰せまつはして、何事をもおもたゝしきさまにおほしおきてたる御めぐみを見奉るにつけても、猶こしかたのかへらぬむかしとなりぬるはかなさのみ、かつかつおもひつらねてかきくらしつゝ過すほと、月日のうつりかはりて、わかれ來りし折のへたゝり行くも、かなしくおほえらる。おやの年老て、いとせちに戀しと覺ゆめるは、げに周公の聖にてだに、東山の三とせを歎き給ふ。ましておろかなる心のやみに、九とせ久しき詠もことはりにかなしく、故郷をかへりみんとおもひなりぬるを、とゝめまほしく覺したる御かた〳〵の御心ともの淺からぬ御言の葉の情のかす〳〵わすれかたきふしともおほかれは、草枕おもひ立ぬる御名殘をしみまゐらせんと、かなたこなたに四日五日の程もおもひまゐるに、今一日〳〵とせちにとゝめさせ給ひて、卯月二十日頃より、五月の晦日つかたまてさふらふ。」

これを見ても、通女が婉順にして、よくその主として仕へし松容院と相契ひしのみか、その他の人〳〵にも愛せられたるを知るに足らむか。

通女、松容院にわかれてよりは、江戸にあることも、おもしろからず。かてゝ加へて、故郷なる慈母かはや年老いて、朝な夕な、門に倚り閭に倚るよしを聞きて、藩邸を辭して、丸龜に歸ることゝなりにき。江戸を發ちたるは、元祿二年の夏六月十一日にて、ゆく〳〵東海の名區を詠めくらして、同じ月の三十日といふに、恙なく家に着きぬ。その喜び、いかなりけむ。そのまさに丸龜に着かむとする前に、父母妹などにあひみんほど いかならんと心ときめきして、何も〳〵おもひわかれさるまゝ、硯もとりやりて、とく着かなんことをのみいふといへるが、さもありぬべし。

はじめ通女が江戸を發つや、備中守の旨をうけて、輿中にて、道の記をものしつ。これ今の世に傳ふる所の歸家

日記これなりき。此に日記中の一二節および詩歌二三をかいぬきつ。

晝つかた立よりたる宿、いと涼しげなり。おくなるおましに居て、北の方をみやれば、雲につらなりたる海原、むかふさまに高く見えて、げに末の松山もこえつべく波の立かへるなど面白く、こゝに住人さへぞうらやましき。それよりいてゆけば、近き頃、早苗とりつらんとみゆる田面に、みどりの稲葉いとうるはしくて、また穂に出ぬ程、くさきる者の笠のみ見ゆ。田歌いとをかしくうたふ。げになりはひのたやすからぬいとなみもみることには、今一しほおもひしられて、素餐の科おそろし。又山きはに畑うつものゝ身の色は墨のごとくにて、あせおしぬごひたる、あつさたへかたけなる。夏畦よりも病めりと、くるしきたとへに仲由のゝたまひし、げにもと覺ゆ。今夜は戸塚といふ所にやとる。

畏圃の男女のはたらくさまを見て、その艱苦せるをおもひ、素餐のとかおそろしといひたるは、むかし園女が當麻にて、みづから織らぬ罪ふかしと懺悔したるとおなしく、その心いとやさし。

夕つかた淀のわたりを過ぐ。こゝは、石川主殿頭殿の御領也。この御よめの君は、過にし我君の御子と聞えさせて、故日向守殿の北方にてわたらせ給ふが、男君かくれさせ給ふて、いまは御子達などのおとなひさせ給へるを御なぐさめにてすぐさせ給ふなる。近頃まで馴て、御心さし殊に御めぐみ深かりしも、露わすれず。かねて此わたりを過なんことをおぼしのたませて、思ふまゝなる世ならましかば、こゝろゆくはかりあるしせはやなど、さまぐくにかたらはせ給ひたる、おもひつゝけ侍れば、こき行舟も、しばしよどみなんと、いと名殘をし。水車のめぐりて、御城の内へかけられたるかけひに水をまかせ入るゝたくみなるもいみしく面白し。むけにちかきほどなれば、いとよくみゆ。岸の上に、御家の士など番する所にや、りんたうの御紋の幕打てなみ居たるもあり。御城は、水にのぞみてきつかれたる ことなれば、波のおしうごかす

やうなるも、たぐひなく見所おほきあたりなり。波にひかれて行まゝに、岸の上なる家とも、跡方にしそくやうなるもをかし。商人の家、民の家とも、町をたてゝ、遙につゞきたり。くれ行程、火のひかり、星のごとくにて、松の間より見えかくれす。かなたこなたと里の名とも聞過ぬ。八幡山もまちかくおふかれさせ給ふ。あつかりし名殘むつかしければ、河水をくませてのむに、猶ぬるければ捨つ。舟のそよ〳〵となるをきゝて、戶をひらきてみれば、蘆の茂りたるをわけ行なり。月はまだ出ねと、星の光りにて、いづくもよくみゆ。帆かけたる舟ともおほく引のほすか、こなたさまにむきて來るをば、よきよとにや、舟人の平によばゝりたるも、何事をいふならんとおそろし。蚊いとおほくて、扇をはなたず手ならしをれは、打まとろむべきいとまもなし。盆本は、いみたる物ともの上にのぼりゐて、秋の水のみなきて落てとうたふ程、山のはゝなれて出る月影もすみわたりて、心ぼそく哀なり。境に觸れて、思ふがまゝに敘し來りて、いとおもしろく

一讀して、その身の三十石にあるがごとき心地す。

箱根山に泉をくみて

山水を手にむすびてもおもひしる
　ひさこを捨し人のこゝろを

三島に詣てゝ

まことあるこゝろばかりをたむくるを
　ぬさとみしまのかみやうくらん

富士

いづくよりふるしら雪の積りけん
　雲もおよばぬふしの高根に

逢阪山にて

せきの戶をさゝて行かふ逢阪は
　夕附鳥のそらねだになし

瀨戶舟中

乘レ風一葉幾浮沈。萬疊奔波蒼海深。
這裡雖レ持二古賢敬一。無人岸上說二無心一。

牛窓にて

世をわたる身をうしまとの明くれた

こきゆく舟の上にてやみん

和歌は、これにて、そが一斑を見るべし。いづれもみなよくその言はむとする所を言ひて、いとをかし。詩は、巧なりとはいひかたけれど、とにかく、その頃の女子にて、かばかりの手腕ありたるは、殆どその類なからむ。詞章の美なること、すでにかくの如くなるのみか、頗る識見も高かりしごとし。相傳ふ、正眼國師たまく錫を飛ばして丸龜に來り、士女の來禮する者、市を成すばかりなりしか、通女さとりその敎を請はず。ある日、さる處にて、ゆきあひて、國師、通女を見て、汝、何かゆゑに佛乘に歸依せさるやと問ふに、通女、我にもまた我が法ありとて、すぐに筆をとりて、一首の歌を呈しき。いふ、

つねにゆく道なくばこそ世をうみの
あまの乘かふ舟もたのまめ

國師、これを見て、默して答へざりきとぞ。或ひはいふ、こは、正眼國師にあらず、了然尼なりと。いまたいつれか眞なるを知らず。國師にもせよ、はた尼にもせよ、たまくに撞着しながら、一鉗鎚を下して、正宗國師か大橋におけるがことくしたまはざりしは、いとをしみてもあまりあり。

通女、丸龜に歸りたる後、同藩の士三田茂左衛門なる者に嫁ぎ、傳左衛門諱義勝を擧げ、正德五年四月十三日をもて身まかりぬ。行年五十歲とぞ聞えし。

室鳩巢かつて通女を激賞し、人に與ふる書にて之を稱しき。いはく、

井上氏の行記、再三見申候。扨く珍敷事に奉存候。才女と申にては、よほど見識も有之事、驚入申候。先日、新井氏抔参會の節咄候へば、とくに承及、且又右行記は、江戸にては方々へ傳へ申候由にて御座候。其外不存者は無之候。是程の才識にては、名も高き筈に御座候。植山重藏と申尾州の儒臣、只今は常の士にて相勤申候、此人の母、尼に成、了然と申候、最早相果申候。此尼、江戸にても噂申候て、雅達の材、天然の禪機を取申候。美敷尼にて、色くかまい中心出來候とて、額にやき金二つ當申者にて候。其時に歌も有之候。此了然と右の井上氏出會候而、儒佛の僉義致、即

時に井上氏讀申歌、人々に膾炙いたし申候由。男子にも候はゞ、英雄に可成候、をしき義共に候。

この書翰のさまにては、通女、世にありしほどより、はやく世にもてはやされて、鳩巢、白石などの大儒にもめでられたるものと見えたり。鳩巢が一言は、通女のためには、他の千萬言の金石文字にもまさらむか。

婦女小傳

田村松魚

○傾國傾城

李夫人妙麗にして善く舞ふ、倡を以て進む、初め夫人の兄の延年といふもの上に侍し、起舞して歌ふて曰く、北方に佳人有り、絶世にして獨立、一顧すれば人の城を傾け、再顧すれば人の國を傾く、寧ろ傾城と傾國とを知らざらんや、佳人再び得難し、と、武帝嘆息して曰く善く世豈此人ならんやと、平陽主因て言ふ、延年に女弟ありと上乃ち召してこれを見る、是に由て幸せられ、一男を生む、これを昌邑哀王と爲す、夫人病篤し、上臨てこれを候す、夫人謝して見ずして曰、我容貌を以て幸を得、今我が毀壞を見たまはゞ、必ず畏惡して我を棄てたまはん、尙肯て追思して其兄弟を閔錄せんやと。

○勾踐の女

越姬は越王勾踐の女なり。昭王の姬となる。昭王燕遊せらる。姬蔡左に在り、越姬右に參す。王二姬に謂て曰く、樂きか、蔡姬對て曰く、樂しと、王曰く、吾願くば孔と生きては此の如く、死して又此の如きことをと、蔡姬曰く、願くは生きては樂を倶にし、死しては時を同ふせんことをと、王復た越姬に謂ふ、越姬對て曰く樂さとは則ち樂し、然れども而かも久うすべからず、妾これを諸姑に聞きぬ、婦人は死を以て君の善を彰し、君の寵を益す、其れ苟も其闇死に從ふを以て榮と爲ることを聞かず、妾敢て命を聞かずと、是に於て王越姬が言を敬す、而も猶蔡姬を親嬖す。居ること二十五年、王、陳を救ふ、越姬從ふ、王病て軍中にあり、赤雲日を夾んで飛鳥の如きことあり、王周史に問ふ、史曰く、是れ王身に害あり、

然れども移す可し、將相に移さん、將相これを聞て將に身を以て神に禱らんと請ふ、王曰く將相の孤に於ける猶股肱の如し、今禍を移し庸てか是身を去んことを得んやと、聽かず、越姬曰、大なる哉君王の德、是を以て妾王に從ふことを願ふ、昔日の遊は燕樂なり、是を以て敢て許さず、君王禮に復るに及んて國人皆君王の爲めに死せんと欲す、而かも況んや妾に於てをや、請ふ願くは先づ狐狸を地下に驅らんと、遂に自殺す。

○武帝の二婦人

尹夫人、刑夫人と時を全うして並び幸せらる、詔有つて相見ることを得ざらしむ、尹夫人自ら武帝に請ひ刑夫人を望見せんことを願ふ、帝これを許す、即他の夫人をして飾て御者數十人を從へて刑夫人と爲し、來り前ましむ、尹夫人前んてこれを見て曰、此れ刑夫人の身に非らざるなり、其身貌形狀を視るに、以て人主に當るに足らずと、是に於て帝乃ち刑夫人をして故衣を衣て、獨身にして來り前ましむ、尹夫人曰く、此れ眞に是なり、乃頭を垂れて泣き、自ら其如かざるを痛む。

○鍼神

魏の文帝愛する所の美人、姓は薛名は靈芸、常山の人なり、後その名を改めて夜來と曰ふ。夜來、鍼工に妙なり、深帷の内に處ると雖も燈燭の光を用ゐず、裁製立ろに成る、夜來が縫製にあらざれば帝服せず、宮中號して鍼神と爲す。

○留仙裙

帝大液池に於て千人の舟を作り、合宮の舟と號す、后、歸風送遠の曲を歌舞す、文帝犀簪を以て玉甌を擊ち、后をして愛する所の侍郎馮無方をして笙を吹いて以て后の歌を倚らしむ、中流歌酣にして風大に起る、后風に順ふて音を揚ぐ、無方長嘯細嫋與に后の裙體に相屬して曰く、我を顧みよ、我を顧みよ、后袖を揚て曰く、仙乎仙乎、故を去て而して新に就く懷に忘れんや、帝曰く、無方我が爲に后を持せよ、無方吹を捨て后の履を持す、久うして風霽む、后泣て曰く、帝我を恩み我をして仙し去るを得ざらしむ、と、悵然として曼嘯し、泣數行下る、帝益々慚愛す、他日宮姝幸せらるゝもの、或は裙を襞し

て紉を爲し號して留仙裙と曰ふ。

○斷織

阿南の樂羊子遠く師を尋ねて學ぶ、一年にして歸り來る。妻刀を引いて機に趨て曰、此の織皆絲より生じて機杼に成る、一絲にして累て以て寸に至る、寸を累ねて已まず、遂に丈匹を成す、今若し斯織を斷ば則ち成功を損失して時日を稽廢せんと、羊子其言に感じて復た還て業を終りぬ。

○崑崙

李太后諱は陵容、本微賤より出づ、始簡の文帝會稽王たりしとき三子あり、俱に妖す、又數年子無し、乃ち善く相するものをして諸愛妾を召して之を示さしむ、皆云ふ、其人に非ずと、時に后宮人となつて織坊の中にあり形長うして色黑し、宮人皆これを崑崙といふ、旣に至る相者驚て云く、此れ其人也。帝召してこれを寢に侍せしむ。后數々兩龍膝に枕して日月懷に入ると、帝聞いて異とす、遂に孝武帝を生む。

○袁隗が妻

汝南の袁隗が妻は扶風の馬融の女なり。字は倫々、少うして才辯あり、融が家世々豐豪、裝遣甚だ盛なり。初め禮を成すに及んで隗これを問ふて曰く、婦は箕箒を奉ずるのみ、何ぞ珍麗を過さんや、對て曰く、慈親愛を垂る、敢て命に逆はず、君若し鮑宣梁鴻が高を慕はんと欲せば妾も亦請ふ少君孟光が事に從はんと。隗又曰く、弟の兄に先んずるは世を擧て以て笑を爲す、今處姉未だ適ず、先づ行くこと可ならんか、對て曰く妾が姉高行殊邈にして未だ良匹に遭はず、鄙薄の苟も然るにあらざるのみ、隗默して屈すること能はず。

○羊子が妻

河南の樂羊子が妻は、何氏の女といふことを知らず。羊子嘗て路を行き、遺金一餠を得、還てこれを妻に與ふ、妻曰く、妾聞く志士は盜泉の水を飮まず、廉者は嗟來の食を受けず、況んや遺を拾ひ利を求めて以て其行を汚さんや、羊子大に慙て金を野に捐てぬ。

文苑

道の記（海道記の一節）

三枝斐子（故人）

十三日卯の時あか阪をたちいづ、傀儡ども朝たつ人になこりをしめる、絲竹のねに合せて何やらんうたうたひつゝ送り出るさま、いとえんなるあけぼのゝけしきなり、朝かぜ身にしみとほりてまたしき春のこゝちす、宮路山二むらの二山をひたりに見つゝゆくに寺あり、村山法藏寺とかや法相宗の山てらなり　あけの玉垣きらめきわたりて東照宮そおはしますといふに、志のゝめに參りて拜み奉る、ふもとにはかせう水とてきよき山井あり、かのゑのはゐならねどいとふりたり、神君いとけなくおはしましゝ頃、此寺にいりおはして御手習せさせ給ひしときみすゝりにめしける水なりとそ、本尊は正觀音阿彌阿佛そたゝせおはします、佛の前に黑く手なれたる折木を添へたり、こは神君常にみあそびのものとして手ならし給へりとなん、あるじの老僧なのめならすよろこほひて、萬つねもころにとりまかなふ、まづ寶物どもをがみ奉るに、おん手習の机は、御みづからみゆびのさきして城のかたをつけさせ給ふとぞそのさまの古くていやしけなる、山里のわらはべがもたらんもかくはとまてみゆるが、かへりてかたじけなきなり、つぎにおん道師の御手本、わま國の御はかし、からの十三經の上のかたに、淸康公の御手してこまやかにかゝせ給ひたる、さては三河國のおんおきての札、御たはふれにかせうへとあそばされし御ふみ、御繪どもよりはじめてなにくれといと多かりし中に、ことにおいくしと見奉るは、御みずからのおしての跡の、いときびはにふくらかなるが墨にておされたる、見奉る

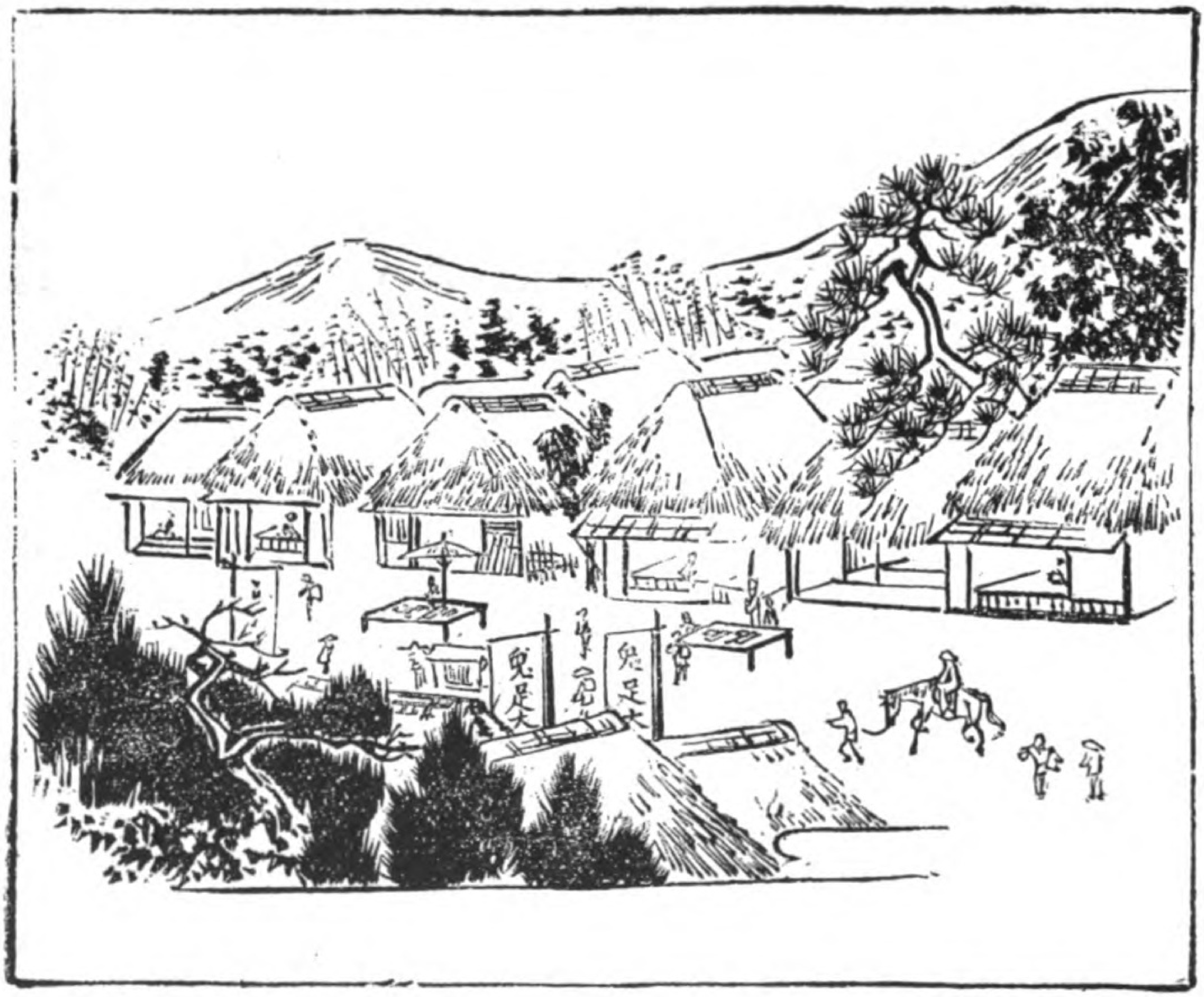
に涙ものこひあへずおんぞの茶色の綾のなへたるに、夕汐みちくる汀に、芦にすてをふねを染られたるが、青色してめゆひにこをいれたり、御袖の長さ一尺三寸ばかりとぞみゆる、さてまたあまたゝびの御戰におほんよろひのしたに引いれさせ給ひしおほん陣かたびら有り、そをかみ奉るさへ目もきりふたがるを、あらたへの布を柿のしぬりもてそめたり、深山の木こり塩やくあまもかゝるものはいまやうには見もしらぬあら〳〵しさを、それさへあまたゝびの御出陣によるひるめさせ給ひしなればさけやふれたるもおほかたならず、礎のみるめにことならざるを、うへとしたとをひな結びなどせさせ給ひし處いと多かる、實にもあめの下、爪のごとくにさけ、瓦のごとくとけて、民の苦しみいか計にか有けん、そを天下の人の心をもてみてこゝろとせさせ給ひて、世をあまねく救はせ給はんとて、斯までおん身をなきになしつゝ苦しませ給ひしおほんめぐみの程をおしはかりたいますれば、有がたくもあはれにも、かなしうも、とり〴〵に思ひめぐらされて、袖をしほるばかりな

れば、つや〳〵をかみたてまつらず、かゝるたい〳〵しさをなすらひ奉るにはあらねど、女のことわりしらぬこゝろに、身一つをなどうしかなしと思ひけん、そはたゞおのれが本意の叶はぬうち〳〵のちりばかりのわざぞかし、夫さへ人にはことなりける身ぞかし、などうち嘆かるゝぞかし、四海のさうぐんにて、神とならせおはしますほどのたときさへ、かくまでのうきおほんなげきはありけりと、今ぞ思ひしり奉る。後の世のおんためとて皆ほふふくにぞてうじかへさせ給ひける、古き土佐の畵あまた、古へさまにていとをかしき姿ゑどもさま〴〵なる御屛風または、昔よりつぎ〳〵の將軍の花押どもを集められたる、神君の姫君、なにくれのおんかた〴〵より、法のためとてよせさせ給ひけるとか、こと〴〵しうは筆にもとめがたし、彼是のあはれをみすぐしがたくて、とゞまらまほしき心地にも、なほ行先はるかなるにと云ふに、もよほされて、かへりみがちにてたち出づ、霞みわたれる朝ぼらけふたむらの木立いとふかく青やかにて、所々ちり殘れる山さくらとおぼしき

が、しろう見渡されて春のなごりふかきに、鶯のひとく〳〵と濃かに囀出たる、かた〳〵うち過かたき曙なり、

命あるはまたや來てみむ玉くしげふたむら山の明かたの空

かへりまうしいとねもごろなり、神威いちじるく、卑妾をあはれみ給ふてとあらば、ふたゝび古郷にかへさせ給ひて、老たる親にいま一たび生前のたいめさせ給へと、うちかへしいのる程時もうつりぬ、野猿疑弄客、山鳥似呼人と思ひつゞけて、とば



かり見わたせば、青々とうつくしき山見ゆ、あれはなど人のいふをきくに宮路山となんきこゆる、むかしよりもみぢいとおほかりときくを、まだ青葉なるにだにいとゆかしうめでたきを、まいてからにしきおりはへたる頃はと思ひやるに、たゝまくをしうて行きやらず、衣の里もうち過ぎて、岡崎のすくを過ぐるに、繁華東武に類するにや、あそびまたいと多し、矢作橋はことに長くて、むかしのうたひもの抔にさへあれば、いとゞ人もしる

にや、下郎などさへいひしらせなどする、大濱といふにてひるのおものなどあるべし、けふは時うつりぬ、行先とほしとて、たゞ急ぎにいそぐ、此頃またけふばかりなるあつさまれなるに、日さへてりそひたるを、おしこめられてもられ行けば、鳴戸をこゆる船よりも猶苦しう、心地もほけたるごとにて、たゞ夢かなどのやうにて物おもひもあへず、さうかへりてはむねあく心地そせまし、なるみがたを遙に見て、落合といふ所を行く、こゝは今川義元の討死したりし桶はざまちかくあるよしなれば、たちよりとぶらはまほしけれどこゝろにまかせず、池りうにはかのはる〳〵來ぬるてふ在中將の八ッ橋のふるきあともあなれど、忍ぶばかりにてむなしく過行くこそくやしけれ、よろづ所を得てもてあつかふ從者など云もの　あはれなるをも思ひやらず、みやびなる心もなし、さるほどにこなたは優に思ひしみつゝ哀にもをかしうも見過しがたき所をば、何とも思ひたらず、追立〳〵あらかひてはしらす、また人多くてきたなきものどもうちつどひ、かや〳〵と罵かちにて酒のみ

物くひなどする所こそ、見るもうるせくはやうち過ねと思へば、おのれはこそ〳〵と口ひきたれ、鼻いらゝがしてをるぞかし、されば道行くほどもあけくれいきなきわざのみ多かれと、うち〳〵のいふべきならねば、一女はかくばかりのことさへに心任せぬを、佛を念じつゝいとせめて後の身はそのこにあらはやとさへ思ひうんじて、はて〳〵は稱名をさへとなへられけり、酉の時過ぐるに宮のとまりにつく、この驛いへごとに火多くともして、絲竹の音たえず、夜なれど大路ものうる聲さやかに、人あまた行きかひたり、ふる里のけしきに似たる所〳〵あるに、思ひ出らるゝ事もまたさま〳〵なり、あすは海わたるへしといへばそのまうけ何くれととり〳〵あわたゞし、

窓のすさび

璽井爾子

朝とく小説を高聲によみたるいとすさまじきよ。三味線を朝まだきにひきたる。殊にはうた、都々逸、道ゆき

ものなどを高うゝたひたる、書生のあまりに遊藝に達したるいとすさまじき。ホーカイナ節歌ひありく書生なさけなきまでにすさまじ。たらちねはかゝれとてしも教へざりしものをと涙ぐまるゝを、得意の音をきり〳〵とまきしめて、サヽホーカイなど、行きすぎぶりにちやかし行くよ。人と生れながら、何とて藝者などにはなりけん、世の排づれの手遊とせらるゝよ。それも、見めうつくしき女子が、はやく親の心を迷はしめし罪の報ひ、猫の皮をばち〳〵と叩きぬるもをかし。むかし櫻井秋山と云ふ女畫師、いと醜くかりしを、丹青に妙を得て、つねに筆をふるひては、我れに匹敵する男子なしと自讃せしを、書生傍らに聞きて、さやうの事をな氣遣ひ玉ひそ、御身に匹敵する男子は、もとよりあらねばと云はれて、秋山恥かしく顔にいとこき紅葉を散らしたりと聞きけるが、みめよくて、動物づれの手遊とならんよりは、醜山中々にまさりたるべし。

　めづるとも手折りな花のをしければ
　　たゞ見るのみを家苞にせよ

と九歳の少女にとく聞きたるを、いたづらなる心に、とかく花を見ては折りたき思ひす。摘みたき思ひす。汝にも似ぬと母に叱られしためしも少なからぬが、一日、師の許に行く道すがら、撫子の花のすぐれたるが一輪こぼれ居たり。おちたるものをとて行きすぎたれど、何のゆかりにかいとをしくて、引きかへして拾ひとり、行きて新らしき、水を筆洗にくみとり、浮べたる心のうれしさ、あまりに子供らしと思ひながら、いつまでも枯れてよ、しをれてよ、あまりに水にひたりぬるか、枯らしてはと、水にひたしては上げ、上げてはひたし、人知れず心をくだきぬるを、うれしや、同じ道に志ざす友、いともうつくしき花かな、寫生しおかばやとて、やがて手帳に色香をうつされたり。思ひがけぬ人の心のなさけ、花もさばかりはうれしかりしならん。しかも、その人、あつぱれ大丈夫にて、畫の道にもいたくすぐれたりと聞きつるを、花の面目、我れも拾ひし甲斐ある心地して、歸へるさに、しをれはてぬるも、今日のみは、をしくも覺えざりき。

古るき書物の間に、銀杏の葉、楓の紅葉したるなど、ひらべたくなりて出でたるぞ、いたくうれしかりき。誰が入れおきけんと、むかしのぬしのなつかしく忍ばれぬるよ。我が入れおきたるにも、よくこそはしおきたりと思ふもあまりに子供らしき。

れんげの花のいたづらならで、田の肥料となると聞くぞうれしき。乾かして、ぬかにまぜて用ゆれば、顔のきめを細かにすると聞きぬ。摘むもいたづらならぬ心地するぞうれしき。たゞのすみれ、咲きたるを見るはいつくしけれど、書物にはさみては、つぼすみれの方の色のうすきが、中々にすぐれたるよ。

昨日今日とは思はざりし叔父君の、にはかにみまかれたり。あはれ果敢なき人生、おとゝし、我が父君が、出雲にて失せ玉へるを、聞きてかなしく、身も心もえすわらぬ嘆きに、すぐに出雲にとあこがれ出でにし我れを、新橋まで送り玉ひ、涙のみ先きたつ我れをなぐさめ、なげくは道理なれど、とてもかくてもかへらぬものをといさめられて、共にむせばせ玉ひけるを、とてもかへらぬと云ふ言のいたく我が身にはしみて、いよ〳〵涙こぼるゝを、汝がさやうに心細くては、母御は何とかする随分わづらはぬやう身をもいたはりてこそ行く甲斐あれ、さらずは中々止まれよと叱らせ玉へるに、げに我れよわるまじ、母君の御前には必ず涙をこぼすまじと早く心をいさめて出でにしが、あはれ、昨日は人の事をなぐさめ、今日は我が子ぞなぐさめらる。我れには血脈の叔父にはあらねど、日來信實なる人にて、我れひとり出雲より歸へれる後も、さま〴〵いたはられ、なぐさめられ、畫などを見玉ひて、一枚をなどの玉はせつるを、あまり拙ければ、耻かしくておくらざりしを、書きそこねたるを是非にとて、强ひてもちかへらせ玉ひけるが、ことぎれ玉ひしと聞き、おどろきて、人々と共に行きて、弔ふ臥間には、我が畫がきたる鹿のはりあり、たてたる屛風にも、我が拙き畫のはりありたるよ。あはれ、我が父の君も、みまからるゝ前きの夜まで、我が送りたる畫を臥間にかけて見、おきてはながめさせ玉ひしと聞きけるをなど、懷舊の涙さへそはりて、いとも悲しな。せ

めて今少し此の道にすぐれなば、人の心に報ゆべき萬分一の手向草もあるべきを。

とくかへりまたやわがめん櫻花
　しばしが程の旅ねとを知れ

しばしが程ぞ、勉強しつゝまてやとの玉はれて、立たせ玉へる先きおとゝしの春を、我が父君はかへらぬ旅の門出とし。塩井の君は思ひがけず早く逝かれたり、我れは我が父の年、七十九歳まては必ずながらへんとの玉はせられしが、やう〳〵五十路を二つ越られしのみにて、叔父君はみまかられたり。露命またいつまてかと思へど、今日はなほ人の身のいとをしきよ。あとを嗣ぐべき子はまだ十八歳、末なるは十歳、此の子たちを止めて、亡き人のあとをもした ひ行けじと、叔母君のなげかせ玉ふ。何と云ひてなぐさめまつらん。



御茶湯日

家巣生

淺草へでもと足を蹈向けたのは上野の用事を濟してからであつた。其は過ぐる日曜日の午後。て六區のドンチヤン、ピー〳〵を素通にして、水族館の前から大銀杏の下に出ると。自動電話に立ち懸つた葛西の若衆といふ先生が二人、不思議さうに中の機器を眺めてゐる、觀音堂からは今ま夥多しい人屑が、只だ赤い黑いと見る計り、李の笊でも傾けたやうに、ポロ〳〵と轉げ落ちて來る、堂から山門へ通じてゐる敷石の兩側には、藤色の屋台傘が、大小高低十許も並んで——、此は無論種々の玩具、種々の飲食物を賣るので——其の間々に幾臺の

鳩が、殆んど駒下駄に蹴散されてはパーッ〳〵と舞上る。堂前堂後見ゆる限、植込を廻つて人の渦卷。

堂前に進んで階段を二三級上つた時、ドカ〳〵と人を押退けるやうにして上つて來るものがある、其は草鞋脚絆に結束した、五十歳許と四十歳許の田舎者で、一人は茶縞手織木綿のゴツ〳〵した羽織の上に、持古しの桐の長箱を斜に脊負つてゐる、そして其の箱には明治四辛未十一月吉日と御家流もて認められてゐる、多分金比羅樣の御札でも入つてゐるのであらう。

階段を上り詰ると、一際立つた婦の一連が、人込を避けて何か話合つてゐる。黑縮緬の羽織が二人、友仙の襲が二人、其と際立つて見落のする婆さんが一人從てゐるが。羽織着の二人が銀杏返の樣、友仙の二人が唐人髷の形、何樣も素人ではなさゝうである。

左手の極隅つこの處に、ガラ〳〵と鈴を打振つてゐる。其方に目を向くると、大丸髷の小婦が、黑紬か何かの羽織着て、大黑天の前に立塞がつて合掌んでゐた所であつた。彼女は薩摩柄の洋傘を左に脇挾んで頭を前に下げてゐるが。何處から差込むとも知れない日が、丁度其の野暮に大い丸髷の上に落懸つてゐる。然し其の願事の半分も陳述したかしらと思ふ頃、もう脊の低い婆さんが、材槌頭の孫を引いて横合から押懸けて來た、先樣御替といふやうに、丸髷を押退けて大黑天と相對に立つた。然し此の婆さんも又た同じ運命で、長うは大黑樣を獨占するとは出來なかつた。斯くて見る〳〵五人十人と立替るのである。此の大黑天は仲々の流行神と見える。

然に此に續く文珠、辨才天、虚空藏、藥師樣などは大黑天と打つて變つて緣結の古紙で凄じう扉を結付けられたまゝ、いとゞ淋しく在すらしく、時偶昔馴染が「今日は」位の挨拶で通過するのみ、傍に御在る御賓頭盧も連坐喰つて、餘り撫人も無さうである。

御賓頭盧の眞向ふが鬮場である。鬮場は低格子を以て表を圍ひ、懸員四名で運轉してゐる。即ち一番奥に机を前にした坊さまが二人――一人は薄茶の法衣、一人は黑の法衣――机の手前に麻法衣が一人、其の次に羽織

着の世話人が一人とてある。さて崩れ寄る人波が手を上ぐると、其を合圖に麻衣が鬮筒をガラリ〳〵と打振る、鬮筒が逆になる、一本鬮がニユツと出る、其を麻衣は斜に膝の上に持上ぐる、すると待つてゐた黒法衣は左の手を伸して後の藥箪笥――幾十百の十抽斗が並でゐる所は、何樣しても漢法醫の藥箪笥と思ふの外はない――から判斷紙を取出して麻衣に渡す。麻衣は更に世話人に渡す、そして世話人の手から初めて願人の手に渡るのてある、又た世話人は其までの間に、願人から鬮料を受取つて置かねばならぬ、此の順序で三人の鬮係は、機を過たず輪轉機となつて働くのてあるが、薄茶の法衣した御坊樣は、てつぷりした顔に頬杖しながらじろり〳〵と眺めてゐるのみてある。今ま世話人から畢措惡さうに判斷紙を受取つた若い婦がある、彼女は其場で見るの勇氣が無いからして、紙を取るなり駈出して、出口の處て密つと讀下してゐる。

本尊の前は即ち大濤小波が涌返つてゐるので。外側の大賽錢箱には、提鞄が乘つてゐるかと思ふと、百足の足のやうに洋傘が立懸つてゐる。其と內側の低い大賽錢箱の前には 男女老若貴賤貧富都人邑人が、五の目となり二揃となり、立てるあり屈めるあり、珠數を採むあり拍手を打つありて、其の面相服裝の異なると同しく、其の願事も多岐多樣てあらう、此が觀音樣の耳に入る時は、何の位複雜混雜してゐるか判らない。尤も此處ては誰が何を言つても誰が何を聞ても、只だワウタと唸るのみて、更に別ちがないのだ。

然し此の混雜を時々冷かしに來るものがある。其は無論普通の人類ではない…鳩てあるが、五六羽或は十羽近くも打連れて、颯と羽風を切つて人の頭を掠め、天井から下つた大提灯を縫ふて、內側の賽錢箱の上の欄間に棲るのてある。そして何樣かすると信心を擬す頭の上へ白いものをベタリと落す事がある。其も無理はないので、佛を拜した頭を少しても上へ上げ過ぎると、提灯と言はず、欄間と言はず、桁と言はず、少し高いものがあれば、此の白い奴が累々と積つてゐる。

鐵網を張つた內陣には、線香の煙が霞の如く棚引いて

ゐる。そして其の間に引切なしに上ぐる「御蠟」が數多の雪洞に點つて居り、薄闇い奥には本尊が金色を放つてゐる。今日は善男善女の內陣拜が非常に多い、左手鬮塲の横に下足傘杖等にて五厘、と書出されてゐる所を見ると、何人も其の五厘を拂つて內陳に入るとが出來ると見える。

が賽錢箱の前の人を押破つて、右手に出て格子外から窺ふて見ると。須彌壇の右手にずらり人が並んでゐる何をしてるだらうと見てゐると、何か白いものを有り難さうに押戴いては口に持つて行き、更に戴いては指を以て眼に付などし、最後に忝けなく今一度押戴いて、返してゐる。暫は何を遣つてゐるのか分らなかつたが稍や人の薄らいだ所で、茶碗船があり、釜があり、柄杓があるのが見えて、茶を飮んで居る事が分つた。同時に自分の後にゐた書生らしいのが、「御茶湯日だよ」と叫んだ。

まあ是で平生にない今日の賑の次第も分つたので、其から右の方へ寄つて行くと、一番右手に出世觀音といふのがある。白木の大木魚が剝げ懸つた天鵞絨の上に据つてゐる。其の前に暫く彳んでゐると、小い丸髷の商家の內儀らしいのがつか〳〵と遣つて來た。彼女は出世觀音の前に座つて、先づ拍手を二つ許叩き、其から珠數を取出して揉み始めた、何樣も神樣と佛樣をちやんぽんに拜んでゐるやうに思はれる。其はさて置き合掌が濟むと、內儀さんは小腰を屈めて立上つた、スル〳〵と木魚の前に進んで撥を取上げた、五ッ六ッ叩いて今一度押上げた撥は、押返つた自身の右の肩に落ちた。木魚の代りに自身が肩先を二つ許叩いたのである、其で止すかと思ふと、其撥は又は木魚に加はり、今度は二つ許叩いて、其から又左の肩を叩いた。そして打納には又た木魚を五ッ六ッ打つて立去つたのである。成る程其の撥先を能く見ると、革を以て包んで當を軟く作つて有るので。此は普通の肩叩と大差ない。されば此の撥は全く木魚に當の軟かなる計りに拵えられたもののみとも思はれぬ。

學海

米國の高等女學校（口繪參照）

櫻田夫人の談話

○我國高等女學校の教育法はどうも迂濶である、その卒業生が少しも實用に適せぬ、といふ批難の聲が近頃なか／＼盛であるやうに思ひます。また一方に於ては女生徒の品性に就て悲しむべき取沙汰をも聞くとてありますが、私は此際米國の一女學校、オガンッスクールを御紹介するとが、敢て無益の骨折てはなからうと存じます。

○御承知の通り、米國は西洋諸國の中でも、最も女子教育の發達して居るところてありますゆゑ、女子大學などが澤山に御座います。これらの學校に就ては、私供は度々種々なお話を伺ふのてありますが、あまりかの高等女學校の有樣は、その割に承りつけぬので御座います。オガレッスクールは、米國に於て最も多くの特色をもつて居る、上品な高等女校學で御座います。日本婦人で此學校を卒業なされた方は、櫻田せつや夫人お一人て御座います。先日同夫人を御訪問いたしまして、お話の序に同校に就て、樣々の事柄を伺ひました。

○同校は今より七十幾年前、ミス、といふ十八歳の婦人の創立したものでありまして、女史はその後六十七年親ら校長の任に居り、數年前八十幾歳の高齡を以て靜に永眠されたのてありますが、女史の穩かに注意深く上品なる教育主義は、多くの人の同情をもちまして、オガンッ、スクールと云へば、今ては恰度我國の華族女學校のやうに、名士富豪の令嬢の最も多く集まる所となりました。私はこの學校の科目、時間割或はいろ／＼の教育法に就て、詳しく櫻田夫人のお話をお取次さいたしまする前に、幸ひ同夫人より拜借いたしました、數

葉の寫眞に就て、きれ〳〵のお話をいたさうと思ひます。

○同校は日本に比べますと、恰度高等小學の三年を終つた位の方を入學させまして、五年の卒業で御座いますゆゑ、生徒の年齡は十四歳以上、廿二歳位がとまりになつて居ります。第一圖はその兵式躰操のところで御座います、私供の目には、婦人はマア此樣なことまでするのかと、一寸異樣に思はれるのでありますが、勿論他に樣々の優しい遊戯や躰操も多いので、時に身躰を強く動すことの必要と、號令の下に心と身躰が一致して、最も敏捷に自由自在に働くことを、練習することの必要よりして、特に軍人を聘して、この躰操を習はすので御座います。

○次の畵は食堂で御座います。食堂はなほ此外に數室ありまして、獨逸の食堂、佛蘭西の食堂など丶申します獨逸の食堂は、部屋の裝飾、食卓のかざりつけ、器物は元よりすべて獨逸風に出來て居まして、此所で食事する間は、是非獨逸語を使はねばなりません。佛蘭西の食堂も矢張同じことで御座います。晝の間前の兵式躰操や、いろ〳〵のことをして、活潑に運動し廻つた方々が、羅の裳をひいて、香水のかほり床しく、靜々とこれらの食堂に集つて、うち語らふ有樣は、どうしても同じ人とは請取れぬ位であります。優しい人は事に臨んで、意氣地なく、活氣ある人は、平生の動作までも荒々しいのは、有勝の缺點で御座います。敎育は是非人の此樣な缺點を補はねばなりませぬ、即ち活潑であるべき場合に、どこまでも活潑に、おとなしかるべき事に就ては、飽くまでおとなしくすることの出來るやうに、敎へ導き、また生徒の方もその覺悟で修養せねばならぬことと思ひます。

○第三の畵は食堂に續いて居ります溫室で御座います綠の色の絶え間なく、紅や黄や、白や紫や、種々の花さへ咲き亂れて、樂園のやうなる中に、生徒は自由に食後の休息を試み、或は書を讀み、或は談話などするのです。

○第四は生徒の劇場でありますが、劇は矢張シユークス

ピアの戯曲などに取りまして、澤山の生徒をいろ／＼の人に扮して、假裝會をするのです。此爲に態々一人の敎師を英國から雇ひ入れて御座います。時には各國公使などを招待して、大假裝會を開くのでありますが、美事とも何とも云ひやうのない程で御座います。生徒はかゝる折に一入雋なれるので御座います。かつはどの名作にしても、たゞ一通り讀んだ丈では、どうしても感じの淺いものでありますが、稽古して居るその書中の人物に、めい／＼が實際やつて見て、いよ／＼名作の妙味が會得せらるゝ塲合もあらうと思ひます。

○之は餘談でありますが、嘗て新渡戸農學博士の御演說中に、日本の學校では、讀ませる書物は割合に、西洋よりも餘程高尙ですが、敎へかたも聞き方も至つて疎漏です。例へば或人が東京から京都に行つたと先生はいふ、成程行つたといふとは分つて居るが、汽車で行つたのか、船で行つたのか、飛んで行つたか歩いて行つたか、少しも云つてない、生徒の方でも、その樣なことは敢て氣をつけぬやうですが、西洋の書生は東京から京都に行つたといふ話を聞くなら、途中の五十三驛ぬよて聞かなければ承知しない、この樣な調子で、一冊の書物でも、習ひ終るまでは餘程永くかゝるやうだが、その代りむかふの學生の智識がハッキリして居る、日本のはどうも朦朧としては居ないかと思ふです。云々と云はれたことを記臆して居りますが、慥に思ひ當ることがあります。

○第五この學校に於て、月曜毎に催さるゝ、月曜會といふ遠足會の寫眞です。此時學校では廿人乘りの馬車を要意いたしまして、女敎師が一人附き添え、外に大學敎授一名を聘して、此日見やうとするものゝ說明を依賴するのです。即ち一種の修學遠足會で御坐います。例へば前の週間に大理石に就て學びます、スルト次の月曜には大理石を見に行くのです。凡て米國では幼稚園からズット上の學校迄實物敎育を、實に巧みにいたして居るやうで御坐います。同櫻田夫人のお話にも、「私の米國の或小學校を見舞いました折、敎師が植木鉢を持ち出しまして、前日預じめ命じまして、生徒め

いく〳〵に持參させました豆の種子を、一つ〳〵植えさせました。十日斗の後種子がはしめて芽を出したのです、スルト敎師は生徒を集めて、めい〳〵の植えつけた豆の芽に就て寫生させ、その翌日は矢張同じ紙に、きのふよりは少しのびて居る、けふの有樣を寫させ、遂に二葉となり、莖が出來、葉をひろげ、蔓をのばして立てかけた竹にからみつくまでを、毎日〳〵それは細かに寫させたので御座います。此子供の年令は僅かに八歳位でありましたから、元より立派な畫にはなつて居りませぬが、さりとて非常の興味を以て、日毎に植物の些の變化に注意して、寫生いたしたものでありますゆゑ、その發育の狀態がいかにもよく現はれて居るのです。實物敎育もたゞ牛なり馬なりを見せるといふ丈では、どうかと思ひますが、斯うまでに致しましたなら、實に八ツきりと子供の腦中に印象を與へるであらうと思ひます。かつこれに依て子供達が一般の植物に就て、いかに甚深き興味を持つとてありませう。西洋人は大人ばかりでなくまた幼い方たちまでも、實によく動植物を愛しますのは、一つは慥かにこの樣からも來るのでありませう。」

○第六はこの學校の中にある以太利風の庭園で御坐います。此所には獨り以太利風の庭園のみならず、西洋各國並に、東洋の國々即ち日本のも御座います。生徒は此間を自由に逍遙して、異なる國々の趣を賞するやうになつて居ります。ソシテこの以太利の庭の後には、水泳場や浴場が出來て居ります。

○第七は故校長の、その部屋店の寫眞でありまして、最後のものは、オカレッ女學校の全躰で御座います。此女學校は以上の通り金に飽していろ〳〵の準備をして居るのでありまして、必ずしもまねる譯には參りませぬけれど、實事を有のまゝにお話しする間には、敎育の精神に於ても、方針に於ても種々私供の注意すべき點を見出すであらうと思ひます。其内前にも申したやうに學科や校風の一斑に就て、櫻田夫人のお話を御紹介いたしませう。（第五以下は前號口繪參看）（なでし子）

米國 女子大學の寄宿舍

▲學校の氣風

マウントホリユーク女子大學校と申しますのは今より六十四五年前に彼の有名なメリーライイヨン女史が設立された學校で有りますがそのメリーライイヨンといふ人はその當時非常な逆境に立つて千辛萬苦を嘗めつゝ勉强した人てまだ其頃に於ては米國の女子の敎育並に婦人の勢力などは極めて微々たる有様で迚も今日の如き優勢では有りませんでしたから、メリーライイヨン女史は女子にも男子と同等の敎育を授けたいと云ふ目的で以ていろ／＼と奔走盡力された結果江湖有志者の贊成と金品の寄附を得て漸く此女學校を設立することになりました、それ故に其校の趣旨目的といふものは貧力の裕かな上流の婦人を敎育すると云ふのではなくて學資に乏しい、そうして精神の鞏固な女子の爲めに其道を與へやうと云ふ考へで有りました。それてすから萬事質素を以て其學校の基礎と致して有りました、併し幾星霜を經過した今日ては時勢の變遷に伴なつて學校の風も幾分か變つては居りませう、けれどもメリーライヨン女史の精神は依然として繼承されて居ります、のみならず女史が献身的に世の中の事に盡した結果として又此學校からは澤山の献身的婦人が出まして、今日でもマウントホリユーク大學の卒業生が全世界到る處に宗敎、敎育幷びに慈善事業の爲めに働いて居りますから、從ッて隨分高尙な冀望もあるのです、それ故かは知らぬが亞米利加全體の高等學校（日本の高等女學校以上の程度）の卒業生と此大學校を卒業した人とは其氣風、風采と云ふものが全く違ひます一寸交際をして見ましても大學校を卒業した人は毅然とした中に何處となく溫雅な處があッて眞に敬すべき風采を備へて言語遣ひから交際に巧みな處何となく高尙な所謂レデーライキになりますその反對に高等の敎育を受けない人々は思想が何となく卑しく、擧止動作が麁暴であッて一口に言へば女らしい風が足らない、然らば學校內

に於て是れ等の事を厳しく教育するかと云ふのに未だ二三十年前までは丁度今の日本の學校の寄宿舎のやうに教員が生徒を監督して婦人の嗜やその心得に就て厳しく訓へ導いたと云ふとでありますがそれが今日では大に趣きが違つて居ります、今では寄宿舎の舎監の如きも漸う四五十人に一人位ゐの割合で而かも其舎監は只生徒の飲食の世話をするのみであつて校長が講堂て婦人の心得を度々申聞かせると云ふこともなければ裁縫科は勿論なく、交際法を教へるでもなし、禮法を教へるでもなく、又日本の家政學と云ふ様なものも決してありません。けれども大學の卒業生は他に秀いでゝ風采も静淑であり品性も又高尚になり交際にも巧みになると云ふのは何ふ云ふ理由であるか、私は彼地に遊學中も日本の女子教育参考の爲めに始終注意して研究をして居りますと毎年九月が入學期で有りまして新入生の入り來る度に感心をすることがある、ソレは何かと云ふに新入生は初めの一期は随分粗暴な風が見える其中でも殊に亂暴者に注意して居りますと例へば自分の室の窓から覗いて向ふの室の人に大聲で話をするとか或は廊下で靴を蹴立てゝ走り歩くとかいふ風に随分活潑と云ふよりは亂暴極まる人も多いやうですが、ソレが一學期間も立つ中には何時となしに變つて來て二學期三學期には全然風采が一變するのであります而して此間教師は前に言ふ通り別に何の訓誡がましいことをも致しません是れは畢竟學校内全體の氣風に感化されるので有らうとおもはれますそれ故先づ其寄宿舎の狀態を御話致しませう。

▲寄宿舎の狀態

一體此學校は家庭的組織で成立つて居りますので教師と生徒との間は恰も親と子との關係或は姉妹の關係に於けるが如く校内に何處となく温き風が充ち滿ちて居りまして、生徒に樂しき家庭を離れて淋しき學窓の下にあると云ふ様な感じが少しも起らない何時も和氣靄々と愉快であるやうに見えます、扨その學校の構造は數戸の大なる建物でその一つの建物が約百室位ゐに

區劃してある、而して生徒は一室に二三人位づゝ居ります、私の在學時分は寢室も勉強室も一室を以て共用であつたが今では勉强室と寢室とは別になつて居るさうです、生徒は大抵十八九歳から二十三四歳までには最早卒業致します、而してその部室は一つの家庭の通りで直ぐ隣室に對しては丁度我々が近所隣に交際すると同じ樣な工合になつて居る從つて室を一歩踏み出した廊下は往來のやうな感じを以て居ります、それ故日本の寄宿舍などでは髮を束ね掛け帶を締め掛けて廊下に出るなどゝ云ふことは珍らしくないのですが、彼方では決してさう云ふことを致しません一歩で室外に出る時には衣服を正しく人に逢つても恥しくないだけの嗜みは常に注意して居る、又室内は常に奇麗に掃除して寢臺なども晝は美しき布を以て覆ひ書物は整頓して何時人に來られても差支ない樣に座敷らしく飾つて置きます。

又彼方では日曜の外に水曜日も休暇日となつて居ますが此兩日の間には互に親しい友を其室に訪問致しますが其折にも丁度他人の家を訪問すると同樣に刺を通じて面會を求め留守なれば名刺を置いて歸る又訪はれた人も客人を取扱ふ考へを以て客をして少しも退屈せぬやうに新らしき談をするとか、或は寫眞を見せるとか珍らしいものがあれば出して見せるとかソレに就て又話をするとか、種々心を盡して待遇しまして、其訪問者と被訪問者との間は決して一つ寄宿舍の室に居る人のやうではありません而して訪問を受けると必らす二週間の内に訪問返しをする、若し二度も續けて來ても此方で訪問返しをしない時は別に惡い感じは持ちませんが此人は自分と交際することを望まないのであるなと云ふ樣に考へて、モウ後には訪ねて來ない、又自分の誕生日などには近所に家のある人は家から種々御馳走や菓子などを贈るそうすると皆不斷家から一寸とした裝飾品や日用の器物などを持つて來て居るから室内を淸らかに飾り、椅子テーブルの置方花の挿し方器物の置方などにも出來るだけ注意して親しい友などを招きます、其時には招かれた人も平服を改めて何も學校内の

事故きらびやかではなくとも、先づは其席に差支の無いほどの着物に着換へて參ッて其誕生を祝します、日本であれば友達同士の禮義もなく、互に寄り集つて食べると云ふ塲合にも決して取り亂した風をしない、又そういふ樣な塲合には都會の地から來た人は室の飾り方とか或は器物の取扱ひ方、客の接待法なども自然と家庭で見習ひて上手に致しますから、田舍から來た人はそれを見習つて遂に覺えると云ふ樣に誠に好い都合になつて居る。それ故に交際法婦人の身嗜み、室内の裝飾法に至るまで自然に覺える譯です。

それから毎年九月には多くの新入生が這入つて來ますが、十月十一月頃になりますと、四年生は此新入生の歡迎會を致し併せて學校の職員をも招き或は他より來賓のあることも御座います、そうすると基督誕生會の頃には新入生が其招待の返禮を致すと云ふ定めになつて居ります、其時分に四年生は好く新入生を待遇し自分の懇意な人に紹介するとか學校の事で心得て置くべきとは話して聞かせるといふやうな有樣で決して塲馴れない新入生をして手持無沙汰の感じを抱かせませぬ、日本の學校に於いては屢々見ることで有りますが新入生は新入生古參の人は古參の人と別々に別れて容易に其間が打解けません加之自分の嘗て學んだ學校に於て其親睦を永く保つ爲めに同窓會を催すと云ふが如き塲合にも來り會する會員は互に一部分の人に話を交ふに止まつて此會の目的は何處にあるやを疑ざるを得ない實例は澤山に有ります、斯樣なわけで米國の學校は實に好い習慣と思ひます、其外にもまだ我國に取りたい例は澤山に御座いますが、未だ我女子教育の程度では實行し難いとも澤山に御座いませう私は外遊中は英語も不熟練であり殊に知己も少ない異邦の人であるにも拘らず何處に往つても如何なる人に遇つても決して手持無沙汰と云ふ感を起したことは有りません然るに日本に歸つて以來婦人會などに出ましても知己の少なき故とは申しながら、誠に其席にも堪へ難く感ずることが度々御座います是れは何故かと云ふに、日本の婦人は多くは自己中心であつて、何に付けても自分の事を

第一に考へて居る、彼の歐米婦人の如く人を慰め、人を樂ましめると云ふ考へは無ひ樣に思ひますが、是等のことは學校の敎師殊に寄宿舍に在つて生徒と起臥を共にする舍監などは常に生徒に注意する處があつて欲しい又個人々々も能く考へて漸々に心の向け方を改良して往かなくては幾ら表面上に婦人會などが殖へても直に婦人の團躰を世の中に活動させるとは出來まいかと信じます。

泰西遊戲法

○ホッケ遊戲（安井女史の意見）

佐竹郭公

英國の女學校又は學校外の婦人方がよくやらるゝ遊戲は、ホッケーでこれは十一人宛の者が双方に分れてこれに一人の判者があつて、ボールを敵の陣屋に入れたものが勝を取るので、先の曲がつたステッキの樣なもので地上にボールを打つのであります。女生徒などは特に一生懸命冬季になつてこれを致します。併しこれは多く十月頃から春にかけてする遊びで、夏は餘り暑くて適當しません。此外クリッケット、ラクロッスなど云ふ遊びの時候により、又は生徒の望みて行はれて居ます。學校でやる運動は成るべく種類を多く擇び時々變化するが、又は各々好む種類の運動を生徒に課するのがよいと思ひます。幾ら面白しとて始終やれば厭きるは當然、又好まぬ遊びに無理に生徒を強ゆる必要もありません。

右のやうな運動を致します時には、英國でも學校の生徒倶樂部ならば會員が投票して總督のやうなものを撰び、それに書記と會計が附屬します。是等の人々は皆生徒中又は會員中より撰はれるものであります。此外各級に二人宛の大將があつて級丈で遊ぶ時は是等の人々が各其組を指揮し、學校全躰が他の學校に對して遊ぶ時は總督が指揮します。例へばケンブリッヂ大學の女生徒とオックスフォード大學の女生徒とホッケーの競

爭をやるとか、又チエルタナム女學校の生徒と倫敦の學校の生徒と競爭するとか、又は令孃方、奥さん方のホツケー倶樂部と女學校の生徒と競爭すると云ふとも屢々ありまして、人々は其勝負を見に行きます。そして此競爭に勝つと何か銀のコツプの樣なものなどを作りて學校に保存するなどもあります。

併し是等の運動をさせるに就ては、種々の注意が必要てあります。澤山の若い娘さん達が夢中になつて球を打合ふ有樣は、素人目には亂暴とか、又はお轉婆とか見えませう。併しあちらの女生徒達が遊んで居る處を見ますにキヤー／＼云ふて大聲でわめく事なとは少しもない。殊にホツケーなどには夫々規則があつて、可成危險てない樣に規律正しくやります。又一方には平生の動作などで、しとやかに鄭重な風を習はせますから是等の遊びによつて、亂暴の女學生ができる憂はありません。時々御馳走の席などて、是等の生徒に出會ふ事もありますが、實に上品て、行儀作法などの粗暴てあると感じた事はありません。由之觀ても活潑の運動が女子を御轉婆にすると申す事は思ひ違ひてあります。

凡そ婦人は、申すまでもなく、其體格及氣象等に付て男子とは大に相異があるからして、其行ふ遊戲運動に付ても男子とは一樣ならぬ所があります。又一歩進んで同じ女中とは云ふりの丶我國今日の婦人（將來は知らず）と泰西の婦人とは其體格習慣風俗等に大差があるからして、日本の女子遊戲として採用するには此點も能く斟酌しなければなりません。因而私の考ではこの遊戲ホツケを本邦の女子に勸める積りならば左の事項に付て最も注意する必要があると思ひます。

第一、運動場は餘り廣からざる事

規則に依りますれば、競技場は長さ百碼幅五六十碼の平地とありますから、即ち其面積は殆ど千五百坪位となりまして、隨分廣い範圍となります。此樣ては、女子殊に我邦婦人の如き未だ運動に馴れざる社會では此範圍を縱横自在に駈けまはりますと、疲勞を來し易ひ虞がある。實際男ても女でも、運動を餘り過度に過激にすると却て其身體を壞はす結果があるから、競技場の

範圍は可成規則面よりは狹くしたい希望です。又一面の理由をして假令疲勞し易からずとしましても、千五百坪の運動場を我邦現今の女學校等に備へて置くのは寧ろ不可能の事である。故に此點を極論して、此遊戲は到底我國の女學生に採用するの望なしと斷言する教育家もありますが、前に申す通り運動場を縮めれば、此弊害は兩つながら除けらるゝだらうと存じます。

第二、杖は可成的高く上げざるやうに致したき事

仕合規則十四條にも規定があります如く、杖を自分の肩以上に上げてはゆきません。これは無論、萬一の危險を防ぐのであります。競技が熱してくると、兎角勢に乘じて亂暴に流れ易く、無意識の間に規則を忘れて、杖を高く上げる樣になりますから、これも亦競技者の肝に銘すべき點で、且つ審判者の御注意を願いたい。

第三、審判官は能く注意して少しにても疲勞せる人ありと認むる時は遊戲を中止し十分若くは二十分間位の休息を命ずる事

これは申す迄もなく、運動の過激に流るゝを防ぐのです。獨り此事のみに止まらず、審判官は色々雜多な事に干渉して、初心の者の世話を燒く樣にして貰ひたいものです。

第四、運動に馴れざる人は成るべく初より斯る遊戲に入らざる事



第一圖

此運動は本邦普通の婦人の遊戲としては、少しく過激に失する恐れがないのではない。西洋に於ける婦人の如く運動に馴れて居れば兎も角、さもなくば、他の比較的優さしい穩かな屋外運動でも、ローンテニスでもして遊んで、少しく運動的に身體を練磨した后に、此運動

に携はるのを適當と思ひます。英國の學校では這般の準備をなすには相應の準備を要すと云ふとを頻りに申して居ります。即生徒又は之をする女子の身體が之をするに適當して居らねばならぬ。筋肉の運動を仕付けたとのない身體が初から餘り過激な運動をしますと、神經が過敏になるとがあります。夫れ故に筋肉を前以て平等に運動させるとを勉めます。之をするには即適當の躰操を課するとがよろしう御座います。

第五、運動をする時、衣服は可成的輕便なのを用ゐ運動后必ず下着は着換ゆる事

かゝる運動をなすには、運動に便利な着物を附けることが必要で、且遊び終ると直ぐに、悉く其衣服を脫ぎ換へるとは衛生上最必要であります。汗で汚れた着物て其まゝ他の仕事をするとは嚴禁です。英國などの學生が冬季の間蹴鞠（フートボール）の仕合の爲めに恐るべき病氣に罹るのは、要するに運動后肌着を着換えない結果に外ならぬのです。又本邦女子の服裝問題に付ては色々今日の敎育家醫學者等の間に說があるが、兎に角西洋の如く特別に運動服とか、自轉車に乘る服を御作りにならなくとも、少し運動に便利な服を御作りになつて、何か仕易い事から始めたら宜しからうと考へます。歸朝以來此遊戯を女子高等師範學校及日本體育會女子部に採用する考で居りましたが、ホッケ用のスチック（杖）が今日の處では、非常に高價であるから、乍殘念來る時期を待つとにしました。

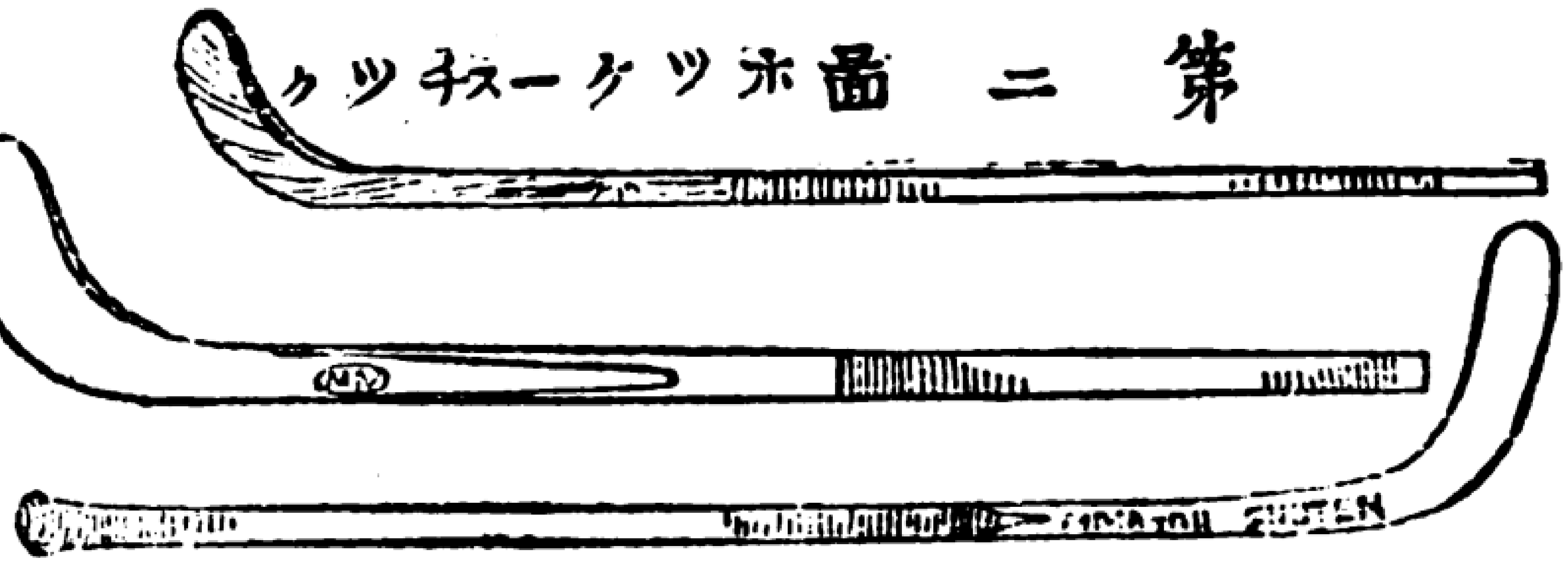
以上はホッケ遊戯に關し安井哲學女史が自から記者に直話せられし要領也

▲ホッケ遊戯の用具

ホッケ競技者の風采は第一圖にある通りです。先づ必要なのは第二圖に示す如く尖きに行つて鉤の樣に曲がつている杖(Stick)ですか、ホッケの遊戯は此杖を利用して敵の關門の中に球を入れたら、それて一點の勝なのです。此杖の選擇は皆競技者の思ひ思ひに任かして居るますけれども大槪其形と重さは定まつて居ります。

杖の形に付て曰へは、其鈎なりの周圍が成るべく

第二番ホッケースチック



地上から離れて居らぬ樣な形が極く良いので、球を取扱ふのに便利です。尤も前軍の用ゐます杖は後軍又は中軍の用ゐますものに比べて見れは屈曲が鋭い。ツマリ前軍は球に近い位地に居りますから、其球に屆かない恐を防ぐ目的からてせう。自由自在に杖を振り廻はすのであるから、柄は餘り長きに過ぎてもいけない。平均前軍の用ゐますスチックの重さは廿二オンス位だ想てす。併し中軍又は後軍になりますと、比較的廣い範圍を防ぐ必要があるから、其用ゐる杖

も長ければ其重さも重く、從而自由自在の方向に球を急射するのには不得手てす。重さは大概廿五オンスて此上を越すと手加減が不自由になります。柄の上部を庭球のラッケットと仝樣に革て卷きます。これは手握りの滑りを脱くので柄の最頂端を一寸手指て握て屆きされない遙かな球に屆かせる利益があります。尤も濕つほい時候てあると更に磨砂紙てこの表面を覆ひ手の滑るのを防ぎます。

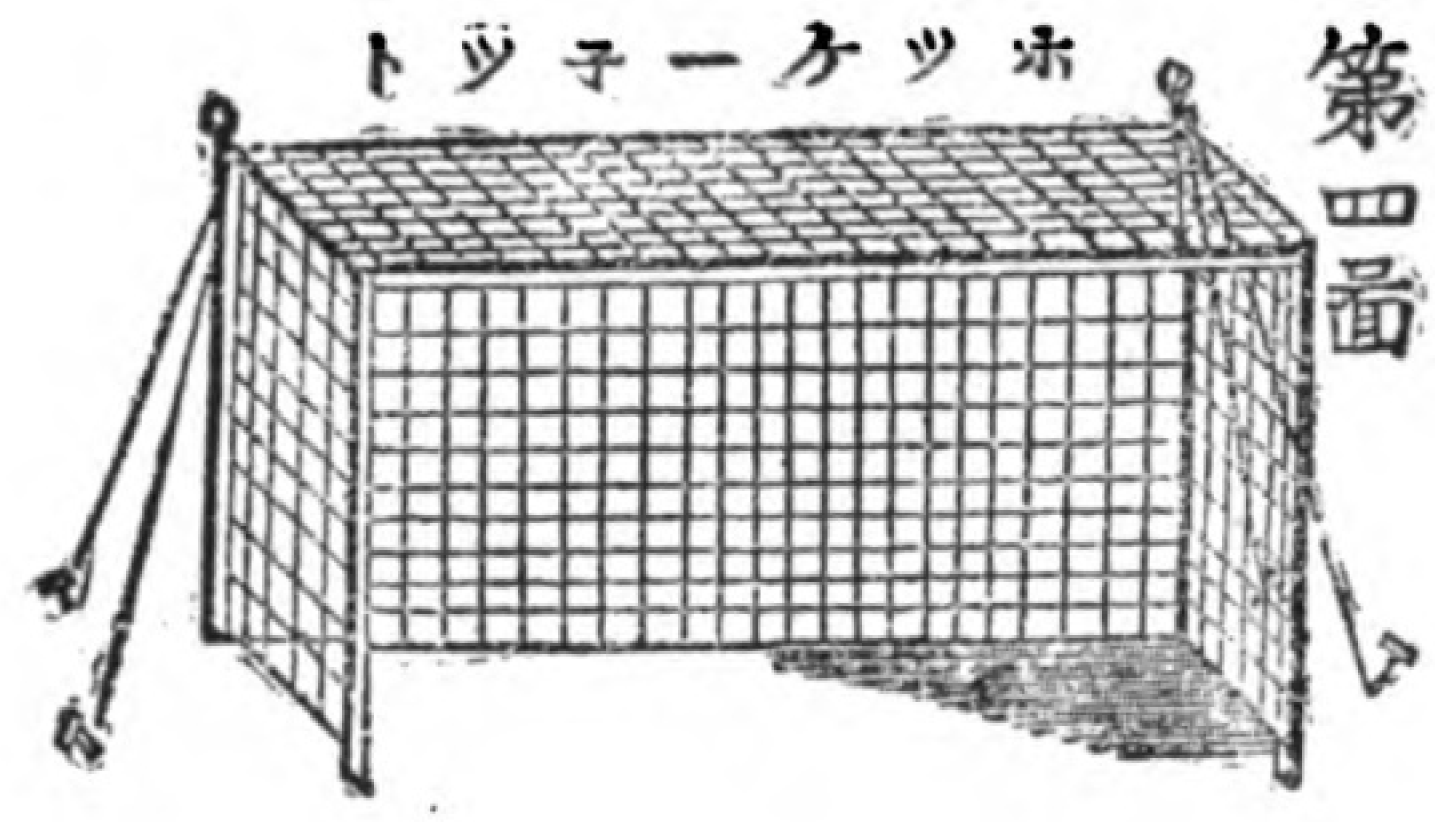
第三番ホッケーボール



偖杖の物質に付ては全躰木て製造する人もありますか柄丈を籐て作る方が球の運動を强めると仝時に握手の振慄を防ぐ效力があります。

長靴は極めて輕くシックリと緊まつたのが一番です。其靴の裏の飾釘は濕地の上では役に立つか、堅い土地の上ては脚裏の掀衝を招ぐ虞がある。或競技者は輕捷な運動を望む爲に半靴を用ゆる人がゐるけれども、經

骨の防禦甲板を欠く憂がある。脚袢は一般に便利です手袋は手の皮の剝けるのを防ぐ利があるが又柄を滑らす欠點がある。要するに諸孃が實際此技を經驗して最良と思ふものを採用したらよろしいでせう。一躰日本人殊に婦人は靴の穿き方が頗る拙いから矢張足袋跣して從來の脚袢を用ゐた方が一番輕快で便利だらうと思ひます。



第四圖

○○用球は昔はクリッケット用球を使ひましたがいやに堅く且つ危險いと云ふので種々の經驗を積みクリッケット球より稍大きく彈性護謨て上を包んだ木球を使用ひ試めしたが、餘り思はしからぬ故に、再び今に至るまで依然白く彩色したクリッケット球を用ゐて居る。

女學生の野外散策

香蘭女學校名譽講師　寺崎留吉

私が久しく理科を擔任して居つた香蘭女學校（東京麻布永坂）では野外理科といふことが一年二回づゝ行はれました、世間でいふ遠足か運動會てあるが別に運動會らしい躰技をなさないで東京郊外に散歩を試み天然の光景に就て理科の説明を聽くのである隨分其れがためには相模の鎌倉、大森川崎の製鹽場、瀧之川の紅葉抔も觀て歩いたが中にて最も屈强の遊び場であつたは隅田川江東の百花園である

茲に其摸樣を少しく書き述べてみますと先づ五十名計りの女學生　新橋停車塲に集まり直其前の堀から出帆する石油發動機械の小滊船に乘ると迅速なる速力で直ちに隅田川に出ます、丁度隅田川の上流には日本中學校の勇ましき短艇競爭がありて其れを眺めつゝ舟は百花園の直ぐ前の岸に着きました

忘れもせぬ十月初旬のことて最早園内の草花は少く遲

れて居る、が客が少きため我々共には却て自由で幸て

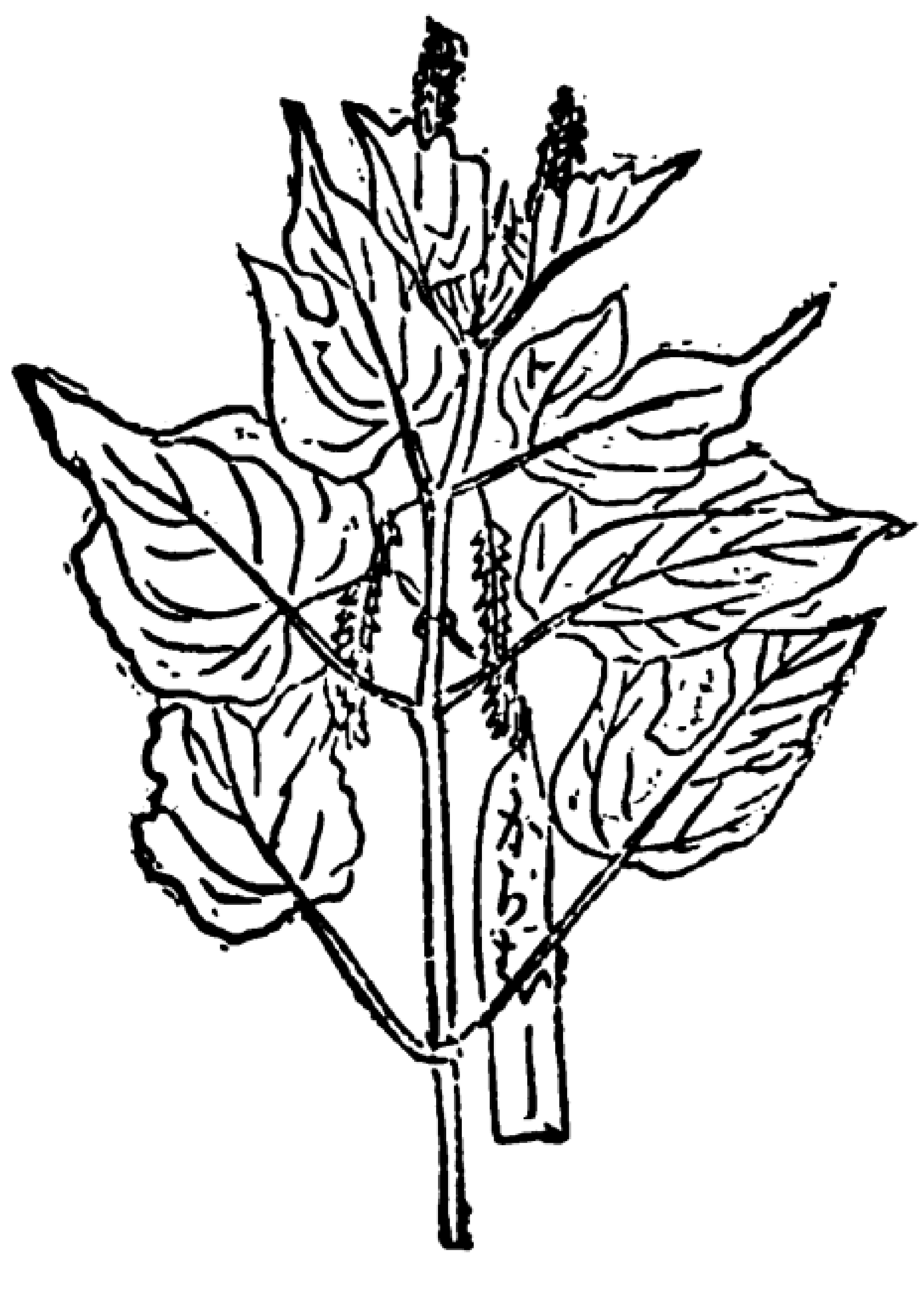


あつた百花園の立札に誠に鄭寧に懇ろに書きてあるが無理な漢字が附けてあつて學校での稽古とは相違が生じて困る、併し唯名前計りを敎ゆるのではない各草木に就て効用から學術上の面白き點を指導するのである

先づ指して見上げあるは葛の蔓である所謂葛の粉といふのは其根から取りたる白粉で、つまり植物が宿根するための養分である、今は眞の葛から製せずして馬鈴薯から造るのが多い勿論之れは顯微鏡の力を藉りて見ると直に見分けが着くのである、葛は豆の類であるから其花は見ゆる通りの蝶の形である

其下に桑の葉の如きが對生して居るそれが「カラムシ」(苧麻)で其莖の皮を剝ぎ其纖維から越後上布の帷子が出來る、苧麻は矢張り桑の類で花は美しくないが雄花と雌花とある一寸見れば蟲かと思ふ樣な實が、羽織の紐の如くぶら〳〵垂れて居る

畔には雁來紅がある雁來紅は若きときは餘り美しくはないが草が伸びて秋に至り最早や種子を結ぶ頃になると誠に美い緋の樣な色となるして見ると多分實を結ぶに關係の深きものなる可し、總て草木が花の美しく



開くのは昆蟲の眼を惹く必要あるからてあるが、美し

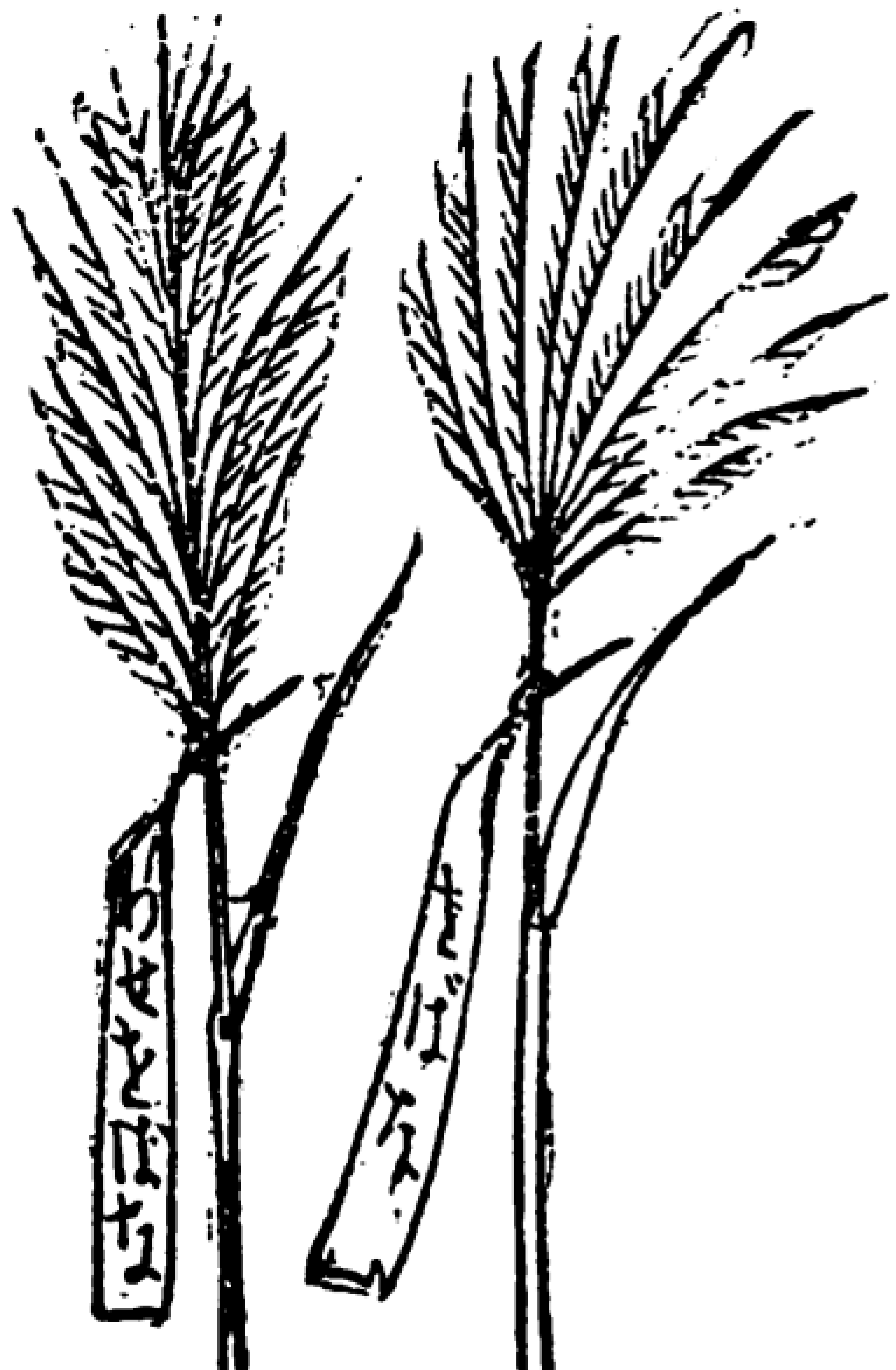
き花のないものは其代りに葉が立派で之れを代用して居る、花は誠に小くて見る價もない

芭蕉の樣で黄や赤の色の咲くのが曇華である此の曇華は冬は寒さを厭ふから根の株を室に入れて置くのである、花の雄蕋は草木種類に依りて實に幾通りもあるが曇華の花は最も少數で二分の一個である僅か一本しかない雄蕋が半分は瓣の形に變化して居る、ツマリ雄蕋は半分でも用は足りる唯其花粉が良く他の花の雌蕋に附いて呉れさへすれば効能は同じことであるから寧ろ花を飾るための瓣に變じた方が得策である

「カルカヤ」(刈萱)に二樣ある「チガルカヤ」と「メガルカヤ」とある別に雌雄といふ次第ではないが唯穗の形が異なる計である、所が穗の硬い方が「メガルカヤ」で穗の優しきのが「チガルカヤ」で餘程妙に感じられる

秋の七草の内に「ワレモカウ」(地楡)といふ草がある細き梢の先きに蝦茶色の球がある、花とは見へないが是れも茶色の細き四瓣の花が澤山集まりて如此球になりて居るのである

龍膽も亦た栽へ込んである秋草として山野に見らるゝ美しき花である根は之れを咬めば非常に苦いので胃の藥になる、龍膽の花は日のある中は開いて居て夕景になるか蔭に入れると自ら閉づる牽牛花と同じ樣である



龍膽は紋樣に用ゐるから名のみは良く知れて居る

次に芒、芒は尾花でも良しい、矢張元どは山野の產であるが山では穗が短くて形が宜しい、我邦の西南の方へ行くと「ハセヲバナ」と謂ふて七月の末頃、穗が出てる、穗には長き心があるから眞の芒とは直に區別が付

く、一寸言はゞ八月夏休のとき、歸省の途次に見らるゝのが「ワセチバナ」て郷里から再び東京へても歸り來る頃に穗の出初るのが眞の芒である、東京に栽へてあるのは皆な眞の芒である

今頃田や畠の側に鴨跖草といふ花がある俗には螢草などゝ謂ふ一寸見れば螢が靑い光を放ちて居る樣に見える、其花のことを少し詳しく申さば靑く二枚立ちて兎の耳の樣に目立ちて見ゆるが一對の瓣てあるが冝く調べて見れば下に今一つの瓣があるが淡綠色で一向に分らない其裏に三箇の萼がある、三枚の瓣の中、唯二枚が美しいといふ事は即ち必要の大小から起つたことてある、凡て花の美麗といふことは蟲を招きて花粉を賣るためであるから昆蟲が空氣中に飛て居て此の花を見る中下の一瓣は餘り目に付かぬが上の二瓣か良く目に着く、良く目に付けば付くだけ花粉を送り出すにも都合が良ければ又花粉を持込んで與れるにも昆蟲を誘ふに効能がある

其の又雄蕋が奇態てある元來六本あるが、其中四本は實に黃金の樣な色をして、しかも靑色の瓣の前に位して一層双方の色を引立たせる、確かに裝飾になる看板になる、所が其美しい雄蕋が肝心の花粉を吐かぬ、雄蕋にして花粉を吐かされは其本統の役目が濟まぬ、跡に殘れる二本の雄蕋は確かに花粉を吐き是れが眞の雄蕋の仕事をする、



そこて學者の頭に疑問が起る折角雄蕋があり乍ら、なぜ四本までが眞の役目を失つて居るか、其れは先づ分業といふことに考へれば說明が付く、雄蕋が六本共揃つて花粉を吐くよりは却て靑色の大きな瓣の前に立て

居る雄蕊が裝飾となりて昆蟲を招くことに力を用ゐた方が得策である花粉は左程澤山に吐く必要はない花粉は小數にても宜しいから百發百中の銃丸の如く甘く花の雄蕊にさへ中たれば一つにても可なり其れて實が結べば子孫を殖やせる事か出來る

こういふ風に述て來る百花園秋草の景色が一層趣味が多くなつて來る

歸り途再び石油發動機の小汽船に乘りて來たが流れ河を下る船の速さに堤に植えてある櫻の樹が反對の方向に走る樣に見ゆる數名の少女は連りに船窓から首を伸はして樹を眺めて居る、講師曰く彼の櫻の樹の速力に見られよと少女は、あら先生！櫻が走るのでありません、此の船が動くのですと、謂ふ講師は語を繼けてそれなら何か證據がありますかと、少女も是れには困りて一言も出る筈はない講師頓智顔に曰く、天の月日星は如何でしよ、あれは日々東から西へ走つて廻はるのでしよか或は吾々が住て居る世界が動くのでしようか、一寸證據は六かしいが、これも彼の日月が動かないで此の乘つて居る地球が自ら轉いて居るのですよと

素人看護法

淑徳女學校講師醫學士　佐藤恒久

看護の基礎は解剖生理學なる事

●是迄お話致した解剖生理が本になつて初めて醫學と云ふことも開らけ、又皆さんにお話致す所の看護法なども皆な此二つの學問に基いて往かなければならぬことてありますから、看護法の根本たる所のものは此二つの學問であると云ふことを御承知なすつて戴きたい樹木て申せば解剖生理と云ふことは樹の根になるものて、是からお話申す看護法は即ち幹となつて居るのであります、それから幹ばかりてはなくして枝迄も御話致しますが、茲に述るのは之は皆さんが是から御話申す所の看護法を實地に御用ひになつて、經驗を積まれ

た所の狀態其看護が宜かつたが爲に全快したと云ふやうなことになりますと、取りも直さずあなた方が花も拵へたのであらうし又實も作つたのである、から私の御話することは詰り樹の根とそれから幹、枝迄を御話致しますから、後の葉であるとか或は花であるとか云ふやうなものは皆さんが心懸けて初めて出來ることであらうと思ひますから、何卒立派な實のなるやうに是から先も御心懸を願ひたいのであります

素人看護法の範圍

是は題號にもあります通り素人看護法と云ふのでありますから、無論非常に手の掛る病人であるとか或は重病者であるとか云ふやうなものに付ては深く御話をしない積りであります、詰る所皆さんの家庭に於て一寸した病人が出來てそれを看護しなければならぬと云ふやうな場合に於て必要だけのことを御話する積りであります、澤山手の掛る病人であるとか重病者であるとか云ふやうなものをあなた方が看病なすつては或は害にならぬとも限らない、それは其道の本統の看護婦に任した方が宜いと思ひます、只だ日常必要に差迫つて一寸の間看護なさると云ふことであるなれば重病者或は手の掛る病人を御世話なすつても一向差支はありませんが、併し長い間手の掛る病人を自身で看護すると云ふことは一得一失であらうと思ひますから、さう云ふ方の側の所は御話致しませぬ、只だ輕症患者に付ての看護法を御話して置きます

看護法に一般と特別の二種あること

それで看護法には先づ一般看護法とも稱すべきものがあります、それはどう云ふ病人であつても用ひらるゝ所の規則であります、それだけのことは病症の如何に拘らず心得て置かねばならぬ即ち一般に通ずる所の看護法であります、これは樹木の幹に當る所でそれを第一に御話致しましてそれが濟むと前に御話した樹木の枝と云ふやうな所則ち特別の看護法を後に御話を致します、

一般看護法

此中で第一に御話することは患者の看侍と云ふことゝてありまず、之は看護法中で隨分重要なものでありまして決して等閑にすることの出來ぬものであります、若し此看侍を等閑にすると所謂油斷大敵と云ふことがありまして大變害になることがある、殊に熱のある患者或は怪我、手術後の患者は能く注意しなければならぬ、何故であるかと云ふに熱のある患者であると云ふと精神上に隨分狂ひを生じて來ることがある、或は又急に模樣が惡るくなると云ふやうなことがある、それ故に若し看侍を等閑にして置くと急に模樣が惡るくなつたのを知らずに過して仕舞ふと云ふことがある、手術後の患者でも同じことで、手術が濟んで寢臺の上に寢て居る、それをおとなしく寢て居るから宜いと思つて平氣で居りますと云ふと何時の間にか手術をした所から出血があつて急に貧血を起すと云ふやうなことが無いとも言へない、大きな怪我の手術をしてから一日二日と云ふものは疵所の模樣に能く注意して、或は血でも染出しはせぬかと云ふことに能く氣を着けて居りませぬと云ふと飛んだ間違が出來る、輕い病人ではさう云ふ必要はありますまいが怪我、手術後の患者とか云ふやうなものは成るべく晝夜共に患者の脇に附いて居つて始終の模樣を見て居らなければならぬ、それから醫師が診察に參りました時に色々な容躰を話さなければならない、昨晩はどう云ふ摸樣でありましたとか何とか云ふやうなことも話さなければならぬ、其話す種と云ふのは詰る所始終病人の傍に居ればこそ話す種があるのであります、それを病人は病人で別に其處に置いて自分は勝手に遊んで居ると云ふやうなことであつたならば一向病人の容躰を話す種が無い、それでは看病した甲斐がありませぬから成るべくは始終病人の傍に附いて居つて摸樣を見て居らなければならない、兎に角看侍と云ふことは等閑にしてはなりませぬから皆さんも其お心懸で願ひたいのであります、それから此看侍中に急に醫者を呼ばなければならぬことが出來ない

とも言へない、それは前にもお話申した通り出血が始つたとか云ふ場合には是非とも醫者に其摸樣を通じて來て貰はなければならない、それは誰がするかと云ふに決して看護して居る人達が自身醫者の所に使に往つてはなりませぬ、さう云ふやうな使は外の人でも出來る、看護する人は何時も病人の傍に居らなければならぬ、殊にさう云ふ急な場合には一寸でも病人の傍を離れることが出來ませぬから、從つて醫者の所に駈付けるといふことは外の人に賴んで、自身は病室に殘つて居らなければなりませぬ、之が看侍と云ふ其次は

回診時の心得

と云ふのは醫者が見舞に來た時の心得であります、第一に醫者が見舞に來たならば醫者が病室内に入る前に患者に其事を告げなければならぬ、決して患者が知らない中に醫者を呼込んでは可けませぬ、誰々先生がお出でになりましたとか言つて其事を前以て病人に話して置いて始めて醫者を病室内に案内致すのであります若し又患者が其折寢てても居りましたならばそれを起して其事を話して始めて診察をして貰ふ、醫師が病室内に這入つて參りましたなれば體溫表であるとか或は何か覺書のやうな物があればさう云ふ書き物を醫者に見せる、或は前夜の容體を話す、併し色々な事を皆な覺へて居ると云ふことは隨分むづかしいことでありますから成るべく覺書にしてそれを醫者に見せた方が宜い醫者の方でも話を聞くよりも書いた物を見た方が都合が宜いから成るべく書留めて置くやうにして戴きたいそれから次に心得べきことは醫者の問には成るべく簡單明瞭に答へることである、色々なことを交ぜて話すると話がこぐらかつて能く分らないことがありますから、醫者が昨晩は熱度はどの位ありましたかと問ふたならば何度ありましたと簡單に答へる方が宜い、決して餘計なことを間に挾まないやうに願ひたい、それから虛言を吐かないやうに願ひたい、之は虛言を吐かれると醫者が迷ふて治療に困ることがあります、例へば昨晩は病人が能く寢ましたかと言つた時に寢たか寢ないか能く知らないで寢ましたとか寢ませんとか宜い加

減なことを言はれては困る、若し知らなければ知らないて宜い、それを知らないと言つては躰裁が惡いからと云つて欺言を吐かれると醫者の方で大變に困りますからどうか欺言を吐かないやうに願ひます、それから看護する人の方から話すことも多言贅辯を用ひないやうにしなければならぬ、成るべく簡單に能く分かるやうに願ひたい、それで是丈のことが濟みますと今度は醫者が病人の身躰を診察しますから、先づ醫者の命令に從つて寢床の上に掛けてある所の物、夜具搔卷の如き物、又衣服などを除けてさうして胸なら胸、腹なら腹と云ふやうな見る所を裸躰にして能く顯はして見せなければならぬ、之が事に依ると看護する人の不注意から醫者自身がしなければならぬ場合が往々ある、之は醫者として迷惑なことでありますから無論看護する人が傍に居るなればそれ丈のことは看護する人が注意して醫者の手助けをしなければならぬことゝて、決して傍て以て手を束ねて傍觀して居ることのないやうに願ひたい、又此場合に患者の身躰を支へて居らなければならぬことがある、例へば大層疲勞した患者を起して背部の方でも見るとか云ふ場合には患者の身躰を支へてやらないと可けませぬ、さう云ふことは看護する人がするのであります、總て患者の身躰を裸躰にすると云ふ場合には其裸躰にする前に病室の戸障子を閉めて明放しにして置かないやうに注意しなければなりませぬ診察は身躰の前面に於きましては大概仰臥の儘行ふ、若し患者が衰弱して居りましてさうして半坐の位置で診察をする必要のある時には患者を支へてやらなければならない、背部の方の診察には常に半坐にして診察をする、半坐と云ふのは身躰は眞直にして居つて足丈け向ふに投出して居る位置を半坐と云ふのであります此時には背部の方を診るのでありますから背に手を當てゝ支へて居れば診察の邪魔になりますから患者の足の方に從つて患者の兩方の腕を取つて輕く引いて支へて居る、さうすれば背部の方を診察するに一向差支ないのであります、先づ是丈けが回診時の心得てありまして、尙委しいことは臨機の處置にお任せ申しますか

ら是丈けは規則として覺へて置いた方が宜からうと思ふ、それから第三には病室のお話を致しませう

病室の事

あなた方の御住居の中で病人を長く寢せて置くにどう云ふ部屋が宜いかと云ふことを最初に知つて置かなければなりませぬ、病人を寢かして置くにはどう云ふ部屋でも宜いと云ふ譯に往かない、それ相當の設備もなければならぬし又色々な必要なことがあります、病室に適當な部屋は清潔にして空氣の流通及び日當りの宜い靜かで適當の廣さを持つて居る部屋でなければ可けませぬ、最初に廣さのお話を致しますが病室の大小は空氣の性質に大變關係するものであります、人が一人一日住つて居るにはどの位の部屋が必要であるかと云ふことはお話せずとも分かる、それは何であるかと云ふに一室に閉籠つて居ると云ふと其中にある空氣を吸つて居るのでありますから、皆な其空氣を吸ひ盡して仕舞ひますと云ふと假令空氣が無くならぬにした所で穢ない空氣許りになるからして、人一人に付ては一晝夜に必要な空氣はどの位あれば宜いと云ふことは分り切つた話でありますから從つて部屋も相當の大きさでなければならない、狹い部屋に他人數住つて居ると其部屋の空氣が妙な臭ひがして來ると云ふものは空氣が惡るくなつた證據であります、勿論此病室の大小は日本造りと西洋造りとで違ひます、日本造りの家は壁が少くして內と外との界が障子であります、障子は紙で張つてあるものであり、又建付でも惡るいと隙間もありませうから外の空氣が自由に這入つて來るから日本造りの家は外の空氣と內の空氣とは餘計な差はない、之に反して西洋造りの家は壁が多くして窓が少ない、而して其窓は嚴重になつて居りまして何れもガラスで張つてありますから外から空氣が這入つて來ない、從つて內の空氣と外の空氣とは餘程違ひがあります、即ち外から好い空氣が輙く這入つて來ることが出來ませぬから西洋造りの方は大きな部屋が必要であります、日本造りの方は外から好い空氣が這入つて來るから小さな部屋でゝ濟む、それから病室の大小は今の空氣に

關係する計りでなくして中で看護する人の働き工合に關係する、狹い部屋の中に寢床を布いて病人が寢て居る、餘す所の疊の數が幾らもないと云ふことであると看護するのに不都合でありますから相當の病室が必要である、空氣の上からは成るべく大きな部屋が宜いからと云つて二十疊も三十疊も布ける馬鹿に大きな部屋に病人を寢せて置いたならばどうであるかと云ふに、空氣の上からは宜いかも知れませぬが働くのに却つて工合が惡るい、何ぜであるかと云へば壁の傍にある道具を取らうとしても足數を運ばなければならない、それでは矢張働くのに不自由でありますから通例日本の家なれば八疊か十疊の間を一人の病室として適當であります、若し必要差迫つて仕方のない時は六疊でも宜うございますが、四疊半と云ふ小さな部屋に病人を寢せて置いて其傍で看病するなど丶云ふことは出來ないことであります。西洋造りなれば少くも十疊敷以上を要しますけれども是も餘り大きくなると却て働くのに不自由でありますから馬鹿に大きくならないやうに注意しなければなりませぬ、餘り大きな部屋は不便であるのみならず夜になつて一人の病人に一人の看護する人許りでは寂しいと云ふ感が起りまして、病人に依てはそれを嫌ふ者がありますから、餘り廣い三十疊敷に一人寢かせるなど丶云ふやうな馬鹿氣たことはしない方が宜い、其外冬などは其部屋を暖めると云ふことが必要であります、餘り部屋が大きくなりすぎると暖めるのに大變不便でもあるし又從つて費用も掛る不經濟と云ふことがありますから、何處迄も大きくなく小さくなく適當なものを病室として用ひるやうに御心懸を願ひたいのであります

編者曰く佐藤先生の素人看護法は解剖生理の一般を本年にて了りたれば明年より病室の事其他有益なる事項を掲載すべし

裁縫實習

共立女子職業學校教授　金子銅子

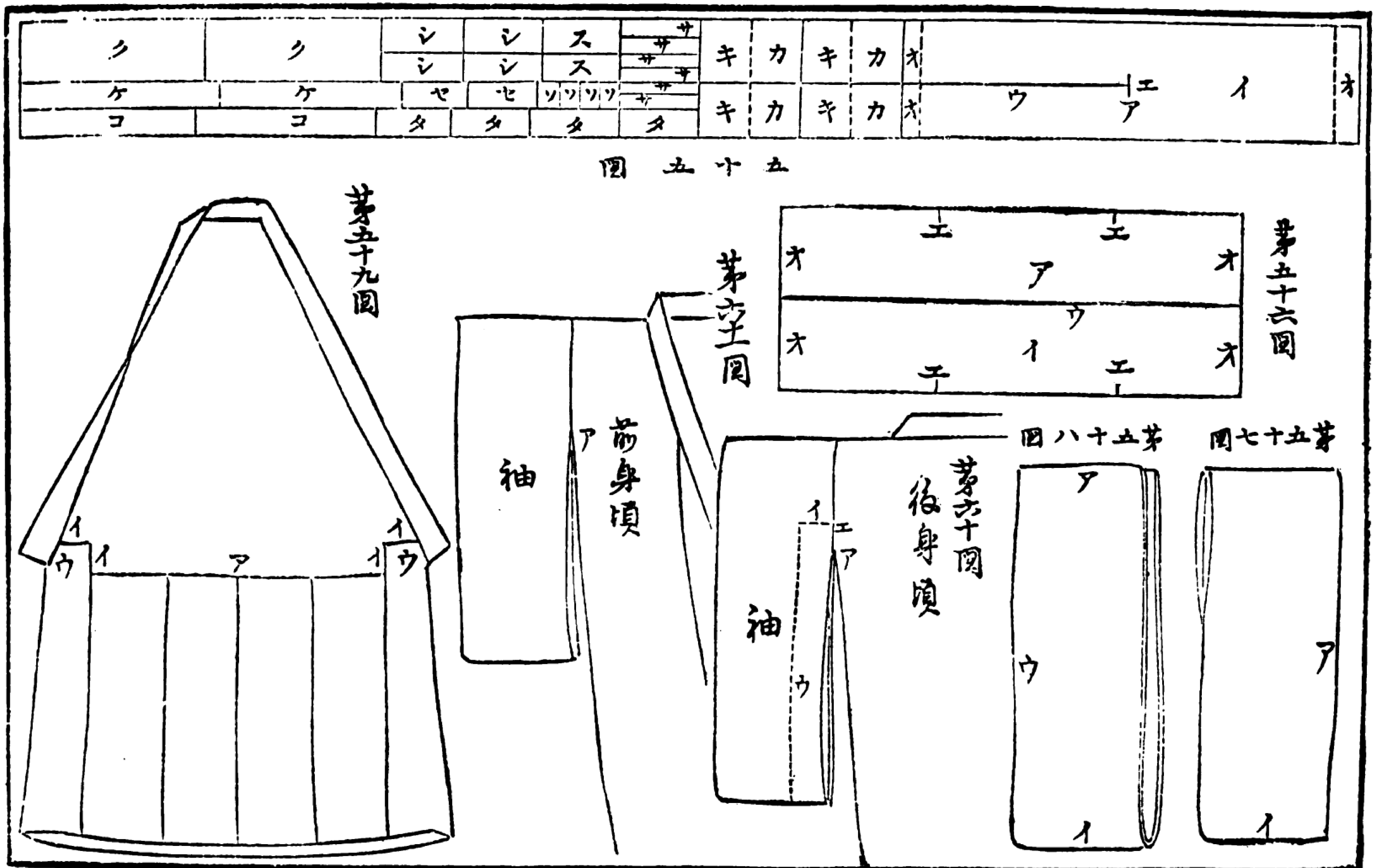
▲附比翼

これは大巾ものを用ゐまして、無垢比翼の裁ちかた縫

ひ方を御話し致さうと存します、扨其裁ちかたは第五十五圖の如くて即ち一尺七寸巾の切のつもりでございます、扨圖中の(ア)は上着の身頃て(イ)後身頃、(ウ)前身頃でございます、身の丈は四尺一寸、それゆゑ總尺が八尺二寸になります、(オ)は裾廻しの切、丈が各一尺五寸といたします、(カ)は下着表の四布て前及後になる切、(キ)は下着裾廻してござります、下着の表になる方の(カ)の丈が一尺三寸、裏の方が甜丈見つもりますから一尺五寸づゝになります、そして下着の表と裾廻しの切と、上着表とこの裾廻しの切とは皆切りはなさずにをきます、(ク)は袖でございます、この丈は一尺七寸てござりますから總尺三尺四寸つゝ二つをとります、(ケ)は衽で巾が四寸五分、丈が三尺六寸づゝ、(コ)は衿てありまして、巾が三寸五分、丈が各五尺て一枚は上着一枚は下着の分でござります、(サ)は上着の袖口切と下着の表袖猶一枚は下着袖口切とでござります、この長さが一尺五寸、巾は衿巾を總巾よりとりました餘りを六分いたしたものでござります、(シ)は上着及下着の裏竪褄て巾が各四寸五分、長さが二尺七寸つゝ、(ス)は下着の表衽て、巾は裏竪褄切と同様、丈は二尺五寸

でござります、(ソ)は上着及下着の衿先さて、巾は衽と同様で四寸五分、丈は六寸づゝとなります、(セ)は共衿て、巾は衽と同様、丈は衿先と衽とをとりました殘を之にあてます、(タ)はヤツクチ切で巾は衿と同様、長さが一尺五寸五分となります、先づこれて裁ち方は終りましたから積り方を申ませう、積り方は袖丈(ク)の四倍(一尺七寸の)、竪褄丈(シ)の二倍、(サ)袖口丈、(キ)及(キ)、(オ)及(オ)の丈は各一尺五寸づゝてありますから一尺五寸を五倍して此總丈を出し、(カ)及(カ)の丈が一尺三寸てありますからこの丈即ち一尺三寸を二倍し、身の丈四尺一寸の二倍を出します、此各々計算して出しました數を殘らず加へますと用布總尺を得られます、以上申上ました裁ち方に於て袖巾を今少しひろくする方が便利であると御考へなさる方があれば少々裁ち方にも積り方にも變更せねばなりませぬが先づ此の方が御わかりになれば自然あとの方も斟酌ができるわけてあります、次に標付けかたてでございます、上着は普通の綿入の通りて又前年の第一巻のときに申上てありますからこゝては申上ませぬ、只衽だけは一寸切の重ねかたが違ふ所もありますから申上て置きます、先づ

一番下に一着の裏衽をおき其上に下着の裏衽をのせ、其上に下着の表衽を置き又其上に上着の表衽を置き都合八枚を重ねます、この八枚を重ねるときに下着及上着の表衽は裏の衽の切よりも衹の二倍の長さだけ引ます、これも普通の綿入衽の標付方のときに申してはございますが、猶委しく申せば衽の裏は表よりも衹の二倍丈長くして重ねますので標の付けかたは前巻綿入の折に申した通りでござります、縫ひかたは上着は普通綿入の通りこれもまた前巻に申した通りでござります、扨下着は表と裏の袖口切第五十五圖の（サ）をとりまして、裏表とも巾をあたります、この裏の袖口切の巾は六分位廣くいたす方が都合がよいのでございますがさやうにならぬときは表と同様の巾に裁ちて置きまして裏の袖口切の方に巾をだします、先づ第五十六圖の如く（ア）表、（イ）裏の切との後の方即ち圖になる方で圖中の（ウ）の所を合せます、次は（エ）の袖口標の下を表は表、裏は裏を合せて縫ひ、裏の袖口に袖口綿をふくませて普道の綿入の通りにおさへ、表袖口は普通の綿入表袖口の通りに躾をかけ、表の方を裏にかぶせてこれも綿入の袖口を絎けました通りにこゝを絎けます、（オ）の所はあとより絎け置きます、即ち第五十七圖の様なものができます、次はヤツクチで即ち第五十五圖の（メ）の切をとりまして初に袖下になる所第五十八圖の（イ）を表は表、裏は裏と縫ひましてフリの所を表と裏とを合せてぬひます、こゝはなるべく裏の方をツル工合に致します、つまり出來上りをよくするためでございます、次に綿を其縫ひ目にとぢつけて表にかへしてヤツクチの表より躾をかけます、次に第五十八圖の（ツ）及（ア）の所を絎けます、か様にして兩袖とも出來上りましたらば下着の廻りをとりまして、裾廻しの方の切の長さを上着の裾廻しの長さと同様にして標を付け、表は裏裾廻しの丈より衹に二倍丈短くいたしただけの長さの標をつけます、次に衿をとりまして山標をつけ丈の標をつけます、下着衿丈は上着より二分短くいたします、衽は上着と共に標をつけましたからこゝでは申しませぬ、扨縫ひますには下着表の切をとりまして、背を合せ後巾を當ります、が、此巾は上部即ち胴につくべき方は上着と同様に致し、裾の分は上着の巾より一分をつめます、それより脇をぬひます、前巾はうへの方即ち胴の方を上着と同様にいたし裾の方で二分



五十五図
第五十六図
第五十七図
第五十八図
第五十九図
第六十図
袖
前身頃
袖
後身頃

つめて標をつけ妊をつけます、妊は前までに標が付いて居りますが其標より一分つめます、衽の上部は裾廻しの上部胴につくべき所の縫ひ込み丈つけのこして置きます、裾廻しも表と同樣に縫ひまして、裾を合せます次に此縫ひめに躾をかけ、妊だけは隱し躾をかけをきます、次に裾綿（これも普通の裾綿の通りにこしらへをきましたもの）をとりまして裾に入れて布絎を致し、横絎を致します、次に裾の上部即ち第五十九圖の（ア）の所をくけるのでございます、次には衽の縫ひのこし圖中の（イ）（イ）を絎け（ウ）の所に衿をつけます、衿は表は表、裏は裏の衿を圖中の（ウ）の所だけつけて其上は表と裏との衿丈を合せてぬひつけます、それより衿先きをぬひ（普通の衿先きの通りに）薄き金巾もしくは之と類似の布をシンに入れて衿をくけます、次には竪褄をくけます、これで下着の分はできました、次には第五十七圖の袖口をとりまして、上着の袖口の內にはめこみ、第五十七圖の（ア）及（イ）を表に針の出ぬ樣にくけます、次に第五十八圖のヤックチをとりまして、上着の袖付第六十圖及第六十一圖の（ア）の所にて下着と上着とをつけ第六十圖の（エ）（イ）（ウ）と皆表に針目の出ぬ樣にとぢつけます、次に下着第五十九圖のものをとりまして、衿山を上着の衿山に待ち針をうち四裾其他の要所に待針をうちて衿先より少しばかり上の所より（第五十九圖の黑點の所より）片々の黑點の所まてとぢつけて、又衿先き第五十九圖の（イ）（イ）及四裾の上部（ア）をとぢつけて終りと致します、

編物實習

共立女子職業學校教授　豐原繁子

▲半手袋

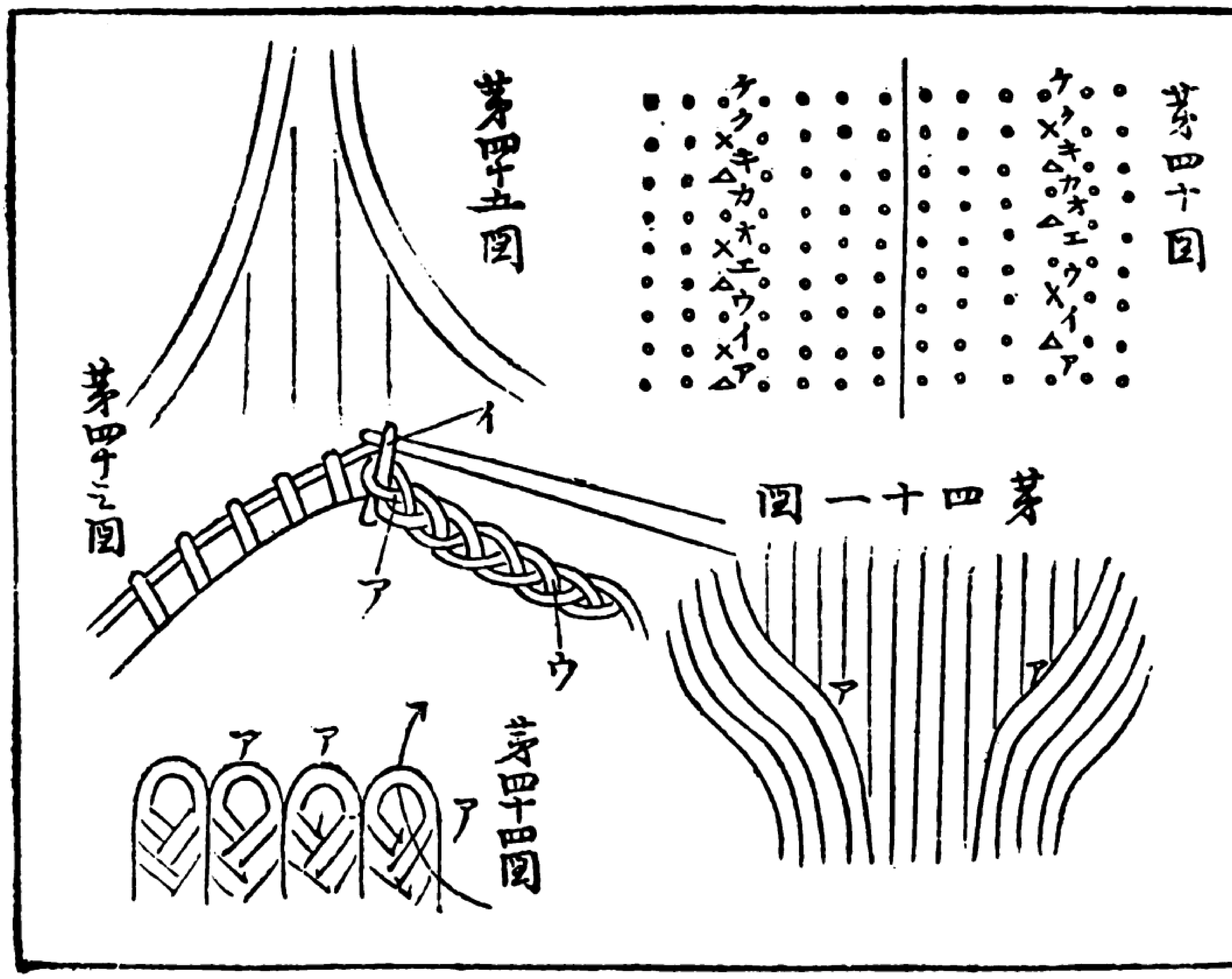
これは女子用の並の半手袋編方につきて御話しを致します、この半手袋を編みますには十六番位の太さの編み棒五本と中細毛糸凡二チンスを用ゐます、初めに二本の編み棒をとりまして、それに三十六度糸をかけます、又他の二本の棒をとりまして又これに三十六度糸をかけます、それて都合七十二の目數となりますのでございます、そこで此二本の棒の（今初めの目をかけました二本の棒）うち一本を拔きとりまして、此總目數を

四本の棒に割ります、(大概この初の糸のかけかた四本の棒に目數を分ちてかけゝするなのことは此編物の初めに靴下の御話しを致しましたときに委しく申してありますから御覧を願ひます、)それより第一圖即ちはじめの側は本目ばかりに編み、次の側よりは本目二つ、逆目二つと互ちがひに編て即ちゴム編みなるものをつくります、(本目、逆目、ゴム編み等も亦已に靴下の折に申してあります、)このゴム編みが四十回編めましたら次にうつります、が、このゴム編みは其人によりまして長くとも短くとも自由に致してよろしいのでたゞきまりを申せば、四十回といたします、次よりは本目ばかりて編むことと鯨尺の五分位、それより拇指を編みますために目をふやします、それは一本の編棒の目の終りより右に數へて二つめの所にまゐりましたらこゝて編むことをせずに只棒の手前の方より向ふに一本糸をかけあとは二つの目を本目にあみます、次は次の棒の初より二つの目をなみに本目にあみ次は又手前より向ふに只糸を一本かけます、其他はなみにいつれも本目に編てまゐります、次の側は矢張り本目にいつれも編てまゐりますが、此一本の糸をたゞかけてある所にまゐりましたら二所とも棒を並の本目の様に入れませんで右の向ふより入れて手前に出して編みますとかけました糸がねぢれまして編みますがこれて並の本目と同様になるのでございます、次の側はいつれの所も本目に編みます、次は今目をふやしました棒の終りの目より三つめの右の方に手前より向ふに只糸をかけます、(前に目をふやしたときと同様に)他は並に編みまして、次の棒も亦初め三つを本目に並に編み次は只糸を手前より向ふにかけ又次よりは本目に並にあみます、次の側はいつれも本目に並に編みますが、たゞ糸をかけました所だけは、前に申しました通りに向ふより棒を入れて糸をねぢりてあみます、次の側はいつこも皆本目ばかりに編みます、つまり一側は目をふやし、一側は只糸のかゝりて居る所だけ棒を向ふより入れて糸をねぢりて編み、一側はいつれも皆並に本目ばかりに編むといふ工合になります、この目のふやしかたは一側毎に一目つゝ左右に廣がりますので即ち第四十圖の如く圖中の三角形(ア)が初めに只糸をかけましてふやした目でございます、(イ)斜の十文字が糸をねぢれてあみました所、(ウ)の丸が並の本目で編だ所で他の部分と同様の

編みめてございます、(エ)は二度目の目のふやしめて、(オ)は糸をねぢりてあみました所、(カ)は並の本目に編みましたのでございます、次の(キ)は目をふやした所、(ク)はかけた糸をねぢりてあみたる目、(ケ)は並に他と同樣本目に編みました所でございます、其ふやし目も一段每に中央より一目づゝ遠ざかる樣に致します中央(コ)の縱線は棒と棒との間でこの(コ)より右は一本の棒にかゝりてある目の一部、(コ)より左も亦他の棒にかゝりてある目でござります、都合此ふやしかたが左右各十一づゝになりますから合せて二十二の目ができます、第四十一圖は目をふやして出來た目の向きを示したものでございます、それで此圖の(ア)が目のふやした所でござります、この二十二の拇指になるべき目數だけを編棒にのこして、其他は毛糸針に糸を通して此糸に皆うつして棒をとります、それより拇指のみを編でまゐります、拇指の股の所は五個の目を新しくつくりまして、二十二個のふやしました目と共に本目に編むこと四回致します、五回めはこの股のふやし初めの所で二つの目を一度に本目にあみまして、一つの目をへらします、それより一つ本目に編みまして、又

このふやしめの終りて(五つの終りのめ)二つ一度に本目に編みまして、目數一つを減じます、次は四回だけ並に本目むかうに編みまして、又其次の側には五つの新しき目の中央の目一つをのこして、兩はしを各二目を一度に編みます、都合こゝの五つの新しく出來た目が前回に二目へり、又此度二目へりまして丁度三つの目數になります、即ち第四十二圖の(ア)及(イ)の如く初めに目を減じ、次は(ウ)及(エ)の如く目をへらします、(オ)は中央の目でござります、次よりは目數の增減なく四廻あみます、次の側は糸を一本編棒にかけては二つの目を一度に編み又糸をかけては二つの目を一度にあみます、か樣にたがひちがひに編てこゝ一回致します、終りになりますと三つ目數が餘りますから之は一度に編てしまひます、此側はいつれも本目に編みますのでござります、次の側はいつれの所をもかまはずに皆本目に編みますと一目をきに穴があきます、この編方より飾になるのでございます、次の側も亦いつれもおしなべて本目に編で一回致します、次には穴のあきてあります所は逆目に穴のなき所は本目に互ちがひに本目と逆目と一つおきに編て一回致します、次には

逆目の所は又逆目に本目の所は又本目に編て四廻いたします、丁度ゴム編みの小さき様なものになります、其上はごくゆるくとめますこのとめかたは編棒にかゝりてあります目の右の方より初めます、第四十三圖の如く右の方の目に左の隣の目を通してまゐるので(ア)の目に(イ)の糸を通して順々に編てまゐると(ウ)の如くになります、つまり目を一つづゝとめて編棒をとるのでござります、このときはよほど糸がつれましてかたくなり易くありますからよく〳〵注意してゆるくなる様にせねばなりませぬ、編棒にかゝりてある目數を



のこらずとめ終りましたらば其糸をきらずに直にヘーケルをとり、其糸を以て今とめを致しました其目の向ふを一本すくひまして、帽子編み一つを致し又次の目にも帽子編み一つをいたし都合帽子編みが二つ出來ます、それより五つ鎖編みをいたして今編みました帽子編みの上の目二本すくひまして糸を直に引出し丸き形をつくります、次はまたとめました目の一の上に帽子編を一つ又隣の目に帽子編みを一つ都合二つを編みまして、五つの鎖をあみ帽子編みの目二本をすくひまして直に糸を引出して丸き形のものをつくります、次

は下のとめを致した目一を飛して、又帽子編みを一宛都合二つを致して五つの鎖をあみ、帽子編みの目二本をすくひまして、糸を直に引出して丸き形を造ります、次も又帽子編みを二つ編み五つの鎖編みを致し、それを帽子編みの目二本 すくひまして、直に糸を引出してまた丸き形をつくります、次は下の目を一つ飛して又帽子編みます、斯樣に編みまゐります、此側の終りは初めの帽子編みの目二本をすくひまして、直に糸を引出して糸をきり裏の方に毛糸針に通してとめます、こゝはよく間違まして下の目をとばさぬとがあります、が、その樣にとほす所ととほさぬ處と交ると見ばが惡くなるから御注意なさいまし、これで拇指丈出來上りましたから次は四本指の通る方を申しませう、これは拇指を造る時に糸を通して置いた目を殘らず編棒に移します、拇指との間の股の所は拇指を編みました時に新に目を造りました五つのかけ目の所をすくひまして、又こゝに目を造ります、その目のひろひ方は拇指を手前にして持つて、五つのかけ目が第四十四圖の(ア)の樣になつてをるから其五つの目を矢の向きの通りに手前より棒を入れて、五つの新き目を作つて右の初の目より編みはじめる、此折には五の新しき目の兩端には大なる穴があきやすくありますこの裏の方の糸を引出して、此編み初めに其引出した目を一所に編む、か樣に致すと穴があくとなく表の目がよく揃ひます、此新き目も皆本目に編みます、其より四回編んで、五段目の所を編むには拇指の股の所で五つの新しき目を作りました其初の端で二つの目を一度に編みあとは並に編て終の新しき目の所で又二つの目を一度にあむ、他の所は並に本目にあむ、次より都合四廻りは並にいづれも本目に編みます、次の側は他は並に本目であみ股の所で又新しき目の端を二つ一度に本目に編み、又其終りで二つの目を一度に本目にあみますと股の拇指の所で造つた五つの目が一つ殘る、これより鯨尺五分計の間目數を增減なく本目に編でまゐると拇指の長さと同じくなります、併し此所の長さは好によつて種々ありますが、先づ並は右申した樣にします、それより飾の編方に移りまして、拇指の如く編棒に糸を掛ては二の目を一度に編み又一本編棒に糸を掛ては二の目を一度に本目で編てゆきます次の側はとれも皆本目にあむと拇指の時に編んたと同樣に穴があきます、是よりは皆拇指の時に飾を編んだ通に編てゆきます、左右共にか樣に編んて半手袋の出來上りと致いたします。

講義

歴代和歌評釋（九）　拾遺集の部

文學士　塩井雨江

○

千年まで限れる松も今日よりは

　君にひかれて萬代やへん

○此の歌は、拾遺集一の巻にあり。作者は、大中臣能宣にて、入道式部卿の御子の、子日せられし時によめるなり。子日するとは、昔正月の子の日に野邊に出て丶小松を採りて、千代を祝ひて遊ぶなり、子の日の遊びといふ。式部卿の御子の、子の日の遊びに伴ひて、この歌をよみたるなり。

○千年まで限れる松。千年を限りとせる松もといふ意なり。○君にひかれて。君に拔き採られてといふ事と、君がめでたさにつれてといふ事とをかねたり。小松を採る事を、小松を引くといふなり。君につれてといふ事を、君にひかれてといふなり。○萬代やへん。やは疑の言葉なれど、輕く見るべし。萬代を經るであらうといふ意なり。

○一首の意は、千年までを限りとせる松も、けふ此の野邊に、君にひかれて、これよりは、千年の松も、君がめでたさに、ひかれて、萬代を經るであらうといふ事にて松のいよ〳〵長命にならんといひて、而して、御子を祝ひたる歌なり。

○意匠も穩當に、祝ひの歌としては、誠にめでたく聞えたり。能宣、此の歌をよみたるに、人々みなめでたがりて、口々にうちずしたるよし、歸へりて、父に語りたるに、父、これを聞き、不覺者の我が子よ、さやうの歌は帝王の御庭にもよむべし、もし、他日御祝ひに召さる丶事あらば、如何によむぞとて、いたく能宣をうちけるとなり。歌人の用意は、またさる事もあらんが、その父の言葉を以ても、やがて、此の歌のこよなくすぐれたる事知られてなむ。

○

ちり散らずきかまほしきを故郷の
　　花みてかへる人も逢はなん

○この歌も、同集の同巻にありて、はし書には、御屏風に、山路を行く人ある所によめるとあり。山路を人の行くさまをかきたる畫にかきつけたる歌なり。

○ちりちらず。散りたるか、散らざるかと云ふ意なり。○きかまほしきを。聞きたいものであるにと云ふ意なり。○故郷。昔、都のありしところをいふ。こゝは作者の心にては、吉野か、奈良などをさしていへるなるべし。花の名所なればなり。○花見て。故里の花を見てといふ意なり。○歸る人も。○もは感動詞なり。○逢はなむ。逢ひたいものである、或は、あへばよいと希望せる意にて、故郷の花を見て歸へる人に逢ひたいものであるハイと云ふ意なり。

○一首の意は、故郷の花は、もう散りたるかまだ散らざるか、知りたいものであるが、その故郷の花を見て歸へりくる人に逢ひたいものであるハイ、逢はゞ聞かうものをとの意にて、これは、やがて、屏風の畫の中なる山路を行く人を、故郷の花を見にゆく途の人と見たてゝ、さて、其の人になりて、かくよめるなり。

○着想よく優美に、よくおもしろく、誠によく其の畫を採り來りて、其の畫のさまも、眼前にうかぶのみならず、其の畫をして、一層活動せしめたるものあるを覺ゆ、此の卿の天稟の詩才、此の一首にて知るべし。延喜の天皇、御子の御はかまきの料に、御屏風をつくらせ玉ひ、かねて、その色紙形にかくべき歌を、すぐれたる歌よみ人して、よませおき玉ひ、さて、其の日に、小野道風をして、かゝせ玉ひけるに、春の帖に、櫻の花の咲きたるに、女車の山路行きたる畫をかきたる所にあて、色紙形のありしを、おぼしおとさせ玉ひて、にはかになりて、心づかせ玉ひ、如何はせん、今日になりて、誰れにかよますべき、さりとて、殘すも口惜しと仰せられ、しばらくおぼしめぐらし玉ひて、やがて、藤原伊衡を以て、伊勢の許に、にはかに召させ玉ひければ、よまれたる歌なり。天皇これを御らんじて、めでさせ玉ひ、御前に候ふ人々に見せさせ玉へば、人々、聲々にうちずして、めでたがりしといふ事、今昔物語に出てたり、誠に贊畫の歌として、古今の秘品とすべし。

○

つげやらんまにも散りなば櫻花

いつはり人に我れやなりなん

○此の歌も、同集の同巻にありて、題も、よみ人も知らず。

○告げやらんまにも。櫻の花が、盛りなれば、來て見よと人に告げやる、その間にもと云ふ意なり。○ちりなば。櫻の花が散つてしまつたらばと云ふ意なり。○櫻花。下によを加へて、櫻花よといふ意にして見るべし。○いつはり人に。俗に云ふ、うそつきと云ふ事なり○我れやなりなん。我れは自身なり。うそつきに我れはなつてしまうであらう、花もなきに呼びしと、人に思はるゝであらうとの意なり。

○一首の意は、櫻が咲きたれば、見にこよと、人に告げやる其のまにも、若し散つてしまつたならば、櫻花よ我しがうそつきになるてあらうとの意にて、言外に花の散りやすく、また花の散るををしみ、人の來るまで散らずにあれよといのり、且つ、人も早くとへかしと、彼方、此方に、心を用ひたる歌なり。

○さしたる歌にはあらざるやうなれど、ありのまゝを云ひて、且つ、櫻の花の散りやすしとも、また散るををしとも云はて、その意匠をもたせて、花の散りやすきを歌ひたる、中々にあはれにおもしろき歌といふべし。なまなかにうるさき細工したる歌よりは、優る事數等なり。

小夜更けてねざめざりせば時鳥　人づてにこそ聞くべかりけれ ○

○此の歌は、同集二の卷にあり。作者は、壬生忠見にて、天暦の御時の歌合によみたるなり。

○小夜更けて。さはたゞ語調のために添へる詞にて、夜といふに同じ。深夜になりてと云ふ意なり。○ねざめざりせば。眠りのさめなかつたならばの意なり。○時鳥。時鳥をばの意にて、即ち時鳥の初音をばといふ事なり。○人づて。人傳へと云ふ事にて、人よりの話にてきくをいふ。○聞くべかりけれ。聞くべくありけるよと云ふ意にて、即ち、聞くであつたらうよと云ふ意にて、けれは、感動のけりなり。

○一首の意は、今、此の深夜に、我が眼がさめなかつたならば、此の時鳥の一聲と無き初音を、人の話して値かに聞くべき事てあらうといふ事にて、よき折りに目がさめてめづらしき、此の初音を聞きけるうれしさよ

との餘情を、言外にきかせたり。人づてに聞くといふ言葉にて、初音のまれなるふしといふ趣きは、察せらるゝなり。

○時鳥の初音を聞きてうれしなど、あからさまに云はずして、「人づてにこそ聞くべかりけれ」と云ひて、初音の意をも、また、それを聞きたる限りなきよろこびを言外にひゞかしゝは、真に上手といふべし。

○

何方に鳴きて行くらん郭公
　　淀の渡りはまだ夜深きに

○これも、同集同巻にありて、作者は同じ。天暦の御時、御屛風に、淀の渡りする人かける所によめる歌なりやはり畫を題とせる歌なり。

○何方に。俗にいふどちらにに同じ。○鳴きて行くらん。鳴いて行くのであらうかといふ事なり。○郭公。郭公はといふ意なり。○淀の渡り。京都の淀川の渡船場なり。○まだ夜深きに。まだ夜の明くるには、程遠く深夜なるにといふ意なり。四、五、三、一、二句と、句をおきかへて見るべし。

○一首の意は、淀川の渡船場、折りから、まだ夜深く、曉には程遠きに、郭公は、どちらへ鳴いて行くのであらうとの意にて、この歌も、畫の中なる淀の渡りをする人になりて、折りから時鳥のなきゆくを聞きて、よめる趣向なり。

○これも、意匠はさしたる歌にはあらねど、いひまはし面白く、句調めでたく、折りからの情景、自からうかびて、風情ある歌なり。

○

かのかたにはや漕ぎよせよ時鳥
　　道になきつと人に語らん

○此の歌も、同集同巻にあり。作者は貫之にて、小野宮大臣の家の屛風に、わたりしたる所に、郭公の鳴きたるかたあるによめるなり。

○彼の方に。あちらに、自分の志す岸の方なり。○はやこぎよせよ。早く舟をこぎよせてよと促し命じたるなり。○時鳥。時鳥がと云ふ意に見るべし。○道に鳴きつと。今此方に來たる道にて時鳥が鳴いたとの意なり。○人に語らん。これから、我があひに行く人に告げ知らせやうとの意なり。

○一首の意は、彼方の岸に、はやく此の船を漕ぎよせ

てよ、時鳥が、今、途中にて鳴きたるを聞いたと、かの人に知らせようほどに、はやく漕ぎよせてよとの意なり。

○思ひがけず時鳥の初音を聞き、よろこびのあまり、聞きしと云ふ事を、はやく人に告げ知らせんと、心のせかるゝあまりに、漕ぐ船もおそく覚え、はやく〳〵と船を促したる、あまりに子供げなるやうなれど、其の子供げなるところ、なか〳〵に面白きなり。時鳥の初音をめづらしくよろこびたる風雅の詩情、さこそと見えて、いとをかし。これも渡りをする人の心になりてよめるなり。

○

秋立ちていくかもあらねどこのねぬる
　朝げの風はたもとすゞしも

○此の歌は、同集三の巻にありて、作者は安貴王、題は知らず。

○秋立ちて。秋になりての意なり。○いくかもあらねど。まだ幾日にもならねどと云ふ意なり。○このねぬる。此の寝て居るといふ事にて、此のは、さしたる詞なり。○朝げ。朝明(あさあけ)の約まれるにて、曉の意なり。○涼しも。もは感動の言葉なり。

○一首の意は、秋になりて、まだ幾日にもならないのに、寝て居る此の床に、あかつきの風は、マー、大變に涼しく覚ゆるハイと事ふ意なり。

○このねぬると云ひたる此のの言葉、面白し。此の一語のために、一首の感情を深からしめたり。意匠は、もとよりあるにあらねど、なか〳〵に、折りからの感情は深くこもり、調もまたよく、一首涼しう身にしみておぼゆるものあり。

○

あふ坂の關の清水にかげ見えて
　今やひくらん望月の駒

○此の歌も同集の同巻にありて、作者は貫之なり。延喜の御時月次の御屏風にかきつけたる歌なり。

○あふ坂の關。山城と近江との境にある關の名にて都より吾妻路へ出づる關門なり。○影見えて。駒の影が水にうつりて見ゆると云ふ事なり。○今やひくらんやは疑の詞にて、今頃は駒をひき來るであらうかとの意なり。○望月の駒。信濃の國、佐久郡望月と云ふ牧場より出づる馬の事なり。昔、毎年、四月二十八日と、八月の十六日とに、朝廷にて駒牽といふ公事あり。これに

献上するなり。其の駒を、勅使たちて、逢坂の關まで迎へにゆく事をなす。それを駒迎へといふ。こゝは八月のなり。さて、此の望月の地名にて、折りから月夜のけしきに取りなしたり。

○一首の意は、この月夜、あふ坂の關の清水に駒の影もうつりて、今頃は、望月の駒をひき來たるてあらうかと云ふ意なり。明月の夜、駒牽の公事に献上する爲めに引き來れる望月の駒、の今頃は逢坂山の月下を牽き來たるならんかと思ひやりたるなり。

○一首何んとなう氣品高く、且つ優美なる風情ありて愛すべし、すみ亘る月下、いさましげなる駒の蹄の音自から何處ともなく、聞ゆるやうなる心地す。

物語の發達

文學士　中内蝶二

七　とりかへばや物語

これも作者不詳である。其筋の大畧は、昔權大納言にて、大將を兼ねてゐた人が、男女二人の子をまうけたところが、男君の方は平生心弱く、物に恥しがる癖があつて、いつも几帳の中に潜まり勝で、たま〳〵父君の怒りに觸れて、少しても小言をきこうものなら、涙をさへ流すといふやうな、極めて柔和な性質であるのに、姫君の方は、却て心雄々しう、いつも外へはかり出て居て、男の子を相手に、弓矢などを弄ぶといふ風て、全く男子と同樣の性質であるから、父君はこれを憂き事に思ひ、何卒して、この二人の子の性質を取り替へたいものてあると、心に願うてゐたといふことを記したもので、取りかへばや物語といふ題名は、これから來たのてある。文章は、落窪物語などゝ、あまり異るところはない。次に文例を擧ぐれば、

北の方、二所ものしたまふ。一人は源宰相と聞こえしが、御女にものしたまふ。御志はいとしも優れねど、人より前に見そめ給ひてしかば、愚ならず思ひ聞こえ給ふに、いとゝ世になく、玉ひかる男君さへ生れたまひにしかは、またなく、去り離きものに思ひ聞こえ給へり。今一所は、藤中納言と聞こえしが、御女にものしたまふ。御腹にも姫君の美しげなる生れたまひしかば、さま〳〵珍しく思ふさまに、思しかしづく事限りなし、うへたちの御有樣の、いづれも、いとしも優れたまはぬを、思すさまならず

口惜しきことに思したりしかど、今は君達の、さま〴〵美しうて生ひ出て給ふに、いづれの御方をも、捨て難きものに思ひ聞こえ給ひて、今はさる方におはしつべきにたるべし。云々

八　濱松中納言物語

この書もまた、同じく作者不詳である。筋の大略は、中納言であつた人が、唐土にわたり、彼の國の后とかたらひて子をまうけ、其子と共に歸朝したる事から書きはじめ、其子が生長して後、異國に在る母を慕ひ、父と共に彼方のことを忍ぶことや、また佛門に歸依した事などを書いたもので、第一卷の中に、

日のもとのみつの濱松こよひこそ
我れを戀ふらし夢に見えつれ

とある歌から、濱松中納言物語といふ題名を置いたのであらう。文章は流麗で、辭句の修飾に苦心した痕が見える。その文例を示せば、

孝養の志深く思ひたちにし道なればにや、おそろしう遙に思ひやりし浪の上なれど、荒き浪風にも過はず、思ふかたの風なむ、殊に吹き送ることゝして、唐土のうむれいといふ所に、七月上の十日はおはしまし着きぬ。其處を立ちて、かうしうといふ所に泊りたまふ。その泊、入江の湖にて、いと面白きにも、石山のをりの近江の海思ひ出でられて、あはれに戀しきこと限りなし。

わかれにし我がふる里の鳰の海に
かげをならべし人ぞ戀しき

それよりこぼうたうに着きたまふ。いとおもしろくて、人の家ども多くて、日本の人着きたまふて、家〴〵の人出でゝ、見騷ぐさまもいと珍し。れきやうといふ所に船とめて、それより花山といふ山、峯高く、谷深く、はげしき事限りなし。哀れに心ぼそく、さうは道遠し雲千里とうち誦じ給へるを、御供に渡る博士ども、涙を流して、はくふ山深し鳥一聲とぞへたり。山越えはてぬれば、函谷の關に着き給ひて、日暮れぬれば、關のもとに泊りたまひぬ。

九　堤中納言物語

この物語は、藤原兼輔の作であるといふことが、先づ信ずべき說らしい。兼輔は、閑院大臣冬嗣の曾孫にあたり、右近衛中將利基の六男である。讃岐掾から進むで、從三位中納言に至り、右近門督を兼ね、承平三年二月十

人日、年五十九で卒した人である。和歌の名人で、住居を加茂川堤の下に搆へてゐたので、堤中納言と呼ばれたといふことだ。

この物語は、次の十帖から成つてゐる。

一　花櫻を折る少將
二　このついで
三　虫めづる姫君
四　ほど〱の懸想
五　逢坂越えぬ權中納言
六　かひあはせ
七　おもはぬ方にとまりする少將
八　はなだの女御
九　はいずみ
十　よしなしごと

以上毎帖讀み切りとなつてゐて、恰度今日の短篇小説のやうなものである。文章は古雅で、趣向も滑稽を交へて面白い。筋は一々述べる餘白がないから、たゞ文例として、第一帖、花櫻を折る少將の中の一節を擧げて置かう。

月にはかられて、夜深く起きにけるも、思ふらむ所いとほしけれど、立ちかへらむも遠きほどなれば、やう〱行くに、小家などに例音なふものも聞こえず、隈なき月に、所〱の花の木ども、偏にまがひぬべく霞みたり。今少し過ぎて見つる所よりも、おもしろく過ぎがたきこゝちして、

そなたへと行きもやられず花櫻にほふ木陰に立ちよかれつゝ

とうち誦じて、早くこゝに物言ひし人ありと、思ひ出でゝ立ち休らふに、築地の崩れより、白きものゝいたうしはぶきつゝ出づめり。哀れげにあれ、人氣なきところなれば、こゝ彼處とのぞけど、咎むる人なし。

十　物語の流行

以上に擧げた數種の物語は、平安朝時代に發達した物語の、主なるものであるが、當時は頗る流行したものと見えて、其頃の書物の中には、なほ數多の物語の名が散見してゐる。

殿うつり物語
井手の中將物語
人目物語

梅つぼの少將物語
こまのゝ物語
寢覺物語
道心すゝむる松が枝物語
月待つ女物語
埋れ木物語
交野の少將物語
唐もり物語
桂の宮物語
藐姑射の刀自物語
芹つみし物語
正三位物語
芹川の大將物語
袖濡らす物語
ふせごの少將物語
みづから悔ゆる物語
大津の皇子の物語
おほひ物語
あし火たく屋の物語
玉の緒姫物語
かくれ蓑物語
かばね尋ぬる宮物語
とほきみ物語
をり川物語
夜半の寢ざめ物語
あさうづ物語
志ゝら物語
初雪の女御の物語
朝くら物語

是等の物語は、枕草子、源氏物語、狹衣物語、更科日記、榮華物語などの中に、名高く聞こえてゐるけれども、其書物は今日に傳はつてゐない、また此外に、多武峯少將物語といふのがあるけれども、今日に傳はつてゐる本は、純然たる僞作であるから、こゝには擧げない。

當時世にあらはれた物語は、實に前述の通り盛であつたにも拘はらず、其作者は何人であるか、其時代はいつであるか、それが判然しないのは、殘念なことではあるまいか。

斯かる澤山の物語の中でも、紫式部の筆になつた源氏物語は、絶世の大作で、脚色の巧みなこと、文章の

妙なること、まことに當代文學の精華と稱すべきものてあるが、この源氏物語に就ては別に題を改めて説きませう。

十一　物語流行の餘波

當時物語の盛に行はれたことは、上に述べた通りてあるが、それ等は、主として上流社會にばかり行はれて、作者も、讀者も、皆上流の人々てあつたと見えて、物語の骨子とも云ふべきものは、大かた宮闈の狀態や、公卿の家庭に起つたことで主人公は、常に王公貴人や、やごとなき姫君である。趣向は何れも戀とか、愛とかいふ、艶話ばかりてはあるが、さすがに、下等社會の事柄とは違つて、近世の小說のやうに野鄙ではない。文章は凡て、女文字と稱せられたる假名を用ひ、殊に意を用ひて優美にかいてあるけれど、一たび源氏物語が世に出てからといふものは、他の物語は、みな是れがために壓倒せられて、次第に世に聞こえないやうになつてしまつた。

さりながら、物語流行の餘波は、他に勢力を及ぼして後に世に出た榮花物語や、續世繼物語や、なほ降りては増鏡などのやうな、小說とは違つて、事實をかき記した歴史類さへ、皆この物語の文體を用ひ、甚しきものに至りては、源氏物語などの中にある、成文熟語を、そのまゝに拔き出してある條も見えてゐるくらゐだ。

十二　物語の衰微

花に開落あり、月に盈虧あり、文學もまた隆替を免るべからざるものである。藤原氏の時代に初めて起つて次第〳〵に隆盛を極め、源氏物語に完成した物語の流行も、遂に藤原氏の權勢と運命を同じうして、藤原氏の衰ふると共に、物語もまた衰へた。源氏物語から後に出たものゝ中では、狹衣物語の外には、見るに足るべきものがない。この書は、紫式部の女、大貳三位の筆になつたので、狹衣大將といふ主人公を設けて、專ら源氏物語に倣うて書いたものらしいが、彼に比較しては、勿論非常に劣つて見える。

保元、平治の頃に至つては、世の中が騷々しくなつて矢叫の聲都大路に聞こえると共に、文學は漸く衰頽に傾き、鎌倉幕府創立せられて、全く武家の天下となつてから以來は、物語は殆ど跡を絶ちて音もなく、秋の夜長物語、鳴門中將物語など、二三種の書は出てたれど、いづれも平凡で、世に行はれたとも思はれない。この頃

より、貴人の間には、繪卷物を弄ぶことが始まつた。民間の方は如何であるかといふに、この頃まだ書物にかゝれた物語はなく、たゞ、質朴簡單な街談、巷話、いはゆる浮世話のやうなものが行はれて、彼の賴光と酒呑童子、維茂の戸隱山、渡邊綱が鬼の腕、賴政が鵺退治、さてはまた、仁田忠常の富士の穴入といふやうな、たゞ一塲の口話に過ぎない。しかも、その說く所は、いづれも勇ましき腕力沙汰ばかり多いのは、如何なる次第かといふに、これは、數年來公家政治の文弱を厭ひ、專ら武斷を尙むだ人情世態の然らしむる所であらうと思はれる彼の平家物語や、源平盛衰記などの演義史類には、當時の街談巷說を、事實に混じて記載したもので、全く正確なる歷史とは云はれない。また義經記や、判官物語も、當時に出來たものと見えるが、これは演義の史類に似て、なほ物語の躰をなしてゐるものである。

十三　結論

以上述べて來た通り、物語の發達は、之を一言に評する時は、初めは趣向も平淡で、文章も眞率であつたものが、時を經るに隨うて、趣向も愈よ巧妙になり、文章も極めて修飾をつくし、華麗婉曲にしやうとつとむるやうになたつのである。これは世運の進化に伴うて、斯くなりゆくべき自然の道理て、一條帝の御代は、正に物語隆盛の絶頂に達した時てあつた。

然るに、保元平治この方、藤原氏の權勢が漸く衰へ、源平二氏の爭亂が起るに及むで、物語の風も一變し、鎌倉時代になつては、戰亂の結果、おのづから勤儉尙武の風を生じたので、藤原時代の纎弱なる文學は、全く雄健の體に化して、延喜以後、次第に衰運に向ひたる漢文は漸々國文と調和し、物語の類は遂に廢れて、戰記文の流行を見るやうになつたのである。

詠歌の栞

文學士　武島羽衣

○

（原）年をへて朽ちにし橋の袂にも
　　ほそくかゝれる青柳のいと

（改）年をへし橋の袂のほころびを
　　つゞりてかゝる靑柳のいと

この歌橋邊柳をよめる也。第一の疵は年をへてといふ

語なり。この語時としてはこゝに用ゐたるやうに多くの年月を經過してといふ意にもなることあれど、普通には年ごとに、毎年毎年といふ意に用ゐらるゝなれば改めて年をへしとなすべし。かくすれば多くの年月を經過したりといふ心となれば也。第二に改むべきは朽ちにし橋の袂にもいふ語なり。かくいひては、たゞこれだけの意にて上句のこらずふさげられて、他の意味をこむること能はざれば、橋の袂のほころびをと打直すべし、ほころびは橋の朽ちたる形容なり。袂といふ語の縁にていへる也。

第三にはほそくかゝれるといふ語也。ほそくといふ語、何等の關係もなく、益なき語也。つゞりてと改めなば、ほころびをつゞる如くに見ゆるといふにて、柳の糸の細きこともおのづから理解せらるべし。

原歌のまゝにては一首の上に、何の巧みもなく、細工もなく、平凡の作たるを免れず、改めたる歌も、よしといふまでにはあらねど原歌に比べては、一ふしありといふを得べし。

○

(原)　あしたは花の香をうかべ
ゆふべはおぼろの月を載せ、
胸にひめたる絃もなき
あやある琴に合すべく、
春の小川のさら／＼と
やさしくかよふゆかしさよ。

(改)　あしたは花の香をうかべ
ゆふべはおぼろの月のせて、
胸にひめたる琴線の
ひくき調べに合すべく
春の小川のさら／＼と
ゆるくながるゝをかしさよ

まづ始めにいふべきは月をのせといふ語也。このところの意味は、春の小川が、ある時は花の香をうかべたりある時は月のかげをうかべたりして吾人の胸の琴にその水の音をあはする如しといふなれば香をうかぶること、月をのすることは共に胸の琴にあはすといふことゝ關係せるなり。されば香をうかべて胸の琴にあはす月をのせて胸の琴にあはすと、正しくはいふべきを略してかくいへるなれば、月をのせてのては必ず無くてはかなはぬ語なり。もしこの助辭なき時は、香をうかぶ

ることゝ、月を截することゝ、胸の琴にあはすることゝは全く相關せざる別々のことゝなるべし。なほ一例をあげていはゞ

雨ふり、風ふき、花ちる。
雨ふり、風ふきて、花ちる。

この二文に於て一にはてなく、一にはてあるため、二者の意味全く相ことなる也。始めの文にては雨がふりたり、風がふきたり、花が散りたりするといふにて三者別々の働きをあらはせり。されど次の文にては雨がふつたり、風が吹いたりするために花がちりたりといふにて、雨ふることゝ風ふくことゝは共に花ちることに關係せり。決して別々なる働きにはあらざるなり。今の歌を作るもの、かゝる理を知らず、たゞ口調のために、ある時はてをおき、ある時はてを省きなどするはいみじきひがごとならずや。

次にいふべきは絃もなきあやある琴といふ詞なり。今是句に於て、胸にひめたるといふ形容句はその下に來る絃といふ名詞にかゝらずして、その下の琴といふ名詞にかゝれるなり。また絃もなきといふ形容句もまた、その下に來る彩といふ名詞にかゝらずして。その下の琴といふ名詞にかゝれるなり。されど、文法上の普通の規則として、形容詞は、その形容すべき名詞のすぐ上に來るべきものなればこの歌を讀むもの、一見しては、胸にひめたるは絃にかゝる如く思はれ、絃もなきは彩にかゝるが如く思はれて、甚だまぎらはしきを覺えずや。これ形容句の位置、その宜しきを得ざれば也。さればこれをあらためて胸にひめたる琴線のとして、胸にひめたるを直にその下の琴線にかゝるやうなすことの明瞭なるには如かざるべし。

すべて數多の形容詞叉形容句の一の名詞にかゝる時、ことごとくそれらを名詞の上に重ぬるは惡しきこと也あまた重ぬる時は俗にいはゆる頭でつかちになり、上重く下輕くなりて、聲調わるくなるものなり。またあまた重ぬる時は最も上に來る形容詞また形容句は勢い數語をへだてゝ下に名詞にかゝるやうなるを以て意味の混亂を來さゞることまれ也。則ちこの歌を以ても知らるゝならずや。されば、さる場合には何とか工夫して、形容詞の數を削るとか、もしくはあるものを名詞の下に付るとかせさるべからず。またこの歌の彩あるといふは相應せず、上に絃なきといつて謙遜の語を用ゐたる

なれば、こゝもまた彩あるなどはいはで、他の卑下の語あるべきはづならずや。

第三に改むべきはかよふといふ語なり。元來かよふといふ語に二義あり。一はまぎるゝといふ義にして、二は往來するといふ義也。琴の音松風にかよふといはゞ、琴の音と松風と音の相まぎるゝことにて則ち第一の義に用ゐたる也。學校にかよふといはゞ、學校より家に來り家より學校に行くことにて、則ち第二の義に用ゐたる也。しかるにこのところのかよふはまぎるゝといふ意にもあらず、往來するといふ意にもあらで、たゞながるゝといふばかりの意に用ゐたるが如し。これ非也。故に改めざるべからず。よしや流るゝにしても上より下にながれ、また下より上にながるゝ意ならば往來すといふ義にてかよふともいはるべけれど、水のながれは一度ゆきてまたかへらず、小川の往來するといふ理なければ、こゝはいかにしてもかよふとはいふべからず。ながるゝと改むべし。

第四に改むべきはゆかしといふ語也。ゆかしといふ語は今の世のうひまなびの輩の最もあやまりやすき語なれば、こゝに少しくその意を說明すべし。そも、ゆかしとは、見ざるもの聞かざるものを見たく聞きたく思ふこと也。物を眼前に見ながら、それに對していふべき語にあらず。手跡を見て、その人をゆかしく思ふといふはよし。これ未だその人を見ざれば也。かをれる小簾のうちぞゆかしきなどいふもよし。これ未だ小簾の中を見ざれば也。さるを梅にむかひて梅ぞゆかしきといひ月にむかひて月ぞゆかしきといひ、もしくは是歌の如く、川にむかひて、川のゆかしといふ如きは用法をあやまれるもの也。かゝるところは、なつかしとか、らうたしとか可愛らしとか、をかしとかいふべきならずや。よく〲考ふべし。

ながれ淸けき春の江を
　ながめて立てるうるはしの
乙女のそばにながれよる
　香りゆかしきさくらばな

あるは

ゆかしの君をたとふれば
　ゆるくながるゝ谷川の
茂る岸べの草かげに
　かくれて匂ふ白百合か

もしくは
　草葉にねむる蝶々を
　　そゞろゆかしみ歌びとは
　歌はむものと筆とれど
　　　想のうかばぬあはれさよ。

とある歌のうちのゆかしきといふ語はこと〳〵く用法をあやまれるもの也。これらは皆その物を見てそれに對ひていへるなれば也。序でにいふべきは始めの例のうるはしの、次の例のゆかしのといふ語ののなり。これはうるはしき、ゆかしきといふべきを語尾のきをのにかへたるにて、意は異ることなけれど、さりとて、ゆかしきとゆかしの、もしくはうるはしきとうるはしのとを全く混同して用ゐるは非なる也。その區別はいかにといふに、ゆかしき、うるはしきなどいふことを感ふかく、力をこめていふ時に、語尾をかへて、ゆかしの、うるはしのといふが常なり。されば、ゆかしの、うるはしのなどいふ下には、必ず、かなとか、やとかいふ感歎辭あるに注意すべし。古への歌に

　おもしろの春雨や花のちらぬほどふれ

とあるも、その證なり。たゞ調子のために、うるはしきをうるはしのと變ふると思ふはいみじきひがごとと知るべし。このうるはしの乙女、ゆかしの君などは別に感をこめていへるにもあらねば、いづれも、うるはしき、ゆかしきといふべき也。

なほ序でに一ついふべきことはをとめを乙女とかくこと也。乙は音を借りて用ゐたる字なれど、これはおつといふ音にてをつといふ音ならねばをとめの借音には用ゐがたし。をとめといふ時は、必ず乙女とはかゝれぬものと記臆すべし。

○

（原）青葉しげれる櫻井の
　里のわたりの夕まぐれ
木の下かげにこまとめて
　世のゆく末をつく〴〵と
しのぶ鎧の袖の上に
　ちるは涙かはた露か

（改）青葉しげれる櫻井の
　里もさびしき夕まぐれ
木の下かげに駒とめて
　世の行末をつく〴〵と

思ふ鐙の袖の上に
ちるは涙かまた露か

こはこの頃市井の兒童が口すさぶ楠公唱歌の冒頭にして、作者は落合直文氏なりといふ。この歌の缺點はまづ一つには里のわたりといふ語也。里のわたりとは里の近邊なり。さればかくいひてはわたりが主となりて、櫻井の里は客となる也。楠公は櫻井の里にて訣別せられしなれば、わたりといふはいかゞならずや。されど、これを除くときは語數不足すれば、里もさびしきなどと改めなばよかるべし。二にいふべきはしのぶといふ語なり。元來このしのぶといふ語に三意あり。本居宣長の古事記傳十四卷に

しのぶといふ言に戀ひしのぶと堪へしのぶと隱れしのぶとの三意あり。

とあるは則ちこれなり。この以外の意あることなし。賊しのびて人の家に入るといふ時のしのぶは隱れしのぶ意なり。貧苦をしのびて勉强すといふ時のしのぶは堪へしのぶ意なり。而して、ふる里をしのぶ、友をしのぶなどいふ時のしのぶは即ち戀ひしのぶ意なり。しかるに是歌、行末をしのぶといひては、堪へしのぶ意にもあらず、かくれしのぶ意にもあらず、さりとて戀ひのぶ意にもあらで、何の意とも聞きとりがたし。おもふに作者は行末を考へる、おもふといふ意にしのぶを用ゐたる也。しのぶと思ふとを混同したる也。これ粗漏なりといはざるべからず。されば、こゝは思ふと改むべきにこそ。

最後にいふべきははたといふ語なり。おもふに作者はまたといふ語と全く同一のものとして用ゐられたるなるべけれど、そはあやまりなり。はたはもまた、もしくははまたといふ意ある語なり。たゞまたといふ意ならず。されば、

花さき、月はた出づ。

といはば、花さき月も亦出づといふ意になりてさしつかへなきも、花はた月。　山はた山

などいふはあやまり也。これ、このはたのかはりに、もまた、はまたの語を置き換ふれば何の意とも聞えざれば也。これにてまたとはたとの區別をしるべし。こゝも袖にちるは涙か、あるはまた露かといふなれば、はたといふべくもあらず。必ずまたといふべき所也。よく〳〵注意して此二者をあやまらざるやうにすべし。

小説

開運

三宅青軒

（一）

所詮名人は貧乏なもの、貧乏を苦にするやうでは美術家の妻になれぬ、そなたも縁有てその葉山松雲へ嫁する上は此心得が第一と、自分も生涯の貧乏書師我田へ水を引ての父の教訓に、覺悟の胸は三々九度の當夜から定めて居れど、扨て妻となり間もなく母となつて、今年でもう二十何年の貧乏生活、一姫二太郎の其一姫のお初の心賴母しく、されば世間普通の娘ならば、只うわ〳〵と髮飾にのみ苦勞する年頃の十八を、あはれや自分から請ふての屋敷奉公竹園伯の小間使に上つて吳れて、二太郎の正造が學資の足しにと、給金の中から一圓二圓と折々に送つて吳れる心根のしをらしさ、姉が斯うした心とて弟の正造も十一といふ腕白盛りにも似ず大人しく、双子縞の筒袖身すぼらしい服裝をかこち顏もせず學校服のお友達に誘はれて出る後姿見れば、さすがに貧乏世帶の今が怨めしく、確かに名人と見る人は見る夫松雲の伎倆の　今年四十五になるも尙世に知られぬ氣の毒を、とほろりとしてオヽ夫れよ、斯んな愚痴なこと考へて居る隙は無い、夫に晝御膳を喰さゝねばならぬ、今日は午後骨董屋の鶴仙堂へ行くとのことなりし、それ、それ、あの誂の彫物持て、ウム、歸途にお米をいふて貰はねば、と妻のお靜は俄かに内職の針仕事止めて世馴れた四十女の何事にも手ばしこく、鹽鮭燒て菜漬刻むで膳ごしらへして。あの、あなた、御膳を上りませ、今日は鶴仙堂へお越しになるのでせうと奥へ向ふて言へば、奥とは言へどたつた二室の障子の彼方。エヽもう正午か、夫れでは御膳を喰て鶴仙堂へ行く

としよう、これ、見て呉れ、よく出來た積りだがと、書棚の飾り戸牡丹を浮彫にした紫檀の板を持出て自慢顔なる男、鬚に霜置き色蒼白く、涼しき眼に天才の光は包めど、辛い浮世の浪の小皺に年より老けて見ゆるも便なし。

ほんによく出來ましたねえと、お靜はつく〴〵彫物を眺めて。これでたつた五圓と、さすが女の、迂ッかり貨幣のことを言ひ出しかけ、急に默つて松雲の顏を見れば。ナニ、美術に價は無い、米のやうに相場のきまつたものでは無いさ、ハヽハヽハヽと寂しく笑ひながら、やがて膳の前へ座りぬ。

時は三月、風柔らかに春を送りて、冬越しの布子汚れ目の目立つ晝中を、松雲彫物を抱へてとぼ〴〵と立出れば。夫れてはお忘れなく、あの米のことを、もう明日のが無いのですからと、お靜は送りて出て小聲で言ふ。好し、好し、いつもの丸屋ちやな、ウム一斗だけか、五圓の中て拂つて、好し、好しと、松雲の聲は寛かなり。

（二）

赤阪の溜池前から出て、京橋の東中通鶴仙堂へと志す松雲、只てく〴〵と日和下駄の足を運むで、芝の櫻田本鄕町へさしかゝれば。やア、松雲さん、お久しぶりですねえ、今日は何處へお越し、エ、鶴仙堂へ、ちやア儲け口ですな、どうもお前さんは豪いや、大した腕を持て居なさるからと、道具屋の主人源助店口より聲かけて。ねえ、斯ういふものが有るんだ、わたしにはよく分らないが、馬鹿に巧く彫たアるぢやアせんかと、木彫の摩利支天、猪に乘た像の眞黑になつたのを出して見せる。

風雅もなければ趣味もなく、只貨幣のことばかり言ふて居るがらくた屋道具屋、松雲言葉交すも嫌ながら、偖て斯う呼止められて見ると、さすがに默つては通られず、特に木彫の摩利支天、どうやら名作らしく眺めらるゝに先づ胸の躍つて。何ですか、面白さうなものですな、拜見しませうと店口へ腰かけぬ。

これだ、よく見てお呉んなさい、エ、丸て活てるやうですぜ、ねえ、今に五月場所が初まりませう、夫れまで待

て、斯奴を巧く角髪士の家へはめ込むのさ、ヘエ、さう言ッた當があるから、わたしは高えのを承知で買てきました、どうです、随分唸める品でせうと、源助は得意顔。

何人の彫刻か、卒かに誰と指すことは出來されど、時代は確かに二百年以前、一刀三禮の信を籠めて、何様名工の心血を濺ぎしものと見らるゝに、松雲眺め入て餘念なく、面貌に威靈の含まるゝ、四肢に神力の藏さるゝ、技巧神に入て生氣筋肉に充ち、彼の一世の名工と仰がらるゝ運慶の技も之れには過ぎじと思はるゝ尊さ怖ろしさ、松雲魂を奪はれて、源助が商人根性卑しい言葉も耳には入らず。

有難い、實に結構な物だ、これは一躰幾等にお賣なさる品ですと、松雲が眞面目に問ふに。エ、お前さんがと、源助はけげんな顔つき。さうさねえ、お前さんにはどうも賣惜いが、ナニ、どうせ賣物だ、早く金にすりやア又其金が働くといふもんさ、負けときませう六圓に、思し召しがあるなら買てお呉んなさいと言ふ。六圓では困るが、五圓なら買ませう。夫れも今は持て居ない、此品を鶴仙堂へ持て往ッて金を取て來るのです、ねえ、源助さん、後生だからわたしに賣て下さい、六圓が七圓でも金さへ有りやア直切も何も爲ないのだけれど、實際五圓しか取る金が無いのだ、夫れにわたしは此品を賣物にするのでも何でも無い、彫物の手本にして祭つて置くのだから、ねえ、どうかさうして賣て下さいと、摩利支天の像を手に持たまゝ松雲が熱心の頼みに、素よりがらくた道具屋の安く仕入れた品物利益は十分にあることゝて、額に手を當て口には困ると言ひながらも、宜しい、負けませうと、話しは終に纏まりぬ。

(三)

夫れては奥へ收藏て置て下さい、歸りに屹度買ひますと、松雲の心は其時摩利支天ばかりに注ぎて天地人間又何者の有ることとなく、希望に動く足の歩みも速かに鶴仙堂へ往き、侑て飾り戸の彫刻料五圓を受取るや否な、いつもはゆる〳〵と長尻の此尻落つかず、今日は少し急ぎますからと、次の注文も碌々聞て挨拶もそこ

ぐ〳〵と源助の店へ歸り、五圓紙幣一枚勢ひよく投げ出し、代りに摩利支天を受取て。有難い、有難いと、歡喜に輝く顏色美くしく、心は春の海の洋々として、歸る足元も長閑なり。

お父さん、お父さん、と何やら馴染の聲が耳に響くに、松雲其處ら見廻せば、我子正造が今しも學校より歸るところ、仲の友達は學校服に首からかけた鞄子細らしく、氣の故か顏つきさへも活々として見ゆるに、猶もあはれや正造の服裝の身すぼらしさ、汚れた筒袖に穢ない風呂敷包抱へて、眼ばかりきよろきよろと痩こけた頰のいぢらしく、狐貉の中へ破縕袍、子路なら知らず今年十一の頑是無い小兒が、よくまア辛抱して呉れる、エゝ、これもわれの不運故と、松雲思はずほろりとして其處に立止れば。お父さん、又何か買て來ましたね、僕の鞄も買て來て呉れましたかと、父が手に持つ摩利支天を眺めるから正造は走り寄る。

さうだ、鞄を買て遣る筈だッた、僅か二十錢足らずの鞄さへも買て遣れぬ貧乏のわれか、大枚五圓の紙幣投げ出して此摩利支天を買つたとは、イヤ、鞄どころで無い、それ、それ、丸屋で米を買ふのであつた、明日のは無いから一斗だけ五圓の中でと確かにお靜に賴まれたさうだ、さうだとはつとして、松雲の胸は遽かに浪の暴れ狂う。

獨身の男ならいざ知らず假りにも妻あり子ある一家の主人として、技術の爲めを言はゞ言へ明日喰ふ米を買ふこと忘れ此摩利支天を買ふとは何事、焼眉の急の入用があればこそ米も一斗と刻むで買ふのだ、一斗の米はたしか一圓四五十錢、殘りの金の三圓幾等は何になる、鹽にもならう味噌にもならう薪にもならう炭にもならう。われに氣苦勞をせまいと、足らぬ世帶の繰廻し苦勞を一人でするお靜の、其貞節を知らぬで無いが、エゝ、何として斯んな物買た、われは白痴か狂人か、確かに白痴だ狂人だ。

地蹈鞴むで齒軋りして、手に持つ像を屹と見れば、さながら我愚を叱るが如く摩利支天の眼光恐ろしく、松雲悄然として立縮みぬ。

（四）

學校より歸り來し正造がお父さんと呼ぶ聲に、お靜は夫の歸れるを知て門邊へ出れば、手に木像を持た松雲の顏色尋常ならず、又例の病が起つて詰らぬ買物をして來たのか、困つた人とは思へども、異逆に米買ふ金まて無くしたとは考へず。お歸りなされ、又何か面白い彫出しが御座んしたかとやさしく言ふ。やさしく言はれて松雲愈々胸苦しい。お、お靜か、わしは白痴だ、わ、わしは狂人だ、こ、これからこれを返して來る、堪忍して呉れと涙聲になつて、木像抱つて駈け出さうとする樣子のいかにも物狂はしき體なるに。どうなされたので御座んす、外聞の惡い、靜かに爲さいと袖引止め兎も角家へと伴ひ入れ、偖て仔細はと聞て吃驚、さすがのお靜も言葉なく只松雲の顏を見守るのみ。これから返しに往つて來る、幾等因業な源助ても、これ〳〵とわしの白痴を打明けて五十錢も損する氣なら此品を引取て呉れぬこともあるまい、そ、それて堪忍して呉れ、わゝわしは何たる白痴だらう狂人だから、正や、お前に買て遣る靴も忘れてお父さんは斯んな物を買て來た、許して呉れと涙を浮め立上らうとする松雲を。まアお待なされと止めるお靜、つく〳〵夫の振舞を考へ廻せば、これが所謂名人の所行、何か一つに凝り固まれは百事を忘るゝ熱心からなるに、さア其熱心の氣先を折て、米買ふこと迄て忘れる程欲しい品を返させて、夫れてわたしの心がすむか、つれ添ふ妻の情が立つか。貧乏からと言はゞ言へ、お酒を呑むてなくお茶好みをするてなく、惡所遊びは言ふまでもよく寄席へも行かず演劇へも行かず、年中木屑に埋まつて花も紅葉も知らぬ顏、只一つの道樂は古物を好むて折々無理な買物するばかりの人を見て、何として責められよう。五圓のお金も大切ながら、明日の生活も氣遣ひながら、此木像を返させて夫の樂しみを奪ふては、妻のわたしの貞が立たぬ、何とでもない、何とでもしよう、一時の凌ぎを何ともしてと、お靜は卒かに身づくろひ萎れ返つて茫然たる松雲の顏打眺め。御心配なされますな、五圓位のお金は何とか工夫がつきませう、些とお道樂が餘計過ぎて

困りましたけれど、まア仕方が御座んせぬ、返しに往くなどゝそんな男らしく無いことを止して、買たものならそれ楽しみに十分稼いで下されませ、わたしは一寸出て參ります、遲くなつたらあなたと御一緒に正坊にも御膳を喰させて遣て下され、お菜は此處に午餐の殘物が御座りまする、お茶も煮立て居りますほどに、よろしくお頼み申しますと、外へ出るにも不斷衣の双子木綿の綿入のまゝ、さすが女の毀れかゝつた丸髷一寸掻上げて、忙がしさうに外面へ出ぬ。

（五）

どうかなろう、又厄介をかけてすまないな、何分頼むと言いながら、さも嬉し氣にお靜と摩利支天とを七分三分に眺める松雲の顏の罪の無さ。宜しう御座んす、どうにか致して參りますと、お靜は輕く受合ふては出たものゝ、偖てどうかなる見込の有て出た譯ならず、夫の樂しみを奪ふまい夫の氣先を挫くまいと、只夫れのみの女の情から、つい口輕くどうにかすると言ひしなれば、家を離れて半町ばかり何處と當途も無き道を、ぶらりぶらりと足元重く頭は思案にうなだれぬ。賣るべき品はなく質に入れる物はなく素より金貸して呉れるやうな知人はなし、今日の五圓を當にして無理の上にも無理して生活の行詰り、餘れるものは財布の底にたつた三錢、さア何とせば好らうやら。米が一斗で凡そ一圓五十錢、これだけあれば十日餘りは暮される、殘りの三圓五十錢を、斯うして彼して何してと、此二三日の胸算用、一錢たりとも餘裕の無い程切り詰めた金なるに、夫れをころりとあの木像にかへられては何と融通も繰廻しも付かふやうなく、エゝどうしたらとお靜の胸は四苦八苦。此處らに紙入でも落ちて居たらと淺猿しい心さへ起りて、歩行でもなく歩行ぬでもなくまた足元を、ちろりと眺め行く巡査の眼の色怖ろしく、はつと思ふて夢中に歩行て丸の内へ這入れば、いつか霞が關なる竹園伯の庭前へ來りぬ。はて、斯んなところへ來る積りでは無つたに、さうだ、さうだ、斯んな汚ない服裝をして、どうして屋敷へ這入られよう。孝行な娘のお初、家の困るを察して呉れて、

自分の小遣、自分の衣類、三圓五十錢の給金ではなか〱苦しい身の上なるを、外の娘とは違ひ親に半衿一かけの心配させるでは無く反つて一圓二圓と折節に助けて呉れる心根思へば、親のわたしがどの面提げて無心に往かれよう、お父樣がこれ〱でと、エ、何としてそんな事が言はれよう。何故此足が此處へ向た何故此身體が此處へ來た。幾等無慈悲な親ぢやとて、お初エ、そなたの肉を殺でまで喰ようとは思はぬものを。歸りませう、歸りませう、まご〱して居て若しもお初に見咎められてはと、お靜は其場を走らんとせしが、さるにても明日のお米を何としよう、五圓と纏まつて一時に無くとも、縱し一圓でも二圓でも、差詰め無ければ親子三人乾物になると、さア其金をどうしたもの、長くとは言はぬ、たつた四五日、どうにか繰廻しのつくまでのところを、さうだ、お初に賴むで貸して貰ふて、イヤ〱そんな無慈悲な事が何として言はれよう、親一通りの躾もして遣らず親一通りの世話もして遣らぬ親甲斐の無い親が、どうしてそんな親らしいことが賴めようぞ、歸りませう、歸りませう。何と考へたとて、所詮工夫のつかぬお金なるに、氣の毒ながら夫にあの木像を諦らめさせて、夫の代りにわたしが持て往つて金を返して貰ふとしよう 夫れより外に道が無い、夫れより外に仕樣が無い。とは思ふもの丶白痴でも無ければ、狂人でも無い夫松雲が、明日の米さへ忘れる程に欲しがる品を、理屈を言へば兎も角も、妻のわたしの情として、それ返させて夜が寢られようか、夫れで御膳が喰べられようか。御心配なさるな、どうでもしますと受合ふて出た其時の、さア其時の嬉しさうな夫の顏が眼に見える。、、えもうどうしたらと、お靜は覺えず啜り泣き。

(六)

お、おッ母樣、どう遊ばした、エ、そんな所で泣て居らしては外聞が惡う御座んす、一體どう遊ばしたので、お父樣がどうか遊ばしてと、いつの間にやらお初が出て來て、自分も淚のおろ〱聲。お靜は氣がつきハつとして。オヤまアお初か、面目無いと淚を拂ひて。ナニ、どうもしませぬ、一寸其邊まで來たものだから寄らうと思

つたけれど、斯んな汚ない服裝ではと、何を言ふやら曖昧な言葉に、お初は愈々不審な顔つき。まアお這入遊ばせ、門の外ではお話しも出來ませぬ、幸に今は手隙で御座んす、お急ぎなれば立話しても、ハイ、丁度わたしが御門の邊まで運動に出ると、あなたが此處で泣て居らッしやるので、わたしはどんなに驚きましたか、おッ母樣、どうぞお秘しなく其譯を仰しやッて下されませと、結立の高島田眞黑の髪に色の白い丸額の愛らしく、お初は心配さうに母の顔を眺めぬ。

問ひ詰められて秘すに秘せぬ場合となり、其處は親子の隔てなく、夫松雲の失錯話し夫れに就ての家の難儀はこれ〱と打明けて物語れば。又ですか、お父樣にも困りましたねえ、どうしたら好いでせうと、さすが女の、お初は涙に咽びしが、これも涙に掻曇る母の顔をば、ぢつと眺めて。好う御座んす、奧樣へお給金の前借を願ふことに致しませう、イヽエ、申し惜いことは山々ですが、外のお道樂とは違ふてお父樣のは面白う御座んすゆゑ、打明けて申し上げたらお聞ずみ下さるでせう、まア此方らへお這入り遊ばして、お供待にても待て居て下されませ、わたくしは其事を願ふて參りますからと、先刻こぼした涙の痕の今は無く、氣轉に受合ひ元氣よく行く我子の後姿を、お靜は心に拜みつゝ、物は言はれず涙に暮れぬ。

（七）

暫く經ちて、お初はいそ〱出來り、さも嬉しさうなる聲音凉しく。おッ母樣、お待せ申しましたねえ、併し嬉しいことが出來て來ましたよと小聲になり。奧樣へこれ〱と何もかも打明けてお給金の拜借を願ふと、學者で道理に明るいお方なものですから、誠にお快くお聞屆け下され、そなたの父の松雲さんとやらがそんな面白い氣分の美術家なら、御前え申し上げて此後のお引立を願ふが好い、よろしい、わたしからお話し申し上げようと、早速殿樣へお話し遊ばして下されたところ、御氣象の勝れた大學者の殿樣、つく〱お聞遊ばして御感心の御容子、今時の美術家には似合ぬ面白い氣分の男、其技の妙も想ひやらるゝ、兎も角其家内とやらに

會ふて見よう、此處へ呼で見よとの仰せ。餘り見苦しい服裝をして居ます からと、わたくしは御辭退申し上げましたけれど、僅か五圓の金にさへ詰る身の上、服裝の綺麗な筈は無い、構はぬ、呼べとのお言葉、おッ母樣、御迷惑でも一寸お目通りをと、偖も意外な上首尾に、過ちの功名とは斯んな事を言ふのかと、お靜も嬉しく立上つて。ほんに明日のお米にもつかへる身の上、服裝の汚ない美くしいなど言ふて居られる境界では無い、失禮ながらこれでお許しを願はうと、帶しめ直し鬢搔上げ、其まゝお初に伴はれ行けは、早や臺洋燈の輝き初めし十疊の座敷に、竹園伯と其夫人とア並び座して、次の室に畏るお靜とお初を打眺め。お前さんがお初のおッ母さんかねえ、今聽けば御主人の松雲さんとやらはなか〱面白い人ぢや、世の中が段々物質にはかり進むで精神を忘れる、早く言へば金ばかりの世の中となり行くに、其金を忘れて摩利支天の木像を買ふなどゝは、イヤ、實に面白い、其氣分で無くちや名作は出來ない、さア、其夫其父を保護して、つらい貧乏を忍んで居るお前さん達は、誠に貞女ぢや、孝女ぢや、わたしは大いに感心した。夫れてと、伯は傍の手箪笥から紙入取出し、十圓紙幣五枚を紙に包むで。これはお前さん達への當座の褒美、そして松雲さんに其摩利支天を寫して貰ふ間の手當ぢや、いづれ出來上つたら更にお禮をするとしよう、十分骨を折て彫て貰ふて下さい、愈々名作が出來たら、わたしが保護者になつて、世の中へ其妙技を紹介して上げようと、何から何まで行屆いた深切に、お靜お初は有難う存じまするも口の中、夢かとばかり嬉し涙に伏し沈みぬ。

* * * * * * * * *

此後二ヶ月ばかりの經營苦心の中に、松雲は天晴絶代の摩利支天を彫り上げぬ。竹園伯は更に百圓を與へて其勞に報いそして、之れを美術展覽會へ出せしが、嘖々の好評こゝに神品の名譽を戴きて、葉山松雲なる稀世の美術家新たに此世へ降生せり。

（完）

婚前の一夜

左川子

阿仙は今將に從兄の達雄と結婚しやうとして居るのである。兩個は幼少の時分から互ひに知りあつて極めて親しい中であつたことゝて、其交情も彼の風流社會で成り立つ戀のやうに際だつたところは無く、互ひに思ひあつて居ると云ふことは自分等にも氣が付かないで育つたのである。

阿仙はちよと嬌媚を交じへて、無邪氣に達雄をからかつて見る位のことは從來とても時々のことで、それに又從兄は容姿も優しく心ばへも素直な人と思ひ、逢ふ度懐かしんでは居たれど、唯從兄妹仝士の親昵であつて、流石にまだ戀の情とては更になかつた。達雄の方に於ては唯全たく可憐な從妹と思つて居たばかりで、素より優しくはしたれど、別に何も理由はなく、唯壯佼の身として愛らし娘には誰れでも示すだけの親切が見えるのみで、それ以上に何の心もなかつたので。

ところで或日阿仙は、母が伯母（これは阿光と云つて達雄の母だが此外にまだ阿佐久といふ伯母が一人ある、これは緣遠くて此老年まで嫁入りせずに過した身て）に話して居るところをふと偸聽した。

「……えゝ兩個はきつと直ぐに好きあふやうになるんですよ、まア御覽なさい。私の方では達雄さんはもう丁度望み通りの婿です。」

此話を聞いてからは、阿仙は直ぐに從兄の達雄を戀ひ慕ふやうになり、それからは逢ふ度に顏が赧らみ、手を把られゝば顫ひを覺え、羞かしげにさし俯伏くやうになつて來たので、達雄も其の素振りに始めて從妹の心を悟り、我も憎からず思つて、それとなく心をほのめかすことになつた。

それ迄見ず知らざりし中をすら、直ぐに親しますが愛、まして兩個は幼少から隔てなき友達とて、何躊躇ふこともなく、それからは唯打ちとけて日毎に懐かしき情のそはり行くばかり、應接室で三人の老女‥‥達雄の母阿仙の母、それに今一人り伯母の阿佐久‥‥の居る

前て、達雄は將來の妻と早も夫婦になつたやうな素振をして殊に優しく勞はるやうになつた。それから兩個は森の中や河邊の路、さては さま〱の草花の咲き亂れて居る牧場の中など盡日散歩に暮らすことも時々て已に極まつた婚禮の日取り、さほどに待ちかねる心もなけれど、唯將に來らんとする身の幸福に互ひに夢のやうな心地て、世界は其身だち二人の爲めに出來て居るやうに思はれた。

兩個の母仝士その姉阿佐久ともいづれも若者仝士が馴染の日毎に添はりゆく樣子を見て、仝情の笑みを湛へ、阿佐久は殊に兩個の素振りに深く心を動かされる樣子てあつた。

此老女阿佐久と云ふはいたつて寡言の質て何時とても奧へ引込みがちて、何の音もさせず、唯飯時に出て來るばかり、食事を仕舞へば直ぐに復二階の我居間へ行き其處て殆んど盡日閉ぢ籠つて暮すのてある。質撲な小ざつはりとした貌だちて性は善く、眼には いつとても穏やかな沈んだ色があつた。一家の中て誰も此人を殆んど數に入れて居らぬ位

他の二人の妹は今は兩方とも寡婦となつて居るが、一度は世の中て人の妻たる身分にもなつたこと〻て、此姉を何方かといへば先づつまらぬ人のやうに思ひ做して其多少輕蔑の心が唯當人だけに判らぬ位に好い程に扱かうて居た。何うしたことか緣遠くて、終に不嫁寡婦となつてしまつたので、今ては家內中て「佐久伯母さん」と呼ばれて居る。いたつて虛飾のない貌だちの小ざつはりとした件の老女は家內の人にさへもひどく臆けて居る、家內は皆親切て、一家の氣風が總じて溫和しく情深かつたのに、よく〱內氣の質てある。

若者はこれまて一度も誰も其室へ行つたことも無く、出這入りをするものは唯下婢ばかりて、外の者が何か話してもしやうと思ふ場合には下婢がいつも呼びに行くのが定例てあつて、實に一家の者等は、佐久伯母さんの居間は何處に在るやら知らないと云ふ程のとて‥‥嗚呼其居間の其寂しい處て、此老女の憐れな一生が今迄過されてしまつたのてある。一同が老女のことをさ

して氣にかけては居ないので、若し其處に居なかつたところが何とも噂するでもなし、全躰老女のことが念頭にないのである。實に此人は一家親類の人々へさへも餘所の人のやうに何時までも疏遠で過ごすといふ彼の退隱者で、喩へば人間界のまだ探險を經ない土地に住んで居る者のやうに、死んだところが一家の中に別に不足なヶ處が出來るといふことはない仲間で、毎日並んで一緒に暮して居る者等とさへ此世の樂しみ、愛情氣風との仲間入りか出來ぬと云ふ人である。いつもチヨコ〳〵と小足に歩き、口を開くことは殆んど無いくらゐで、些しの音もさせねば人に何の邪魔もせず、宛て何か生きて居ぬ目に見えぬ物と交通でもして居るかのやう。又手は何か毛絲のやうなもので出來てゞも居るやうに、何處でわれ其さはるところを極輕やかに優しく扱かふのである。

家内の中で「佐久倍母さん」と云ふ聲を聞いても、其名は誰の心にも更に氣に留らないと云つて宜しく、何の事はない「茶注」とか「砂糖壷」とか云つたも全じことで、牝犬の『たま』がまだこれよりは遙かに重んぜられて居る。『たま』は絶えず脊を撫でゝ可愛がられ、皆の者が『可愛いたまや』とちやほやする。若し此牝犬が死にでもしやうものなら、老女が死んだよりは遙かに家内中の歎きを起したことであらう。

右の從兄妹間の婚禮は愈々五月の末に式を擧げることに極つたので、兩個は顔見合せても何時もほゝ笑まれ、常に手を把りあつて、實に二つの心には唯一つの思ひがあるのみであつた。今年は氣候が後れて、春に入りても暖氣が遲く、これまで夜毎々々に霜白く、朝はまた冷たき霧が立ち籠めて居たのが、此程から俄かに暖かになつて、野邊の若草は萠え出て、樹々の梢は美しく花が咲き初めた。

今は世を從がへた春の日影が終に土地の濕りを乾かせて遍ねく野原を照らせば、長閑さは限なく田舍の村々に行き渡りて、草木ばかりか人さへ禽獸さへ春の氣に動かされぬものはなく、友呼びかはし鳴き囀づる小禽の音色もそゞろに心浮き立つ空となつた。阿仙と進雄

とはいひしらぬ幸福の感胸に滿ちて、森の春めきに誘はれて動く樹の爲めに不安を覺え、平常よりも却つて氣が臆して、二人きりではあまり遠く遊びに行かなくなり、嗜家の前のベンチに腰を掛けて、白鳥が遊んで居る池の樣などそれとはなしに眺めて一日を暮らした。追ひ〳〵夕方になれば、兩個は又更に溫柔しく氣も靜まり、夕飯をしまつてからは應接室の開け放つた窓口へ倚り凭つて靜かに話し合ひ、母親仝士はランプの側で、火光の圓く映して居る處で、骨牌を取つて遊び、佐久伯母は隣りの人から賴まれた靴襪を編んで居た。池の向うには高い樹々が立ち並んで居て、また僅かばかりの木葉越しに、今しも出て初めた月の影、見る〳〵首を擡へて居た梢を離れていつしかに空高く昇り、星の光りは後ろに消して。あはれ深き影を隈なく地上に注げば、白い霧やら夢に見るやうなさま〲の形が光の中に現はれて、詩人や戀する人や情に脆き人々の心を動かすのである。兩人の若者は始め月を眺めて居たが、優しき夜の景色、

草木の月光に彩られたる喩へ難き樂しき景色に誘はれて、我知らず庭にお り立ち、そろ〳〵と步を移して、月光を浴びたる 綠 の芝生の間を逍遙して、そよふく風に金波の躍る池の側へまで迴り出た。母親同士は每夜定例の、骨牌を四度取つてしまふと、もうそろ〳〵眠く立つて來て、床へ這入りたくなつた。『若い者たちを呼び込んで置きませうね』と一人が云へば、一人は急に外部を眺めた。向うには蒼白い月光りの中をそろ〳〵と辿る二つの人影が見える。『打ちやつて置かうよ、ほんとに好い月夜だから。』『佐久伯母さん』が二人が歸るまで起きて待つて居てくれるだらう……ねえあなたが待つて居て下さるねえ。』『はア宜しい、私が待つて居やう。』そこで二人の妹はそれ〳〵自分の床へ行つてしまつた。それから佐久伯母さんも起ち上つて、今迄編んで居た毛絲だの針だの安樂椅子の邊へ置きながら窓口の方へ立ち出で 窓に肱を凭せかけて麗はしい夜の色をつく

〳〵眺め入つた。彼の二人は猶も歩を止めないて芝草の上を歩き廻り、池から上り段の方へ、それから又上り段から池の方へと幾度も往返し、今はものをも云はず、茲から魂は躰を離れてしまつて地中から湧き出た有形の詩となつたかのやうであつた。

斯て阿仙は窓口の處に彫み付けたかのやうになつて伯母の凭りかゝつて居る姿格好が後ろのランプの光に透して見えて居るのに僅かに氣が注いた。

「おや、御覽なさい、佐久伯母さんが彼處から見ていらつしやる。」

達雄も頭を擧げながら「さうだ、佐久伯母さんが見て居る。」

それから又二人は徐々歩いて打ち解けて話して居るが、だん〳〵夜が更けて來るに從つて草葉の上に置く露しげく冷たい、夜氣が稍肌に泌むやうになつた。

「もう内へ這入りませう」

阿仙が催がして終に二人は家の内へ這入つたが、彼の應接室へ來ると、伯母は讀めて居た編物を僅かに復始めた。顏が見えぬ程仕事の上へ俯伏き込み、其痩せた小さな指は疲れ果てゝても居るかのやうに輕く顫うて居た。阿仙は側へ寄つて

「伯母さんもう寢みます。」

老女は姪の方を瞶めたが、泣いてゞも居たやうに其眼の中が赤くなつて居た。されど達雄も阿仙もこれには少しも氣を留めなかつたが、達雄はふと阿仙の可愛らしい靴が濡れて居るのに目が付いて、氣遣はしくなり、

「あなたは足が寒くはないの？」

と問ふと、忽ち伯母の指が劇しく顫ひ出し編みかけの靴下は手から落ちて、毛絲毬は床を轉がるを見向きもせず、急に兩手を顏に當てゝ耐へかねたやうに聲を出して歔欷した。

二人は驚いて直ぐに駈け寄り、阿仙は倉皇兩手を擧げながら、

「何うしなすつたの？伯母さん、え、何うしなすつたの」

と繰返し問ふと、憐れの老女は、顔は憂ひに皺めながら歔欷の間に頷ひ聲て

「あの‥‥達雄がお前にあの‥‥‥「足は‥‥寒くはないか」と云つた時に悲しうなつた。私には誰もさう云つてくれた人が無かつた‥‥一度も‥‥」（完）

霜の夜

山口すみ子

寢よとの鐘は響けども、悲しき事、今の果敢なき身を思ひ廻しては、眼は冴え心は結ぼれて、涙は例のあやなく流るゝ。夜は漸々更け靜まりて、折々の風に木々の枯葉のそよぎの外は、音なく聲なく、只門守る犬の遠吠のみ異樣に耳朶に響く物凄さ、折柄がら〳〵と門邊に聞ゆる轍の音に、嬉しやそれとおはたゞしう立上れば、あな仇なりしよ、響きはあらぬ方にそれて、軈て遠く〳〵果ては聞えずなり終りぬ。俄に氣落せし身のまた今更に流るゝ涙を拭ふも術なく、倖と我胸かき抱きて思はずよゝと伏沈めば、同じ浮世の運命をかこつか、無常の風にはら〳〵と木の葉は落ちて地に聲あり。

あはれ父君は今宵も誰か手枕に醉ひて狂ふらん、妾の涙は物數ならねど、母上の歎、祖母樣のみ心つかいを如何に見そなはすぞ、夜々の枕に流るゝ涙を露哀れとは見返らで、血を吐く思ひの諫言も空吹く風と聞流し、名のみゆかしき花の巷に夜毎〳〵醉ひしれ唄ひ給ふとは、夢か、あらず、夢ならざる事の悲しさよ、よし戀に眼は狂ふとも、祖母樣の熱き涙は身にしみ給はざるか、母上の病ならぬ腦みにおとろひて影うすれし哀れの姿にみ心は動かざるか、正しき心にもどりませと、人知れずの神詣ふてに祈願をこむる妾の心も通ぜざるにや、せめて今宵一夜なりとゝく歸り來給はゞ嬉しからんを‥‥と悶えに悶えつ、果ては思ひに堪へてそと雨戸開きて立出でぬ、そは父上の歸り來べきよしもやと果敢なき望みにひかれてぞ。

露しげき草むら踏み行けば、霜や下りけむ冷かなる夜氣は身にしみ渡り、仰げばみ空の月も片破なるぞ恨みなる。さても果敢なしや、此霜の夜を悶えつゝ泣きつ涙に咽ぶ姿ありとは露知らで、つれなき父は如何なる夢路辿るらん、遠の山邊に棲鹿の夫戀ふ聲を夢見ては、妻子哀れとおぼせしか、さらば中々に嬉しからんを、迷ひの雲の晴れやらで惡魔に猶も誘はれ行きなば如何にせむ、さらぬも母上のおとろひ果てし御身の上の氣づかはしきに、と思ひやりては吹きくる風も意ありげに、下行く水のせゝらぎも怨みに咽ぶ人の泣く音と聞なされて、亂れ苦しき胸の思ひにほつと斗り月に恨みの息吹きつ、うらがれし尾花の上に涙注げば、秋におくれしこほろぎも同じ哀れの音に泣き出たしぬ。

名家談叢

女學生の墮落問題

高等女子師範學長高嶺秀夫氏曰く女學生墮落の問題に就ては、種々議論もありますが、先づ第一地方に於ける良家の子女などが、東京に確たる親戚も、引受人も無いのに、東京へさへ行けば立派な教育が受られると思ッて出て來るのが惡いのであります。尤も東京には女子大學や高等學校があるから、充分な教育が受けられると思ふのに無理もありませんが、妙齢の婦人を一人手放しで、東京のやうな處へ出してよこすのは危險至極で、婦人はどうしても、家庭で仕立るのが一番です。

一體東洋の婦人は、家を離れて、一本立の運動をするやうに躾けてありません。隨つて父母の膝下を離れ、他

人の中で生活する心得が出來て居ないので、一層注意を仕なければ意外失策が出來ます。例へて申せば男女の學生同志が、學校が同じだとか、旅宿が同じだとか、些細の關係から、お互ひに話し合つて、懇意になッた果は、手紙の遣り取りをするやうになる。尤も日本の婦人は都てが叮嚀過ぎる結果、男子から話し掛けられて、其の挨拶を仕ないで、先方の機嫌を損ずると云ふ樣な事は、失禮だとか何だとか思ッて、何處の何者だか確な紹介人もない碌々身元の分らぬ者と知己になる抔は隨分迂濶千萬ではありませんか。

斯ういふ事に就ての心得は學校の先生も、善く教へなければならんし、家庭でも能く話して聞かせ、本人も始終其邊に注意して居るべき筈でありますが、女子が家を離れて、獨立すると云ふ習慣がないだけ、斯う云ふ處へ氣が注いて、嚴格しく云ふ者が尠ないので、洵に困ります。

西洋抔では何國でも、斯う云ふ事に就ては、却々嚴しい組織になつて居ります。假にも處女と名の付く者は、

假令一所の學校、一所の宿所で、毎日顔を見合せて居る樣な仲間でも、自己が飽まで信任して居る先輩か親友の確實なイントルザクシヨンがなければ、一寸した話も出來ない事になつて居る位で。手紙抔は容易に遣り取りする事はありません。

現に私が洋行して居りました時、親友のモールスと云ふ人と、一所に汽車に乘つた時でしたが、同室に乘り合した婦人が、親友モールスの弟子でありました。モールスは其婦人と私とを對手にして、頻りに話し込んで居りましたから、私も打解けて、其婦人に一寸詞を懸けましたが、其の婦人は一向取合ひませんで、聞えても聞えぬ容態をして居ました。其處で私は、あゝ惡い事を仕たと思つて、直にモールスに向つて、此方に私を紹介して下さいと頼みましたところ、モールスは、おゝ左樣でした、全然忘れて了ツて、大に失敬、と云つて私を紹介せて與れました。さて紹介が濟んでからは其の婦人が、直に握手を仕て、面白可笑しく種々の話をした事がありました、總て西洋は斯樣風になつて居ります。

西洋に於ける婦人の狀態は、前申上ました樣な次第ですから、男子の方で何程どう斯う思つても、實際神聖なる交際の外は、婦人の方で承引て與れませんから、どうしても墮落すべき餘裕がないのであります。

翻つて我國の狀態を見まするに、西洋とは全く反對して、親切に敎ゆへき筈の母たり姉たる者が、男女の交際態り抔に就ては一向話して聞さず、甚しいのは自分達が若い時と只今とは宛で時世が違つて居るからどんな風にしたら宜しいか、全然分らないと云ふので、若い者の爲る通りに、何んでも任せて置くと云ふ樣な具合ですから耐りません。未だ幾何も浮世の風に當らない產な時ですから、勢ひ墮落せざるを得ないので、寧ろ墮落するのか當然であると云はねばなりません、斯う云ふ事は學校の先生が修身位の講義では到底盡す處でないから、父兄も充分氣を注けて遣らねばなりませんが、別して母たり姉たる直接の監督者は、充分會得のつく樣に親切に云て聞すのが肝腎て、婦人さへ嚴格に仕て居

たなら、如何に男子が近寄らうとしても親密にならうとしても出來得ないのであるから、婦人が此惡弊を取除いて呉れなくては、底到墮落腐敗を矯正する事は出來ません。

婦人の公會抔へ行て見ますと、立派な貴婦人抔が、私は此頃子宮病で困りますなどゝ大きな聲で平氣に話合つて居りますが、西洋では婦人同志でも、子宮病はさて置き婦人病とすら言ふ者もなく、多寡が病氣で困る位で、病名まで饒舌散す樣な不躰裁は斷じてありません。是等は婦人に其心得がないから、耻を耻とも思はずに居るのですが、斯う云ふ家庭に育てられ、如何はしい戀愛小說抔を讀んでは、戀はどうの斯うのなどゝ生半可の事を口にする抔は、飛んでもない間違ひで、是等は最も注意して貰ひたい處です。

こんな光景な東京へ、態々地方から修業に出て來るのは、自から好んで墮落しに來る樣な者て、學問を爲に來て德を失ふやうでは何にもならない。寧ろ學問を爲ない方が增てある。それに近頃は地方にも大分高等な學校が出來て居るから、自分の土地て修業するのが一番であるのに、無闇に女學生が東京に出ると云ふのが、一番惡い事であらうと思はれます。

高等女學校抔も始終生徒の家族を招んでは嚴しく話して聞かせ、面會人抔も保證人の判を取つて來なくては、凡て免さぬ事に爲て置きますが、是とて學校だけの事て、手の屆くだけは充分嚴格に氣を注けて居ります。

此間も女學校の教科書問題て妙な事が起りましたが、私は態と無頓着に打捨てゝ置きました。すると他の人から話が出ましたから、其事なら學校てはお話しないと云つて斷りましたが、高等女學校では御承知の通り、作文に妾と云ふ字を用ゐない事になつて居る位ですから、彼の問題抔は無論口にすべき事てはないのです。妾と云ふ字を用ゐない事にする時も、種々な議論があつて、妾を妾と讀ませたら差支なからうと云ふ事てしたが、成程妾と讀ませないなら良いが、素より妾とも讀める字ですから、決して用ゆべき文字てないと主張して、遂々用ゐない事に爲ましたが、隨分女子教育と云

ふ事は、面倒が多う御座います。要するに現今の家庭を根本的に改善する事と、一方には各地方から婦人を東京に出す事に就て、特別の注意をする事の二つが完正しなくては、目下の墮落は矯正出來なからうと思はれます。(讀賣新聞)

女學生の風紀矯正に就て

某教育家曰く今日女學生の腐敗して中には淫賣婦に迄墮落し居るものありと云ふ事は如何にも女學界に取て不面目の次第ではあるか併し多數の女學生中二三の墮落生を出したとて直に女學生全體が腐敗したやうに言ひ做し毫も女學界の前途如何に頓着せざるは決して女學界に同情を有する人とは言へない、墮落女學生中には始めは清淨無垢の處女にして修業中漸次に腐敗に感染したものもあらう併し其の多くの海老茶袴を穿ちて學校の門に出入せない以前から腐敗したものが多いのである、地方から出た女學生抔は既に地方で散々馬鹿を盡くし鄕黨には居るにも居られずして東京に遊學し、澄ました顔で女學校に入學して居るものもある、甚だしきは外妾や娼妓上りて其前途を惡へて他の職業を求むる爲め晝のみ女學生となり居るものもある。如何に嚴格な女學校でも一々彼等の素性來歷を調査して入學を許否するのは却々に困難である、それて時々彼等に侵入せられて、飛んだ迷惑害毒を被る場合が多いのである、爲めに女子教育の効力を疑ひ地方の父兄に其の女妹を學問せしむることを躊躇せしめ折角發達せんとする女子教育を頓挫せしむるを顧みざるのは思ひやりのない仕方である、斯く言へばとて固より女學生の腐敗を辯護するのではない、女學生の腐敗は何處迄も矯正せねばならぬ、其の矯正の方法は先づ第一學校と家庭との連絡を通じ學校の監督を嚴重にすると同時に家庭の取締を嚴重にせねばならぬ、尤も是は東京に家庭を有する女學生に限ることとてあるが地方から東京に遊學した女學生は一切學校の寄宿舍に收容し、猥りに通學を許さぬ樣にするのである、下宿屋に男學生と女學生と混合して下宿するのは女學生腐敗の最大原因で

あるからとて警視廳は一切之を禁止せんとの樣子であるが、元來下宿屋抔に下宿する女學生は既に腐敗したる女學生で父兄等よりも見放され居る位のものが多い父兄の監督嚴重なる者は勿論、苟も清浄無垢なる女學生ならば決して初より男學生の起臥する下宿屋へ下宿抔はせぬのである、先づ父兄の知己とか親戚とかの宅に居るのである、然るに親戚とか知己とかの宅で主人主婦が品行方正、家内和合し、預かりたる女學生を感化するとが出來る人なら宜いが十に七八はソレは往かぬ、ソレで種々不都合がある、結局は其親戚や知己の關係ある素人屋に預くるとか下宿屋に託するとか云ふ事になる中には遂に貸間を假りて自炊するものもある、素人屋に下宿するとか、貸間に自炊するとかする樣になれば、監督は固より行屆かぬのみならず日々接する主人主婦は教育なきもの多きゆゑ追々腐敗の氣を吹掛けらる、それに下宿屋よりも人目が少い故男學生との交通も頻繁になると云ふ順序である、地方にある父兄も下宿屋に居ると聞けば固より其儘にホッテも置かないけれども、學校の寄宿舍は滿員ゆゑ同學生の家庭に同居するとか、同學生と共に一家を借りて自炊すると書面にて胡魔化し置けば父兄も先づさうかと安心するものが多い、是が女學生の自墮落になる最大原因である、それで女學生の風紀矯正に就ては下宿屋の取締よりも何よりも所謂素人下宿、素人貸間、借家自炊等を廢絶せしむるのが何よりも急要である、各學校も腐敗女學生に侵入せられざる樣にするには、親戚なり、知己なりの宅に同居監督を受け居れりと稱する女學生の身元性行は特に吟味して假にも多少の疑あるものは其入學を拒絶する樣にすること肝要である、下宿屋の男女混宿を禁ぜんとする警視廳は此等の點に就て特に調査ありたきものである。(東京朝日新聞)

森卷耳氏の盲人教育談

私は明治の初年に英學に志しまして今では第四高等學校となつて居る金澤の專門學校に始は生徒とし學び、後は教師として十八年まで奉職致しまして、夫より

滋賀師範、岐阜中學に轉任して敎育に從事中、去廿一年より眼病を發し爾來百方治療を盡しましたが二十六年に遂に失明しました有躰にいへば具眼てあつた時は盲人救濟てふ念はなかつたのてありますが一旦明を失してよりは洵に同病相憐の情に禁ず廿七年に岐阜訓盲院を設立して自ら其主任となり今日に至つたのてあります、其間廿七年より廿八年に掛け丁度半年程は敎授法研究の爲め特別研究生として東京盲啞學校に入學しました訓盲院の現況を申しますれば學科は普通科と技藝科とに別ち普通科の程度は小學高等に準じ之に歷史と本邦和歌とを授けて居ます又た技藝は醫學の大意と鍼治、按摩、マッサーヂを敎えます、卒業生は是まて三回に十二名を出し孰れも岐阜、愛知、神戸等に開業し貧乏ながらも額に汗して兎に角獨立自活が出來て居ります、敎師は私が普通科を受持まして東京盲啞學校卒業生一名、訓盲院卒業生一名が技藝を訓え別に和歌の敎師として一人の具眼者があります、生徒は都合十七名でありますが孰れも寄宿のみてす、

今度上京の目的は寄宿生の爲に適宜の運動塲を設けたいと云ふ一念でありますが申す迄もなく盲人は運動が不自由てすから自然健康を害し半途退學するものもあるのてすされぱとて院の地面は僅に百坪ばかりて日常彼等をして適宜の運動を取らしむるに由なく是は誠に苦心に堪えぬのてあります先日舊藩主前田侯に伺候しました時侯爵には盲人の不自由なる身を以て不幸なる盲人の敎育に任ぜらるゝは眞に奇特の至りなりとて即座に百五十圓の寄附をせられました、侯爵の名譽ある慈善のお思召を始め斯波淳六郎、早川千吉郎、拔山庄次郎諸氏孰れも篤き同情を寄せられました從來訓盲院は岐阜聖公會に附屬して內外慈善家の寄附に依つて維持し來つたのてありますが今後は一般公衆も社會的事業として三顧せられんとを切望する次第てあります、

私は幸に失明前より基督敎信者てありましたから盲人となり始は隨分困難を致しましたが絕望するともなく夫妻協力して盲人を敎育して居ります尤も理科を敎ゆるにも地理を敎ゆるにも一人別に手探にて模型や

地圖にて說明するのですから其困難は實に思料の外です、私は三十九歲の時失明したので世間の美も醜も酸も甘も知つて居りますが幼少よりの盲人は山川風景の美は愚か父母の顏すら得知らざるものが多數ですから其不幸可憐の狀は言語に絕するのであります、併し盲人の敎育には點字(假名)を用ゐ例の漢字を授けざる爲め尋常高等小學全科は五年にて習了し得るので是は具眼者の參考にもなるだらうと思ひます云々

人類の服裝

坪井博士談

各人種の服裝の噺をするのは衣服にすべき材料の選擇、寒暑に處する服制の工夫をする等の事に就いて熱帶寒帶地方に住んで居る人民から學ぶべき事が多いのと、各人種の嗜好を伺ふこと、優美とか强勇とか云ふ事を服裝に表すに就いても參考に成る事があらうと思ふからである。

元來衣服と云ふものは其初め何の爲めに出來たものかと云ふと身體保護の爲めなりとは之に向つて一般に與へらるゝ答であるが果して然らば第一に保護を感ずる脚部即ち足の衣服が最先に出來て居らねばならぬ譯だが事實の之に反して居るのを見れば先の答が全く宜しいとは云はれない。

眞裸體で居つては人間として品格が維持せられないから若くは人に對して恥かしいから衣服を作つて身に纒ふ樣に成つたのだと云ふ答の如きは已に衣服と云ふものゝある社會の思想を以て衣服の無い時代を說明しやうと云ふものであつて正當でない。

要するに衣服と云ふものゝ出來た理由などは各人種に依て各々異なつて居るのであつて片言以て之を斷ずべきものではない從つて其用とする處も各々多少の相違があつて身體の保護、禮儀、裝飾、信仰等の要求を充して居るのであつて身體の保護と一口に云ふても寒暑から身體を保護する戰爭から身體を保護すると云つた風に色々な意味が含まれて居るのぢや。

西印度人は皮の衣服を著けて居るが其背中の處には各人が自分の履歷を書いて居る自分が某の處に於て大熊

を付留のたとか某の種族と戰ふて勝利を得たとか云ふ類の事が認められてある此等は隨分念の入つた方の衣服であると云はねばならぬ。

米洲のブラヂルでは木の皮をはぎ其へ穴をあけ其穴へ手を通す樣にして其儘衣服にするので帽子も同じくはいだなりの一枚皮である又た南洋諸島中のポリネシヤにては木の皮をたゝき伸ばして其儘衣服にする一寸紙衣と見まがふ樣なものである、アイヌ人の用ゆるアッシと云ふものは榀の皮の纎維をとり之にヨリをかけずに織り爲したものである。

北海道に産する蕗は秋田蕗にも增して大きいのであるが土人が途中で雨に逢ふと其の蕗の葉をとつて傘に代用する事と南洋の土人が椰子の葉を重ねて腰簑にして居るが雨に逢ふと其内の一枚を外して傘に代用する事とは南北相對照せる自然服の一例である。

衣服の材料と動物性の者は馴鹿、羊、牛等の皮でありますす其の皮で服を製する事は至極珍らしいのであるが韃靼地方では それをやつて居る、支那の北方の一族なる通古斯は魚の皮で衣服を作るが其の名を魚皮韃子と云ふて居る。

我邦の服裝には單物、袷、綿入等の數種ありて袷 綿入の如きは二三枚も重ね著をすると云ふこともあるがかう云 ふ數種の衣服の無き處及び重ね着等をしない處もある。

アイヌ人は單物ばかりであつて袷綿入等はない併し冬期になればその單物を幾枚も重ね著をする、和蘭人はチヨツキ、上衣を各々一枚著る、氷洲人は二三枚の袴を著ける伊太利の或地方では多きは十二三枚の袴樣のものを著け其數の多いのを誇つて居るラップ種族は何時も同じ一枚の毛皮の衣を著けて居るが夏期は毛を外側へ向け冬期は之を裏返して毛を内側へ向けて著る。

我國などでは男性と女性とに依り衣服の作り樣が多少違つて居るけれども各人種盡くさうではない、丁抹人は夏期には男女共に佛國服であるから男女の區別があるが冬期は寒いものだから古來の毛皮の衣服を著ける此には男女の區別がないエスキモー人の衣服にも男

女の區別がないエスキモーの男には髯が無くて衣服が女と同様であるのぢやから一見男女の區別がつかないカムチヤツカ地方の住民の服装にも男女の區別が無い只だ女子のには下著のあるのが相違の點である、アイヌ人のにも男女の區別はないが女はモール或はフクロ（其形袋に類するより內地人の與へし名稱ならんか）と稱する下著に著けて居る、ポーランド人は老人は古風な衣服を著、若年者は英國風の服装である。西班牙の婦人は外出する時には服装を凝らして出掛けるが家に居る時は頗る穢ない衣服を著て居るさうで此國の婦人ほど家と外とに依て服装を異にする所はないのぢや氷洲は九百年以來衣服の作り様が尠しも違ふて居ない。

佛國は流行の源と云はるゝ程に服装なども時々刻々改まつて行くが支那及葡萄牙は流行の無い國柄である瑞典は千七百七十七年に國王が勅令を以て男女の服制を一定されたのでちやんと定まつて居る、高加索地方のチロルチヤ人は高貴なるは波斯風を眞似下賤の人民はコサック騎兵の服装に眞似て居る、其他各人種の服装の事を噺せば色々な事があるがざつとこんなものである、馬子にも衣裳と云ふ事があるが私の噺が此會に幾分の裝を與へたかどうだか狠に衣服との評を免るれば滿足である。

鮮朝婦人の服

朝鮮の婦人服は腰部の最下に日本の袴と殆と同一制なる裳を穿ち、其上に股引の形して稍や大なる下着を着け、其上に多く襞を取たる女袴を纏ふ。此の女袴は即裳なり。而して上部は筒袖の短き上着を着て、更に其上に洋服の外套に似たる丈の長き上衣を纏ふ。去れは袖窄き故動作に便に、高踏濶歩して股脚を露はす醜態なく、腰に幅廣き帯をも纏はずされば、身體の發育をも妨ぐること無く、而かも冬は煖かく、夏は涼しく、實に間然する所無きなり。但し朝鮮人は、男女とも小兒の外は皆な純白の衣裳を着る故、汚れ易くして斷へず洗濯を要するの不利あるも。此事は必ずしも朝鮮の白色を學ぶの要なければ色彩あり、模様あるものを用ふる方却て上品なるべし。要するに日本女服の改正には朝鮮服に則りて多少の折衷を加ふること最も宜きに適ふべからん。

雜俎

露西亞の歳晩

三枝みつは

烏兎匆々、本年も早や剩す所僅かに相成り、クリスマス祭の日も愈々二旬の後に近寄り居り候に付、嘸ぞかし御繁多の事と存じ上候、扨て自分が先年目睹致候露國風俗中クリスマス祭に關するものは時節柄面白き節も可有之哉と存じ候まゝ其の模樣を御案内可申上候。露國は御承知の通り今以てユリアン暦を用ゐ居り候へば十二月廿五日のクリスマス祭を普通の暦より拾三日遅れて正月七日に催す勘定に御座候、我國にて地方の農民間に今尚ほ依然として大陰暦が行はれ居り候如く、露國にては舊暦のユリアン暦を墨守して、新暦の採用をば頑として斥け居り申候間、同じクリスマス祭も他國とは甚く日を異にし居り候。

歳晩必迫つての人情は何處も同じものと見え大路往く人の足搔もそゝくさと忙しく、市中は何と無く景氣付いて一種の活氣を帶び來り、さは〳〵として賑かに喧しく相成り候、此頃の露國の氣候は寒さの頂上にて積雪山をなし、朔風肌を裂いて、我邦人の到底想像し能はざる所のもの有之候、併し乍ら年に一度のクリスマス祭を目前に控へ居り候に付、寒氣にもめげず商店は競ふて代物の仕入を爲し、盛に飾り付けてクリスマス祭の贈物を賣出し申候、中にも呉服屋、繪草紙屋の如きは凄じき景氣に御座候、其他玩具屋にまれ、文房具屋にまれ、花屋にまれ皆な夫々に意匠を凝らし工夫を圖らして、賑やかに商品を飾り立て婦人連の目をひく樣足を停めるやう心懸て、用意をさく〳〵怠りなき狀は我國の年の市にも立優りて目醒ましう御座候、市中を歩きて先づ眼に觸るゝ物は辻々角々にて鬻ぎ居候樅の枝に御座候、こはクリスマス祭の當日座敷をしつらふ料にとて商ふものに有之候、又た處々の廣場にはヤル

マルカと申して假小舎やうのものを建て家具厨具を初め魚肉乾酪さては肴物果實などを鬻ぎ居り候、是等の間を彼方此方と忙はし氣に縫ひ歩くものは主婦さん達にて或は小間物屋に赴き呉服屋に往き仕立屋に立寄り或は肉舗を訪れ酒舗の暖簾を潜り、八百屋の閾を跨ぐなど眼も廻る程多忙を極められ候　小供連は又たクリスマスの贈品を心待にして何事も手に着かず夜の間も夢に見ると申候

扨愈々クリスマス祭の當日と相成候へば老弱男女各がじゝ思ひ思ひの衣装を着飾りて最寄の教會堂に赴き、來ん年の新しき運命のさきく有らん事を祈り、そが年内の恙無からんを念じ申候、總じて露國人の習俗は事につけ物につけ神に祈禱を籠めて難有き加護を蒙らんとするの風ありて頗る信神の念に富み所謂延喜を祝ふの實に有之候が故、教會に於て祈禱の濟むや直ちに廻禮の爲にとて橇に乘りて雪路を奔り、平素出入する家々に就いて祝意を述べ歩き候、此時の橇は露西亞の名物とも申すべきものにて、トロイカと申す三頭立の橇にて雪路を走る時は、物馴れし駿馬は風を衝き雪を蹴つて驀に驅出し候まゝ、橇は少しの動搖をも感ぜず素直にスルスル進行致候有様は言ひ知らず壯快にて御座候、廻禮者が述ぶる祝義の口上は至極淡泊のものにて無用の長口舌や虚々しい御世辭を避けて、そが家の召使共には必ず心付を取らせる風習に御座候、乍併我邦の如く歳暮に進物を授受する抔の事は一切之無、只親類同士小供に贈物をなす丈にて有之候

家に停りたる主婦や娘達は廻禮者が微醉機嫌の蹣跚たる足取危く、高歌放吟しつゝ歸宅するを待ち得て茲に亦た家庭的の酒莚を開き候、主人は三鞭酒を飲みて家族の健康を祝しさて我國の雜煮にもた比べつべき臟腑なるものを食し、畢つて舞踏會を開くが每年の嘉例に御座候

クリスマスの晩には吉例として樅祭と申すものを催し候、是は特に兒童の爲に行ふ一種の遊戯にして十四五歳を頭に五六歳迄の子供を一堂に集めてヨルカの周邊を踊り廻らしむるの儀式に御座候、ヨルカと申し候は

樅の枝を切りたるものに木の脚を附け、之に金箔塗の胡桃、林檎、菓子、繪草紙等を結付けたるものにて、我國にて申さば繭玉の如きものにても候はんか、兼て之を座敷の眞中に飾り置き日暮に及んで數多の蠟燭を水氣滴る綠の枝間に點じ、小供の好む物を吊し懸け候、近來聖彼得堡邊にては蠟燭の代に電燈を使用するとの事に候へば壯觀思ひ遣られ候、斯くして無邪氣なる小供達は黃金色の髮を振亂しつゝ、欣々然と樅樹の周圍を、洋々たる音樂に合せて可愛らしく踊廻り候、或は談り或は笑ひ興じて菓子を摘み林檎を頰張る尊き有樣は、天使界のパラダイスも斯くやと想像致され候、次第に夜も更闌けてソロソロ小兒の眠氣を催す頃を見計ひて主婦は樅枝に懸けられたる玩具繪双紙を取りて子供等に頒ち與ふるを以て此の儀の終局と致し候、此のヨルカは重に小兒の爲に行はるゝも時には不幸なる女學生の爲め、孤兒院の子のため、製造場の女工の爲に慈善的に催す事も間々有之候。

このヨルカと申し候ものゝ濫觴を取調べ候處中古の御伽噺的の傳說に基いて起りたるものゝ由、其が概畧を左に開陳可仕候。

むかし森の中に貧しき一人の樵夫住ひ居り候ひしが、いとしき妻に死別れて後は七歲の男子の生先を何よりの樂に暮し居候、小供は其名をワレリヤンと呼び、よく父の手助をなし父と共に林に入りて木を伐り枝を卸すなど至つて孝心深き質にて有之候へば、親子はさる物寂しき山中に細き煙を立てながらも世を安らかに送り居たる由、然るに或夜の事なりとか父は晩食を濟ませての後ワレリヤンに向ひ、今夜は恰もクリスマス祭の當日に候へばとて其昔猶太の一寒村に生れませし基督の物語を脫漏なく語りきかせ、問ひつ答へつ互に睦じく打談らひ居り候折しも、小供の聲にて『何卒此處をば御開け候へ余は寢泊する所も無ければ饑ても腹を充たすに由なきものにて候』と扉を叩いておとなふ者有之候まゝワレリヤンは直ちに座を立ち扉を開けて打眺め候處、襤褸を纏ひし一人の小兒が寒さに身をば震はし居候間いと氣の毒の事に思ひ慇懃にその子を奧に招き

入れて『見そなはし玉ふ如く吾家は貧しき者にて候が汝よりは少しは裕に暮し居らるゝ身にし有れば客一人位御宿め申すの設備は有之候に付御遠慮なく足を停めて悠々御休息なさるべく候』と申して手を取りて暖爐の前に案内し凍えたる手足を焙らせなど致し、自分は厨房に赴きて晩餐の用意をなし乞食の客を食卓に侍らせ候、軈て食事の終りし時その人の疲勞を察して『いざ此方へ御出て候へ吾は椅子にて事足れば足下は吾が寢台に御休みなさるべく候』と告げ候處、彼の乞食はタレリマンの寢臺に身を横たへながら『天の父は必ず汝に福祉を授けらるべく候よ』と申しつゝスヤ々々就眠致し候、軈て二人の優しき鼾聲は聞え申候、就寢後間も無く屋外の方に幽に微妙の音樂の響くを聞付たるタレリマンは早くも耳を欹てその物音を聽き澄まし居候處、數多の兒童が隊を成して歌ひつゝ此方に進み來るものゝ如くに察せられ候深山育のワレリマンは生れて初てかゝる音を耳に致し候事故非常に物珍らしく感じたるも無理ならぬ事に御座候唱歌の聲は次第々々に近寄て今は早や手に取る許歌の意味も判然と聽き取られ申候。

眺はるけき久方の　御空に星の燃えぬるは
輝く神の喜びを　世人に告ぐる光かも。」
神の冥名子は嬰兒の　姿をもちて天降り
乞丐となりて鳥羽玉の　闇の夜頃に賤が家の
葎の板戸訪るる。」　扉叩きて訪れし
正しき者は喜べや　そは神の子ぞ基督ぞ
貧しき人を誰となす　淵に沈める汝たちに
永き月日を悲みの　齎す爲の御使ぞ。」
樂みと又喜びを　いとも尊き大神を
賤が伏屋を賑かす　汚れたる世にも尚ほ
稱へ奉れよ、吾達は、　見ては喜び且つは舞ふ」
正しき者の生存ふを、

此の唱歌を聞きたるタレリマンは言ひ知らぬ感に打たれ候まゝ、寢床を脱出てゝ窓より外面を覗き候處、東の空赤うなりたる朝暾の前に數多の兒童現れ出て候、何れも黄金の喇叭と琵琶とを手にして銀の衣を着けた

る姿燦然四邊を拂ふて眩き許の有樣に御座候故、タレリマンは暫し吾を忘れて凝と打目成り居候處卒然背后より優しく肩を叩くもの有之候へば驚きて見返り候ひしに、こは抑も如何に昨夜一夜の宿を乞ひし乞食は忽ちにして姿を變じ、華美やかに裝ひ銀色の頭髪よりは妙なる光を放つて到底此世の者とも覺へ難きものと相成り申候その時彼の人は儼然容を更めて扨て申され候やう、『汝はよくこそ予を優遇し候よ、かゝれば此家に福祉は下り來て常に喜びと樂みとをもて充たさるべし』と。其より窓前に生ひ茂りたる樅の枝を手折り來て坐敷の内に樹て再び語を續けて『御覽候へ、樅の枝は彌が上に生ひ茂りて木の實をさはに結ぶ可く候よ、此の常盤木の緑色濃く四季其色を變へ候はぬはすなはち汝を恣む吾が愛の渝らざる證とも相成るべく候ぞ』と申しつゝ、唱歌隊を牽連れ搔消す如く姿を隱し候、然る所樅の木は須臾にして生長しその枝よりは多くの林檎や胡桃を垂れ數多の星は綠の葉蔭に輝きて燦爛たる景狀と相成り候此事いつか村内の評判となり不思儀の靈木を拜まんものとて樵夫の家に來るもの陸續踵を接する有樣に御座候年あまた經てタレリマンのみまかり申候後は紀念の爲にとて村人共は每年クリスマス祭の折に樅の枝を折りて室内に飾り付け申候此の風は延いて隣村にも移りて次第に四方に傳へ今は歐洲一般に行ふの風習と相成り申候由言傳へ居候。

露國のクリスマス祭に於て面白き遊戯は氷滑と舞踏の二つにて御座候、名にし負ふ寒國の事とて歳晩頃の寒さは實に御話の外にて、道は堅氷を以て張られ河水は一面に凍つて、馬は其上を滑走致す程に候へば此頃の公園地には氷田の設け有之候、氷田と申候は方一町の平地に柵を以て氷を圍み、每朝雪を拂ひ水を灑ぎかけて滑かに致しあり候へば、宛ら鏡を見るが如き心地致候、氷田の入口には入場料を賣出す所あり、入口の側には休憩所もあり着替の場所もあり、其外奏樂所の設も有之候點燈頃とも相成候へば幾組かの若き男女は氷靴を踏鳴して三々伍々列をなして園内に繰込み來り候大學生は紺羅紗の制服に金釦をひけらかし、女學生は

白羊の帽子を戴き、士官は得意然たる顔に鰡髭を捻くり、孰も嬉色を浮べて歩調も勇しく入り來り候、樂隊が奏する劉喨たる音と共に幾組の滑走者は相携へて園内を滑り、或は一直線に進むもの、二人二脚にて走るもの、或は螺旋的に旋ぐるもの　或は跳るもの轉ぶもの後戻するもの、千種萬様の曲藝を演じ致し候、中にも翩々と裾翻へす淑女の如きは花に舞ふ蝴蝶かと疑はれ落葉の風に飛ぶかと怪まるゝもの有之候　尻餅付いて泣顔する少女や、輿に乘りてキヤツ　キヤツと叫ぶ少年や、乳母に手を引かれて恐々踏み出す女兒や、見來れは仲々に面白きものに御座候、斯る事は寒國なる露西亞ならては目撃するを得ざる光景かと存候。

右の外クリスマス祭には演劇、音樂會、慈善舞踏會等の催しも有りて、何れも大入叶の賑ひを呈し候。

以上は都市に於けるクリスマス當日の模樣に御座候が、之よりは少しく田舍の農家に於けるクリスマス祭に就て御話し可申候、農家の娘はクリスマスの晩に指環を雛に投じ其の喙む有樣を見て來ん年の吉凶をトし候、又は深夜人なき頃を見すまして盥に水を盛り左右に蠟燭を照らして久時水面を見守る時は、男の顔があり／＼と水面に映ずる由、其人は一生のよすがたる將來の配遇なりと確信致し候是を以ても露人の迷信深きは御分りに成るべく候、クリスマス祭の日一般に農家にて行ひ申候處のものは我國の盆踊に類似したるものに御座候、その模樣は二十疊敷位の土間に數多の長椅子を並べ、暖爐の傍には粗末なる食卓を据え、其上には火酒や肴や種々の料理が堆高く載せられ候、此の食卓を隔てゝ十二三人の男女は手を繋ぎ合ひ唄ひながらぐる／＼廻り居候と聽て一組の男女は群を離れて輪の周圍を追ひつ追はれつ追馳競を致し候、この折面白きは輪を造りし男女が聲を揃へて「白鳥の浮ぶ青海原に……白鳥の浮ぶ青海原に……」と申す歌を風琴に合せて唄ひながら踊る事にて御座候こは獵人の白鳥を追ひ廻すさまに擬したるものにて唱歌隊踊と稱し露西亞固有の遊戲に有之候由一寸面白きものに御座候、此の唱歌隊踊終る頃を計りて假裝者の一群は突然爐を

排して押掛け來り、行商に扮したる少女あれば土耳古軍人に擬したる婦人も有りて、何れも皆手巾もて覆面致し、手の舞ひ足の踏む所可笑しき眞似のみ致し候へば觀客ドッと失笑して容易にその何人なる哉を判じ兼ぬるまで巧に化け居候故人々手を拍て興がり申候。其次には十八九の若者が哥薩克踊なるものを演じ候、是は兩手を膝にあて蹲踞んで脚を前後に踏み展すやらクルクル回をするやら、肩を窄めて足を曲ぐるやら、是も中々面白きものに御座候、其上踊の調子を取る爲に風琴や口笛を盛んに吹立て候間非常に陽氣なるものにて看る者も爲に浮かれ出し申候。

露國のクリスマスは要するに賑はしきものにて隨分愉快の事を以て充たされたりと可申候先は是にて擱筆、匇々頓首。

支那の風俗

他國人が支那人を見て先づ奇怪に感ずるものはその長く々しき辮髮なり、打見る所にては悉く同じ樣に見ゆれど階級によりて結び方を異にす即ち上流社會に在りては辮髮を固く縮め粋人社會に在りては極て緩く編むの風あり、年齡の甲乙身體の長短に依ても甚く異なれり概して青年時代には辮髮に意を用ふる風あり、隨て種々なる流行もあらはれ風流才子を氣取るものあれば華車優美の姿を裝ふもあり、中にも遊冶郎などいはるゝともがらは髮容に苦心して一髮の精にも浮身を窶すものありとぞ、衣服は我國の如く形の上に種々の變化は無けれど、冬向には純子の表に毛皮の裏地を附けたるもの普通上流社會に行はれ、之に用ふる毛皮には頗ぶる高價のものあり、禮服は濃紺色にて例の長き上衣を着け、帽もまた黑の毛皮もて作られたり、支那は領土廣大なれば一樣には言へねど衣服の材料は繻子、紗、羅紗等を多く用ゐ居るが如し、天津は是等流行物の起原地にして俳優などは天津下りに非れば幅の利かぬものありと、婦人の服には縞物皆無にて地質に紋のあるものを各種の色に染めて其上に刺繡を施せるもの多し、

上流社會の支那婦人は日々深窓に在りて刺繡を事とすれば裁縫の伎能無きもの多く、仕立屋に命じて裁縫せしむるを常とす、其の代には靴を製する風あり、上流中流押なべて自家用の靴を手づから製造するが故、市中には別段靴を鬻ぐ店といふものなし、此の習慣は畢竟支那婦人が纒足を他人に見らるゝを厭ひ親子夫妻の間にも見せぬ風あるより來れるものゝ如し。

裝飾物としては金銀を尊重すること無論なれど、金銀よりも多く寶玉を尊ぶ風あり、わけても翡翠第一にて次いでは古玉、雞血等の寶石類を愛用す、躰の左右に垂下げたる香袋は、實用よりは寧ろ裝飾物となりて色糸の飾を附け刺繡したるもの多く行はる、男子は又た扇袋てふものを用ゆ、扇は支那人の最も珍重する所のものにして、扇面の繪には精神を籠め衣匠を凝らしたるもの多し、婦人用の物は骨多くして男子のに比すれば短く華奢造りなり、我邦の扇と異る所は骨を糊付にせずして、骨の入る可き所を袋張にしたるにあり。

支那人は一般に昆布を愛用するの奇習あり、昆布は我邦より多額に支那內地に輸出する所なるが、昆布其物の味を賞美するにては無く、寧ろ其味よりは其れに含有したる鹽分を愛するが如し、支那は鹽稅頗る多額にして鹽政大臣といふ鹽政にのみ關する大臣さへ有る程なれば非常に高價にして平民間には容易に得難き所、されば他の食物と共に鹽昆布を炙て其鹽を煮出すよりの風習なりとか、正月は日本と同じく粳の餅を搗き又た饅頭をも製す、此外尙は豕の肉を神に供ふる習慣なるが上流社會に於ては豕の胎兒を最も珍味として持囃す奇風あり、我邦の門松の代には聯を張り、立春大吉祥雲滿堂などの文字を麗々しく書しあり、その上に色提灯を下け天后聖母を祀る、こは福を祈る神にて船頭等も多く信仰す、又た上隍廟といふものありては日本の氏神とも云ふべき神にして小さき都會にも必ず祭祀するの祠あり。

支那の町には湯を賣る店あり、來客などのある場合には湯店より湯を購ひ來つて煎茶の料に充つ、此賣湯にも上等下等の別ありて上等は飲料用とし下等は洗濯行

水等の雜用となす、支那は節儉の國柄なれば冬季といへども日本の如く長火鉢に櫻炭をカンカンおこす等の贅は無く、手を焙るには手爐を用ゐ、足を暖むるには足爐を用ゐ、生活方法頗る簡單にして中には一室に三戸を同居せしめたるもあり。

支那の貨幣に就て言へば彼の一兩が我が一圓三十錢替の相場なる時はその下位も同じく一三の割にて算すべし、則ち蜜柑十個六錢といへば三割增の七錢八厘となる理屈なり、されば此の理に通ぜぬ時は思はざる損失を招く事往々にしてあれば注意すべき事共なり、兩以下には自國の補助貨幣無ければ多く日本銀貨を使用し居れり、貨幣授受の際には充分に其眞僞を鑑定し、細微なる所に迄注意すれば貨幣鑑定者といふ專門の職業さへありて割合に多額の俸給を受け居れり、金錢に拔目の無いは驚く許りなり、乞食に錢を惠む塲合にも若し小錢無ければ大きな錢を出して乞食より釣を取るが如き、頗る奇觀といふべし。

支那の衡器は御客衡、亭主衡の二樣あり、物品賣買は多く量目を以てするが故衡器は商賣上缺く可からざるものとして注意さるゝ所なるが例の狡猾なる支那人の事とて衡の目を盜むに得手たれば客の方にては亭主の使用する衡に信用を置かれぬが爲め客の方より衡を持行ノ風ありされば衡御持參なれば何程當方の衡なれば何程と一種の代物に二樣の價を明記したり、面白き習俗といふ可し。（鹿硯）



婦人と職業

婦女内職のしをり

婦人の職業に就ては、甞つて都下の新聞でも之を通論したことがあつたが、吾人もこの問題に就ては、少なからず重きを措いて居ると共に、又之が今日の生活上輕々に看過すべからざるの問題であらうと思ふ。

婦人の職業と言へば、或る意味に於ては極めて範圍が廣いのであるが、吾人が今茲に言はんとする職業なるものは、啻に家政的職業を意味するので、言ひ換れば、婦人の内職である。

内職、この語は甚だ卑吝に聞える感があるので、從つて單に内職と言へば、恰かも裏店長屋に生活するもの丶職業でもあるかの如くに聞えるのである、が、この内職なるものが、果して卑吝なものであらうか、裏店長屋に生活する下層社會のもの丶みの職業であらうか、決してそんな筈はない、而も世間は之を卑吝なもの丶如くに思ひ、下層社會に於ける婦人の職業の如くに心得つ丶あるに至つては、吾人實に世間一般の婦人が我儘にして贅澤なるに驚かざるを得ない。

若しこの内職なるものが、果して世間一般の婦人が思惟するごとき卑吝なものとすれば、世に果して貴き職業があらうか、大臣より車夫輩に至るまで、啻に生活するべくこの世に働きつ丶あるのを見れば、固よりその執る所の職業に於て何等の高下はないのである、況んや之を婦人の職業として見れば、大は深窓に育ちたまふ奥様お孃樣なるものより、小は裏店長屋に生活する娘達に至るまで、その執りつ丶ある職業に於て何處に差があらう、小學校に教鞭を握りたまふのが蝦茶式部の勤めであるなら、工場にマッチの函張りするのも又裏店娘の勤めである、それを、徒らに身分の高下を論じて、内職は下賤のなすもの丶如くに心得、長火鉢の前に烟を輪に吹く奥様や、品性とか身分とかを口にしたまふ權式高きお孃樣が、親をへこまし夫を尻に敷きつ丶

あるに至つては、吾人の眼より見て、いさゝか片腹痛き感があるが、之と言ふのも、そも／＼社會の風潮が一般奢侈に流れて居るので、之を矯正するには、婦人自らその職に當つて勤儉を行はねばならぬ、勤儉固より物を節するのみてはない、時間の節約、仕事の勉強等は固より言ふまでもなく、更らに職なくして遊惰に耽りつゝあるもの、新たに職を求めて家政の助けをなすが如きは、蓋し勤儉中の重なるものてあらう、つら／＼今日婦人社會の狀態を見るに、上流下流を通じて、皆一般奢侈遊惰に流れて居る、殊に官吏、會社員等に於ける家庭の如きは、尤も甚だしくこの弊風がある夫は日々營々として勞苦しつゝあるのに、妻君は家に在つて長閑に烟草を燻らし、下女を叱り飛ばすを能とし、子供の守か小說本讀む位が關の山、更らにその甚だしきに至つては、夫は日々腰辨當て役所通ひをなし、汗水流して一家の爲めに犧牲となりつゝあるも、妻君獨り傲然として奧樣風を吹かし、家政は甚だ難澁なるも、尙ほ下女の一人も使はねば自分の體面が保てぬ如くに心得、內實やり繰り算段にその日を過して、表面飾らても好き體裁を作りつゝある、之等は啻に奢侈遊惰の惡風のみに止まらずして、夫に對して又不貞てはあるまいか。

內職にも勿論種類がある、裏店的內職もあれば奧樣的の內職もある、之を以つて、吾人は徒らに裏店的內職を以つて、世の所謂奧樣なるものに向つて强るのてはない、即ち奧樣的內職、妻君的內職、お孃樣的內職下つて裏店的內職を紹介する、もしこの列記する內職が果して一般の婦人社會に向つて多少の參考ともなるならば、記者の願ひは即ち足る。

▲靴下編み（妻君向）　手袋又は靴下等の內職は、世間ても之を內職としつゝあるが、玆に言ふ靴下編みは普通の手內職てはなく、即ち器械を用ゐて作のてある。

○器械と材料　器械は稍々高價のものてあるが、普通は五六十圓より七八十圓にて求められるので、之を內職の道具としては少しく重荷に過ぐるが、それても利益の點に於て、手內職などよりは遙に多いから、一時の資本として之位は擲つても割に合ふ、材料は重にス

コッチ木綿糸の類である。

○利益　手でもつて編むものは、重に毛糸かスコッチの靴下に過ぎないので、それも、如何に腕が達者でも一日一足は編めないが、この器械で製するものは、重に木綿糸の靴下であるが、その代り日に一打や二打は容易のことである、之を大にすれば、職人の二三人も置いて專門に之を營なみつゝある所もあるから、世の奧樣お孃樣方の内職としては尤も適當であらう。

○販路　市内の各洋物店小間物店と特約するも好いが、或は警察その他の官衙に就て、一手に引受けるも得策であらう、が、これは餘りに大裟裂であるから、矢張り自宅で製して卸賣をするのが尤も好い。

▲洗張仕立(妻君向)　之は吾人が玆に喋々せずとも多くの婦人が爲しつゝあるのだから、敢て事々しく言ふまでもないが、而もその方法に就ては聊か參考にもならうと思ふのだから、今吾人が考へ得たる華客を得るの途に就て言はんとす。

洗張仕立は即ち裁縫である、而してこの裁縫が一般の婦人に出來つゝある所から、從つてこの洗張仕立なる看板も到る所に掲げられてあるが、唯に看板を掲げて居つても、年が年中絶間なく仕事を繼續することは甚だ困難のことであらうと思ふ、依つて吾人は玆に下宿屋を華客に持つことを勸める。

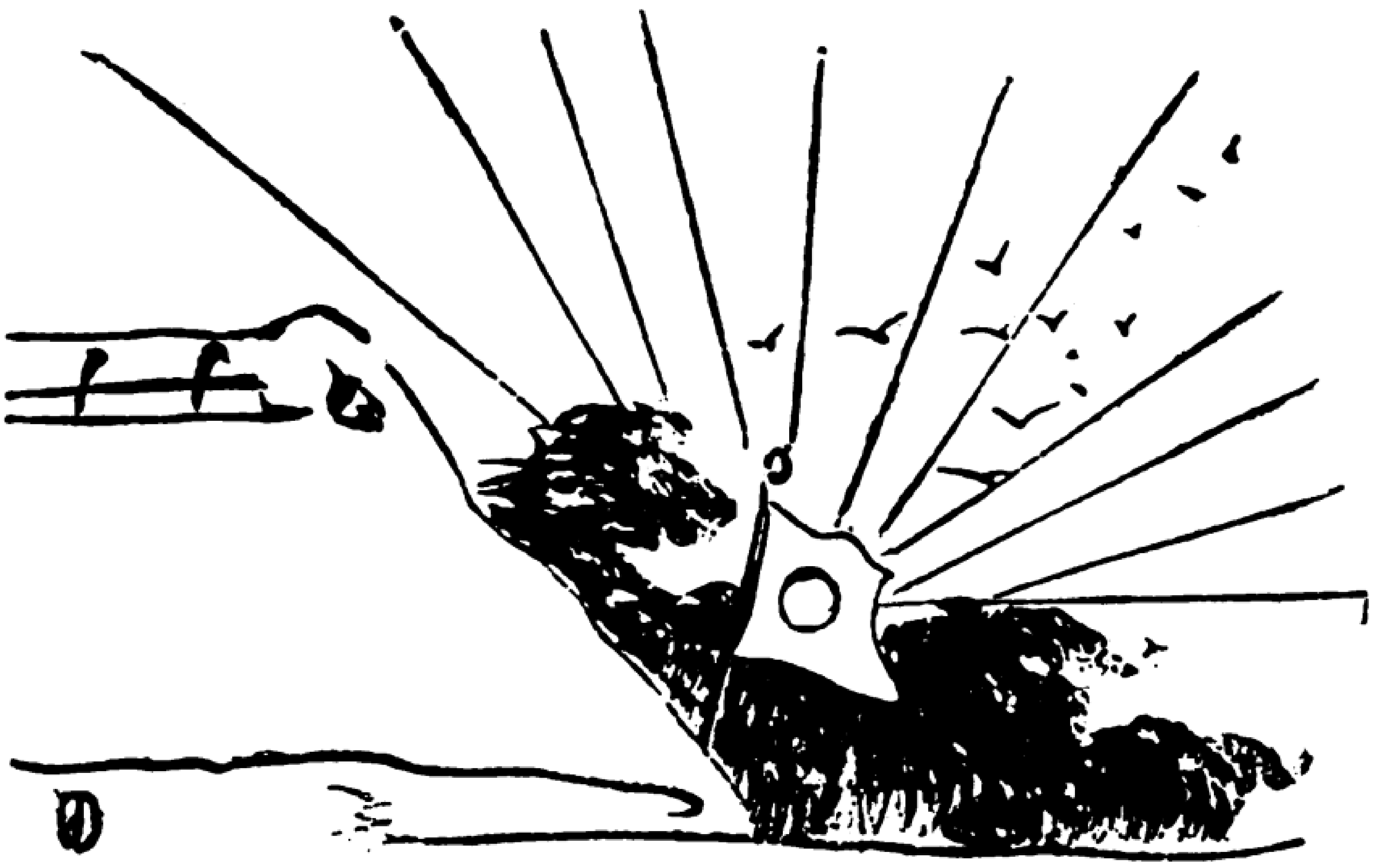
單に裁縫の看板を掲げて居るものは、或は呉服屋の抱へとなつて居るものもあるが、之等は一般に行ふことが出來ないのだから、玆に各自で二三の下宿屋を華客にすれば、年が年中絶間なき仕事を得られる故に妻君的内職に於ては、蓋しこの職を以つて第一とするであらう。

▲寫字(女學生向)　之は餘り筆蹟の惡いものはいかんが、兎に角普通の文字を書き得るものなら、誰しも容易になし得るのである、而もこの職が餘りに勞力を要しないのと、それに束縛されずに自由になし得るのだから自活して自勉せんには、尤も好き内職である。

○收入　收入に就いては、その人の技倆に依つて一定はしないが、今筆耕料の一斑を示せば、普通の罫紙に

楷書て認めて、一枚大凡二錢が普通てある、尤も字數の多きものは三錢位て、少きは一錢若くは一錢五厘てある、そして、達者のものは日に十四五枚より二十枚を書き得るのだから、女一人の生活としては優に凌ぎ得らるゝてあらう。

○寫字生の募集所　これは一種の受負的に營業しつゝある場所て往々寫字生を募集する、由來寫字生なるものは、殆んど男子にのみ限られて居たのて、未だ女子の寫字生なるものを聞かないが、寫字生に於て固より男女の區別があらう筈はない、勿論技量に於て多少の差はあらうが、兎に角女だとて爲し得られないことはないので、之を以つて吾人は世の女學生に向つて寫字生を勸めるのてある、而して女學生がこの寫字生たらんとするの途は、即ち受負的の寫字專門所に就くもよいが、他に辯護士若くば執達吏等に於て求むるのも又上策てある。



▲傭吏　女の官吏と言へば異樣に聞えるが、その實官廳に於て女の傭をする、この傭吏は、勿論女學生の通學するには不適當てはあるが、單に自活するだけに止まるならは、女學生の職業としては尤も適當てあらう。扨この女の傭員を採用する所は、各官廳悉く採用するのてはなく、唯遞信省、東京郵便電信局、及び電話交換局等てある。

○遞信省　に於て採用する課は、電報調査所の一課て、從來より女子を採用しつゝあ

つたが、その手續方法としては、敢て試驗等を用ゐずに、たゞ緣故や手蔓を以つて採用してゐたのであるが、近來に至つて、女子を尤も多く採用するやうになつたのは、この電報調査所以外に、別に省內に於ける郵便爲替貯金管理所である。

○郵便爲替貯金管理所　同所で女子を採用するようになつたのは、今より五六年以前のことで、當時は、未だ女子の傭員は極めて少數であつたが、爾來年々女子の傭員を增加して、今では或る課の一部に於て悉く女子を以つて充てるやうになつた、從つてその採用手續等も、電報調査所のやうに手蔓緣故等を以てせずに、重に試驗で採用するのである。

○試驗の程度　試驗は管理所內で之を行ふその程度は高等小學卒業位であるが、之は表面だけのことで、その實極めて易々たるものである、讀書、作文、珠算、筆算等が重なるものである。

○給料　試驗に及第して採用を得れば、最初二十錢乃至二十三錢が普通である、それから六ヶ月若くは一年を經て、事務に習練すれば、書記補となつて月給八圓より九圓を得る、爾後年を追ふて一圓づゝ昇給するので、十二圓位が大概止りである。

○郵便電信局　この局で採用する傭も、同じく管理所に類する爲替貯金の事務を扱かはせるので、試驗の手續及び給料等は、悉く管理所に於る傭員と同じである。

▲髮結　概していへど之は裏店的內職であるが、而もこの職業が內職として尤も收入が多いのである。髮結にも固より上下の差はあるが、上なるものは即ち上流社會に出入し、下は普通の中流社會に出入するので、その品格その收入に於ても又各々大差をなすてある。

○華客　髮結に上下の區別がある如く、その華客に於ても又差はあるが、玆に言ふ所の髮結は、所謂裏店的髮結を言ふのである、その華客に於いて固より上等の華客があらう筈なく、從つて收入に於ても普通の髮結の如くにはなく、妻君娘を華客としてゐるのである。

○収入　華客の範圍が極めて狭いのと、その華客が多く妻君的娘的であるから、普通の髪結と比較すれば餘程劣つて居る、と言ふのも、妻君的娘的の華客は、多く髪結の手を煩らはさないのと、その賃銀の稍々安いのが原因である、普通の髪結賃が通例五錢であるならば、この種の髪結賃は三錢乃至四錢である、故に、一日三十錢乃至四十錢の收入を得るには、一日十人の華客を要するので、この收入を日々得んとすれば、少なくも華客の四五十も得なければならないのである、好しそれだけの華客がなく、それだけの收入がないとするも、それでも裏店的内職としては比較的上の部であらう。

▲印刷局女工　この印刷局女工なるものは、汎く世間に知られて居るから、吾人が茲に紹介するまでもないが、而もその手續方法若くは勞働及び收入等に就ては少しくのべやう。

○手續　と言つて面倒なことはなく、緣故や手蔓に依つて入るものもあり、或は募集することもある、而もこの印刷局が尤も多く女工を要するのと、それに試驗と言つても、たゞ躰格檢査位に止まるのだから、職に就くには尤も容易である

○勞働　女工と名の附くものに容易な業はないが、この印刷局の女工も、勞働の點に於ては隨分激しいので、勿論他の機織女工や紡績女工の如くに甚だしくはない、兎に角官廳と名の附くだけそれだけ、他の女工とは同日の比ではない、普通の勤務時間は、午前六時より午後の六時、若くは午前五時より午後の四時と、時期に依つて多少の差はあるが、兎に角一日十時間乃至十一二時間の勞働は覺悟しなければならない。

○給料　勞働時間は永いが、而も給料に至つては又比較的少ないので、最初普通のものは、日給十四五錢より十五六錢位、で爾後漸次に一二錢づゝの昇給はあるが、日給三十錢乃至四十錢を得るには又容易のことではない。

▲足袋の下職　この内職も餘り多く行はれて居ないのであるから、之を上品なる裏店的内職として紹介する。之は腕の熟練を要するので、針の達者なものでな

ければならない、何となればこの內職は非常に薄利なので、從つて收入に於て甚はだしい相違があるのだから。

足袋の下職、即ち足袋屋より受け來つて下職をするのである、下職は底以外を縫ふので、或は全部悉くを縫ふのもあるが、多くは底以外だけを縫ふのである、年が年中仕事に休みのないのがこの內職の取柄である。

○收入　その人の腕前と足袋屋に依つて相違はあるが、一足縫ふて普通が四五厘より六七厘、多きが六七厘より七八厘、之て近來稍々騰貴してこの相場になつたのだといふから、以つてこの內職の薄利なるを知るに足るべしてある、故に餘程の達者てなければ割に合はないので、普通のものなら一日漸く十四五錢より多きは二十錢位にしか止まらないさうてある。

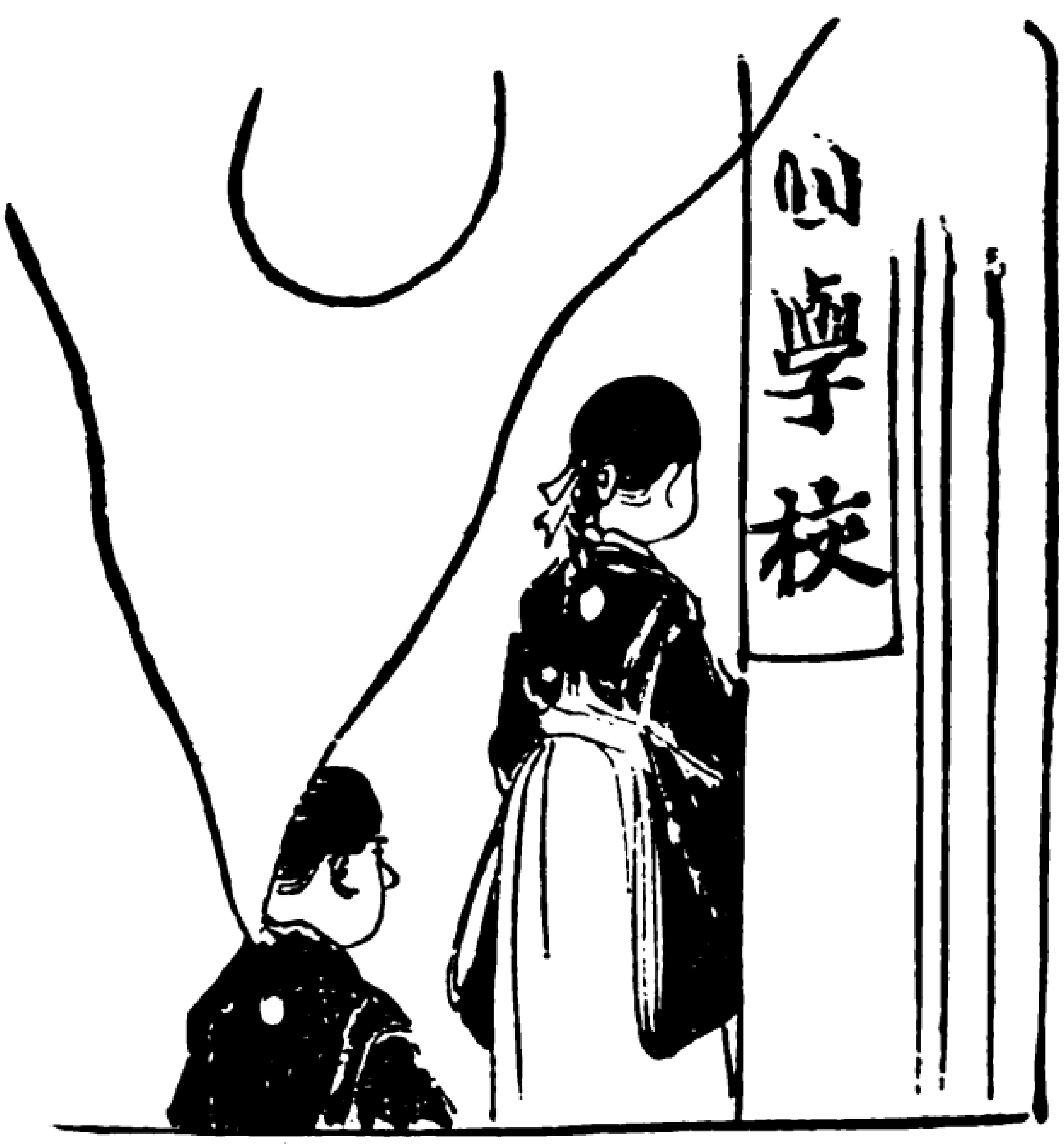
▲下駄の鼻緒ぬひ　之も足袋の下職と似寄つたもので、一足が漸く二三厘より四五厘、品の上等なるものが、四五厘より六七厘位なさうて、收入も又略ぼ同じ位ゐてあらう、場所は淺草の今戸花川戸の附近に多くの問屋があるので、抱えるものもあるが、又より多く外に出すのだから、之れも仕事の方では不自由せぬてあらう。（東風生）

婦人の賃捲煙草

麻布赤坂又は四谷邊の山の手を散歩する者は隨所にブー、カチヤンの音を聞くてあらう。是は我々が日夜口に味ふて居るかの紙卷煙草を卷く器械の音てある。此の音の主なる器械の踏手も、又側に坐して仕上を爲て居る者も總て皆な婦人許て在つて、中には五尺の男子も無いてはないが、其等は極て少數に止まり、大抵は婦女子の從職者が多いのみならず、實際婦女子で無ければ間に合はぬ仕事であるから、女職の一つとして紹介して置かう。元は手卷と言て眞鍮て拵へた手輕な器械を用ゐたものだが近年足踏器械を發明してからは、遲つこい手卷杯をするものは少く成て多くは皆な此の器械卷に乘替て了つた。宛ら機を織るやうな姿勢て器械に腰掛けた婦女がブー、カチヤン、ブー、カチヤンと一

秒毎に巻き出して行く幾十萬本の巻煙草は總て美裝せられて市中に列べらるゝのであるが、其の斯う成つて我々の口に入る迄には何程の手數が掛るものであらうか、葉府とか刻とか袋貼りとかの原料方に屬するものは言はずもがな。元方から女工に渡されてからも、打ち、差し、切り、束ねる等の手順を經て、初て五十本宛の束に成るのであるから、その手間日間を數へ立てたら仲々容易のものでない事が解る、其を我々は側からパツパと吹かして煙にして了ふのであるかと思ふと勿躰無い樣な心持も催て來る。

▲器械の構造　足踏器械にも幾通か有るが要するに岩谷式、永田式の二種が最も廣く行はれて居る。何れもその考案は機織器械から脈胎して來た樣に思はれる、機の綾の代りに押切庖丁、梭の代りに鐵の棒を用ゐ、之を動かすに螺旋を以てし、其の螺旋を伸縮する爲に足踏を要するといふ仕掛である。此の器械は巻手の爲に貸付る所が在る、敷金の多少に依て損料に高低はあるが大抵一月一圓五十錢から二圓迄の間で貸付て置いて月末の勘定から取立てるといふ仕組に成て居る。



▲原料の供給　當今市内で紙巻煙草を盛んに製出して居るのは岩谷、千葉、木村それに此春頃から新たに京都から打入て來た村井を合せて四軒ある。岩谷の天狗印、千葉の牡丹印、木村の星印、村井の忠勇太閤等がその重なるものである。此等の家では皆夫々原料を取次ぐ所を市内各所の便宜の地に設けて有るから、新に此仕事を始めやうとする人は最寄々々の取次所に申込んで案

約を結び、原料の供給を爲て貰ふのである。

▲込め方　器械を踏んで卷紙に煙草を込める順序を咄さうなら、先づ粗刻の煙草を臺の左方に備へ付けた送り箱に入れ置き、卷紙を口金に鉗め、原料を庖丁の根に送り乍ら右足を踏んで庖丁を落下し、次に左足を踏卸して鐵の棒を前に突き出す、其力に壓されて管の煙草は圓筒形を成して卷紙の中に一杯に籠まるのである、是を幾度と無く繰返し繰返して例のザー、ガチヤンを緻速く續けて行く内に何千本の卷煙草は看々かたへに堆くなる。其れを仕上の方へ廻はすといふ手順である。

▲仕上方　一口に仕上といふものゝ此の内には口紙をさす事、末端を切る事、束ねる事などが在て、多樣の手數を要するので、込方よりも餘計に根氣が入つて三倍も手間が費れる。だから器械一臺即ち踏手一人に對して三人の仕上方を要する。尤も仕上は大人よりも目の鋭い、指先の達者な少女の方が出來榮も美く、捗も進く。先づ踏手から込め上つた煙草を渡されたならば直ぐ口紙を卷くのである。口紙は普通二百枚一把だから千本仕上るには、之を五把解かなければならない。捲き方は右の母指と食指とで蠟燭の心のやうに尖端を出して所謂筍卷といふのにするのである。而して兩手の掌で撚付けてライスの口に指し込む、けれど唯だ差したのみでは不完全であるかも知れぬから穴を覗て見て渦の卷盤桝やライスとの鉗り工合を改めて視る。それが濟むと鋏で末端に喰出た草を切落す。此の切り樣にも呼吸が在て、ライスと摺々に平に切らねばならぬのだ。一本づゝ離してある時はさのみ目にも立たないが束にしてから見ると鋏の當て工合で折角の煙草を臺無に爲て了ふ事がある、丁度下手な散髮屋が人の頭を段々に刈やうに、其は〱見とも無いものに成る。扨て此の次は束ねるのであるが、兩手に握つた煙草を六角形に纒める、即ち兩端を六本宛、次を七本宛、中を八本宛三通に揃へてキチンと六角形を爲さしめる。最後に美濃紙の結苧を帶に廻して端を捻つて置く、是て先づ一通り仕上つて元方へ持て行かるゝ許に成るので

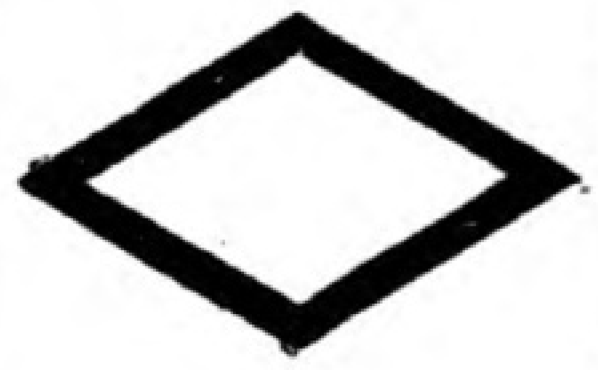
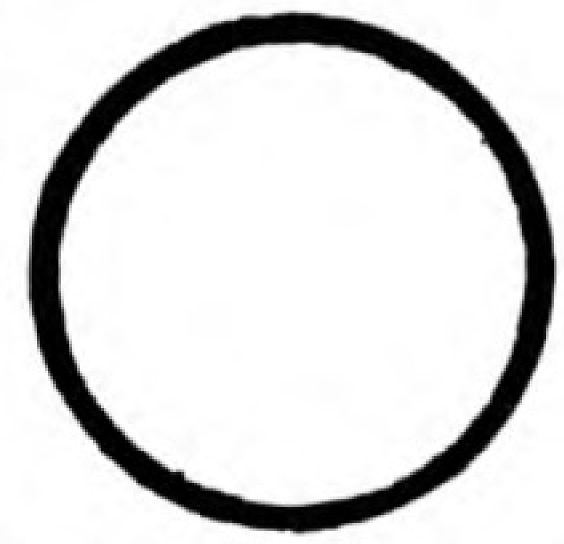
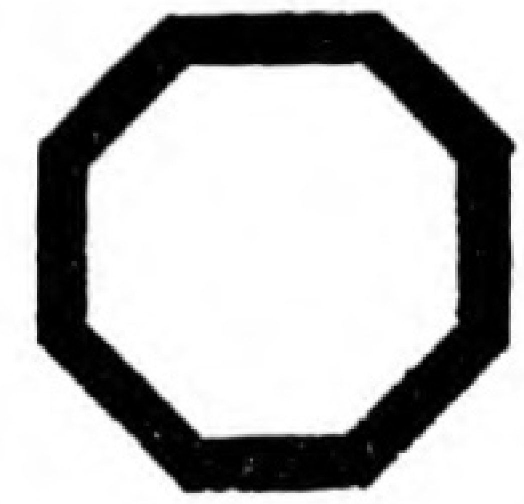
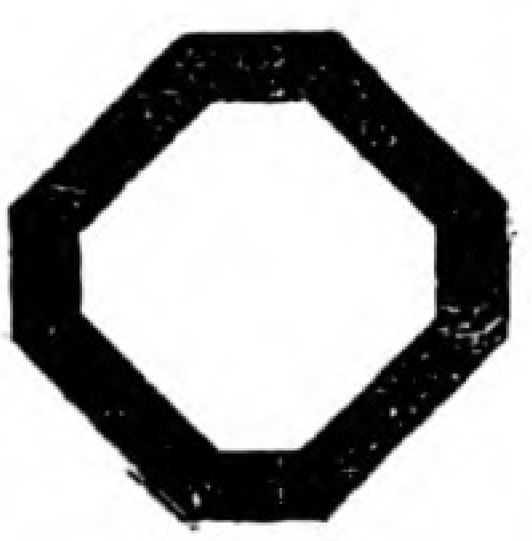
ある。

▲物品の検査　一玉は二斤で量目に直すと二百四十目から有つて宜い筈だけれど、實際貫々に掛て見ると二百目が餘程缺けて居るさうだ。甚しいのに成ると百七十目やう〳〵のも有るとか。扨て此一玉を千二百本に仕上る。即五十本束を二十四束拵え上るのである。けれど素人の内は極め通りに仕上るもので無い。乾度幾千か捲込んで了ふ。巻込ぬ積で遣ても後で數へて見ると千本の内で五十本なり百本なり不足する。其が溜り溜つて終ひには一萬本二萬本の多きに達する事すらある、加之出來上りが惡いと衝返さるゝ虞がある。朝から晩まで骨を折つてエンヤラヤット拵え上て、ヤレヨシと思ひ通箱に入れて元方へ持て行くと、先づ煙草の本數から、込め方、吸口の差し樣、尻の切り樣の善惡を一々検査して見て、若し何處ぞに缺點でも發見すると直ぐ其場から不合格として却下されて了ふ。此の時の心持ちと言つたら實に泣き度なる程つらい相である。折角擔ぎ出したものを持返へして奇麗に拔いて了つて新規巻直しをするのであるから勢ひ煙草の目は減て了つて元通りの本數に仕上る事は到底出來無い。その手間許ても何程の損だか知れない。斯ういふと恐ろしく六ヶ敷いものゝ樣に思はるゝけれど其も初心の內、辛抱して遣て居る内には習ふより馴ろて、呼吸も呑込み、工夫も出て來、手も枯て來るので無駄な手數をも爲ずに濟む。供給はれた原料はチャン々々極つた丈の本數にして持て行かるゝ許て無く、巻出と言つて定規の外に餘分の煙草を拵え出す事が出來るやうに成る。斯う成れば最う締めたもので一日一日と速力も加はるし、仕上本數も殖えて來る。初め漸く千本位が關の山て在つたものも此に至つては優に五千六千本の多きをさへ仕上る事が出來るさうである。

▲用意と注意　高が煙草を捲く位何の雜作も無い、素より美術がゝつた仕事ては無し、緻密を要する譯でも何でも無いから直き覺えられさうに思はれるけれど、さうは手易く問屋で却さぬと見え。いろ〳〵の熟練と注意とが要るさうだ。先づ込め方でいへば原料を打込

んで不足さするも、巻出して原料を剰すのも、柔かく込める事、堅く込め過ぎるも、皆な是れ踏手の巧拙如何に在るのだから、隨分氣骨も折れるさうな。其故常に器械の工合、草の乾濕、送りの分量等に注意して、仕上から劍突を喰はぬやう努めなければならない。又た仕上の方で言へば品物を穢くしないやうに、可成奇麗に手際よくするとか、或は堅く込つたものへ口紙を差さうとする無理に押せば腰折が出來るとか、鋏の切口にポコンと穴が穿いて紙がプカプカに浮いて、吸口の方から吹くと中の煙草が皆飛出して了ふとか、是等は孰れも不合格であるから手數を掛けぬ内に跳ね出して了はなければならない。尚ほ又た季節に據て取扱かひ方を違えなければ不可い。春から夏にかけては殊に雨期の候は煙草が濕氣を含んで居るから、風に當てゝ火に燥かすの手數と注意が要る。濕けた煙草程扱ひ惡いものは無いと言つて居る。其故は煙草に水氣があるので器械にからみ付いて運轉を据倔させる、従つて仕上にも困難を感ずるからであらう。其柄秋から冬にかけては煙草が乾燥いてパサパサに成るので、少許風が吹いても粉々に成て了ふ。其故霧を吹いて可成外の風に當てぬやうにする抔の心配もあるさうだ。

▲賃錢　元方によつて幾らか違ふが先づ大抵千本拾二錢が目下の相場であるさうな。千本拾二錢として五千本の六拾錢、一萬本の一圓二十錢であるから、假し器械の損料を拂ふたとしても月々平均十二三圓の收入には成る。その外に前にも言つた捲出しといふのが、仕上高の五分(一萬本に對して五百本)程にも成らうから、是が仲々小さくは無い。尚又た家内の看屬共が喫用する煙草迄も掃寄やら粉煙草やらで充分買はずに有り餘つて行くから、細い女の內職としては餘程割の善い仕事と言つても宜からう。殊に家族多の人逹には最も適した仕事であると言て善い。(寿人)

			
四ツいかり	菱輪	糸輪	八角
			
太輪	中輪	影雪輪	細輪
			
鍛碗角	角切	小持輪	八ツ花形
			
四ツ目	唐花四ツ目	笹りんどう	桔梗

才媛詞藻

佐々木信綱先生選

(天) 神樂　弘前市　平山ちい女

五とせのつらさを君と語りあひて
鎮守の森に神樂みにゆく

評　可憐なる村少女の面影浮び出る心地すこたびの中の秀逸なるべし

(地) 紅葉　廣島市　和知廣子

錦着てかへらむといひし兄君の
おくつきどころもみぢ散るなり

評　錦着て故郷に歸るといふ想はいひふりたれどしかいひつゝ國を出し兄の牛途空しく病を得て故山の土となりしといへる着想は未た人のいはざる所いひ得てよし

(人) 紅葉　弘前市　今ちか

盛りなりかならずこよともみち葉を
ひとひらいれし乳母よりの文

評　いひざまやゝかはりたるをもて採りつ原作三四句もみち葉の一ひら封せしは調いたく劣れりよみ味ひてさとり給へ

(秀逸)（神樂、紅葉、煤拂）

里神樂聲靜まりてさびしくも夜空にひゞくかしは手の音　弘前　今ちか

父ましゝ時こそ人もつとひしかそしむかひなき庭のもみち葉　京都　三宮露子

評　上句はすぐれたれと下句劣れり再考せらるべし

たゞ二人ふたりたちたる片岡の紅葉の林夕日さすなり　神田　松寺綠子

大君のみゆきはなくて五百年嵯峨の山道もみぢこぼる　宮城　渡邊しげ子

少女子も茜のたすきうちかけておのが手ばこのすゝはらひする　河内　大矢たれ子

學やのゆくさかへさにかたらひし峯の紅葉ははや散りにけり　奥羽　靜子

み社のわけのとりゐに月ふけて笛のねさゆる里の夜かくら　東京　すゞき

病む妹が目覺めむ事のつらくして煤拂ふ手のはかどらぬ哉　佐賀　石井とめ

妹をつれてなに波のみやまいり五とせぶりに見る神樂かな　牛込　富永蕙子

評　上句のいひさま猶あるべくや

ふる里のそれにも似たる山越の行手の紅葉色なつかしき　神戸　中村菊子

夕暮を群れゐる鳩の羽ばたきに紅葉かつちる神の廣庭　宮城　濱野はな

あたらしき年を迎ふと神棚の煤をはらひてあかしあけにけり　名古屋　彩錦女史

水はかれ軒はゆかめる水車小屋の壁に淋しきつた紅葉かな　埼玉　林若葉

とぶ鷹の羽風恐れてひな雀逃げ入る軒に散る紅葉かな　和泉　井上清子

なき人の手馴の笛も見いでけり家のくまぐ〵煤拂して　東京　倉富多加

歸り來し我身耻かし故郷の山は紅葉の錦飾れり　埼玉　遠藤千代子

うぶすなの夜神樂はてゝ人ちりて月影寒し宮の廣神　下谷　外河花子

里の子かいくさまねびの旗風にもみぢみだるゝうぶすなの森　岐阜　立田松子

すゝはみし甲冑はらひて遠き祖のいさをし語るひげ白き翁　和歌山　佐山靜子

評　原作二句すゝまみの冑はらひつゝ

佳調

神樂　常陸　鈴木ぎん子

千早振神のみまへに木綿とりてたち舞ふ袖の風にあやある

靜岡　白露女史

母親が稻になひゆく彼よりうなゐもかへる秋の夕ぐれ

神樂　京都　松永敏枝

さかきとる庭火のあたり神さひて月影さむし明方の空

神樂　名古屋　富田重子

少女子が立舞ふ袖の長き夜もいと面白き里かくら哉

紅葉　ふじなみ

嵐山きり立こむるをち方にくれなゐにほふ薄紅葉かな

紅葉　三河　松崎美登利

雁鳴きて秋たけゆけば露霜にとなせのあたり薄紅葉せり

煤拂　京都　那須千代

諸共に心のちりを打拂ひいざくる年の春を迎へん

紅葉　伊勢　岸田春子

夕日かけ斜にさしてもち葉のてかけまはゆき岡たえの道

紅葉　各古屋　鈴木ちゑ子

ちりかゝる庭のもみぢば秋にうけてくれゆく秋をしばしとゞめむ

紅葉　本郷　齋藤花

ますらをがゑみて讃れしあと訪へば秋風さむくもみぢ散るなり

紅葉　芝區　細野幸子

月を負ひて牛曳きかへる夕まぐれ鹿の聲して紅葉散るなり

神樂　東京　朝倉とめ

さわがしき神樂の音もしづまりて鎮守の森に日はくれにけり

神樂　甲斐　越山つれよ

たなつものゆたにみのれと保食の神の御前に舞ふ里神樂

紅葉　伊勢　森本靜子

入相の鐘つきいます老僧のやせたる頬に紅葉ちりきぬ

紅葉　伊勢　鐵東くに子

迷ひ來て紅葉の溪に入りにけり夕日うら〳〵名なし鳥なく

煤拂　河内　巽白百合

すゝけたる軒の簾もとりかへて急がしげにも送る年哉

煤拂　河内　巽かつら

人並に煤ははらへど積りたる心のちりは其まゝにして

紅葉　河内　巽かつら

箕面山嵐のしぶきの染めてけりぬれ色ふかき谷のもみぢ葉

煤拂　三重　石澤あき子

思はずも現はれ出でし羽子板のひとり榮ある煤掃かな

神樂　鳥取　君野靜子

大庭に里のをのこのかくら遊び神もおかしと笑み給らむ

神樂　針生まさを

小春日を村の御寺の廣庭に里神樂ありて人集ひけり

紅葉　美作　三船みち代

松がくれ紅葉いろこき驛路を京へ貢ぎの飾り馬ゆく

紅葉　大分　甲斐ゑい

常磐なる松のこの間をたのみにてことしもかへてく色つきにけり

紅葉　伊勢　岡島蝶子

舍人等が紅葉のかげにあたたむる酒盡きなくに夕日いざよふ

神樂　吉田みれ子

何となく神々しさもまさりけりあれし宮居の神の御神樂

紅葉　河内　櫻井喜子

すさましく手負の猪のわたる見えて紅葉こほるゝ谷の苔道

紅葉　大村　兒玉まき子

秋風に野邊の尾花も折りぬれどなほ色のこす峰の紅葉

紅葉　高知　兒島えい子

高倉のみかとの頃もしのばれてたゝまくをしき紅葉のもと

紅葉　信州　山崎緑子

紅葉ばの色濃くなりし此頃はつゞれさせとて鳴く蟲もなし

紅葉　長崎　古賀秀子

風ふかば散りもみだれんもみぢ葉の上にやどれるくれなゐの露

紅葉　肥前　又川粂子

錦ともみゆるもみぢのちり行くは亡せにし人のあとや追ふらん

紅葉　信州　山崎りん子

繪にせんか歌にせんかのたゆたひにさ霧とざしぬ溪のもみぢ葉

神樂　東京　保谷いね子

豐原の瑞穗の民の舞ふ袖を神もうれしと見そなはすらむ

神樂　和泉　井上濟子

篝火の木も白みて朝倉の笛の音さゆる明方のそら

紅葉　紀伊　郭雪子

村しぐれ晴れゆく空になく雁のはがひの山は紅葉しぬらん

紅葉　和歌山　郭早苗

うら庭のたけみじかなる木々も早とき知りがほに紅葉してけり

神樂　志摩　濱口しづ

御神樂の鳴り靜まりて風やみぬ神さぶ森に梟の鳴く

紅葉　芝　水野君子

我が籬に近き山里の紅葉のおくの紅の下よ

神樂　本所　山田雪

ちはやふる神代の頃もおもはれてあたりかしこき神あそび哉

紅葉　和歌山　郭政子

奥山の木々の紅葉や散りつらん錦流るゝ黑川の水

紅葉　日本橋　生方秀子

亡き母の愛でにしもみぢ折りしかどおくり届けむ道しらずして

紅葉　周防　中谷乙羽

くれなゐの花か錦か我袖に色うつろへる庭のもみぢ葉

紅葉　千葉　小出ひで

たづねこしおくつきどころ秋たけて苔の上さむくもみぢちるなり

神樂　和歌山　美山女史

朝くらやうたふ聲音に大神も天の岩戸を思ひ出づらむ

紅葉　和歌山　美山女史

ふるさとのはゝその紅葉いまいかに雁よ羽かせ行きて見て來ん

紅葉　新潟　吉田梅子

色とりし入日の影はうすらきて夕風さむくちる紅葉かな

紅葉　金澤　立田久子

秋深く翠瀧の池の水やせて魚は動かず紅葉ちりかふ

神樂　三重　吉村八重子

杉檜つゞく宮の神さびて神世ながらの神樂聞こゆる

紅葉　新潟　萩野てる子

色つきし軒の楓のうつくしく主人ゑみつゝ歌詠みいます

紅葉　信濃　和代子

大そらも染まんばかりにみゆるかな夕日まばゆき山のもみぢば

紅葉　牛込　富永蓮子

あさまだき起きいでゝ掃く老僧のあとに且つちる紅葉うつくし

紅葉　　けた子

一群の小鳥とびゆくかげ見えて夕風寒くもみぢ葉の散る

紅葉　麹町　伊藤すみ女

わつらひて十日ふす間に鉢の木のはや色つきて一葉ちりぬる

紅葉　武藏　小川富春

山姫の惠みの露やかゝるらん峯のもみぢ葉ことに色よき

神樂　佐賀　江口しげ子

六歳ぶりにいたくみのりし此年の神樂賑はし秋の山里

紅葉　福島　武藤しげ子

夕日影落かゝりたる野の杜のならのかたえは紅葉してけり

紅葉　福島　武藤靜江

瓢負て今風流雄の歸るなり里山紅葉家つとにして

紅葉　岩代　武藤哲江

太刀をぬきて滿ほゝゑめり紅葉はの血しぼみたるゝ谷かけの庵

紅葉　徳島　速愛女史

共に植えし庭のもみぢばいろこきを君やいつこに君やいずこに

紅葉　京都　片島小やぎ

山鳩のなり〳〵立ちて御社の神饌の上に紅葉ちるなり

すゝ拂　下總　清水すゞ子

新玉の年を迎へんいざゝらばつもりし塵をはき清めつゝ

すゝ拂　下總　清水凉子

一と年の塵の限りをはきすてゝ心樂しき今日にもある哉

神樂　河内　高野八重

はふり子かあかほし歌ふ客すみてほの〳〵しらむ夜神樂の庭

紅葉　對馬　村井秀子

振りかへり靜なかむる老翁の菅笠の上に紅葉散るなり

紅葉　佐賀　泉　眞波千代

少女子が小袖の色にしてしおな夕日に匂ふ峰の紅葉

紅葉　佐賀　川渕すゑ子

夕づく夜色赤はしき紅葉の中に遊べる少女子のむれ

神樂　神戸　今村竹子

ゆふかけてみまへに歌ふ里かくら面白しとや神もめづらむ

神樂　岐阜　立田松子

うぶすなの御囃子更けてみとりする祖父がうつゝのかくら歌きく

紅葉　埼玉　林若葉

雨の夜を手燭とらせておばしまに國のつかさの紅葉見給ふ

紅葉　信濃　竹鼻はる子

を鹿鳴くしまのもみぢにあけそめて入江にのこるありあけの月

紅葉　伊勢　森本さいち

春ならば茂らんものを面毎に木々の梢は色つきにけり

神樂　河内　大矢たれ子

八平手の音もとたえてふけわたる齋庭しつけきみかくらのこゑ

紅葉　河内　大矢たれ子

一むらのさくらの紅葉夕映えて鐘のねきこゆ嵯峨の奥原

紅葉　前橋　花岡藤代

北しぐれすぎたる森のつたもみぢ赤き心を見せて散りゆく

紅葉　豐前　伊東けい子

神無月時雨の風の烈しさにそむるまもあらで散る紅葉かな

煤拂　高知　高橋ゆき子

あたらしく幸ある年をむかへんとうたうたふ聲煤拂ふ音

紅葉
大空も匂ふばかりに見ゆるかなゆふ日まばゆき楽の紅葉
岐阜　山田富子

神楽
なべて世のゆたけき年のしるしなれや鎮守の森にひゞくふえの音
高知　高橋ゆき子

神楽
木の間より鎮守の鳥居ほの見えて神楽の音はきこえそめけり
名古屋　鈴木政子

紅葉
うちつゞく紅葉林に入日さし血潮わき立つ南の海
伊勢　横木光子

紅葉
雨はれて夕日さしそふ紅葉はひとしほ赤く見え渡るかな
佐用　松本秀子

紅葉
うつすとも筆もおよばし高雄山にしきとみゆるみねの紅葉
京都　村井湿江

紅葉
遠く近く色濃く淡く染め出てししくれの展古黒を思ふ
岐阜　中村益子

紅葉
さらぬだに錦の色のまばゆきに朝日てり添ふ峯のもみぢば
下野　増澤とみ子

紅葉
一しきり夕風そよぐもみぢ葉の散りの最中を鹿の聲する
茨城　三田はや子

紅葉
母と共に十年の昔眺めつる紅葉は散りて母ましまさず
丹波　田中敷枝

紅葉
栞かりに行きし森も一枝は手にして歸る米のもみぢば
和歌山　岡中てる子

煤掃
一とせの煤掃してあたゝかに梅の花さく春を待つかな
信濃　竹島はる子

煤掃
煤掃ふ音を聞きても知られけり春待つ宿の心がまへは
伊豫　田中重子

紅葉
秋雨にはかなもみ葉うち散りてかなしきまゝに書にはさみつる
下總　清水すゞ子

神楽
みてくらを神にさゝげて霜の夜半かゝり火白し舞おもしろし
紀州　岡中てる

紅葉
時雨して紅葉散りしく故郷に別れん時の苜の葉のなき
秋田　梅田くに子

紅葉
今咲きぬ日光よりの兄君の御文うれしき紅葉の一
陸奥　角鹿きよ子

紅葉
嵐吹く庭の紅葉はよもすがら目にも降らぬ時雨なりけり
土佐　西尾英重子

紅葉
入相の鐘のひゞきにさそはれて心ぼそくも散る紅葉かな
土佐　英重子

紅葉
たつた川燃ゆるばかりに紅葉しぬなど白雲を染め殘しけん
高知　西尾美重子

紅葉
荒れ果てしあだのとりてに霜おきて曉寒く紅葉散りしく
三河　落えふ子

煤掃
父とふたり煤掃ひして床あげて母のかたみのをぐしいてきし
滋賀　淺野外枝

神楽
かゝりひのかけふけゆきて御神楽の庭いとしろく霜をおきける
嘉子

紅葉
去年まではともにめでしをもみぢばのたむけの水に一つおちきぬ
出雲　三浦あや子

紅葉
入日さす山のふもとの日だまりに小鳥むれゐてちらすもみぢば
甲斐　神奈なみ子

紅葉　青森　平山溪川女
たらちねの奥津城ところ時雨して夕べ淋しく紅葉ちりしく

神樂　駿河　林すき子
みしめひきて榊葉とりて客人の立ちまふ庭に神風のふく

紅葉　河内　大矢たれ子
ちさき鉢に楓をうゑてよろこびし少女はなくて紅葉しにけり

紅葉　四日市　山田とみ
瀧の川流るゝ水も秋すみてうつるもみぢのかげをまちけり

神樂　相模　谷口深雪
孫曾孫左右におきて老翁のよねんなく見る里神樂かな

紅葉　伊勢　鈴木さん
みるたびに目にもうつるは山の邊の青葉まじりのもみぢなりけり

紅葉　伊勢　藤谷さだ
みどり葉と枝さしかはしうつくしく山をにしきとなせるもみぢば

紅葉　駿河　林すき子
白雲に紅葉のにしきうつろひてながめうつくし秋の山々

紅葉　駿河　林すき子
ふる寺の塔園のもみぢ二ッ三ッ鳥にしむ風にちりてそめけり

神樂　伊勢　橋本きみ子
はふり子がたち舞ふ姿神さびて霜にふけ行くあさくらの聲

神樂　河内　矢守はぎ子
霜さえてかゝり火更けて神さぶるすゝの音たかしみかくらのこゑ

煤拂　河内　矢守はぎ子
伴うふくろなからにとり出でてすゝはらひするひけなかき人

紅葉　伊勢　新[illegible][illegible]子
大宮の舎人酒くむ袖の上に二ひら三ひら散る紅葉哉

紅葉　岐阜　岩間文子
ふりつもるもみぢまとひていかめしく地藏たちませり坂の下みち

紅葉　駿河　渡邊久子
立まじる松の緑ももえんばかり夕日てりそふ岡のもみぢ葉

紅葉　紀州　國中てる
白雲に塔はぬき出で夕日さす遠の山邊の紅葉めつらし

すゝ拂　下總　清水すゞ子
年毎にすゝ掃へとも如何なれば變らぬ塵の山となりゆく

紅葉　佐賀　大隈ふじ子
もゝ草の露つきぬれば打はたす術もなへて紅葉しにけり

紅葉　伊勢　飯田はる
山みれば杜鹿の木の葉色づきぬたにのもみぢはふかくそあるらん

煤拂　駿河　林すぎ子
新らしき年や待たまし神棚のすみまで清く煤はらひして

神樂　駿河　林すき子
うぶすなに聲高くうたふ御神樂の鼓きこへて霜夜ふけゆく

紅葉　東京　加藤ふみな
鶴のなく聲高き賤が家に紅葉一本もえ出にけり

紅葉　高崎　富士しのぶ
うすくこくそめし時雨のあと見へておくれ先だち散る紅葉かな

紅葉　米澤　みつ子
見渡せば四方の山邊は紅葉しぬ故郷の山は如何なるらむ
楓葉の散りし庭邊を掃く毎に酒あたゝめし昔をぞ思ふ

神樂　徳島　はる子

里からら島の空さへ數々に朝くらうたふあけかたの空

煤拂　　神戸　中村きく子

月影に煤拂して朝日子のひかりも清き我庭かな

神樂　　相模　識　子

ゆたかなるみのり祝ひて村々に歌ひはやせる里神樂かな

紅葉　　麹町　廣瀬うの子

其むかし大宮人のめでにけるたつたの紅葉いまさかりなり

紅葉　　金杉　うくひす

乙女子の人形片手にまりつけば袖ふることに散るや紅葉ば

紅葉　　橫濱　高野そめ

なか〳〵と梢にかこつ姉君のまくらべ守る紅葉一枝

紅葉　　秋田　櫛笥たか子

夕暮に鎌利かゝへて木影ゆく少女の袖にちる紅葉かな

紅葉　　越後　小林ゑつ江

むら烏ねぐら尋ぬる杜かげに夕風さむく紅葉ちるなり

紅葉　　東京　角　ひで子

芝の戸を立ち出て見ればをちこちの紅葉を照らす日は斜なり

紅葉　　松山　越智伸子

大原女が黒木のはしに折そへし一枝の紅葉秋更にけり

紅葉　　栃木　猿山よね

風死して入日の影のあか〳〵と庭のもみぢにひとり照れる

煤拂　　相模　大村とみ子

父君がさしたる袷のすゝはらひ一ふりふりてほゝゑまれけり

紅葉　　佐賀　大塚露子

外國に故郷の秋を知らすとて紅葉の一葉送りやるかな

すゝはらひ　　本間柚子

来んとしは幸多かれといのりつゝすゝはきするも人の心や

煤拂　　佐賀　大津さだ子

煤拂幼き弟の箒取りて足もつれする愛らしさかな

紅葉　　讃岐　春　子

あふきみれば峰に移りうつむけば衣に映ゆる峯のもみぢは

紅葉　　金杉　うくひす

松林すぎて五丁の細道を案る紅葉に夕日さしそふ

紅葉　　安藝　松阪梅子

ちからなき夕日さびしく照しけりちりのこりたる庭のもみぢ葉

紅葉　　佐賀　眞砂しも子

わが庵も住むその人もおとろへて紅葉ばかりか錦着る哉

紅葉　　河内　三島ふく

賤男のいこひ處となりにけり山田のくろのもみぢ葉のかげ

紅葉　　岩手　澤藤あや

底清き池を鮮鱗の走る見えてほろ〳〵ちるか岸の紅葉

紅葉　　石川　平田色香

古郷の山や此頃もみつらん去年打つれてかりせし思へば

煤拂　　佐賀　齋藤むら子

此月を歩みそめにし弟も共にこぞりて煤打ち拂ふ

紅葉　　島根　松　濤

上瀧部下りてつなぎし馬の背に三つ四つ二つ紅葉ちりくる

神樂　　山城　野口富士

氏神のやしろに笛の音すなりかみにさゝぐる神樂なるらむ

女學世界懸賞和歌兼題

（〆切十二月十五日）

（披露一月五日）

春曙

山家雪

鞠

○賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

女學世界懸賞文

▲消息文（二十四字詰二十行限）

▲新體詩（二十句限）

▲雜文（二十四字詰四十行限）

○〆切　十二月二十日

○披露　一月五日

○賞品　以上三種中より甲、乙、丙を選び九名に呈す

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙燃に綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界宛とせらるべし▲投書原稿一切返却せず

甲賞

伏木の海濱に遊ぶ

みどり

軒の松風柴の戸を音なひ置く露さへも心ありてふ今日此頃秋期旅行にとて師の君始め五十餘人の同窓打つれうらうらとかゞやき昇る朝日をなびつゝ二番列車に打のり心のまゝに語りつ歌ひつ朝霧深きわたりを分け進めは山も田も家も人も一時に走りそめあるは兩側山にせまれる所に出づるよと見れは頗々たる小矢部の流れにうかびあるはうつくしく黄金色したる稻田のほとり眞白に尾花の連りて打招きたる遠くながむるあふたの森は鎭守祭にもや太鼓の音こそ聞えれまゝ紅葉せる木の間より赤青黄の大旗小旗數旗朝風に飜りたるうつくしともうつくしさる程に駒にもまさる滊車の足はや伏木停車塲をなりやがて此町より一里許りなる雨晴してふに辿り出て山をおひ海にのぞめる淸々しき茶店に息ひぬ

見上ぐれば絕壁けつりたらん樣なる峻山峻々として聳え見下せば底ひも知らぬ青海原蒼々として極みなく所々に小松の生ひ茂れる巖のなつかしくあらはれたる吹く風に帆をはらましつゝ行き交ふ船の片帆眞帆遠く近く浮びて逵きは動かす眠れるかもめにも似たり

こなたにはよせくる波の巖にあたりたばしりて雪か花かとあやしまるはるけくあなたを見渡せば青海原はうつゝの如く天に連りて其のけじめもわかず實に妙なる畫も斯くやと許り思はるゝをあはれ畫圖ならはうつさ

人ものを歌人ならば歌はんものをとあせれども甲斐なくてすゞろに浮ぶ古歌

わたのはら漕ぎ出て見れば久方の
雲井にまがふ沖つしらなみ

と思はす小聲に口吟みつ人もやなきと見まはしぬ

名にしをふ義經公の雨晴しは離の程よく直なりて遠き昔しのあはれさも忍ばれてなん

衣はと見れば雪踏のもすそかゝげつ白き眞砂あるりて小貝ひろふもありあるは岩傳ひに小蟹捕ふるもありさてはパン等なげやりて小魚の集うを興かるもありあまりのなかしさに日の傾くも覺えずはや發車の刻近づきければなごりをのこして歸途につきぬ

雨後のわが庭

大阪府立堂島高等女學校　古山くす

あなおもしろの雨後のけしきやな、小高き岡より流れきたりし幾すじかの水はまた集まりてふとき一すじの流れとなりて低きにそひてうねり流れたるあたかもちいさき一つの河の樣またかしこなる泉水のあふれいでたるこれはまたちいさき一つの湖とも見ばや、雨に會ひて色まさりし岡のべの楓なにゝおぢてか、しほれし山茶花のうなだれし風情もいと艶なり折から一ひら二ひら花の散りてかの流に落ちてたゞよひたる折からとて興深し



折しもあはたゞしう妾をよぶ弟の聲にいそぎ走りよればさてもさても弟のいたづらか流れの水をこなたへと引いてまたも一つの流を作りそれにちいさき水だめ二つまた其のそばに家居の如きものしつらえたる何の意味ぞとゝへば弟は得意げにはなうごめかして「姉さんは女學校にまでいつてゝこんなこと位分らないのこれ支那の楊子江つて河であの二つの水だめは、湖であつちのが洞庭湖でこつちのが鄱陽湖でこの家は北京つて王さんの居るとこ」といふに妾は「猛ちやんのうそばかし北京なんてそんなとこにありやしないわ」といへど弟は平氣にて頭をふりて「北京をこゝへやどがあましたとのだと聞いて覺えずふき出しゝが弟のなほもあかず首をもたげ無心に說明する樣の愛らしきに妾も疲れが教へ子となりて頻に耳かたむけぬ弟は說き終りて後妾のまだうつとりして耳かたむけ居るを見てほゝ笑みつゝ「姉さん僕もういつてしまつたよ」といふにはじめて首を上げたるもをかし弟は姉さんいまいたことをして見せて上げるからといふより早く身ひるがへして妾のとゞむる間あらばこそ少さき足もて河と湖と平原とをふみにぢりぬ妾のあつけにとられ居る間にはや影も形も見えず日はうららかに取り亂したるこの庭をらして在しましぬしばしたゝづむ折から弟のかとべの聲をとらへて「ちいや僕今れ支那帝國を亡ぼしてやつたよといひつゝまた日本萬歲猛ちん海軍大將萬歲といふこゑこだまにひゞきていと勇まし。

臺灣にある父の許に

本郷區龍岡町十八番地 小河原操

其後父上様にはお障りもいらつしやいませんかお馴れ遊ばさぬ風土故朝の風夕の雨につけ御案じ申して居りますこちらは母上様始め折々無事祖父様にはとりわけおまめにて御脊見に餘念なくまた土曜日には私共に活花やお茶の稽古をして下さるのを樂にしていらつしやいます母様がいつもおぢー様のおしこみでたいそう上手になつたとおつしやつてですよ茂は先頃の病氣でやせたと御心配なすつてでしたが此頃は大變太つて折々私と腕のくらべつこしては威張つて居りますまたこないだのお手紙に茂の頭より大きなザボンがあると母様がよむでおきかせになると大變喜で父様お歸りの時おみやにもつてきて下さいとそして私の頭とくらべて見ますと――まだ／＼面白い事が――それは毎日母様が父様のお寫眞にかげ膳とやらなお供へになると茂さんは其前に兩手を（楓の様な）ついて父様御飯をおあがり遊ばせと――やがてわたしがたべさせてあげませうといつて父様のお口の所へごはんを一粒つけましたが父様おがりなさらないといつてお膳をさげて了ひましたので皆々大笑ひ致しましたいつかはお膳に鯛のお吸物がついて居りましたら母様これは父様の所とおなじ名ね――なぜつて母様がおつしやると何故つて母様鯛にお祝だからたいわんじやありませんかと申しましたので皆おなかをかゝへて笑ひましたが鯛のおぢー様は茂はどうもなか／＼智惠があると仰ておほめなすつたものですから當人は大得意で居りましたなほ其外申上げたい事もありますお又後のおたよりにと申殘します

只今母様は父様のお召をこしらへていらつしやいますから何れ後からお手紙さし上げますがどうぞ宅の事は御心配遊ばさぬ様父上にも心の限りはお事へ申しますまた子供の教育にも精々心を盡します故呉々も御心配なく御自愛専一に遊ばされ御職務おはたし遊ばす様にとのおことづけですよ

この御清書は昨日學校で私獨り三〇を頂きましたから一寸御目にかけます。この後は茂さんからの御手紙ですが私は書記を命ぜられましたからかきました

ご免下さい父様私は大變大きくなりましたよ姉さんは學校で三重まるをおとりなさいましたよ私も仲よしのおぢー様にお手本かいて頂いて忠孝とかいたら大變ほめられました今に日本一の書家とかになるつて私嬉しいわお清書送りますからおまるつけて下さいれー父様早く歸つてきて頂戴おぢー様とかあ様からよろしくつて

これをいひ終るや終らぬにもう外へ出ていつて了ひましたお友達がきたものですから

今頃は父様何をしていらつしやるだろー

乙賞

冬の日學びの窓にて

名古屋六句町 長谷川ちやう

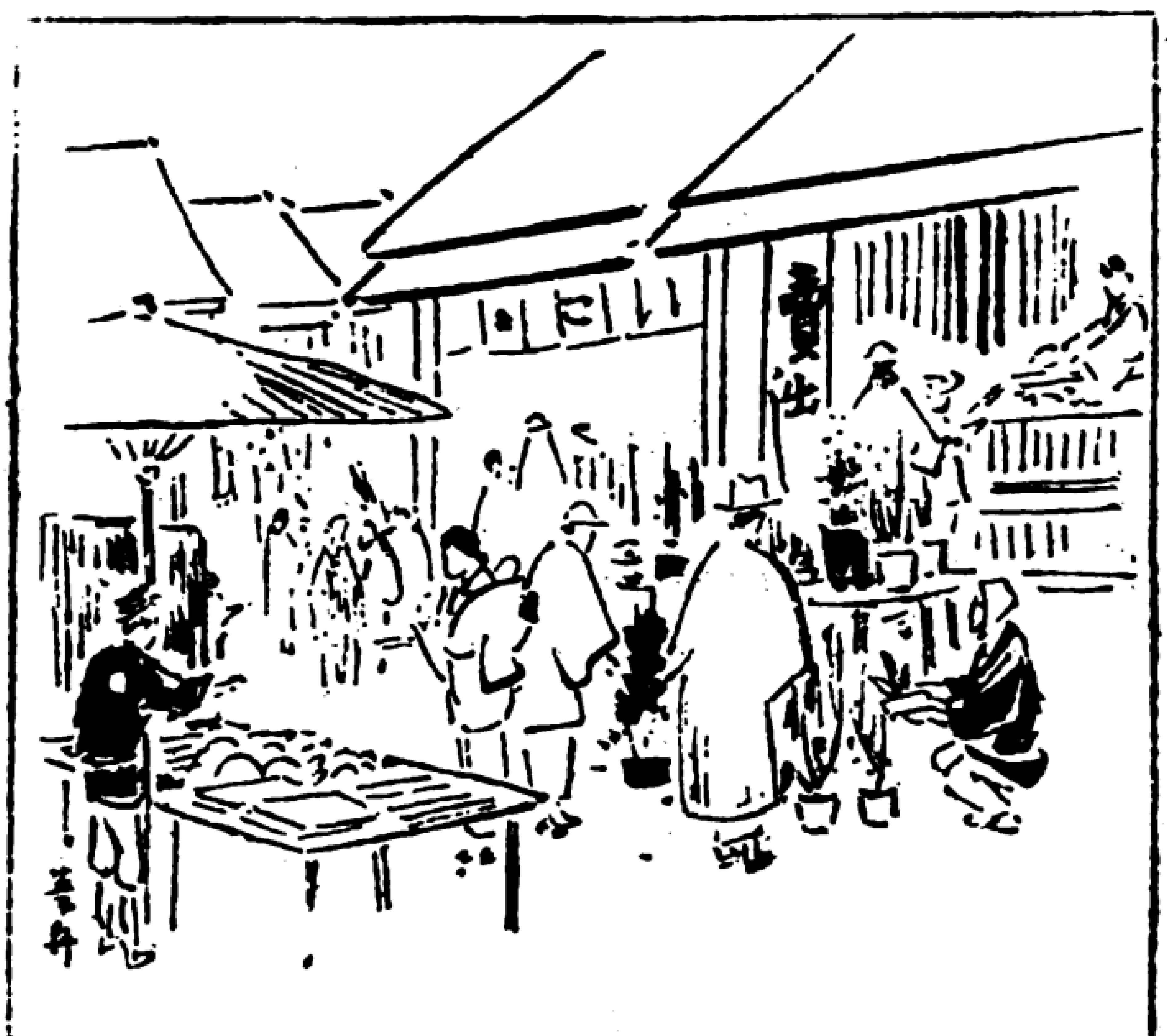
呉竹の世ははや春もちかづきぬれどまだ山風の寒きにかけひの水もこほりけん音だにせず雪さへ降り出でぬれば火桶のもとによりて文よみ居けるにあなめづらしや鶯の初音のきこえていとめでたくおぼえぬ

あれは檜のゆきを花とやみらんと獨りこつ折からゆきならば匂ふまじき
に何となうすき間もる風うちかほるにいといふかしう思ひつゝ立ち出て
見ればかのめでたくなく音に誘ひいだされしにやまがきの梅の花三つ四
つ二つ春をもまたで雪にまじりて笑み初めたるげに床しくいはんかたな
くうれし
あはれこの花こそ三冬のさむき風ゆきをしのぎてかくばかり床しき色香にさき匂ひ四つの君の一にかぞへられもゝの花の魁とたゝへらるゝもげにうべなりけれ
されはわれらはかゝるめでたく雄々しき花にならひて挽まずうまずいよゝ學びのわざをいそしみてかしこき女とならばやと思ふになむ

他郷の友より久々にて送られし文の返事

豐後國大分郡戸次村 小栗栖光子

瓣價の裳に意されて、走出れば、なつかしや君が御文急ぎ我室に返りて封をし開き、拜し參らすれに、細々と認められし御水莖の跡麗わしう。日頃御懷爐も伺ひまつらぬ我失禮はつゆ咎め玉わで、萬みやさしくの玉ひし嬉さよ。御互に白瀧の河邊、君は舟に我は陸に、然數郎別れ致候は昨日今日とのみ存居候るしに、共同三年四歳の月日は流れ、け



には益々玉の光を磨玉ひ今年頭玉、櫻花さき、小島の聲の床しき頃、無に遊學の御志願にて、芽出度も事業を卒へ玉ひしと、慈愛深き母君や、扨は君が御喜び左計と御喚數も御祝申上候、其後も引續き斯道の奥深く極られ候由、明治の女界に一入の花咲せ玉はん事願は數社、君には數ならぬ巳をも御友の片端と思召され辱き玉ふ御心、深く肝に銘し嬉しう存候に、此頃は又、麗しき我姿はじく在す由、御申聞御心切難有御言葉にあまへ、去天長の佳節取らせ置候を、一ひら差上候まゝ、御笑納被下候はゞ、うれしうなん、こなたとても御なつかしさは同お事に候へば、推付に失禮には候へ共、御諾ひ玉はとこよなき幸にこそ、玉はらずや、御諾ひ玉はとこよなき幸にこそ、先はあまりの嬉しさに、不調法も顧みず、つい筆取りてかくなん、かしこ

さゝがにの糸

東京 もみち

深山の奥は秋もひとさは寂びて、松吹く風ぞまづは音つれにける、古へ人が心盡しと云ひけむ頃も、四とせ五歳隔てゝ物なき山の庵に過ぎぬれば中々に浮世の人こそ戀にはうたてけれ、佐保姫が織りなす錦ふみ別けつゝ、鳴く音わびしく戀こふ鹿も、いつちよりそかすけく聞ゆる小夜の砧の音に絶えなんとするもいみじう哀れなり、岩間をくゞる水の音さへ常なれば天樂とも響くらんを頼みなき

世を頼みきて戀しき人に後れ、唯獨り淋しき庵に起き伏す身は、此山にある限のもの皆すさまじと思ふもわびしや。

かゝる山奥に物思ひつゝ明け暮るゝ身にも、反故など弄ぶる業こそ朝な夕なに變らぬものなれあはれ秋高き今日の一と日を、戀人が殘して去にし文繙きて、ありし昔を忍ばんかな。

いまとて荒れし庭に眼うちかくれば、軒端にやせたる柳のふる葉を包みて、露を宿せる蜘蛛の糸ぞかゝりぬる、あはれ蜘蛛の糸よ、なれこそは妾が思ひのつまを知るものなれ、思へば昔し戀人が、「蜘蛛の糸に露見えそめて曇る日の降るとはしるき秋の雨哉」と云ひおこせけむ歌の心にもかなひぬ、ゆかしき歌、妙なる蜘蛛、されど今の身には見るもなか／＼にあはれなり。

汝がふる葉を包めるは荒たる柳を隱さん爲めか、露を宿して秋雨をしらするは、塵に埋れし庵を洗ひ清めむとての業か、あはれ蜘蛛の糸。

妾に似たる昔の少女が、さゝがにの蜘蛛の振舞と云ひけん歌くり返しつゝ來べき宵なりと我背まちわびし昔をも汝が姿を見し時に浮び出ぬ、あはれ戀しの古へやな。

手に取る針も今は誰が爲とての業ぞ、八千代をかけて織りなせし戀の衣は殘れども着る人なきをいかにすべき、鳴らす妻琴も、今は誰が爲とてのすさびぞ、琴柱におとす共淚も、曲も昔に變られど、聽く人なきをいかにすべき。

柳の葉をも風は誘ると聞くに、風にも解かれず、手にも別けられぬ黑髮より心は亂れきて、此山里に逃れ入りにし妾が心を、蜘蛛のいよ汝は知るやそも、あはれ此山に塵はあれと拈はあれど、今日よりは汝を離れぬ友と見つゝ、汝が露ぬき止めて秋雨をさそはん時、妾も軒端を掃き清めばや。

戀人の遺物に取り持ちつゝ讀みもやらて、過し昔を思ひ出れば、柳のふる葉吹き込む野分の夕風おとすさまじく、亡き人を偲ひ顏に、秋雨さへ降りいでてしもいみじうわびしや。

秋雨すぎし庵のあれし軒端を朝日のもりきて、眠るともなく眠りにし戀寢顏を照しぬるに夢驚かれつゝ、夕べの名殘やいかがなんと、とく起き出て軒の柳うち見やれば、あなつれなし、友と頼みし蜘蛛の糸にかゝりて、羽ばたく秋の蝶二つ哀れなり。

丙賞

少女の日記

大阪府下豐能郡岡町　田中志遊

廿八日朝晴、待ちに待つた運動會はとう／＼明日となつた、モウ嬉しくつて／＼早く日が暮れると可いのにと思つた、お學をさらつてもご本を讀んでも何んだかいつもの樣に面白くないから、自分の居間へは入つて机にもたれて居ると、男生の綱引や女生のマリ拾ひが目の前へあらはれてくる、そうして春さんのをかしい風して走る樣まであり／＼と見える、今度は誰れが一等を取るかしらん、此間茸狩に行つた時私が山道をかけ歩くのを父樣がごらん成さつて、靡は大分足が達者になつた、來る運動會には一等が取れるて有らふと仰しやつたから、私に取れるかもわからない、若し一等だつたら父樣も母樣も何んなに喜こんで下さるたらふ、私の好きな繪やはキツト踊つて喜ぶにちがひない。

お下にかけて下さいと母樣に買つて頂いたトキ色のリボン半分を妹に、

多鶴さんとこへ持せてやつたし、明日一緒神へにまして行きましやうと多づさんが可愛らしい小菊を下すつた、茂雄さんが見ると直ぐムシツてしまうから棚へのせて置た、見つからないと可いが、眞實においたて仕方がないのよ、此間も私の大事の大事の人形の首をぬひて仕まうのだもの。午後三時頃空に灰色の雲が大分て來たので、私は心配でたまらないから空ばかり眺めて居た、權樣お氣の毒てすけれど雨てすよと爺やが云つたら、兄樣が明日雨降ると家の内にも雨が降ると仰しやつた、家の内に雨が降ると云つたら、何んなに成るのよと、母樣に伺つたらホ、、、、と母樣はお笑ひなされた、夫からてる〳〵坊主をこしらへて南天の枝にくゝりつけたら、照る〳〵坊主じやなくつて雨坊主じやと兄樣がお云ひ遊された、何んてい憎らしい方たらふ、私其時眞實に悲しかつたわ。

夕飯すんでから茂さんや茂雄さんはキアア〳〵と云つて遊んで居たが、私は火鉢のそばに座はつて何卒お神樣明日はお天氣て有ます樣にとお祈りをして居た、すると戸にパラ〳〵と音がしたので若かつ と思つて耳をすましてると(胸は早鐘を打つて居た)兄樣が嬉やちん〳〵雨が降つて來たよと仰しやつたので、驚いて戸を開て見たら枯葉の落つる音だつた、其時の嬉しかつた事は中々口で云へないわ、けれども空は黒雲が一ツメィて居と云つたら松の樹の上に二ッとくらの上に一ツとて有つた、其後幾度見たか知れなかつたが、黒雲はもとのまゝて有つた。

時間が來たので床についたが中〳〵目が冴へて眠られない、スヤ〳〵と眠つて居る茂さんがうらやましくつて、其顏をしげ〳〵と見て居ると何んな夢を見たので有ふニッコリと微笑んだ、ギイーと戸のあく音がしてつがて、爺や明日はお天氣たらふか、あの子があんなに樂しんで居たんだから降らなかと可いのにねと母樣のお聲が聞へた、續ひて、奥樣この鹽行きては明日は天氣てご座ります、私が受合ますると爺やの聲が聞へた。



稚子うしなひたる人に代りて

稲井とよ

つきぬなげきの長月か　行末長きみどり子の
朝の露ときえんとは　嗚呼是非もなき天命や
チンチ〳〵と咏ひつゝ　添乳をせしはうたゝねの
子故に迷ふ夢路にて　さめて驚く佛だんの
香の烟につゝまれて　おぼろに見ゆるうつし絵は
忘るゝまなき其笑顔　又も訪ふおくつきの
あたりの花におく露は　此世戀しの涙かと
とへと答はなきたまの　いつこの空に迷ふらん
見上ぐる尾上に松風の　たゞ颯々と音のして
無常をつくる入相の　かれに散くる桐一葉

雁の聲をきゝて友の許に

延許にて　前崎照子

月をかすめてゆく孤雁の聲にいとど御邊のなつかしくそれにも似たる皆

の走り書してみけしき伺ひ上げ候さても先つ日は御わたまし遊ばし候よし賑やかなるみ庭の木立や清らなる御間取の様など数寄を好ませ給ふ御老母様の事とてさこそ御風流ならめとゆかしう心に畫かれ申候中とはいへ物静かなる三國あたりの御住ひこの晩秋のあはれさ如何御らんぜられ候やさこそ秋の錦を其まゝなる歌や文やの御すさびいか斗楽しき御事と御羨ましく存ぜられ候折にふれては二つ三つなりと逸ざせ給はずやそれこそわらはにとりて何よりの慰藉者には候

折々御尋の候ひし英子の君には千草におく露と共に夜半の嵐に誘はれてはかなくよみぢに旅立せ給ひし由母上よりつたえられ候悲しさ斗り難きは人の命定め無世に定まれるは此事のみと兼てより存じ候ひしがさてとて昨日今日親しき友の上にとは存じ候はざりしを實さらぬ別のなくもがなと祈らるゝは人の子のみには候はすなべての人の願には候何かにつけ過にし昔の偲ばれ候て此頃の空にもまして時雨がちなる心の内御察し下たまはり度何も筆の序に聞え上げ候夜寒の折柄心し給ふべくかしこ

秀逸

初冬の朝

埼玉　秋山秀子

昨夜しらべ物で夜を更かしたためか、今朝は一時ばかり寝過こしてしまうた。

窓の隙洩る光に驚いて、やをらとばかり身を起し、急いで手拭片手に洗面所へと出かけた。あたりは一面に霜が降つてゐて桐の枯葉を散らしながら吹いて来る朝風は身にしみる程である軒下にしき散らしてあるわらの上にも白く霜がかゝつて鶏が其上にさびしげに、片足もたげてたゝづんでゐる。

庭の垣に結ふてある白萩も矢張り霜を戴いて、伏したふれ、其やつれた有様は丁度失戀になく少女の様、庭の白膠木も早や既に紅葉して、何となく庭の秋めかし水仙は勢いよいよずん/\と生長して行く。隣りの下女らは初霜をつければ、霜やけができぬとて草葉の霜を笑ひながらつけてゐる。

其内に顔も洗い終つたから今しばしと臥い/\田の畔道へと歩を運んだ。道側の草々も皆寒げにちゞみあがつてゐる。田の稲は大方刈りとられて畔道へ布いてあつたり、横へた竹へ懸けてあつたりなどしてある。やがて遠からぬ黒川の橋に達した。もう誰か通つたと見えて霜の上に二の字/\の下駄痕があざやかである。

朝日は、今鎮守の森の方へ上つたらしいが、其日陰となつてゐる所は何處となく寒げである。日はます/\上つて、今やあたりの森羅萬象をクリムソンに彩色した。葉も大低吹き落された木の間から二つ三つの家がちら/\と見え、朝餉の烟がぼーと棚引き鶏の聲が朗らかに聞こゆるなど、中々に捨てられぬ野の趣である。農夫らは鎌や籠などかたげながら田に趨き、牧童は牛ひき、鼻唄面白く牧場に急ぐ。是實に一幅の畫である。忽ち汽笛の音に驚いて見ると、一番列車は、勢よく右手のレールを走つ行く、其汽罐の釜と赤いシグナルに朝日が反射したる所は、目もくらやむばかりに美しい　やがて登校時に後れてはと　家路を急ぐ。

嫁ぎて後妹の許に

東京　木村貞子

桐の一葉の散り初めしより秋吹く風の音さへ何となうあはれを催し候ふなりからなるを御許初め皆々様にはいかゞ渡らせられ候ふや扨も／＼此方へ參り候うてより日もまだ淺きゆゑにや夕方など表へ出てゝは年頃住み馴れし古郷の空うち眺められたらちねの御膝下はらからのまとゐの事などおもひ出でられこひしうのみ存じ暮し候ふあはれ道程だに近からましかば日毎のやうに伺ひまゐらすべきに汽車ある世も女子の身にはかなはぬものに候ふかな雲井遙に鳴き行く雁の一行二行を認め候ふ毎にあの雁にこそ一こと言傳てめなどゝかひなきおもひに涙をしぼり候ふ事も度々に御座候ふさるにつけても多年養育の御恩身にしみて覺え候ふされど一旦他家へ嫁ぎ候ふ上は何事も其の家を家として心ひとつにかひ／＼しく家政に從ひ候ふ事女子の道なる事はかねて學校にて師の君のおほせられ候ふ事にて今日に至り初めて深く思ひしられ候ふにて行々は御許にも此の心懸け肝要と存じ候ふ又嫁ぎて後はいかほど孝をおもひても詮方なきものに候ふ私も家に在りし間は我が儘のみ申し上げ又御許にもをり／＼腹立たせ申し候ふ事今となりては悔しく候へども後の悔い臍を噛むとも及ばざる事に候ふまゝ此の邊も能く／＼御こゝろえなされひたすら御孝養なされ私の分をも補ひ下され候ふやう願ひ入り候ふ　かしこ



柳

横濱　近藤榮子

遠近の山々にかすみなびき百千鳥さへずりくらすいとのどかなるやよひの頃櫻の花のちりかゝりていみじう美はしきに柳の若葉のみどりしたゝるばかりなるはいとめでたし實にくれないの花の山も柳の緑り照り添ふてこそ一しほの眺めなれ、

夏の日の夕まぐれ清らなる小川のほとり青柳の糸長く垂れてそよ吹く風によれつもつれつ水の面に文字かくさまに見ゆるなど涼しさのきわみなれ蟬のなく音もいとくるしき日盛りに葉の繁れる影に道行く人の重荷下ろして滝なす汗拭ひもあへすはては煙草などくゆらすいと可笑し、

涼風身にしむ秋の夕べ小雨さへしめ／＼と降り止まぬに柴の戸のほとりに一本の柳影くらくついぢの垣も破れたるまゝなるに奥まりたる座敷よりぞ琴の音洩れきこゆるそゞろにさが野の古事など思ひ出てゝ哀れにも床しく覺へはべる

はては冬のあした筑波下しはだへなさくばかりに吹きすさみ雪さへ催しけるに柳の枝のおきふし亂れておだ卷の糸のもつれしさまなるもむなやかにしてしかも強くさしもの嵐にも雪にも耐へてやがて萌出る春に逢ふは操正しく健氣なる女子の道にも似かよいて柔よく剛を制すとこそ古へより云ひつたへけん我人の見習ふべきかゞみにこそ

秋の頃都にありて父母のもとへ

名古屋　長谷川　ちやう

くれゆく秋のならひとて千草もいまはうらがれたり殘る虫のこゑさへいとあはれを催す折から御親の君には如何わたらせ給ふにかいつしかく寒さにむかふ頃には御持の病は御身にもたせる病の起らせ給ふを今年はいかにおはしますらん遠くへだつる身のかなしさ御側近くつかうまつりて御心なぐさめ參ることもかはず雨につれ風につれ思ひやられ御方の空のみながめつゝあかしくらし侍りぬわらははいとすこやかに日ごとに學びの道にのみわけ入り朝な夕ないそしみはげみ居り侍れば御心安うおぼしめし給ひれかしさても月日のたつはいと早きものにて去年の今頃にやすみなれし里をたち出て汽笛一聲のもとに限りなく盡せぬ名殘を止めて見も知らぬ此都にいでこしはげにかなしさの極みなりしが此頃にては所にもなれ親しき友垣もあまた出來てことに師の君には父母のもとを遠くはなれし身なればとて一しほいつくしませ給ひ忝さの涙にくるゝ事さへ侍りされど御親の君たちの御なつかしさは又更にて秋匂ふ菊の花をみては父君のめで給ふらん庭のしらぎくを思ひさえ渡る月をながめては母ぎみと共にかなでし小琴の音を忍びいで一日もはやくつゝみなく學びのわざを終へかへりて御そばにてつかへ奉らんとそれのみ樂しみ居り侍りなほこと紙にしたゝめたるは此頃師の君より承りし長壽を保つ法とかやかゝる事はとくしらせ給ふならめどめづらしきふしも侍るべければかくはたてまつるになん返す／＼もいまよりは寒さも加り侍ればとかく御身いとはし給はれたく偏にねぎまつるになむあなかしこ

栗を送るにそえて

周防　中谷登輪子

昨夜恙なく歸省致し餘り久サ／＼の事故なつかしさに朝まだきより幼き弟の手をとり。こゝかしこと。そゞろ歩きし侍る折から。せどの山邊にほと／＼となふものあり何ものなるかと覗き見れば。こはそもいかに、「桃栗三年柿八年」と云へる世の諺にたがはずして妾が三年前にいたづらはんぶんに植えおきたる。たんば栗の今年始て實な結び妾の來るを待かね顔にほゝ笑みつゝぼた／＼と地に落下しいたる樣の愛らしさに思はずも。あゝ嬉しと一聲高くさけびたるにぞ弟は、事かとはせ來り姉さん何をしてと尋れし故。おゝこれはお前の大好きな栗の實だすぐに。ゆでてあげるよと。云へば弟はとびまはッて喜びおちこちを妾と共に拾ひ集めたる此栗初なりの事故いさゝかながら汝にわかち參らすべく。あまりに少しばかりにて心ぐるしく且ツ味の如何もおもふなく存侍れど去ながら「姑の情が嫁の里みやげ、ついた餅より心もち」と云へる如く品は細なくとも深き妾の心こもれるを味ひ給ひてよ尚明日は是非御見まいかた／＼なじやま致すべければ餘は其時ゆる／＼申のぶべく　かしこ

秋の夕

東京　佐々木和子

銀杏散りて夕映またく消えゆきぬ小徑くまざゝ露ふかうやがて枯れなば炭俵となり果てむ哀の身とも知らでやがて一むらすゝき穗に出てゝ何にひかるゝ者ならむ右に左にさらさらとさゝやく聲かすかなり垣の朝がほ風に破れ葉にくちてはや實はかりなるに秋風高う吹きて落葉朽葉うづた

かし折しも芝か上野か冷やかにつき送る鐘聲長う余韻をたゞよはせて木々の梢うすぐらう風一しきりまた一しきりあたりは靜まり返りてたそがれの色深う籠ひ來れり

この夜頃彗星出づと傳ふされば夜に空を眺むれども影だも見し事なし今宵も例の如ししばしありて月出でぬさえにさえし秋の空句はしう星かげは光をうしないてたゞ明星のみかすかにほのめけり

千草もゝくさ枯れはてゝまたく冬の粧なりにし庭もせにこよひ限りの命とや知りけむひた鳴きになく虫の聲あゝあはれなる虫の音よされどいかてなつはひとり虫のみかは人生もやがてまた尾花が木のされこうべ草葉に置けるつゆのごと消えぬへきものをあゝ秋の夕こそ悲しけれ

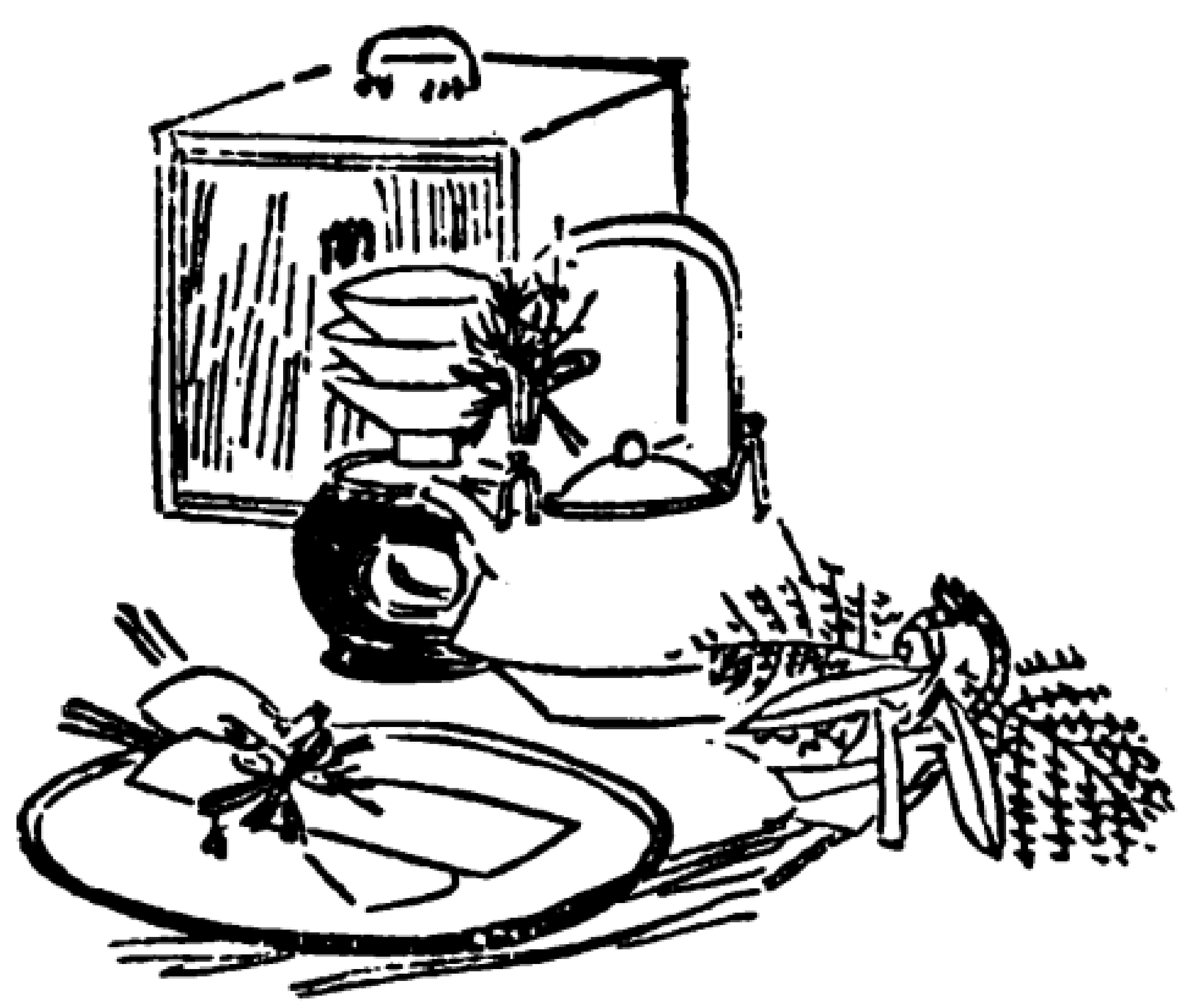
兩親の許に

岡山　藤波正子

いつこも同じ秋の淋しさをいかにすごさせ給ふらんなど推し上げ奉りしを御兩親樣には御きげんよく過させ給ふ由嬉しくも嬉しう存じ候私も此頃はすこやかにいそしみ居り候まゝ御案じ下さるまじくねがひ上げ候

さて先日はねもごろなる御手紙賜りまた此度は早々綿入羽織など御送り下され忝く拜納仕り候何につけても唯々御めぐみの程ありがたく朝な夕なに御寫眞にのみしたしみ居り候御殿山の紅葉も日にそえて色深ゝなりぬらん伯母樣の御庭の菊の花も今を盛りの頃ならんなど殊更に御膝下の戀ばれ候この紅葉は先頃後樂園に遊び手入森にて色いと深きを二三葉撰び取りしきたるものに候へば御目にかけ候

追々寒さも加り候事故御身躰御大切に折角御養生のほどくれ〻も祈り上げ候　かしこ



鏡面に對ひて

東京　木村てい子

うつそみの世のくだちゆくまゝに、大方の人の心誠の根ざしやう〳〵失せて、僞の言の葉のみ空をもおほふばかり蔓こりぬ、されば物として誠の影を見んことゝ難くなりぬるを、朝夕少女が手に親み馴るゝ鏡よ、移りゆく世のさまには習はで、昔も今も變りなく物來ればさながら其影をうつして露たがへず、物去ればやがて其影消えて僞りのかげとゞめざるは、豈くしく妙ならずや、朝の閨には玉藻なすかよりかくよりなびかひし寢亂髮を正さしめ、夕の床には影細き柳の眉の月をゑがゝしむ、かく奇しく妙なる鏡も、なほ形なき影はえ寫さゞれば、各がじゝ胸に包める人の心のよしあし見るに由なし、されば少女が閨の鏡の前に小町水の絶えざるも、やがて小町がうつろひやすき花の色にのみならはんとなるべく、キレー水よキメチンキよといへるも、徒に其かほばせをうるはしくつくろはんとのみ思ひわづらへるなるべし、そも〳〵年若き少女の小町たらんことを欲りし、衣通姫のおもかげにあえんと願へる、實にことわりなれど、そも身の程に従ひつゝよきほどにこそつくろふべけれ、ひたすら紅白粉の力にのみすがりて僞り飾りたらんは、

なか〳〵に心おとりせらるゝわざにて、鏡のおもはんこともやさしかりぬべし、とまれかくまれ心の美はしからんこそ眞の美人なるべけれど、心は影の寫らねば誰かへりみることもなく、ひたすら姿ばかりに心をつくすは、唯うかれ男が目に媚びんとする卑しきつたなき思ひより起るものにて、浮河竹の遊女とかはるふしもあらざるべし、あはれ少女が行すゑには情あたゝかき妻となり、慈愛深き母となり、夫を助け子をはぐゝみ育つる婦となるべきなど、いみじく大なる務めあるをも知らで只徒に眉をゑがき、髮を梳りて、かたちのみつくろひたらんよ、よしその影はうつらずとも心のほどいかにやさしからずや、かくて徒に頭の霜を、對へる影に見ておどろくとも、まそかゞみはた何のかひかあらん、年まだ若きみどりの髮、つやゝかなる面輪と共に見えん心の誠の影をうつしとゞめば、後の悔のいかで來りうつることあるべき、

その夜

東京　もみぢ

先つ日、文子の君の來り玉ひし時にはそゞろ心の勇めるまゝ彼の君と共に、人の此世にありての務はかくこそあらめ一度夫に嫁つきなば夫を助けて内證なからしめ、もて所謂理想の家庭をぞ造らまほしなど打語りいさゝか文子の君にもすゝめ參らせし事もありけるが、さてその今日となりては、さすがに心うちさわぎて、舅姑の君には如何に仕へん、彼の君には如何にせん、はては、いかなる彼の家のならはしなるや、又出入のものは如何なるものなるか、此身の如きはしたなきもゝのよくつとめらるべきやなど色々の聯想浮び來て止むべしとも思はれざりき

身の衣裳、簞笥長持など一通り整へ玉ひしかば、さる事に心なく事はなけれども、猶かなしきは夫とすべき彼の君の、風の便りに聞けば近頃よからぬ遊びに心を迷はし玉ふとな、よし此身嫁ぐともかゝる人と共にあらむには、如何で睦しく暮らされむや、彼の君にいとはれ、爪はじきせられなば、如何にかくはしたなき身なれば、彼の君を諫めまつるとも、その甲斐のあらむや、さりとて舅姑の君よりは、此身を惡しざまに云はるゝもいとはれど、もし緣なく再び此家に歸らんその時は先つ日あれ程に文子の君に誇りながら、何の面ありてか見えんや、あゝ悲しきものは我身なり。これも從弟妹同士の妹脊なればとの御言葉、亡き母様の遺言に對し今更に否むべしとも思はれず、なか〳〵に此身の一生を樂しく暮さむよりは、一生を犧牲にして彼の君の惡しき所をいさめ舅姑の氣を和らげまつるこそ我身のつとめなれ

日は全くくれぬ。父なる人は羽織袴正しく上座にすわらせ玉ひ、その次には兄君、その次には叔母君、次は乳母など、づらりと列び玉ふ一間に出てゝ「さらば父上……」と口ごもり涙むせびしに、父上は「さらばよ彼の家に行きなば年頃教へし女の道常に忘れず、二方の君はもとより、夫君にも心して順ひ露我儘の心をな出しぞ、まして御身を大切に……」と後は父上涙くまれしが姿も夢の如くありき、續いて兄君叔母君にもさらば〳〵との挨拶も形ばかりにて、その心の中は涙なりけり。

車來りぬ。いざのり玉へと云はれ、綿帽子目深かにかぶり、はしための手にすかりて車にのりぬ。いざと聲かけて、曳き出す五輛の車、轟々と響き夜半の寂寞を破りて四面の山々に反響し、いかなる尊き方かとも思はるもいとをそれ多し。沼田に飛び下る鴨の一群、今夜も悲しげに居立つその啼き聲、いとも寒げなり、我家の燈の光りは次弟〳〵に遠かり行きぬ、あはれ此一夜をば如何にして明かさん、あはれ明日よりは如何にしてくらさむ。

家庭小說

春夏秋冬

大石きりさめ

（春）

藁屋の檐の梅の花は早や梢を辭して、入替りに彼岸櫻のちらほらと笑み初むる此頃、麥は子狗の脊を沒する程に伸び、菜種も稍や黄ばみ初め、一片の雲翳も見えぬまで蒼味渡つた空には、其影とも見えぬ告天子の嘲が心地好く、四山霞の衣を纏ふて面羞さう、彼方の岡の上の一本杉には陽炎の燃ゆるも見えて、實に心ゆくばかり長閑な春の野邊である。

さら〳〵と水の頃淸う、遊ぶがやうに流れて行く小川堤、芽を發いた青柳の糸ゆるく枝垂るゝ木陰に、青草を褥として休んで居る畑打の二人の娘があつた。共に年頃は十八九。

『おやアお菅さん、最う太助さん家へ嫁くのは決まつて？。』

斯かる田業する田舍娘にも似ず、色の白い、髪の濃い目の眦の長い、口元の引締つた、稍や瞼はあるけれど鄙には稀な容色好き一人、彼岸櫻をちよいと挿したのは微笑みながら斯う訊いた。

淺黄の手拭を姉さん冠りにしたお菅と呼ばれたのはおつとりとした容貌の、醜いといふ程では無いが、扨て今一人のに比べると何うも見劣りのする容色であるのが、

『何うもね、嫁かなきやアならんのだとさ、』と、稍や伏目になつて、頰の邊に垂れた柳の枝を爪繰つて居たが、

『お艶さんは——貴女も伍市さん家へ嫁くんだてんぢやありませんか。』

『ほゝゝ、可厭な事た、』と、お艶は唾棄するやうに言つ

た。「妾は最う〳〵這麼眞黒になつて働く農業家は可厭、だから妾は阿父さんが何と言つたつて那麼家なんかへ嫁きやア爲無いわ、奥樣と尊てられて、僕婢を使つて、芝居を觀たり、遊山を爲たりして暮しても一生、這麼に眞黒になつて土弄りを爲てたつて一生、同じ一生なら百姓なんか本當に詰ら無いわ、だから最う〳〵農業家なんかへは甚麼事があつても妾は可厭、今日だつて畑へ行くのは可厭だつて言たんだけれど、阿父さんが八釜しく言つて許かないもんだから詮方無しに來たんですわ、ねえお菅さん、爾うぢやありませんか本當に百姓ほど詰らないもんは無いと思つてよ。」

「爾うね、そりや詰らないけれども――妾だつて嫁きたか無いけども、那樣百姓を爲ずに暮す家を望んでたつて、妾のやうな者なんか娶つて呉れ手が無いから仕方がありませんわ、貴女なんか容色が好いから甚麼家へでも嫁かれるけども……。」

「あら、何も妾や容色の事を言ふんぢや無くつてよ、容色が好いから何うてんぢや無いけども、たけども妾は何うしても百姓なんか御免だわ、ほゝゝゝ。」

「そりや誰だつても同じ事だけども、妾は阿父さんが斯う爲ろと云ふのを可厭だとは何うも言ひ得無いんだから……。」

「何も父子中で那樣に遠慮するにも及ば無いわ、だから妾なんか我儘ばかし言つて遣つてよ、ほゝゝゝ。」

時、後の方に劇しき物音、はッとして二人は見返ると赤毛の大犬が驀然として菜種畑へと駈入るのであつた。

「あらまア……喫驚してよ。」

「可厭な犬だつちやないわ。」

と見ると、此れも度を失ふて小川を越えて、向ふの蓮華畑へと落ちて行く雌雄の蝶二羽、流石に離れもやらず、右に、左に、上に、下に。

(夏)

四五日降續いた五月雨も、今日は廓然と霽れて、東阡西陌、三々五々挿秧の爲め散在せる男女老若は、此れ

や一幅平和の活畫、鄙びたる節可笑しき田植唄は、彼方にも、此方にも、樸朴なる田夫の口を漏れて起るのである。——插秧者の囃子に連れて。

此處、道路に沿ふた唯有る水田に一團の人數。

《婿殿ー肴は何しよ……》

四十格好の岩疊男は、鍬持て搔坦しながら斯う唄ひ出すと、土地の風俗で今日を晴と美々しく粧ふた插秧女の一隊は、囃子の調子も威勢よく、

《そーれ。》

《……萵苣の菜て、ソーヨノ、萵苣の菜を細かに切りて……》

《そーれ。》

《……酢を掛けて、ソーヨノ。》

一段唄ひ了ると、今度は今一人、廿四五の若者は直に後を繼いで、

《面白やー京には車……》

柄にも似ず朗々たる美音。

『まア、太助さんの聲の好いこと。』

『那樣好い聲を持つてお居でだとは知らなんだ。』

賞め立てられて、太助は急に口を噤んで苦笑ひ。

『おや何うしたの、さア次をやつてお呉れな。』

『はゝ。』

『やつて貰はないと調子が取れ無いわね。』

『はゝ。』

『早くさ太助さん、も一度其の好い喉を聞かせてお呉れな、笑つてばつかり居無いでさ。』

『はゝ、那樣に賞められちや最う出無えだ、爺さんやつて呉れさつしやい。』

『那樣に急に羞恥ま無くつても可いぢやないかね、なんぼ今年は花嫁さんが出來たからつて……。』

『はゝ。』

『なアお菅さん、左うぢや無いかね、御亭主に賴んでもツとやつて貰つてお呉れな。』

鳥渡顏を見られて、躰裁惡さうに微笑みし儘、お菅は面を伏せて居る。

『おや、此の娘も恥かしがつてるんだねえ、おほゝゝ

ゝ、お前さんの御亭主は本當に喉が好いよ、喉ばかしおやない、性質は好し、働は他の二層倍もおやりだし、本當に頼母しいね、お菅ざんは仕合だよ。」

「最う〳〵御免よ、小母さんは直に妾に調戯つて掛るんだから……。」

「いゝえ何も調戯ふんぢやありません、何を言つたつて太助さんの家と言ひア昔は大したもんだつたからね、これからは若夫婦が一番發して、切めて昔の半分位にても仕上げなきやアならんわさ。」

「ほゝゝゝゝ。」と、お菅は恥かし相に笑つて顔を上げる。

と、忽ち彼方に轍の轟き、十數輛の車が威勢よく駈けて來るのである。

何事かと、他の者も腰を伸して見ると、正しく嫁入の一行らしい。

「お嫁入だよ。」

「何處のだらう。」

囁き合ふ間も無く、早や前の道を過ぎらんとする一行、視線は花嫁の面上に蒐つた。

「おやッー。」

お菅の喫驚したも道理、其れは此處へ嫁入るまで無二の友達であつたお艶であつたからで。

お艶は嫣然、輕く會釋したが、忽ちにして過去つて、並木を縫ふて、家に隱れて、又見えて、又隱れて了つた。

「お菅さんの村の方ぢやありませんか、あの街の生糸問屋へ嫁くと云ふ評判のあつた……?。」

「はア。」とばかり、お菅の顔は冴えて居無い。

「あの娘は飛だ出世をするねえ。」

「何うしても女は容色が好く無いと駄目ですね。」

「容色次第で甚麼出世でも出來るんだから……。」

互に喋々たるのであつたが、日の大分に傾いたのを見て驚き、急がし立てゝ又精々とやり出した。

處へ、此れは既に今日の仕事を了へて歸りかゝつた一群、

「まだつい仕舞え無えやうだな、太助さん。」

「あゝ爺さんか、些と手古摺つて居やすだ。」

「そんだら手傳ふて上げますべえ、さア衆……。」
「濟まねえな。」
茲に加勢を得て太助は欣然、
《早乙女衆は午睡が過ぎて……》と、例の喉を搾つた。》——
《そーれ。》と囃子。
《……お田が張る、ソーヨノ、お田が張りや助手が御座る……》
《そーれ。》
《……赤襷て、ソーヨノ。》

（秋）

唯見る萬頃黃金の波。
今年は二百十日の厄日も無事に免れ、降雨の加減も好かつたので數年來絕て無き豊作だ。て、此の里の人氣は大したもので、既に早稻の刈入に着手して居るのもちらほら見える。
太助お菅の夫婦も、今日は一町の早稻を刈り終つたので、太助は其れを運ぶべく忙がしかつた。
今一荷を持運んで田へ引返して來た太助は、荷造りを爲しながらお菅に向つて、「お前知んねえかつたが、今艶さんてのが其處を歸つて行つたのを……。」
「え、お艶さんが……。」
「うむ、此夏生糸問屋へ嫁入つたあのお艶さんがだ。」
「爾う、妾些とも知ら無かつたわ、俥で……？。」
「いんや歩つて……風呂敷包を提げてたゞ。」
「歩いて？」と、お菅は不審さうに、「可笑しいぢやありませんか——歩いてなんて……、人違ひぢや無くつて？。」
「いんや、間違え無えだ——お艶さんによ、何だか隱れるやうに斯う外方を向いてたゞけんど……。」
「だつて、お艶さんなら何とか聲を掛けさうなもんだのに……。」
太助が又荷を運んで行つた後も、お菅は何故お艶が聲を掛けず、又何日に無く徒歩で歸つたかと思ひながらも深くは怪しまず、漸く刈り了つて家路に付いた。

日は落ちて、早や星影のちらほら散まる〻頃、太助も稻を運び了つて後の小川で足を洗つて居ると、小鍋を洗ひに來たお菅は、『おや、最う運べて?。』

『うむ、今漸と運んで置いたゝ。』

『大變早く仕舞へてね。』

『今年は澤山收穫がありさうだから、難有え事た。』

『爾うですねえ、今年程都合よくいつた事は無くつてね。』

『眞實によ、難有え事た。』

お菅は急に何か思出した狀で慌て〻引返したが、今度は白鳥を提げて來て、『お前さん、忙がしくつて未だお酒を買つて來て居無いんだから、少時待つて〻下さいよ、一ッ走り行つて來ますから。』

『爾うか、最う何うでも好えだけんど……。』

『だつて、お酒が無くつちや身躰が休まりませんわ。』

『それも爾うだな、そんだら氣の毒だけんど爾うして貰ふべえか。』

『ぢやア鳥渡……遲くなつて濟ま無いけども……。』

白鳥片手に小走りに、早や夕靄の中へと消えて行つた妻の後を見送つて、

『可愛想に、苦勞をさせるのう。』と、太助は口の中で氣の毒さうに言つた。

東の空、橙黃色に染まつた雲を縫ふてさと數條の光線、と見ると、嫣然たる嫦娥は今黃金の眉を見はし初めた。

（冬）

『唯今。』

『おうお菅か。』

圍爐裡の傍に淋しさうに煙草を吹かして居た太助はお菅が二三日前所用あつて實家へ歸たのが、今日あたりは戻て來る日取ではあるけれど、急に寒氣が加はつて日暮前からは雪さへ降出した位だから、よもやと思つて居た所へひよつこり歸つて來たので、破顏一番。

『今日は餘り寒いから何うかと思つて居ただ、お前寒かつたゞんべえ、さあ早く暖らつせ。』

『本當に滅法寒くつてね、』言ひながらお菅は圍爐裡の傍へ上り、『最う御飯は濟んでり？。』
『いんや、未だゞ、今始めやうかと思つてた所だ。』
『ちやア恰度好くつてね、』と、小包を引寄せて紐を解き、『お前さんのお好な鰑鯡を買つて來ましたから……、それから是れは村の上酒だから飮んで貰つて見ろと阿父さんがね……。』
『ほう』と、太助は嬉しさうに莞爾々々して、『大層なお土産だな、難有え事た、ほう……。』
『ほゝ、かゝ、もつと何かと思つてたけども、他に此れつてえもんも無いもんだから……。』
『なアに、此上の土産は無えだ。』
　早速太助は件の酒を暖めて、晩酌を初めたのである。
　今年は豐作祝に村芝居を興行た事、母親が軈て出來る子の着物にとて機を織つて居て呉れる事、父親が不相變農作法に達して居るといふ自慢、それから戲に村の若い衆と角力をやつたが、乃公の片腕にもかなふ奴は無いと鼻を高くして居る事、などお菅は種々の村の噂を爲て太助を興がらせて居たが、
　急に思出したやうに調子を改めて、『あのお艶さんね、日外歸つて來たとお前さんがお言ひだつたけども、妾や人違ひだつたらうと思つて居たら、矢張しあの時歸つたなりて今に家にお居でだとさ。』
『まだ引續いてり？。』
『はあ、何でもお婿さんとも姑さんとも折合が惡くつて歸つて來たんだつてよ、お艶さんは些と我儘の方だし、何てつたつて先方はあの通り大家の事だから何うも辨理が出來難いんださうです、だから始中終紛紜が絶え無くつて、二言目には土百姓だから土百姓だからつて怒鳴られるものだから、遂々逃げて歸つたんだとさ、何うも今では離縁になりさうで、固く元の鞘に納るのは難かしからうと云ふ事です。』
『ふうむ、氣の毒な事だな。』
『だから今ではお艶さんもね、矢張し農業家へ嫁つて居たら這麼苦勞をして、人から指彈を指されるやうな事にもなりは爲無かつたらうにてつて、大變後悔して居ら

つしやると云ひます。」

「牛は牛連れといふからな、はゝゝ。」

「本當にお氣の毒だけども……、釣合はぬは不緣の因だとやら云ひますが、本當に好く言つた事だと妾はつく〱爾う思つてよ。」

「そりや諺に嘘は無えだ、あの時は衆出世をするつて羨んだけれどなア……。」

「爾うてしたね、妾も實を言やアお艶さんが羨ましくつてならなかつたけども、矢張しお百姓をしてる方が幾程氣樂で可いか知れ無いわ、ほゝゝゝゝ。」

「はゝゝ、來年になりやもつと樂にならアな、稼ぐに追着く貧乏無しと云ふだから、茲で二三反も殖やして精出すだ、見ねえ、あゝやつて今年はお前が來て呉れたお蔭で、例年とは七八俵も餘計積めたど、賑かで氣持の快えものだ、はゝほゝゝゝゝ。」

外は早や大分に霜が積つたらしい、颯と忍び込む寒い風に、太助は思はず首をすくめて『ほう寒いちやねえか、お前最う寢るが可えだよ、普通の身軀て無えだから、寒さにぺえあたつて塩梅でも惡くなつて呉れるだと大事だから……。」

「ほゝゝゝ。」

「笑ひ事ちや無えだ、眞實によ、妊娠の者は能く〱氣い付けて呉れねえと、挽回がつかねえ事になるだから……。」

「いゝえね、妾や那樣に寒かありませんから可くつてよ、ほゝゝ、さア所夫……。」と、お菅は微笑みながら銚子を持つ。

「そんだらも一杯重ねるとしべえか、美え酒だから勿体無えけれど……」と、太助は猪口を出して、『あゝ酔ふた、お蔭で何日に無え好え心持になつたゝ。」

注いで遣いて、お菅は囲爐裡に榾を投べると、忽ちぱッと燃え立つ火光に、欣々然たる二個の面貌は明かに照らされた。

あゝ平和！、平和！、實に平和なる蝸盧の團欒！

《完》

彙報

◉新高艦進水式と皇后陛下の行啓

新造三等巡洋艦新高の進水式は去月十五日横須賀造船廠内に擧行せられたり當日は皇后陛下の行啓を仰ぎたるを以て鎭守府當局の人々は前日來奉迎其他の準備に從事し横須賀市民亦祝意を表する爲め種々の用意を爲したり　皇后陛下には午前十一時三十七分横須賀に御着輦あらせられければ港内碇泊の軍艦敷島、鎭遠、扶桑、天城、浪速、平遠、鎭東、武藏、八重山、電、曙、雷、朧、春雨の諸艦は皇禮砲を發し停車場前より鎭守府への沿道には所在文武高等官幷に海陸軍儀仗兵、赤十字社員、各學校生徒等整列して奉迎したり供奉は花房宮内次官、高倉典侍、岩佐侍醫、千種、小倉兩權典侍、北島、吉田、六角三權掌侍、萬里小路、九條兩式部官、香川權掌侍、三上命婦等にして御馬車に召し御順路鎭守府に成らせられ御晝餐後所在海陸將官幷に相當官鎭守府幕僚、艦政本部員造船廠員以下各高等官に拜謁仰付けられ午後二時二十分井上鎭守府司令長官の先導にて造船廠内なる進水式場に臨御、參列者は親任官、海陸高等武官各省總務長官、東京府知事、兩院書記官長、各省局長、重もなる實業家其他を合せて約二千餘名に達し豫期の如く午後三時の滿潮を認むるや山本海軍大臣式壇に立て命名書を捧讀し造船官三鞭酒を艦體に灑ぎ次て塚原造船廠長繋索を斷ちたれば重量千六百噸の艦は早くも船臺を離れて水上に浮き上り見る〳〵船渠の彼方に浮び去れり此首尾よき進水を目撃せる一同は雷の如き喝采を爲して同艦の前途を祝し式終りて參列者一同造船廠樓上に導かれ三鞭、葡萄酒等の饗應あり斯くて陛下は供奉諸員を隨へさせ同四時十分横須賀御發車還啓遊ばされ次て一同散會を告げたるは同六時半頃なりし此日は朝の程少しく雨ふりしも間もなく拭ふが如く晴れ渡り市中は孰れも旭旗を掲げ前記各艦は滿艦飾をなしたれば海陸の美觀云はん方なく附近各町村より集まれる老幼男女頗る多く近來になき賑ひなりしと云ふ

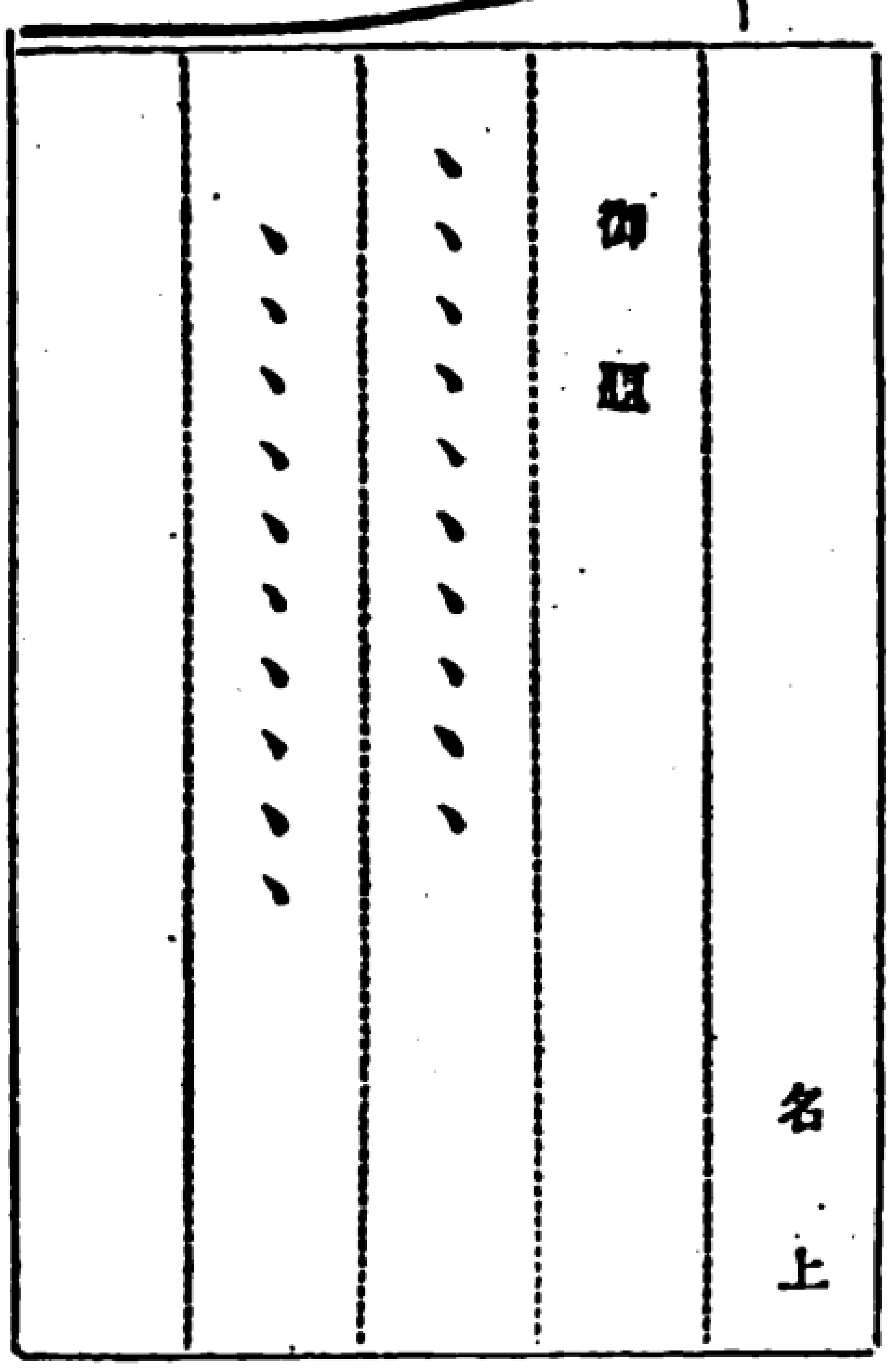
●新年歌御會始御題

明三十六年一月宮中歌御會始御題は

新年海

と御治定相成りたり詠進期限は明年一月十日限り書式は例年の通り用紙は檀紙奉書杉原紙又は美濃紙を用ふ可く尚一人一首に限るとの事なり、封筒には「宮内省御歌所御中　詠進在中」と認むべき由雛形如左

竪詠草（但五ッ折）



右裏面は　某府縣下某國某（市郡）某（町村）住所

華士族又平民　苗　字　名

官位勲功爵位を有するものは肩書に記載すべし

（注意）例年各府縣より詠進の中には違例の者多きに付殘念ながら天覽に供する能はざるものあり又郡國名のみを記し府縣名を省略する者あれど右は取調べ上非常の不都合あれば是非必ず府縣名を記する事を忘る可らずとなり

●島津常子姫の調度

山階宮菊麿王殿下には去月廿六日の吉辰をトして島津公爵家の息女常子姫と御結婚の式を擧げさせられたる由なるが右に付き島津家にて調べさせられたる御支度の模樣を承はるに箪笥長持等の諸道具は松方伯の手を經て京橋水谷町の箪笥屋越中屋と角市との二軒へ注文ありしが其製作は一切古式の上品なるを旨とし金物塗方等の吟味に愚かなるは言ふまでもなく先づ開箪笥の高さ三尺五寸、横三尺三寸、巾一尺六寸にして地は朧色に塗上げ金粉にて轡の定紋を散らし金具は眞鍮地金鍍の唐草彫、箪笥は円附にて塗方金具より寸尺まで開箪笥と同じく又長持は高さ二尺五寸、巾二尺五寸、横五尺八寸にして塗方は矢張朧色、金具も眞鍮地金鍍唐草彫とし横の兩側に大きく轡の紋を二ツ宛金粉もて蒔き其料金は三棹にて千餘圓なりと云ふ因みに記す昨年の春王子村字下條の資産家小島某の女が鳥尾子爵の令息へ嫁ぎたる時の調度も近年稀なる盛式にて箪笥九棹長持七棹是れ皆越中屋の調製に係り之を送り屆くる時の

供勢は五十人なりしとぞ尚ほ渡邊千秋子の女を大山侯爵家へ輿入する時の調度も同家に於て製作せしが是亦頗る善美を盡したるものなりきとぞ

●カラーザス夫人の再遊

我國最初の英語女教師たるカラーザス夫人は米國カリフォルニア州の人明治二年宣教の目的を以て我國に渡來し初め新富町に住し後、築地六番に移り基督教の傳道に從事せる傍ら日本人に英語を教へたりしが滯在八年にして同八年歸國したる後も始終日本の事を忘れず折もあらば再遊を期したりしに今度愈々二十餘年來の希望を果して再び渡來されたり左れば當時夫人の薫陶を受けたる人々申合せて去月十四日小石川後樂園に歡迎會を催したるに在京三十餘名の人々は當時修學の用に供したる舊板の英和辭書又は寫眞などを携へて來會し絶えて久しき師弟舊友の再會に三十餘年の昔を語り合ひたるは感慨無限の趣なりしと云ふ當時横濱には既に西洋人の渡來せるもの少なからざりしも東京に在住するものは至つて少く殊に開港後間も無き頃の事なれば一般の人氣穩かならざりし其間に婦人宣教師として率先渡來したる同夫人の奮發は一方ならざりしと共に其頃日本人にして英語を勉強するものは甚だ少なく夫人の教を受けたる人々も前後漸く三十餘名に過ぎざるに拘はらず今日多くは中流以上の地位を占むるの事實は夫人が最初の英語教師として間接に日本の文明進歩に盡したる功績として見る可きものならんか爰に面白き話は其頃英語を學ぶ男子さへ多からざりし程なれば況して女子にして英語を學ぶは一層稀れにして適々當人及び父母に其志あるも親戚友人より制止するの例さへ少なからざりしかば中には世間を繕ふ爲めに女子にして髷を結び袴を穿ちて純然たる男子の服裝を爲し通學したるものあり其後生徒の增加するに隨ひ遂に男女を區別することゝ爲りしに一人の生徒が「私は婦人なり」と書して女子組に入りしかば教師も他の生徒も始めて男裝の女子なりしことを知り大に驚きたるの奇談あり或人が今度の來朝に付き何か目新しきものありやとの問に對し夫人の云へるやう自分が前回と比較して第一に感じたるは今日市中往來に出でゝ乞食に附纏はれざることなり當時東京市内には西洋人少なく殊に婦人は最も少なかりしかば外出の度每に多數の乞食が後より追駈け來りて去らざるには恐ろしさと氣味惡

さに得堪へざりき而して彼等は口々に「横濱旦那、大い旦那、チヤチヤプ困ります足サランそパン」抔叫びて錢を乞ふが故に成る可く速に去らしめんと貨幣を投げ與ふるに其餘は普通の日本人が與ふる一厘錢よりは多額なるを以て乞食共は慾に乘じて益々多く附纏ひたるには閉口せり又新富町の日本家を修繕して西洋窓を附けたりしに當時硝子は甚だ少なく殊に西洋人の住居とて其窓の外に佇立して内部を覗見るもの終日群を爲して絶えざる程なれば室内にては何事をも爲す能はず遂に巡査に制止方を依賴したりしかば巡査は外部より「此窓を見る可からず」と云へる貼紙を爲したることあり又以て當時と比較すれば其間僅かの日時ながら日本の事物が頓に非常の進歩を呈したるを見る可し云々夫人は富裕の身分にて安樂に生活するものなれば性來文學の嗜好あるに乘じ曾て日本に關する著述を公にしたる因みに依り今又三十年後の日本を世に紹介せばやとて筆を執りつゝありとぞ。

●女子東京美術學校開校式

神田區仲猿樂町なる同校は先頃來内部に紛紜を生じ世評とかく面白からざるものありし爲め校長湯本武比古氏辭任するに至りしが、今回設立委員等は藏原惟郭氏を推して校長となし去月廿二日新築校舍落成式を兼開校式を擧行したるが來賓は岡府視學官、本莊子爵、福岡秀猪、三浦安、三井八郎次郎、其他の諸氏二百有餘名にして午後一時振鈴と共に樓上の式場に著席し君が代の奏樂に次で藏原新校長は教育勅語を捧讀し次に湯本前校長の祝辭藏原新校長の式辭演説、辻帝國教育會長、井上博士、府知事代理岡視學官、市長代理山田市教育課長等諸氏の祝詞演説あり終て茶菓の饗應あり午後四時過散會したり尚ほ去月二十三、二十四の兩日間校内に於て各科生徒成績品の展覽會を開催したり

●明年度開校の女學校

明年四月一日より開校せらる可き豫定の高等女學校は左の六校なりといふ

福島縣立	福島高等女學校
新潟縣郡立	長岡高等女學校
新潟縣立	新發田高等女學校
岐阜縣立	大垣高等女學校
岐阜縣立	岐阜高等女學校
兵庫縣	郡組合淡路高等女學校

●家事科試驗問題と合格者

本年度右の文部省教員檢定本試驗中家事科の問題は左の如し

一、建坪を五十坪前後として官吏（家族は老母主人妻子供三人書生一人下婢二人）の住宅を建築せんとす其圖面を調製すべし

但し右の内若干坪を二階建とす

二、左の事項を日用帳に記入すべし

十月廿一日

- 一俸給　百五十圓
- 一老母小遣　七圓
- 一月謝　二圓
- 一給料　五圓五十錢
- 一來客費用　一圓廿五錢
- 一足袋三足　五十一錢五厘
- 一來客用牛酪罐五枚　二十錢
- 一西京親戚へ物品郵送費　廿四錢

同　廿二日

- 一石鹼一箱　九十錢
- 一炭二俵　一圓
- 一古賀叢書豫約金本月分　一圓五十錢
- 一慈善會切符三枚　六圓
- 一頭髮　六十錢
- 一貸地七百坪地代受取　百五圓
- 一植木屋一日分二人　一圓
- 一寶丹一包　二十錢

三、左の事項を高等女學校第五學年の生徒に教授するものとして一時間の教授草案を作るべし

一繃帶用法

而して右試驗に於ける合格者は左記の十八名なりし

岐阜縣平民	井上はつ	群馬縣士族	石丸シゲ
山梨縣士族	板倉ひこ	佐賀縣平民	早田コト
兵庫縣士族	小倉しづ	愛知縣平民	加藤謙
東京府平民	竹内なみ	群馬縣士族	高山ふみ
新潟縣平民	高野キイ	石川縣平民	中谷市
青森縣平民	野田こう	香川縣平民	山下むめ
佐賀縣士族	松永シカ	愛媛縣平民	藤井豐
和歌山縣平民	藤岡登莫	福井縣平民	藤岡ツネ
靜岡縣平民	下山あん	三重縣士族	森もと

●婦人勞働者の數

警視廳の最近調査に依れば同管内に於ける私設の大小各工場に於て使傭せる男女職工の概數は三萬九千二百八十九人にして動力を使用する工場の該職工數は男一萬八千四百五人女子一萬五千七百七十人又動力を使用せざる工場の該職工は男三千三百四十六人女子千七百六十人等なりと又た以て勞働界に於ける婦人の勢力の多大なるを知るべし

新年の女

女子教育は前途の問題なり、家庭の改良は刻下の急務なり、我が女學世界は此の必要に應じて聊か婦女社會智識の啓發に資せんと欲す創刊以來年を閲すること二、年所淺しと雖も主婦の務を全ふすべき家庭と、未來の良妻を造るべき學窓とに對して多少の貢献ありしを信ず、明年一月より更に誌面に改善を施し內容を豐富にし材料を新たにし以て將來我が女學界の明星たらしめんを期す

▲書畫手本　本誌の卷頭に揭ぐる手本は精緻なる石版刷八頁を書畫兩様に分ち書は多田親愛、坂正臣兩翁の筆、畫は跡見花蹊、野口小蘋二家の草花禽鳥

▲論說　は時代の潮流を捉へ時事の問題を說くを主とし當途專門の大家江湖の名流に囑托す

▲家庭　家政の學問をして實際に適應せしむるは本欄の主張にして家事衞生、家庭の慰藉、育兒、料理、庖厨百事、裝飾其他日常生活の上に必要なる事項を網羅し世の主婦をして居家處生の務を全ふせしむるを期す

▲文藝　國文學、漢文學、西洋文學の大要を簡潔にして且つ平易なる記述により初學の

女學世界 第參卷第壹號記事要目

新年附錄　四君子 繪はがき
蘭　奧原晴翠女史
菊　武村耕霞女史
梅　跡見玉枝女史
竹　野口小蘋女史

學　世　界

婦女をして社會文藝の發達進歩變遷を知らしむるを主となす

▲史傳　東西古今に傑出せる賢婦烈女の傳記を掲ぐるを主とし又時に英雄豪傑偉人傑士の事歴を尋れ優美なる婦人の特性と剛毅なる兒童を作るの一助たらしむ

▲科學　專ら學術上の利益を與ふるを主とし理化博物の解說、講演を主となし自然界の萬象に就て極めて趣味ある部分の說示をなし以て婦人に科學的の智識を與へ才能を啓發するの料に供す

▲手藝　婦人の習得すべき種々の技藝、意匠、圖案、縫箔、彫刻、裁縫、編物、刺繡、造花と就ての實習手引を掲げ婦女子をして他日獨立の地を作るの準備ならしむ

▲小說　文壇の名家が特に本誌の爲めに材を撰み想を構へて洗練されたる作品を掲ぐ蓋し一面娯樂に供し一面人情の秘機を悟了せしむるにあり

▲雜錄　家庭以外社會百般の事項を尤も趣味ある雜々以て記し世の風俗、習慣、生活の巨細を知るの料に供し以て一方にかては蟄居的風習に馴れたる婦人の智見を開發せしむ

▲職業　居家處世に婦人の取るべき職業に極めて多く輓近女學の勃興に伴ふて婦人の職業は俄然にしてその地歩を開拓せり本欄には婦女の取るべき職業の各方面に就て內部の事情を報道す

●●新年第一號口繪豫告●●（一月一日發行）

▲高貴

▲雪の上野　東京上野公園三王臺下

▲兎　川端玉章翁筆

▲御題新年海

▲舞姫　佛國女優オセラ孃

▲紫式部　安宅海鳴氏筆

▲時雨　上村松園女史筆

▲貴婦人　石原白道氏筆

▲雪中少婦（刺繡繪）　女子美術學校製品

▲林間歸牧（彫刻繪）　仝上

▲庭園の美　熊本市外水前寺成趣園の景

▲日光東照宮唐門

▲下田の港

▲木蔭の清音　玉置照信氏筆

▲ロッキー山の雪景　米國風景

▲新年海、鶴（石版手本）　野口小蘋女史

▲初日の出、姫小松　跡見花蹊女史

每月一回五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二冊 增刊四回…三、六、九、十一月價格同一）

郵稅 一冊 二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁卅二行	一頁六十四行
特等			割引三十三圓
一等	四十三錢	十三圓七十六錢	割引二十七圓
二等	三十五錢	十一圓二十錢	割引二十二圓
三等	三十錢	九圓六十錢	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

明治卅五年十二月五日發行 第貳卷第十六號

編輯人 松原岩五郎
發行人 內山正如
印刷人 石川金太郎
印刷所 株式會社秀英舍 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地
發行所 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

電話本局 三百三番 千十八番 二千六百二十番

博文館雜誌發行

定價

雜誌	定價	郵稅	發行
太陽	一冊參拾錢	郵稅參錢	每月一回
少年世界	一冊拾錢	郵稅一錢五厘	每月一回
中學世界	一冊貳拾錢	郵稅貳錢	每月一回
女學世界	一冊貳拾錢	郵稅貳錢	每月一回
文藝倶樂部	一冊廿錢	郵稅貳錢五厘	每月一回
太平洋	一冊六錢	郵稅五厘	每月曜日
圖書世界	一冊參錢	郵稅五厘	每月一回

拾貳月發兌表

雜誌	號	發行
太陽	第十五號	五日發行
中學世界	第十六號	十日發行
女學世界	第十六號	五日發行
文藝倶樂部	第十六號	一日發行
少年世界	第十六號	一日發行
圖書世界	第五號	廿五日發行
太平洋	第四十四號	一日發行
	第四十五號	八日發行
	第四十六號	十五日發行
	第四十七號	廿二日發行
	第四十八號	廿九日發行

廣告料

雜誌	一行一回	活字
太陽	金四十五錢	五號活字十八字詰
少年世界	同 金四十錢	五號活字廿四字詰
中學世界	同 金三十錢	五號活字廿四字詰
文藝倶樂部	同 金四十錢	五號活字廿四字詰
女學世界	同 金三十錢	五號活字廿四字詰
太平洋	同 金四十錢	五號活字廿二字詰
圖書世界	同 金十五錢	五號活字廿四字詰

(發付の一)

發兌元　贈進用

足立栗園君著	通俗日本歷史	（全壹冊洋裝 第七版）	正價二十五錢	郵稅八錢
增田干信君著	新撰日本小歷史	（全壹冊洋裝 第二十版）	正價十五錢	郵稅六錢
巖谷小波山人著	幼年讀本 日本歷史	（全壹冊洋裝 第三版）	正價十五錢	郵稅四錢
坪谷善四郎君著	通俗明治歷史	（全壹冊洋裝 第五版）	正價二十五錢	郵稅八錢
內藤耻叟先生著	德川十五代史	（全十二冊洋裝）	正價一冊廿五錢	郵稅一冊六錢
文學士笹川臨風君著	奈良朝	（全壹冊洋裝）	正價二十五錢	郵稅六錢
長谷川誠也君著	通俗世界歷史	（全壹冊洋裝）	正價二十五錢	郵稅八錢
巖谷小波山人著	幼年讀本 世界歷史	（全壹冊洋裝）	正價十五錢	郵稅四錢
藤野房次郎君著	平壤包圍攻擊	（全壹冊洋裝 第七版）	正價七十錢	郵稅十八錢
平田勝馬君著	黃海大海戰	（全壹冊洋裝 第五版）	正價九十錢	郵稅二十錢
勢多章之君著	明治名家 古人評論	（全壹冊洋裝）	正價二十五錢	郵稅四錢
中央新聞社編纂	名士の嗜好	（全壹冊洋裝）	正價二十五錢	郵稅四錢
無何有道人著	名士の平生	（全壹冊洋裝 第三版）	正價二十五錢	郵稅四錢
松井柏軒君著	上杉謙信	（全壹冊洋裝）	正價二十錢	郵稅四錢
鈴木光次郎君著	明治豪傑譚	（全壹冊洋裝）	正價三十錢	郵稅六錢
鈴木光次郎君著	明治閨秀美譚	（全壹冊洋裝 第三版）	正價十二錢	郵稅二錢

（後付の二）

好適品　博文館

著者	書名	體裁	定價
熊田宗次郎君著	明治才媛美譚	（全壹冊洋裝第三版）	正價五十錢 郵税八錢
落合直文、小中村義象兩先生合著	家庭教育歴史讀本 花の白雲	（全壹冊洋裝第十一版）	正價十八錢 郵税四錢
落合直文、小中村義象兩先生合著	家庭教育歴史讀本 卯花月夜	（全壹冊洋裝第十一版）	正價十八錢 郵税四錢
落合直文、小中村義象兩先生合著	家庭教育歴史讀本 紅葉の錦	（全壹冊洋裝第十一版）	正價十八錢 郵税四錢
落合直文、小中村義象兩先生合著	家庭教育歴史讀本 枯野の雪	（全壹冊洋裝第十一版）	正價十八錢 郵税四錢
文學博士高山樗牛君著	少年讀史 平相國	（全壹冊洋裝）	正價十五錢 郵税四錢
文學士大町桂月君著	少年讀史 鬼吉川	（全壹冊洋裝）	正價十五錢 郵税四錢
文學士中内蝶二君著	少年讀史 旭將軍	（全壹冊洋裝）	正價十五錢 郵税四錢
國府犀東君著	少年讀史 鎮西八郎	（全壹冊洋裝）	正價十五錢 郵税四錢
政治家文學家合著	近世 世界十偉人	（全壹冊洋裝再版）	正價五十錢 郵税八錢
政治家文學家合著	東西二十四傑	（全壹冊洋裝）	正價三十五錢 郵税六錢
巖谷小波山人著	幼年讀本 日本地理	（全壹冊洋裝）	正價十五錢 郵税四錢
博文館編輯局編纂	太陽紀念増刊 海の日本	（全壹冊洋裝）	正價六十錢 郵税六錢
志賀重昂君著	日本風景論	（全壹冊洋裝第十四版）	正價五十錢 郵税十錢
志賀重昂君著	河及湖澤	（全壹冊洋裝第五版）	正價四十錢 郵税六錢
大橋乙羽君著	増補 千山萬水	（全壹冊洋裝第十三版）	正價五十錢 郵税十錢

（後付の三）

贈進用　發兌元

著者	書名	體裁	正價	郵稅
大橋乙羽君著	續千山萬水	（全壹冊洋裝　第五版）	正價五十錢	郵稅十錢
大橋乙羽君著	耶馬溪	（全壹冊洋裝　再版）	正價四十錢	郵稅四錢
大町桂月君著	一笠	（全壹冊　洋裝）	正價三十錢	郵稅六錢
田山花袋君著	南船北馬	（全壹冊洋裝　第三版）	正價四十錢	郵稅六錢
幸田露伴君著	枕頭山水	（全壹冊　洋裝）	正價十五錢	郵稅四錢
大橋乙羽君校訂	紀行文集	（全壹冊　洋裝）	正價六十錢	郵稅十六錢
岸上操君校訂	續紀行文集	（全壹冊　洋裝）	正價六十錢	郵稅十六錢
岸上操君校訂	續々紀行文集	（全壹冊　洋裝）	正價六十錢	郵稅十六錢
大橋乙羽君著	歐山米水	（全壹冊洋裝　第四版）	正價壹圓五十錢	郵稅八錢
大橋乙羽君著	歐米小觀	（全壹冊洋裝　第三版）	正價四十錢	郵稅六錢
鎌田榮吉君著	歐米漫遊記	（全壹冊洋裝　第六版）	正價四十五錢	郵稅六錢
水田榮雄君著	大英國漫遊實記	（全壹冊洋裝　再版）	正價七十錢	郵稅十錢
松井廣吉君著	米國漫遊雜記	（全壹冊　再版）	正價三十八錢	郵稅六錢
野崎左文君著	日本名勝地誌	（全十一冊　洋裝）	正價一冊卅錢	郵稅冊八錢
野崎左文君著	改正漫遊案內	（全壹冊洋裝　第廿四版）	正價四十錢	郵稅八錢
大橋乙羽君著	旅行案內	（全壹冊洋裝　第十二版）	正價二十五錢	郵稅六錢

好適品　博文館

著者	書名	冊數・装幀	正價	郵稅
日本鐵道株式會社編	增訂 日本鐵道案内	全壹冊 洋裝	四十五錢	十四錢
石倉翠葉君著	本派本願寺名所圖會	全壹冊 洋裝	六十錢	十錢
石倉翠葉君著	大谷派 本願寺名所圖會	全壹冊 洋裝	四十錢	六錢
石倉翠葉君著	佛光寺名所圖會	全壹冊 洋裝	二十五錢	四錢
石倉翠葉君著	日光名所圖會	全壹冊 洋裝	六十五錢	十一錢
博文館編輯局編纂	文藝倶樂部春期增刊 東京	全壹冊 洋裝	二十五錢	二錢五厘
博文館編輯局編纂	文藝倶樂部夏期增刊 京都と奈良	全壹冊 洋裝	二十五錢	二錢五厘
博文館編輯局編纂	文藝倶樂部秋期增刊 大坂と神戸	全壹冊 洋裝	二十五錢	二錢五厘
博文館編輯局編纂	文藝倶樂部冬期增刊 名古屋と伊勢	全壹冊 洋裝	二十五錢	二錢五厘
農學博士稲垣乙丙君著	增訂 農學入門	全壹冊和裝 第二十版	三十五錢	八錢
農學博士横井時敬君著	農業讀本	全貳冊和裝 第十八版	一冊十四錢	一冊四錢
茅原茂君著	農業大意	全壹冊洋裝 再版	二十五錢	六錢
坪谷善四郎君著	農工書翰文	全壹冊 洋裝	二十五錢	六錢
福羽逸人君著	果樹栽培全書	全四冊洋裝 第八版	壹圓五錢	一冊六錢
安藤謙吉君著	果樹と蔬菜	全壹冊 洋裝	二十五錢	六錢
大橋乙羽君著	住居と園藝	全壹冊洋裝 第六版	二十五錢	六錢

（後付の五）

贈進用

發兌元

- 江原春夢君著 ● 果樹草花盆栽庭造 園藝全書 （全壹冊洋裝） 正價六十錢 郵稅八錢
- 田村松魚君著 ● 狩獵と養鷄 （全壹冊洋裝） 正價二十五錢 郵稅六錢
- 佐々木藤太郎君著 ● 養蠶手引草 （全壹冊洋裝） 正價三十錢 郵稅六錢
- 森一兵君著 ● 商業大意 （全壹冊洋裝第七版） 正價二十五錢 郵稅六錢
- 森一兵君著 ● 商家書翰文 （全壹冊洋裝第三版） 正價二十五錢 郵稅六錢
- 森一兵君著 ● 致富要訣 （全壹冊洋裝再版） 正價二十五錢 郵稅六錢
- 法學博士天野爲之君著 ● 金即權利 能散能聚 金 （全壹冊洋裝第十一版） 正價十八錢 郵稅六錢
- 寒澤振作君著 ● 商業文範 （全壹冊和裝） 正價二十五錢 郵稅六錢
- 濱田四郎君著 ● 補習教育 商業入門 （卷之一和裝） 正價十八錢 郵稅六錢
- 竹貫直次君著 ● 造家と築庭 （全壹冊洋裝再版） 正價二十五錢 郵稅六錢
- 工學士松永新之助君著 ● 工業大意 （全壹冊洋裝再版） 正價二十五錢 郵稅六錢
- 工學士松永新之助君著 ● 化粧品製造法 （全壹冊洋裝） 正價二十五錢 郵稅六錢
- 藤野修吉、花井七三郎 草野堅藏三君合著 ● 通俗理化一斑 （全壹冊洋裝） 正價三十錢 郵稅八錢
- 木村小舟君著 ● 春夏秋冬 理科手引草 （全壹冊洋裝） 正價三十八錢 郵稅八錢
- 木村小舟君著 ● 理科春秋 （全壹冊洋裝） 正價二十錢 郵稅四錢
- 金澤巖君著 ● 寫眞及幻燈 （全壹冊洋裝第四版） 正價二十五錢 郵稅六錢

（後付の六）

好適書　博文館

著者	書名	體裁	正價	郵税
橋本奇策君著	實驗應用寫眞術	（全壹冊洋裝 第六版）	正價十錢	郵税四錢
竹貫妻文君著	算術手引草	（全壹冊洋裝）	正價五十錢	郵税六錢
中江兆民先生著	一年有半	（全壹冊洋裝 第二十二版）	正價三十五錢	郵税八錢
中江兆民先生著	續一年有半	（全壹冊洋裝 第十八版）	正價三十八錢	郵税八錢
神津禎二郎君著	民法戶主必携	（全壹冊洋裝）	正價三十五錢	郵税六錢
管學應君著	成功要錄	（全壹冊洋裝 第五版）	正價二十八錢	郵税四錢
法學士丸尾昌雄君著	日常行爲法則	（全壹冊洋裝 第五版）	正價二十五錢	郵税六錢
法學士桐生政次君著	勤學と處世	（全壹冊洋裝 第十一版）	正價二十五錢	郵税六錢
千河岸櫻所君著	日本女子立志編	（全貳冊和裝）	正價一冊六十錢	郵税一冊八錢
風間禮助君著	偉人修養錄	（全壹冊洋裝）	正價四十錢	郵税八錢
管學應君著	言行要錄	（全壹冊洋裝）	正價三十錢	郵税六錢
下田歌子女史著	内國少女鑑	（全壹冊和裝）	正價三十五錢	郵税六錢
下田歌子女史著	外國少女鑑	（全壹冊和裝）	正價三十五錢	郵税六錢
下田歌子女史著	學校の心得	（全壹冊和裝）	正價三十五錢	郵税六錢
澁江保君著	世界格言大全	（全壹冊洋裝）	正價四十錢	郵税四錢
千河岸櫻所君著	女訓評釋	（全壹冊和裝）	正價六十錢	郵税十錢

贈進品好適書

著者	書名	體裁	定價
釋雲照律師述	佛教大原理	（全壹冊洋裝 第五版）	正價十錢 郵稅二錢
釋雲照律師述	國民教育之方針	（全壹冊 洋裝）	正價七十五錢 郵稅十二錢
文學博士加藤弘之君著	天則百話	（全壹冊洋裝 第六版）	正價三十錢 郵稅六錢
福羽男爵述	人事百話	（全壹冊洋裝 第八版）	正價二十錢 郵稅四錢
石黒男爵述	況翁閑話	（全壹冊 洋裝）	正價二十五錢 郵稅六錢
久留島武彥君著	國民必携 陸軍一斑	（全壹冊洋裝 第七版）	正價二十五錢 郵稅六錢
長尾耕作君著	國民必携 海軍一斑	（全壹冊洋裝 第六版）	正價二十五錢 郵稅六錢
三宅青軒君著	陸海軍書翰文	（全壹冊洋裝 第三版）	正價二十五錢 郵稅六錢
上野義八郎君著	海軍兵器説明	（全壹冊洋裝 第十版）	正價十八錢 郵稅四錢
金澤巖君著	通俗治療救急法	（全壹冊洋裝 第三版）	正價三十錢 郵稅四錢
西川政憲君著	育兒體育 健康要訣	（全壹冊 洋裝）	正價三十錢 郵稅四錢
破竹居士著	健足と遠足	（全壹冊 洋裝）	正價三十錢 郵稅四錢
澁江保君著	西洋秘傳 魔術	（全壹冊 第十版）	正價三十錢 郵稅八錢
博文館編輯局編纂	易占及骨相法	（全壹冊洋裝 第五版）	正價二十五錢 郵稅六錢
太田才次郎君著	諸藝指南	（全壹冊 洋裝）	正價二十五錢 郵稅六錢
博文館編輯局編纂	秘術傳法	（全壹冊洋裝 第八版）	正價二十五錢 郵稅六錢

女學世界
毎月壹回五日發行
第貳卷第拾六號
（明治參拾五年十二月五日發行）
（明治參拾年貳月廿五日第參種郵便物認可）

（定價金貳拾錢）

東京秀英舍印刷

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑯
明治35年11月（第2巻第15号）、12月（第2巻第16号）

2006年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　ジャパン リアルティ スーパービジョン株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-2962-6　C3321